

## **Oracle® Business Intelligence Discoverer**

構成ガイド

10g リリース 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris  
Operating System (SPARC)

**部品番号 : B25069-01**

2005 年 10 月

Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris Operating System (SPARC)

部品番号: B25069-01

原本名: Oracle Business Intelligence Discoverer Configuration Guide, 10g Release 2 (10.1.2.1) for Microsoft Windows and Solaris Operating System (SPARC)

原本部品番号: B13918-03

Copyright © 1999, 2005, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

---

# 目次

はじめに .....	xi
対象読者 .....	xii
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	xii
OracleBI Discoverer のナビゲーションおよびアクセシビリティ .....	xii
関連ドキュメント .....	xii
表記規則 .....	xiii
JGoodies 社の使用許諾契約 .....	xiii
サポートおよびサービス .....	xiv
<b>1 OracleBI Discoverer の概要</b>	
1.1 OracleBI Discoverer .....	1-2
1.2 OracleBI Discoverer 10g リリース 2 (10.1.2) の新しい構成機能 .....	1-5
1.2.1 ユーザー作業環境の変更 .....	1-5
1.2.2 URL パラメータの変更 .....	1-5
1.2.3 Discoverer Plus のルック・アンド・フィール .....	1-6
1.2.4 Discoverer Viewer のカスタマイズ .....	1-6
1.3 OracleBI Discoverer の構成 .....	1-6
1.4 OracleBI Discoverer インストールの確認方法 .....	1-7
1.5 Discoverer への接続 .....	1-9
1.6 OracleBI Discoverer アーキテクチャ .....	1-10
1.7 Discoverer クライアント層 .....	1-11
1.7.1 Discoverer クライアント層と Discoverer Plus .....	1-11
1.7.2 Discoverer クライアント層と Discoverer Viewer .....	1-11
1.8 Discoverer サービス層 .....	1-12
1.8.1 Discoverer J2EE コンポーネント .....	1-12
1.8.2 Discoverer CORBA コンポーネント (Discoverer サービス) .....	1-13
1.9 Discoverer データベース層 .....	1-14
1.10 OracleBI Discoverer の動作 .....	1-15
1.10.1 Discoverer Plus Relational の動作 .....	1-15
1.10.2 Discoverer Plus OLAP の動作 .....	1-16
1.10.3 Discoverer Viewer の動作 .....	1-16
<b>2 Oracle Business Intelligence インストールと OracleAS Infrastructure について</b>	
2.1 Oracle Business Intelligence のインストールについて .....	2-2
2.1.1 Business Intelligence and Forms タイプのインストールと OracleAS Infrastructure に 関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストール .....	2-3

2.1.2	OracleBI スタンドアロン・インストールについて .....	2-4
2.2	OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法 .....	2-5
2.3	Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法 .....	2-7
2.3.1	メタデータ・リポジトリの OracleBI Discoverer 部分のみのアップグレード方法 .....	2-8

### 3 OracleBI Discoverer の開始

3.1	OracleBI Discoverer の開始の概要 .....	3-3
3.2	Discoverer でサポートしている Web ブラウザ・バージョン .....	3-3
3.3	Discoverer の開始方法の制限 .....	3-3
3.4	Discoverer Plus および Discoverer Viewer の開始に必要なメモリー要件と権限 .....	3-4
3.5	HTTPS を使用した Discoverer の実行 .....	3-4
3.5.1	Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法 ..	3-5
3.5.2	JInitiator 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法 .....	3-10
3.5.3	Java Plug-in 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法 .....	3-10
3.6	HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合 .....	3-11
3.7	Discoverer Plus の開始方法 .....	3-13
3.8	HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Microsoft Internet Explorer で初めて Discoverer Plus を開始する場合 .....	3-14
3.9	HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合 .....	3-17
3.10	HTTP を使用して UNIX クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合 .....	3-22
3.11	HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始 .....	3-23

### 4 OracleBI Discoverer 接続の管理

4.1	OracleBI Discoverer 接続 .....	4-2
4.1.1	Discoverer プライベート接続と OracleAS Single Sign-On .....	4-3
4.2	Discoverer 接続のタイプ .....	4-3
4.2.1	プライベート接続 .....	4-3
4.2.2	パブリック接続 .....	4-3
4.3	Discoverer 接続の管理 .....	4-4
4.4	Discoverer の接続ページ .....	4-4
4.5	Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定 ...	4-5
4.6	パブリック接続の作成方法 .....	4-6
4.7	パブリック接続の削除方法 .....	4-9
4.8	Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかを 指定する方法 .....	4-10

### 5 OracleBI Discoverer の管理と構成

5.1	Oracle Enterprise Manager Application Server Control .....	5-2
5.1.1	Discoverer で Application Server Control を使用する理由 .....	5-2
5.1.2	Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの 表示方法 .....	5-4
5.1.3	Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法 .....	5-5
5.2	Application Server Control を使用した Discoverer コンポーネントの管理 .....	5-7
5.2.1	Discoverer クライアント層コンポーネントを有効または無効にした際の動作 .....	5-9
5.3	Discoverer サービスの起動および停止 .....	5-9
5.3.1	マシン上で Discoverer サービスを停止または再起動する方法 .....	5-11

5.4	Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化 .....	5-11
5.4.1	Discoverer クライアント層コンポーネントを無効にする方法 .....	5-12
5.4.2	Discoverer クライアント層コンポーネントを有効にする方法 .....	5-13
5.5	Discoverer サブレットを起動および停止する方法 .....	5-14
5.6	Discoverer サービスおよび Discoverer クライアント層コンポーネントのオプションの構成 .....	5-15
5.6.1	Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法 ....	5-16
5.7	Discoverer メトリックの監視 .....	5-17
5.7.1	すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのサマリー・メトリックを監視する方法 .....	5-18
5.7.2	単一の Discoverer クライアント層コンポーネントのメトリックを監視する方法 .....	5-20
5.8	Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法 .....	5-22
5.8.1	Discoverer のデプロイ先ポートの変更方法 .....	5-23
5.9	異なる Java 仮想マシンでの Discoverer Plus の実行 .....	5-24
5.9.1	Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法 .....	5-25
5.9.2	Discoverer Plus に対する独自の Java 仮想マシンの指定方法 .....	5-26
5.10	Web クエリのフォーマットにエクスポートするための Discoverer の構成 .....	5-27

## 6 Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成

6.1	Discoverer カタログの概要 .....	6-2
6.1.1	Discoverer カタログ .....	6-2
6.1.2	OLAP カタログ .....	6-2
6.1.3	Discoverer カタログのオブジェクトに設定可能なプロパティ .....	6-2
6.1.4	Discoverer カタログのアーキテクチャ .....	6-3
6.1.5	Discoverer カタログと BI Beans カタログの相違点 .....	6-3
6.2	Discoverer カタログの管理方法 .....	6-4
6.2.1	D4OSYS ユーザーに割り当てられるデータベース権限 .....	6-4
6.2.2	Discoverer カタログのインストール方法 .....	6-4
6.2.3	Discoverer カタログのアンインストール方法 .....	6-5
6.2.4	Discoverer カタログのエクスポート方法 .....	6-5
6.2.5	Discoverer カタログのインポート方法 .....	6-6
6.3	Discoverer カタログに対する承認ユーザーとロールの管理方法 .....	6-6
6.3.1	Discoverer カタログのフォルダ構造の特性 .....	6-6
6.3.2	構造内のフォルダ .....	6-7
6.3.3	オブジェクトおよびフォルダに対する権限のタイプ .....	6-7
6.3.4	D4OSYS ユーザーで権限を管理する方法 .....	6-8
6.3.5	ユーザーによる Discoverer Plus OLAP の使用が可能であることを確認する方法 .....	6-8
6.3.6	Discoverer カタログに対するユーザーとロールのアクセス権を承認する方法 .....	6-8
6.3.7	Discoverer カタログに対するユーザーまたはロールのアクセス権を取り消す方法 .....	6-9
6.3.8	OLAP データへのアクセス時にプライベート接続またはパブリック接続を使用する方法 .....	6-9
6.4	Discoverer Plus OLAP のルック・アンド・フィールをカスタマイズする方法 .....	6-10
6.5	エンド・ユーザーへの伝達事項 .....	6-10
6.6	Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ .....	6-11
6.6.1	ユーティリティからの出力のフォーマット .....	6-11
6.6.2	ユーティリティからの出力の説明 .....	6-11
6.7	Discoverer Plus OLAP サブレットの URL パラメータ .....	6-13
6.8	Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ .....	6-16

## 7 複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール

7.1	複数マシンの Discoverer 環境 .....	7-2
7.2	Oracle Business Intelligence インストール .....	7-3
7.2.1	1 台のマシンへの Discoverer のインストール .....	7-3
7.2.2	複数のマシンへの Discoverer のインストール .....	7-4
7.2.3	Application Server Control を使用した複数マシンの管理 .....	7-4
7.3	OracleAS Web Cache を使用して OracleBI Discoverer のロード・バランシングを行う際の前提条件 .....	7-5
7.4	OracleAS Web Cache Manager を使用した OracleBI Discoverer のロード・バランシングの構成 .....	7-6
7.5	OracleAS Web Cache を使用したロード・バランシングとともに OracleBI Discoverer をデプロイする方法 .....	7-6
7.5.1	OracleAS Web Cache Manager の起動方法 .....	7-7
7.5.2	OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法 .....	7-8
7.5.3	OracleAS Web Cache がロード・バランシング用に正しく構成されているかを確認する方法 .....	7-13
7.6	複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント .....	7-14
7.6.1	中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントの指定方法 .....	7-14
7.6.2	Preference サーバー・マシンのホスト名とポート番号の確認方法 .....	7-15
7.6.3	他のマシンでの Discoverer Preference サーバーの指定 .....	7-16
7.6.4	マシン上で Preferences コンポーネントを無効にする方法 .....	7-16
7.7	複数のマシン環境での tnsnames.ora ファイルの構成 .....	7-17

## 8 OracleAS Web Cache との OracleBI Discoverer Viewer の使用

8.1	OracleAS Web Cache の概要 .....	8-2
8.2	OracleAS Web Cache の利点 .....	8-3
8.3	OracleAS Web Cache の動作 .....	8-3
8.4	OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合 .....	8-4
8.5	OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する方法 .....	8-5
8.5.1	Discoverer キャッシュ・ルールの作成方法 .....	8-5
8.5.2	Discoverer Viewer に対して OracleAS Web Cache を有効にする方法 .....	8-8
8.5.3	キャッシュの最大化を可能にする Discoverer Viewer の構成方法 .....	8-9

## 9 OracleBI Discoverer のカスタマイズ

9.1	Discoverer Plus のカスタマイズ .....	9-2
9.1.1	Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP で使用可能な LAF スタイル ...	9-2
9.1.2	Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF スタイルの変更方法 .....	9-4
9.1.3	すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法 .....	9-4
9.1.4	Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法 .....	9-5
9.2	Discoverer Viewer のカスタマイズ .....	9-6
9.2.1	Discoverer Viewer のカスタマイズ .....	9-6
9.2.2	デフォルトの Discoverer Viewer の LAF の変更方法 .....	9-6
9.2.3	デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトの変更方法 .....	9-8

## 10 OracleBI Discoverer 作業環境の管理

10.1	Discoverer 作業環境 .....	10-2
------	-----------------------	------

10.2	Discoverer システム作業環境の概要 .....	10-2
10.3	Discoverer ユーザー作業環境 .....	10-3
10.4	すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法 .....	10-4
10.5	各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法 .....	10-5
10.6	Discoverer ユーザー作業環境のリスト .....	10-6
10.6.1	EnhancedAggregationStrategy ユーザー作業環境設定 .....	10-21
10.6.2	Discoverer のタイムアウト値の設定 .....	10-22
10.6.3	Discoverer Viewer のタイムアウト値の設定方法 .....	10-22
10.7	Discoverer 作業環境ファイルを異なるプラットフォームの形式に変換する方法 .....	10-22
10.8	Discoverer 作業環境の移行 .....	10-23

## 11 OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用

11.1	OracleAS Portal の概要 .....	11-2
11.2	OracleAS Portal とともに OracleBI Discoverer を使用する方法 .....	11-4
11.3	OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法 .....	11-4
11.4	Discoverer Portlet Provider の編集方法 .....	11-8

## 12 OracleBI Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティの最適化

12.1	Discoverer のパフォーマンス .....	12-2
12.2	Discoverer のスケーラビリティ .....	12-2
12.3	Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-2
12.3.1	ワークシートおよびページ・アイテムを適切に使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-3
12.3.2	ビジネスエリアおよびフォルダの表示にかかる時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-4
12.3.3	サマリー・フォルダを使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-4
12.3.4	Discoverer で生成される SQL を最適化してクエリーのパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-5
12.3.5	Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-5
12.3.6	「保存形式」アイテム・プロパティを適切に設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-5
12.3.7	データベースからのフェッチ行で使用する配列サイズを拡大して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-6
12.3.8	重複しない値を含むテーブルに基づいて値リストを生成して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-6
12.3.9	システムのキャッシュ設定を変更して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-7
12.3.10	ワークシートを夜間に実行するようにスケジューリングして、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-8
12.3.11	OracleAS Web Cache を使用して Discoverer Viewer のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-8
12.3.12	Discoverer Portlet Provider のパフォーマンスを向上させる方法 .....	12-8
12.3.13	Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティのトラブルシューティング .....	12-8
12.4	OracleAS のスケーラビリティ機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法 .....	12-9
12.4.1	OC4J のメモリー使用量パラメータを指定して、Discoverer のスケーラビリティを向上させる方法 .....	12-9
12.4.2	OC4J 処理の数を指定して、Discoverer のスケーラビリティを向上させる方法 .....	12-9

## 13 URL パラメータを使用した OracleBI Discoverer の起動

13.1	URL パラメータで Discoverer を使用する理由 .....	13-2
13.2	URL パラメータの構文 .....	13-2
13.2.1	URL パラメータとフォーマット・マスク .....	13-3
13.3	URL パラメータを使用したログイン情報の指定について .....	13-3
13.3.1	プライベート接続での URL パラメータの使用 .....	13-4
13.3.2	Discoverer 接続を使用したログイン情報の指定方法 .....	13-4
13.4	URL パラメータを使用したワークブックおよびワークシートの指定について .....	13-5
13.4.1	ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法 .....	13-6
13.4.2	ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法 .....	13-6
13.4.3	接続の接続 ID を確認する方法 .....	13-7
13.4.4	スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認する方法 ..	13-8
13.5	URL パラメータの使用例 .....	13-9
13.5.1	例 1: Discoverer Viewer の起動 .....	13-9
13.5.2	例 2: ワークシート・パラメータを使用した Discoverer Viewer の起動 .....	13-9
13.5.3	例 3: Discoverer Plus の起動 .....	13-10
13.5.4	例 4: 接続詳細を要求しない Discoverer の起動 .....	13-10
13.5.5	例 5: Discoverer Viewer の起動およびパスワードの要求 .....	13-11
13.5.6	例 6: Discoverer Plus OLAP の起動 .....	13-11
13.5.7	例 7: Discoverer Plus の起動およびスケジュール済ワークブックの表示 .....	13-11
13.5.8	例 8: Discoverer Viewer の起動およびスケジュール・ワークブックの結果セットの 表示 .....	13-12
13.5.9	例 9: Discoverer Viewer での OLAP ワークシートの表示 .....	13-12
13.6	URL パラメータ・テーブルで使用される構文および表記法 .....	13-12
13.7	Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト .....	13-13
13.8	Discoverer Plus 固有の URL パラメータのリスト .....	13-15
13.9	Discoverer Viewer 固有の URL パラメータのリスト .....	13-19

## 14 OracleBI Discoverer のセキュリティ管理

14.1	Discoverer とセキュリティ .....	14-2
14.2	Discoverer とデータベース・セキュリティ・モデル .....	14-3
14.3	Discoverer と Discoverer EUL セキュリティ・モデル .....	14-4
14.4	Discoverer と Oracle Applications セキュリティ・モデル .....	14-5
14.5	Discoverer と OracleAS Security モデル .....	14-5
14.5.1	Discoverer パブリック接続と OracleAS Security モデル .....	14-6
14.6	OracleAS Framework Security との Discoverer の使用 .....	14-6
14.6.1	Discoverer の通信プロトコルの指定 .....	14-7
14.6.2	Discoverer Viewer のセキュリティと通信プロトコル .....	14-7
14.6.3	Discoverer Plus のセキュリティと通信プロトコル .....	14-8
14.7	Oracle Identity Management Infrastructure との Discoverer の使用 .....	14-13
14.7.1	OracleAS Single Sign-On との Discoverer の使用 .....	14-13
14.7.2	OracleAS Single Sign-On .....	14-13
14.7.3	Single Sign-On を使用しない Discoverer の使用 .....	14-16
14.8	Discoverer による Single Sign-On 詳細情報のサポート .....	14-17
14.8.1	Virtual Private Database、Single Sign-On および Discoverer の概要 .....	14-17
14.8.2	SSO ユーザー名による Discoverer データの制限方法を示す例 .....	14-18
14.8.3	SSO ユーザー名による Discoverer データの制限に必要なタスク .....	14-18



14.8.4	SSO ユーザー名に基づいて異なるデータを表示するように Discoverer ワークシート・ポートレットを設定する方法 .....	14-19
14.8.5	「データベース接続」 ページにある「ログインしているユーザー」 リージョンの他のオプションの使用方法 .....	14-19
14.8.6	SSO ユーザー名を使用するためにデータベースの LOGON と後続のトリガーを変更する方法 .....	14-20
14.8.7	eul_trigger\$post_login トリガーの使用方法 .....	14-20
14.9	セキュリティに関するよくある質問 .....	14-21
14.9.1	ファイアウォール .....	14-21
14.9.2	非武装地帯 (DMZ) .....	14-21
14.9.3	HTTPS の概要と HTTPS を使用する理由 .....	14-22
14.9.4	イントラネットでの Discoverer の構成方法 .....	14-23
14.9.5	ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法 .....	14-23
14.9.6	複数のファイアウォールを通して動作する Discoverer の構成 .....	14-24
14.9.7	イントラネットで暗号化を使用して Discoverer を構成する方法 .....	14-24
14.9.8	ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法 .....	14-24
14.9.9	Discoverer による通信の暗号化を確認する方法 .....	14-25
14.9.10	イントラネット用およびファイアウォールを通してユーザーが Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法 .....	14-25
14.9.11	NAT デバイスと Discoverer の使用 .....	14-25

## 15 OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite

15.1	Discoverer 接続と Oracle E-Business Suite .....	15-2
15.2	Discoverer プライベート接続、OracleAS Single Sign-On および Oracle E-Business Suite のユーザーについて .....	15-3
15.2.1	SSO 対応 Oracle Applications データベースの使用時に、Oracle Applications ユーザーが Discoverer でプライベート接続を作成または使用するために必要な条件 .....	15-3
15.2.2	Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする方法 .....	15-4
15.2.3	SSO 対応 Oracle Applications データベースで SSO プライベート接続を使用する場合の Discoverer リリースと OracleAS Infrastructure リリースとの相互運用性 .....	15-5
15.2.4	以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法 .....	15-7
15.3	Oracle E-Business Suite 用の Discoverer プリファレンスの設定 .....	15-7

## A OracleBI Discoverer の構成ファイル

A.1	Discoverer ファイルの場所のリスト .....	A-2
A.2	configuration.xml 内の構成設定のリスト .....	A-5
A.3	opmn.xml 内の構成設定のリスト .....	A-7

## B 以前のリリースの Discoverer からのアップグレード

B.1	OracleAS Upgrade Assistant の使用について .....	B-2
B.2	アップグレード・サマリー .....	B-2
B.3	Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からのアップグレードについて .....	B-3
B.4	Discoverer リリース 9.0.4/9.0.2 からのアップグレードについて .....	B-3
B.5	Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法 .....	B-3
B.5.1	Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からリリース 10.1.2.1 へのプリファレンスのアップグレード .....	B-4

B.6	Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法 .....	B-5
B.7	Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法 .....	B-5
B.7.1	作業環境のアップグレード .....	B-6
B.7.2	URL 作業環境の更新 .....	B-8

## C OracleBI Discoverer 管理アカウント情報

C.1	OracleBI Discoverer スクリプトにより PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限 .....	C-2
C.2	OracleBI Discoverer スクリプトにより Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限 .....	C-3

## D Discoverer のトラブルシューティング

D.1	問題と解決方法 .....	D-2
D.1.1	Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 を使用したエクスポート時に Discoverer Viewer によってエラーがレポートされる問題 .....	D-2
D.1.2	Discoverer および Oracle Applications の動作要件 .....	D-4
D.1.3	Discoverer でネットワーク・エラーがレポートされる問題 .....	D-5
D.1.4	Discoverer でエラー ORA-12154 がレポートされる問題 .....	D-5
D.1.5	ポップアップ・ストップの問題 .....	D-5
D.1.6	Netscape Navigator 4.x の問題 .....	D-6
D.1.7	Discoverer Plus で RMI エラーがレポートされる問題 .....	D-6
D.1.8	Discoverer のメモリーの問題 .....	D-6
D.1.9	Discoverer Plus Relational のヘルプの問題 .....	D-7
D.1.10	Discoverer Viewer の SMTP サーバーの構成 .....	D-8
D.1.11	Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データに関する問題 .....	D-10
D.1.12	エラー: Web キャッシュ接続を開始できませんでした。(WWC-40019) .....	D-10
D.1.13	エクスポートされた Web クエリー・ファイルに非 ASCII の動的パラメータ値が含まれる場合に Microsoft Excel で開けない問題 .....	D-11
D.1.14	Discoverer ポートレットの値リスト (LOV) が長すぎる場合の問題 .....	D-11
D.1.15	Microsoft Excel で索引値を使用してパラメータを指定すると Web クエリー・ファイルが機能しない問題 .....	D-11
D.1.16	Single Sign-on (SSO) と Secure Socket Layer (SSL) のリダイレクト競合 .....	D-12
D.1.17	ワークシートのカスタマイズに関する問題 .....	D-12
D.1.18	OC4J_BI_Forms JVM プロセスでのメモリー不足の問題 .....	D-12
D.1.19	Discoverer Viewer にグラフが表示されない問題 .....	D-13
D.1.20	Discoverer Portlet Provider の問題 .....	D-13
D.1.21	Discoverer 接続の可用性 .....	D-13
D.1.22	URL パラメータとして許容されないパスワード .....	D-14
D.1.23	Discoverer Viewer のカスタマイズ .....	D-14
D.1.24	Discoverer 接続を切断するファイアウォール .....	D-14
D.2	Discoverer の診断およびロギングについて .....	D-15
D.2.1	使用可能な Discoverer の診断機能とロギング機能 .....	D-15
D.2.2	checkdiscoverer ユーティリティ .....	D-16
D.2.3	OracleAS のログの表示機能の使用について .....	D-16
D.2.4	OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法 .....	D-16
D.2.5	Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする方法 .....	D-17
D.2.6	Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする方法 .....	D-18
D.2.7	Discoverer サービス・ログ・ファイルの表示方法 .....	D-18

D.2.8	Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法 .....	D-19
D.2.9	Discoverer ログ・ファイルのコピー方法 .....	D-20

## 索引



---

---

# はじめに

Oracle Business Intelligence Discoverer (OracleBI Discoverer) へようこそ。

このマニュアルでは、Discoverer Plus (Relational と OLAP) および Discoverer Viewer を Oracle Application Server の一部としてインストールした後、または Oracle Business Intelligence のスタンドアロン CD からインストールした後の構成およびカスタマイズの方法について説明します。

OracleBI Discoverer のインストール方法は説明していません。インストールの詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドまたは Oracle Business Intelligence のインストレーション・ガイドを参照してください。

このマニュアルを読む前に、HTTP サーバーおよびデータベースについて理解しておくことをお勧めします。

OracleBI Discoverer の最新情報については、このマニュアルの他にリリース・ノートを参照してください。

## 対象読者

このマニュアルは、OracleAS 管理者（Discoverer 中間層管理者とも呼ばれます）を対象としています。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## OracleBI Discoverer のナビゲーションおよびアクセシビリティ

### キーボードによるナビゲーション

OracleBI Discoverer では、標準のキーボード・ナビゲーションがサポートされています。標準のキーボード・ナビゲーションには、[Tab] キー、ニーモニック ([Alt] キーおよび下線付きの文字キー) およびアクセラレータ ([Alt]+[F4] キーでウィンドウを閉じるなど) の使用が含まれます。

### Discoverer での JAWS スクリーン・リーダーの使用

スクリーン・リーダー (JAWS など) とともに Discoverer を使用する場合は、最大限に活用するために、次の指示に従ってください。

- Discoverer Plus で framedisplaystyle 構成値を「separate」に設定することにより、別のウィンドウで Discoverer Plus を表示します (詳細は、第 13.8 項「Discoverer Plus 固有の URL パラメータのリスト」を参照してください)。

さらに、クエリーの進行状況ページを遅延することによって、ページがリフレッシュされるまでにスクリーン・リーダーがページを読み取るのに十分な時間があることを確認します。

## 関連ドキュメント

このマニュアルで参照されているドキュメントおよび Oracle Business Intelligence に関するその他の情報 (ホワイトペーパー、ベスト・プラクティス、最新版のドキュメント、その他の関連ドキュメントなど) は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から入手できます。URL は次のとおりです。

<http://otn.oracle.co.jp>

## 表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。
<>	山カッコで囲まれたテキストは、ユーザーが指定する名前または値を示します。
[]	大カッコで囲まれたテキストは、ユーザーが選択可能な（または選択しなくてもよい）オプション句を示します。
メニュー名→コマンド	一連のメニュー選択を表します。たとえば、メニューを選択し、そのメニューのコマンドを実行します。

## JGoodies 社の使用許諾契約

Oracle Business Intelligence には、JGoodies 社のソフトウェアが組み込まれています。このソフトウェアの使用許諾契約は次のとおりです。

Copyright© 2003 JGoodies Karsten Lentzsch. All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted provided that the following conditions are met:

- Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer.
- Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided with the distribution.
- Neither the name of JGoodies nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE COPYRIGHT HOLDERS AND CONTRIBUTORS "AS IS" AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE COPYRIGHT OWNER OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

# サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

## オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

## 製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

## 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

## その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

---

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---



---

---

# OracleBI Discoverer の概要

この章では、OracleBI Discoverer の概要について説明します。この章の項目は次のとおりです。

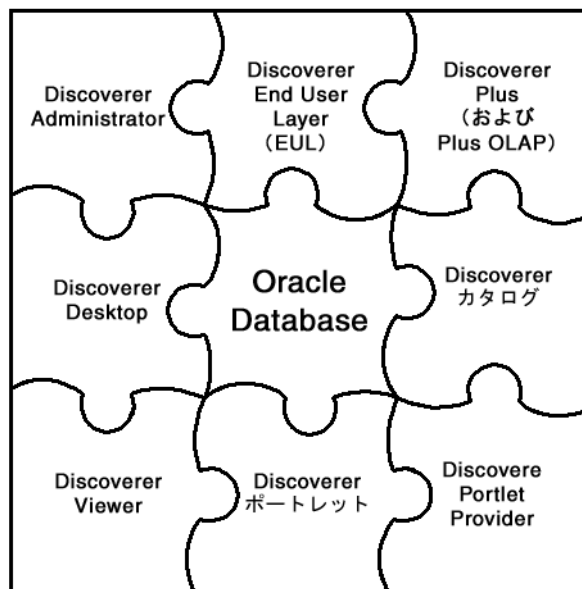
- 第 1.1 項 「OracleBI Discoverer」
- 第 1.2 項 「OracleBI Discoverer 10g リリース 2 (10.1.2) の新しい構成機能」
- 第 1.3 項 「OracleBI Discoverer の構成」
- 第 1.4 項 「OracleBI Discoverer インストールの確認方法」
- 第 1.5 項 「Discoverer への接続」
- 第 1.6 項 「OracleBI Discoverer アーキテクチャ」
- 第 1.7 項 「Discoverer クライアント層」
- 第 1.8 項 「Discoverer サービス層」
- 第 1.9 項 「Discoverer データベース層」
- 第 1.10 項 「OracleBI Discoverer の動作」

## 1.1 OracleBI Discoverer

データ分析のためのビジネス・インテリジェンス・ツールである OracleBI Discoverer は、Oracle Business Intelligence および Oracle Application Server (OracleAS) の主要コンポーネントです。Discoverer は、直観的な非定型のクエリー、レポート機能、分析、Web 公開機能から構成されるビジネス・インテリジェンス・ソリューションを提供します。これらのツールを使用すると、高度な技術的知識を持たないユーザーでも、データ・マート、データ・ウェアハウス、マルチディメンション (OLAP) データ・ソース、オンライン・トランザクション処理システムからの情報にすばやくアクセスできます。OracleBI Discoverer は OracleAS Portal とシームレスに統合し、ワークブックやワークシートの Web ポータルへのデプロイを迅速に行えます。

OracleBI Discoverer は、Oracle データベースと連動する多くの統合コンポーネントで構成されており、統合化された完全なビジネス・インテリジェンス・ソリューションを提供します。次の図は、Discoverer のコンポーネントを示しています。

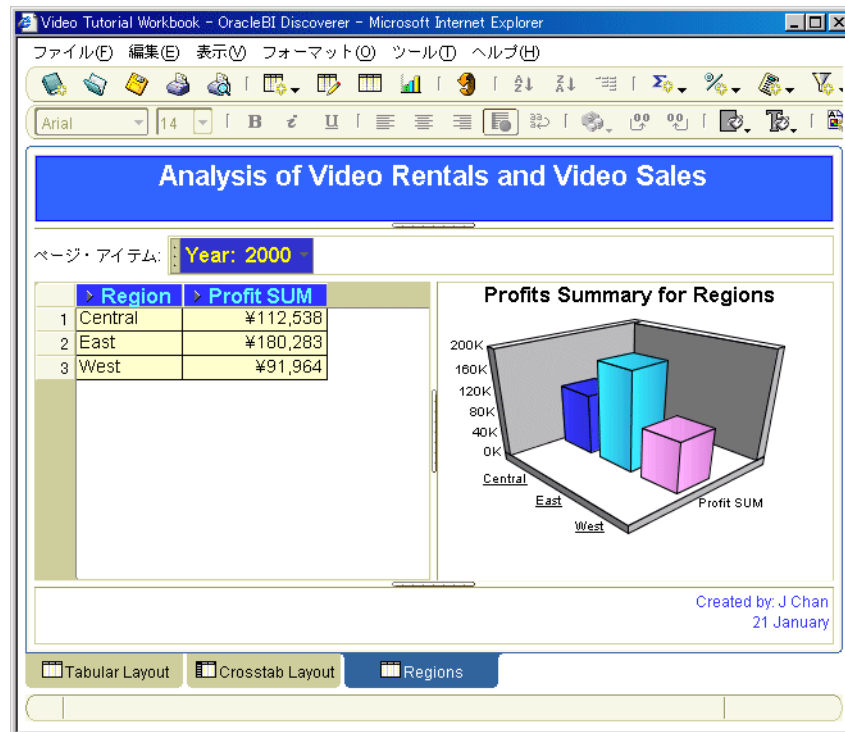
図 1-1 Discoverer のコンポーネント



OracleBI Discoverer には、エンド・ユーザー向けに、次の 2 つの主なビジネス分析ツールがあります。

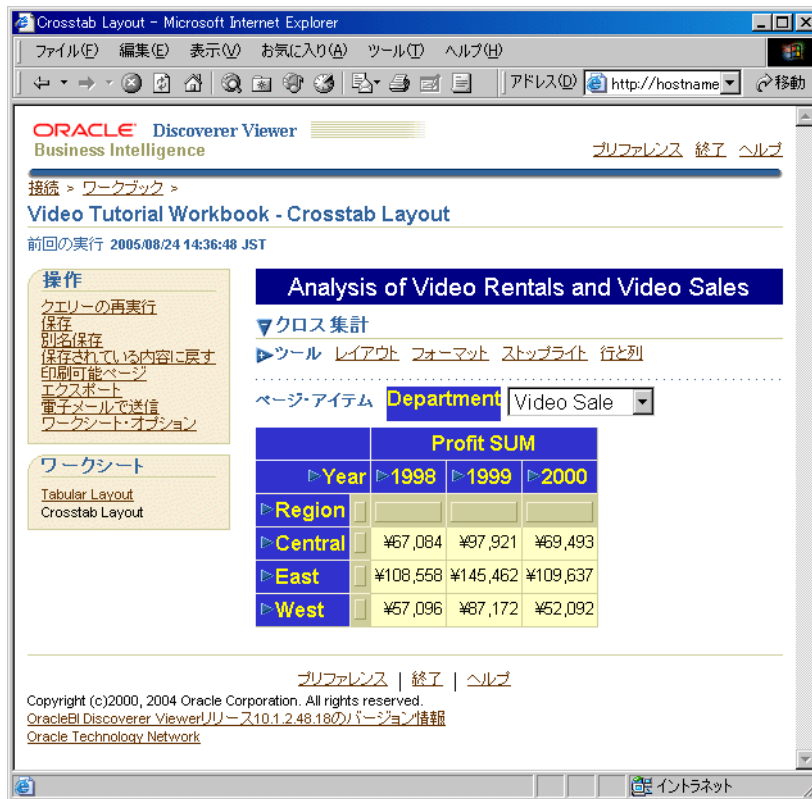
- Discoverer Plus は、データベースの複雑な概念を理解しなくても、データの分析やレポートを作成できる Web ツールです。ウィザード形式のダイアログやメニューの手順に従うことで、高度なレポートやグラフを作成できます。レポートやグラフには、Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Oracle Portal を使用してアクセスします。

図 1-2 OracleBI Discoverer Plus



- Discoverer Viewer は、Discoverer Plus を使用して作成したインタラクティブなレポートやグラフにアクセスするための Web ツールです。Discoverer Viewer はシン・クライアントの HTML ツールで、ユーザーは Web ブラウザさえあれば Discoverer Viewer を実行できます。また、Discoverer Viewer を使用して作成したレポートをポータルに公開することもでき、Web サイト特有のロック・アンド・フィールや用途に合わせたカスタマイズを容易に行うことができます。Discoverer Viewer は、パフォーマンスの最適化が行われており、ネットワークの通信量を最小限に抑えるように設計されています。

図 1-3 OracleBI Discoverer Viewer



Discoverer には、Oracle Portal での Discoverer ワークシートとグラフの公開に使用する Discoverer Portlet Provider も含まれています。(詳細は、第 11 章「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」を参照してください)。

Oracle Application Server Control を使用すると、Discoverer の中間層コンポーネントを管理できます (詳細は、第 5.1 項「Oracle Enterprise Manager Application Server Control」を参照してください)。

Discoverer の典型的なワークフローは次のとおりです。

- Discoverer Plus ユーザー (パワー・ユーザー) がインタラクティブなレポートおよびグラフを作成します。通常、レポートには、エンド・ユーザーによるデータ分析のための強力なビジネス・インテリジェンス・コンポーネント (パラメータ、条件、総計など) が含まれます。
- Discoverer Viewer ユーザーは、インタラクティブなレポートにアクセスし、通常は、一定の制限のもとに、レポートをパーソナライズ (必要なデータへのドリル、パラメータの適用、ストップライト・フォーマットの追加など) できます。

## 1.2 OracleBI Discoverer 10g リリース 2 (10.1.2) の新しい構成機能

この項では、OracleBI Discoverer 10g リリース 2 (10.1.2) の重要な構成変更についてのリストを示します。

### 1.2.1 ユーザー作業環境の変更

ここでは、ユーザー作業環境の変更についてのリストを示します。ユーザー作業環境の完全なリストは、[第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」](#)を参照してください。

#### 1.2.1.1 削除されたユーザー作業環境

次のユーザー作業環境は削除されています。

- DefaultUserTypeIsApps (Oracle Applications の接続の詳細は、[第 15 章「OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite」](#)を参照してください)
- Outoffetch
- ShowUserTypeChoice (Oracle Applications の接続の詳細は、[第 15 章「OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite」](#)を参照してください)
- MachineIPs
- Title

#### 1.2.1.2 追加されたユーザー作業環境

次のユーザー作業環境が追加されています。

- AdjustPlusFontSize
- AggregationBehavior
- AvoidServerWildCardBug
- DefaultExportPath
- DisableClassicExports
- MRUEnabled
- ScatterGraphDataModel

### 1.2.2 URL パラメータの変更

ここでは、URL パラメータの変更についてのリストを示します。URL パラメータの完全なリストは、[第 13 章「URL パラメータを使用した OracleBI Discoverer の起動」](#)を参照してください。

#### 1.2.2.1 削除された URL パラメータ

次の URL パラメータは、サポートされません。

表 1-1 サポートされない URL パラメータ

URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ
aow=	con_name=	cp_width=	nls_number_ format=	password=
arq=	con_nsl=	cs=	nls_numeric_ characters=	pg=
brandimage= (Discoverer Plus Relational)	con_pw=	fm=	nls_sort=	pw=
con_db=	con_rs=	locale=	nlsdateformat=	qpd=rd=

表 1-1 サポートされない URL パラメータ (続き)

URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ	URL パラメータ
con_del=	con_sg=	newpw1=	nlsdatelanguage=	tsc_d!=
con_del=	con_us=	newpw2=	nlsl=	tsc_g!=
con_eul=	connect=	nls_date_format=	nlslang=	tsc_h!=
con_key=	cp_height=	nls_date_language=	nlsnumeric_characters=	
con_lm=	cp_show_legend=	nls_lang=	nlsort=	

### 1.2.2.2 追加された URL パラメータ

次の URL パラメータが追加されています。

- helpset=
- ReuseConnection=

## 1.2.3 Discoverer Plus のロック・アンド・フィール

Discoverer Plus のロック・アンド・フィールは、Oracle Application Server Control を使用して変更できるようになりました。たとえば、Discoverer Plus のロック・アンド・フィール (LAF) を変更することができます。詳細は、第 9.1 項「Discoverer Plus のカスタマイズ」を参照してください。

## 1.2.4 Discoverer Viewer のカスタマイズ

Discoverer Viewer インタフェースは、Oracle Application Server Control を使用してさらにカスタマイズできるようになりました。詳細は、第 9.2 項「Discoverer Viewer のカスタマイズ」を参照してください。

## 1.3 OracleBI Discoverer の構成

OracleBI Discoverer は、インストールした後、特に構成を行わなくても機能します。必要に応じて、次のテーブルに示されている Discoverer 中間層の構成タスクを 1 つ以上実行します。

構成タスク	参照する項
Discoverer インストールと OracleAS Infrastructure との関連付け	第 2 章「Oracle Business Intelligence インストールと OracleAS Infrastructure について」
Oracle Applications とともに使用するための Discoverer の構成	第 15 章「OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite」
ファイアウォールおよび非武装地帯 (DMZ) を使用するための Discoverer の構成	第 14 章「OracleBI Discoverer のセキュリティ管理」
Application Server Control を使用した Discoverer 中間層の構成 (Discoverer サービスの起動および停止など)	第 5 章「OracleBI Discoverer の管理と構成」
Discoverer のインストールの確認	第 1.4 項「OracleBI Discoverer インストールの確認方法」
パブリック接続の作成 (データベースへのログイン)	第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」
OracleBI Discoverer Viewer のロック・アンド・フィールのカスタマイズ	第 9 章「OracleBI Discoverer のカスタマイズ」

構成タスク	参照する項
パフォーマンスの向上を目的とした OracleAS Web Cache との Discoverer のデプロイ	第 8 章「OracleAS Web Cache との OracleBI Discoverer Viewer の使用」
URL 詳細を使用して特定の Discoverer ワークブックおよびワークシートのデプロイ	第 13 章「URL パラメータを使用した OracleBI Discoverer の起動」
OracleBI Discoverer で使用される管理アカウントの情報の参照	付録 C「OracleBI Discoverer 管理アカウント情報」
Discoverer 構成ファイル情報の参照	付録 A「OracleBI Discoverer の構成ファイル」
最適なパフォーマンスとスケーラビリティを得るための Discoverer の微調整	第 12 章「OracleBI Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティの最適化」
Discoverer Plus OLAP に対する Discoverer カタログのインストールと構成	第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」
Discoverer に対するロード・バランシングの提供、または中央集中の Discoverer Preference サーバーの指定	第 7 章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」
OracleAS Portal で使用するための Discoverer Portlet Provider の登録 (Discoverer ポートレットを作成する場合は必須)	第 11 章「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」
Discoverer Plus または Discoverer Viewer の実行	第 3 章「OracleBI Discoverer の開始」
Discoverer エンド・ユーザー作業環境の指定	第 10 章「OracleBI Discoverer 作業環境の管理」
新しいリリースへの Discoverer のアップグレード	付録 B「以前のリリースの Discoverer からのアップグレード」

## 1.4 OracleBI Discoverer インストールの確認方法

OracleBI のインストールの完了後、Discoverer Viewer を実行して、OracleAS Discoverer が正しくインストールされているかどうかを確認できます。

OracleBI Discoverer のインストールを確認する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、OracleAS のインストールで使用した完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む Discoverer Viewer の URL を入力します。

例：

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer`

Discoverer のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていない場合は、エンド・ユーザーが「OracleBI Discoverer に接続」ページの「直接接続」領域を使用して直接接続します（次のスクリーンショットを参照してください）。

ORACLE Discoverer Viewer  
Business Intelligence

OracleBI Discovererに接続

OracleBI Discovererへようこそ。

**直接接続**

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先 OracleBI Discoverer

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール ブラウザから取得したロケール

実行(O)

**注意:** Single Sign-On が有効になっている場合は、最初に Single Sign-On ユーザーとしての認証が要求されます。

Discoverer のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合は、Discoverer Viewer に接続ページが表示されます (次のスクリーンショットを参照してください)。

OracleBI Discovererに接続

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択**

接続の作成(C)

詳細	接続	説明	更新	削除
▶表示	Annual summaries	Annual reports by Region		
▶表示	Customer Reports	Customer reports by Region		
▶表示	Monthly worksheets	Monthly reports by Region		
▶表示	Weekly worksheets	Weekly reports by Region		

**直接接続** [最初に戻る](#)

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先 OracleBI Discoverer

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール ブラウザから取得したロケール

実行(O)

- 「接続の選択」領域が表示された場合は、次のいずれかを実行します。
  - 「**接続**」列で接続名を選択し、Discoverer Viewer を起動します。
  - プライベート接続を作成し、データベース・ログイン詳細を保存します (プライベート接続を追加するには「接続の作成」をクリックします)。次に新しい接続を選択します。
  - 「直接接続」領域を使用してログイン詳細を入力し、「実行」をクリックして Discoverer Viewer を起動します。



3. 「直接接続」領域のみ表示された場合は、ログイン詳細を入力して「OK」をクリックします。

「ワークシート・リスト」ページが表示されます。このページを使用すると、開くワークシートを選択できます。これで Discoverer の強力なビジネス・インテリジェンス分析ツールを使用して、データの分析を開始できます。

### 注意

- プライベート接続の作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
- Discoverer Viewer の起動の詳細は、第 3.11 項「HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始」を参照してください。
- Discoverer Plus の起動の詳細は、第 3.6 項「HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合」を参照してください。
- checkdiscoverer ユーティリティを使用して Discoverer の構成を確認し、障害または異常についてレポートできます (checkdiscoverer ユーティリティの詳細は、第 D.2.2 項「checkdiscoverer ユーティリティ」を参照してください)。
- Discoverer Plus OLAP には、独自の診断ユーティリティがあります (詳細は、第 6.6 項「Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ」を参照してください)。

## 1.5 Discoverer への接続

Discoverer エンド・ユーザーは、次の 2 つの方法で Discoverer に接続できます。

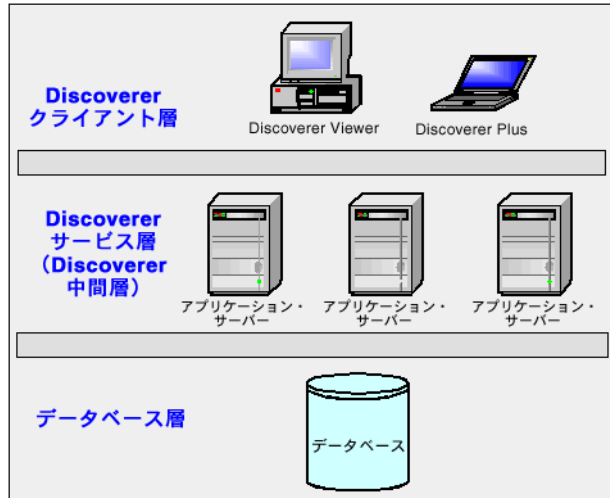
- OracleBI Discoverer Desktop を使用して、エンド・ユーザーのデータベース・ユーザー名とパスワードでログインします (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』を参照してください)。
- OracleBI Discoverer Plus または OracleBI Discoverer Viewer を使用して、エンド・ユーザーがログイン情報をプライベート接続に保存し、その後、その接続を選択します (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』または Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer のオンライン・ヘルプを参照してください)。

また、Discoverer 中間層の管理者がパブリック接続を作成すると、Discoverer Plus および Discoverer Viewer のエンド・ユーザーは、Discoverer をログイン詳細を入力せずに自動で起動できるようになります。詳細は、第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」を参照してください。

## 1.6 OracleBI Discoverer アーキテクチャ

OracleBI Discoverer は、複数層アーキテクチャを採用しています。このアーキテクチャは、Web 環境の分散化特性を活用しています。1 台のマシンに OracleBI Discoverer アーキテクチャのすべての層をインストールすることも可能ですが、パフォーマンスと信頼性を最大限に活用するために、各層を複数のマシンに分散してインストールすることをお勧めします。

図 1-4 Discoverer の複数層アーキテクチャ



**注意:** 複数のアプリケーション・サーバーを1台のマシンにインストールできます。

Discoverer の複数層アーキテクチャは次の層で構成されます。

- Web ブラウザからアクセスする Discoverer クライアント層 (詳細は、[第 1.7 項「Discoverer クライアント層」](#)を参照してください)。
- 1 つ以上の OracleBI Discoverer インストールおよび1 つの OracleAS Infrastructure インストールが含まれる Discoverer サービス層 (Discoverer 中間層とも呼ばれます)。詳細は、[第 1.8 項「Discoverer サービス層」](#)を参照してください。
- データおよびメタデータを含む Discoverer データベース層 (詳細は、[第 1.9 項「Discoverer データベース層」](#)を参照してください)。

### 注意

- 複数のマシンで Discoverer を構成する方法の詳細は、[第 7 章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」](#)を参照してください。

## 1.7 Discoverer クライアント層

Discoverer のクライアント層は、Discoverer Plus または Discoverer Viewer にアクセスする Web ブラウザです（次の図を参照してください）。また、Discoverer クライアント層には Discoverer Portlet Provider も含まれます。これは、OracleAS Portal で Discoverer ワークブックを公開するとき 사용됩니다。Discoverer Plus および Discoverer Viewer をエンド・ユーザーにデプロイするには、適切な URL をエンド・ユーザーに提供する必要があります（詳細は、第 3 章「OracleBI Discoverer の開始」を参照してください）。

図 1-5 Discoverer クライアント層



Application Server Control を使用して、Discoverer クライアント層コンポーネントを有効および無効にできます（詳細は、第 5.4 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化」を参照してください）。

### 1.7.1 Discoverer クライアント層と Discoverer Plus

Discoverer Plus の場合、クライアント・マシンで、Java 仮想マシン (JVM) とともに Java 対応の Web ブラウザ (Microsoft Internet Explorer, Netscape Navigator または Mozilla Firefox) を使用する必要があります。ソフトウェア要件の詳細は、Oracle Business Intelligence のインストール・ガイドを参照してください。

マシンを初めて Discoverer に接続すると、Discoverer Plus アプレットが Discoverer サービス層からダウンロードされ、クライアントのマシンにキャッシュされます。

Discoverer Plus アプレットには、ワークブックを作成してデータを分析するための、Discoverer Plus ユーザー・インタフェースおよび機能が含まれています。以降のユーザーのログイン時には、Discoverer Plus アプレットはローカル・キャッシュから実行されるため、ダウンロードは行われません。

**注意:** Discoverer をアップグレードした場合は、Discoverer Plus アプレットを Discoverer クライアント・マシンへ再度ダウンロードする必要がある場合があります（詳細は、第 3 章「OracleBI Discoverer の開始」を参照してください）。

### 1.7.2 Discoverer クライアント層と Discoverer Viewer

Discoverer Viewer の場合、クライアント・マシンに対する最小要件は、そのマシンで Web ブラウザを介して HTML を実行できることです。Discoverer でサポートされる Web ブラウザのバージョンの詳細は、Oracle Business Intelligence のインストール・ガイドを参照してください。

## 1.8 Discoverer サービス層

Discoverer サービス層は、Discoverer アーキテクチャの一部であり、Discoverer 中間層の管理者が管理します。

図 1-6 Discoverer サービス層



Discoverer サービス層は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer J2EE コンポーネント（詳細は、[第 1.8.1 項「Discoverer J2EE コンポーネント」](#)を参照してください）
- Discoverer CORBA コンポーネント（詳細は、[第 1.8.2 項「Discoverer CORBA コンポーネント \(Discoverer サービス\)」](#)を参照してください）

### 注意

- Discoverer サービス層には Discoverer Plus アプレットも保存されています。これは、Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer Plus を最初に実行したとき、クライアント・マシンにダウンロードされます（詳細は、[第 3 章「OracleBI Discoverer の開始」](#)を参照してください）。
- Discoverer 中間層コンポーネントを実行するマシンは、すべて同じサブネットにある必要があります。

### 1.8.1 Discoverer J2EE コンポーネント

Discoverer J2EE は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer サブレット（詳細は、[第 1.8.1.1 項「Discoverer サブレット」](#)を参照してください）
- Discoverer Plus サブレット（詳細は、[第 1.8.1.2 項「Discoverer Plus サブレット」](#)を参照してください）
- Discoverer Portlet Provider サブレット（詳細は、[第 1.8.1.3 項「Discoverer Portlet Provider サブレット」](#)を参照してください）

図 1-7 Discoverer J2EE コンポーネント



サーブレットは、サーバー・マシンで動作する Java コードのモジュールで構成されており、クライアント・マシンからのリクエストに応答します。サーブレットを使用することにより、クライアント側の処理を最小限にすることができます。

Discoverer サーブレットは、サーブレットを実行するためのサーブレット・エンジンを含む OC4J (Oracle Application Server Containers for J2EE) 環境にデプロイされます。

Discoverer サーブレットの起動および停止の詳細は、[第 5.5 項「Discoverer サーブレットを起動および停止する方法」](#)を参照してください。

### 1.8.1.1 Discoverer サーブレット

Discoverer サーブレットは、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の接続とログインを管理します。

### 1.8.1.2 Discoverer Plus サーブレット

Discoverer Plus は、Discoverer Plus Relational アプレットとそのセッションに対して開始された Discoverer Session プロセスとの間のトラフィックを処理します。

### 1.8.1.3 Discoverer Portlet Provider サーブレット

Discoverer Portlet Provider サーブレットは、Discoverer ワークシートを公開するためのユーザー・インタフェースを提供し、OracleAS Portal ページの Discoverer ワークブックにリンクします。Discoverer Portlet Provider の詳細は、[第 11 章「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」](#)を参照してください。

## 1.8.2 Discoverer CORBA コンポーネント (Discoverer サービス)

Discoverer CORBA (Common Object Request Broker Architecture) コンポーネントは、エンド・ユーザーが Discoverer Session を開始したとき (つまり、ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続したとき) に、Discoverer をアクティブ化します。

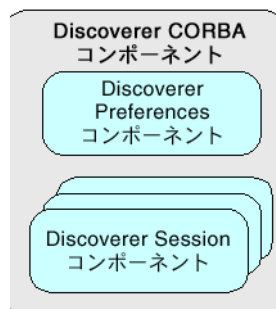
**注意:** Discoverer CORBA コンポーネントを総称して、Discoverer サービスと呼びます (詳細は、[第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」](#)を参照してください)。

Discoverer CORBA コンポーネントは、すべての Discoverer クライアント層コンポーネント (Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider) で使用されます。

Discoverer CORBA は、次のコンポーネントで構成されます。

- Discoverer Session コンポーネント (詳細は、[第 1.8.2.1 項「Discoverer Session コンポーネント」](#)を参照してください)
- Discoverer Preferences コンポーネント (詳細は、[第 1.8.2.2 項「Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください)

図 1-8 Discoverer CORBA コンポーネント



### 1.8.2.1 Discoverer Session コンポーネント

Discoverer Session コンポーネント (CORBA サーバーとも呼ばれます) は、データベースへの接続やワークブックを開くなど、Discoverer の操作を実行します。Discoverer Session コンポーネントにより、Discoverer サブプレットまたはアプレットとデータベースとの間のリンクが提供されます。アクティブなユーザー・ログイン・セッションごとに、1 つの Discoverer Session コンポーネントがあります。

### 1.8.2.2 Discoverer Preferences コンポーネント

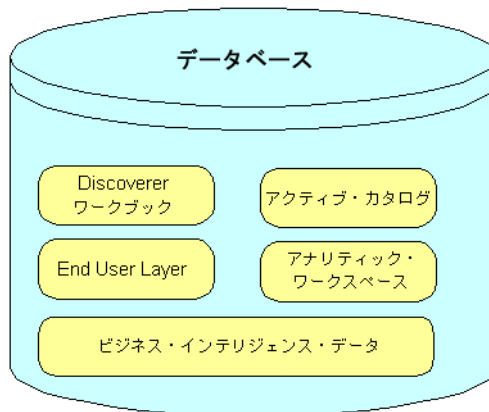
OracleBI Discoverer Preferences コンポーネントにより、すべての Discoverer ユーザー (つまり、Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザー) の作業環境が 1 箇所に保存されます。Discoverer サービス層は、保存された作業環境に従って、デフォルトの Discoverer 動作を指定します。

**注意:** 異なるマシンでそれぞれ別の Discoverer Session コンポーネントを実行する複数のマシン環境では、Discoverer は 1 台のマシンにつき単一の Preferences コンポーネントを使用します。単一の Preferences コンポーネントの指定の詳細は、[第 7.6 項「複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください。

## 1.9 Discoverer データベース層

Discoverer アーキテクチャのデータベース層には、データおよびメタデータが含まれます。

図 1-9 Discoverer データベース層



Discoverer データベース層は、次のコンポーネントで構成されます。

- レポートおよびグラフの保存に使用する Discoverer ワークブック
- データをわかりやすく表示する EUL (End User Layer)
- ユーザーが分析するビジネス・インテリジェンス・データ
- アクティブ・カタログ (アナリティック・ワークスペースに格納されたメタデータから標準を公開するリレーショナル・ビューのセットで、これによって SQL がアクセスできるようになります)
- リレーショナル表に格納されたマルチディメンション・スキーマであるアナリティック・ワークスペース

EUL を作成および管理するには、Discoverer Administrator を使用します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

**注意**

- ユーザーが Discoverer を使用してリレーショナル・データを分析するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) リリース 5.1.x をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、事前に、OracleBI Discoverer Administrator を使用して、EUL を作成または更新しておく必要があります。
- ユーザーが Discoverer を使用してマルチディメンション・データを分析するには、Discoverer カタログをインストールする必要があります（詳細は、第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」を参照してください）。

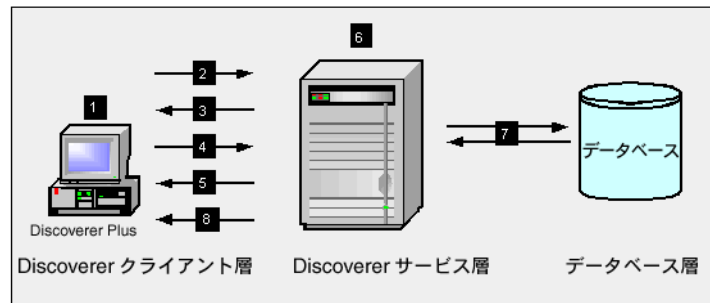
## 1.10 OracleBI Discoverer の動作

この項では、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の動作について説明します。

### 1.10.1 Discoverer Plus Relational の動作

この項では、Discoverer Plus Relational が Discoverer サービス層およびデータベースと連携する方法について説明します。

図 1-10 Discoverer Plus Relational のプロセス

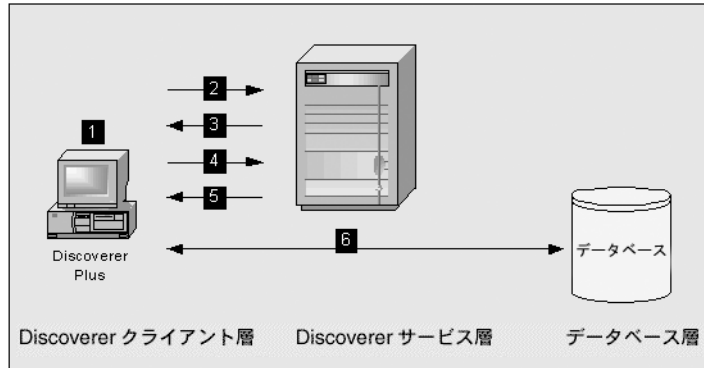


1. クライアント・コンピュータで Web ブラウザを起動し、Discoverer Plus サブレットの URL を入力します。
2. Web ブラウザが Discoverer サービス層の Discoverer Plus サブレットにアクセスすると、リクエストが Discoverer サブレットに転送されます。
3. Discoverer サブレットでは Discoverer の接続ページを取得し、これを Discoverer Plus サブレットに返します。次に、Discoverer Plus サブレットによりページがクライアントに返されます。
4. ユーザーがログインします（直接接続するか、または Discoverer 接続を使用します）。
5. Discoverer Plus Relational アプレットがクライアント・コンピュータに転送されます（まだ転送されていない場合）。
6. この間に、Discoverer サブレットでは Discoverer セッションが開始され、セッションとの接続が確立されます。
7. Discoverer セッションがリクエストを送信し、データベースからデータを取得します。
8. Discoverer セッションがデータを Discoverer サブレットに転送します。Discoverer サブレットにより、Discoverer Plus サブレットにデータが転送され、そこからクライアント・マシンに転送されます。

## 1.10.2 Discoverer Plus OLAP の動作

この項では、Discoverer Plus OLAP が Discoverer サービス層およびデータベースと連携する方法について説明します。

図 1-11 Discoverer Plus OLAP のプロセス

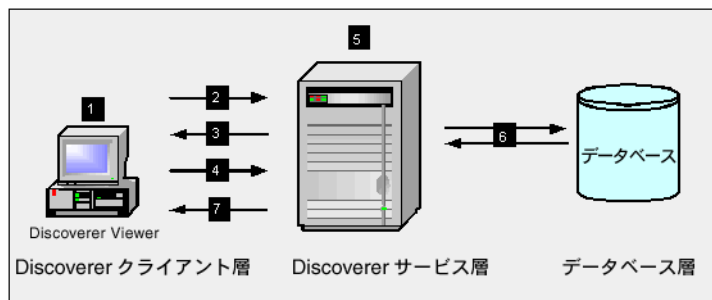


1. クライアント・コンピュータで Web ブラウザを起動し、Discoverer Plus サブレットの URL を入力します。
2. Web ブラウザが Discoverer サービス層の Discoverer Plus サブレットにアクセスすると、リクエストが Discoverer サブレットに転送されます。
3. Discoverer サブレットでは Discoverer の接続ページを取得し、これを Discoverer Plus サブレットに返します。次に、Discoverer Plus サブレットによりページがクライアントに返されます。
4. ユーザーがログインします（直接接続するか、または Discoverer 接続を使用します）。
5. Discoverer Plus OLAP アプレットがクライアント・コンピュータに転送されます（まだ転送されていない場合）。
6. Discoverer Plus OLAP はデータベースに直接接続します。

## 1.10.3 Discoverer Viewer の動作

この項では、Discoverer Viewer が Discoverer サービス層およびデータベースと連携する方法について説明します。

図 1-12 Discoverer Viewer のプロセス



1. クライアント・コンピュータで Web ブラウザを起動し、Discoverer サブレットの URL を入力します。
2. Web ブラウザが Discoverer サービス層上の Discoverer サブレットにアクセスします。



3. Discoverer サーブレットが Discoverer の接続ページを取得して、クライアントに返します。
4. ユーザーがログインします（直接接続するか、または Discoverer 接続を使用します）。
5. この間に、Discoverer サーブレットでは Discoverer セッションが開始され、セッションとの接続が確立されます。
6. Discoverer セッションがリクエストを送信し、データベースからデータを取得します。
7. Discoverer セッションがデータを Discoverer サーブレットに転送します。Discoverer サーブレットは HTML ページを生成し、そのページをクライアント・マシンに転送します。



---

---

# Oracle Business Intelligence インストールと OracleAS Infrastructure について

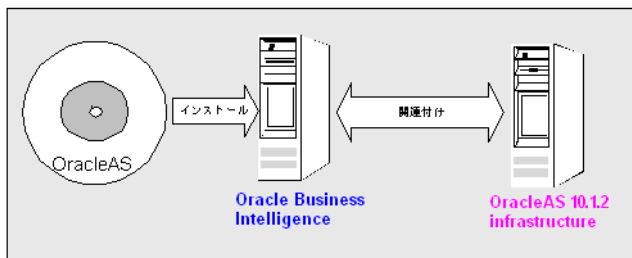
この章では、OracleAS Infrastructure とともに Oracle Business Intelligence を使用する方法について説明します。この章は次のトピックで構成されています。

- [第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)
- [第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」](#)
- [第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」](#)

## 2.1 Oracle Business Intelligence のインストールについて

Oracle Business Intelligence は、次の 3 つの方法でインストールできます。

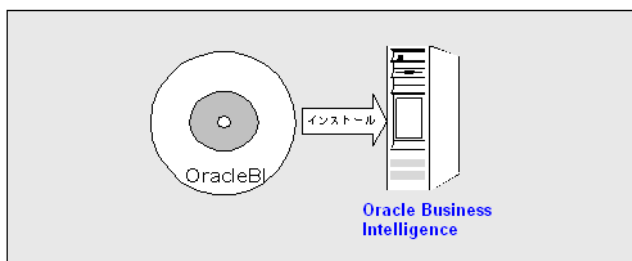
- Business Intelligence and Forms タイプのインストール (Oracle Application Server の CD からインストールします)



Business Intelligence and Forms タイプのインストールは、インストール時に自動的に OracleAS Infrastructure 10.1.2 に関連付けられます。OracleAS Infrastructure は、Business Intelligence and Forms タイプのインストールと同じマシンに存在する場合もあれば、別のマシンに存在する場合もあります。

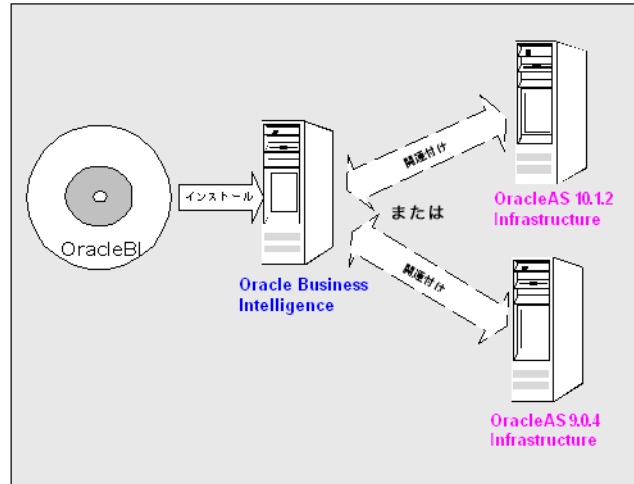
Business Intelligence and Forms タイプのインストールで使用可能なコンポーネントの詳細は、第 2.1.1 項「[Business Intelligence and Forms タイプのインストールと OracleAS Infrastructure に関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストール](#)」を参照してください。

- OracleBI スタンドアロン・インストール (Oracle Business Intelligence スタンドアロンの CD からインストールします)



OracleBI スタンドアロン・インストールは OracleAS Infrastructure に関連付けられていないため、使用可能なコンポーネントの数が限られています。OracleBI スタンドアロン・インストールで使用可能なコンポーネントの詳細は、第 2.1.2 項「[OracleBI スタンドアロン・インストールについて](#)」を参照してください。

- OracleAS Infrastructure に関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストール (Oracle Business Intelligence スタンドアロンの CD からインストールし、手動で OracleAS Infrastructure 9.0.4 または 10.1.2 に関連付けます)



OracleAS Infrastructure は、OracleBI スタンドアロン・インストールと同じマシンに存在する場合もあれば、別のマシンに存在する場合があります。OracleAS Infrastructure に関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストールで使用可能なコンポーネントの詳細は、第 2.1.1 項「[Business Intelligence and Forms タイプのインストールと OracleAS Infrastructure に関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストール](#)」を参照してください。

#### 注意

- 特に記載がないかぎり、このマニュアルでは、Business Intelligence and Forms タイプのインストールまたは OracleAS Infrastructure に関連付けられた BI スタンドアロン・インストールを前提としています。
- Oracle Application Server は、Oracle Business Intelligence と同じマシンにインストールされている場合もあれば、別のマシンにインストールされている場合もあります。

### 2.1.1 Business Intelligence and Forms タイプのインストールと OracleAS Infrastructure に関連付けられた OracleBI スタンドアロン・インストール

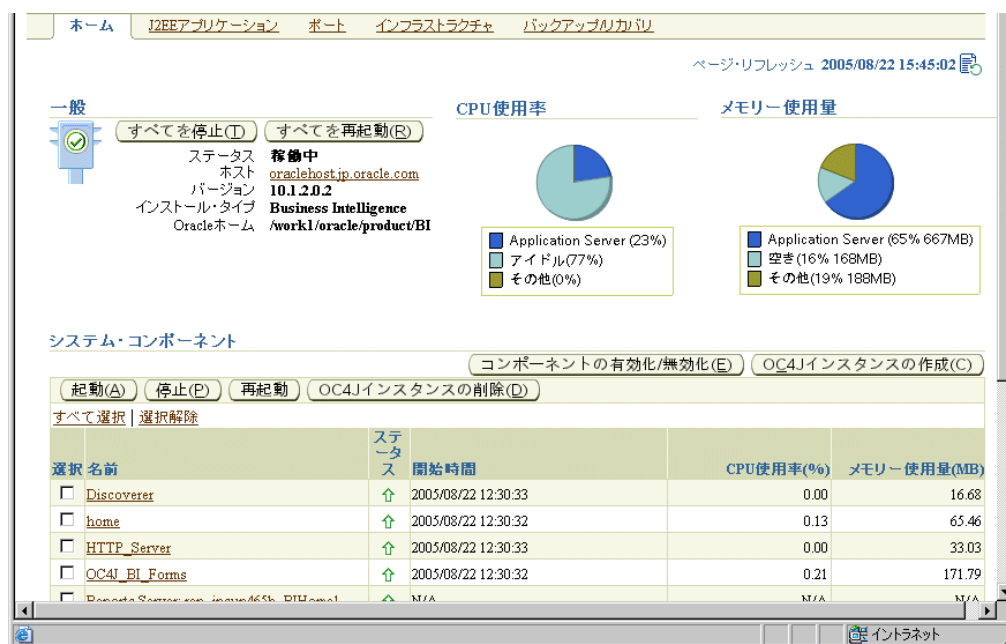
Business Intelligence and Forms タイプのインストールまたは OracleAS Infrastructure に関連付けられた BI スタンドアロン・インストールでは、次のコンポーネントが使用可能です。

- Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP
- Discoverer Viewer
- Discoverer Portlet Provider (Oracle Portal 経由)
- OC4J
- Oracle HTTP Server
- OPMN
- Oracle Application Server Control
- OracleAS Web Cache
- OracleAS Single Sign-On
- Discoverer 接続の管理ページ
- OracleBI Discoverer のプライベート接続とパブリック接続
- OracleBI Discoverer の SSL 機能
- Oracle Identity Management

エンド・ユーザーは、Discoverer の接続ページを使用して、Discoverer の起動やログイン詳細の管理を行うことができます。Discoverer 接続の詳細は、第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」を参照してください。

インストールが終了すると、Oracle Application Server Control ホームページのシステム・コンポーネント・リストに Discoverer が表示されます。

図 2-1 Oracle Business Intelligence インストールでの Application Server Control ホームページ



OracleAS Infrastructure への OracleBI スタンドアロン・インストールの手動による関連付けの詳細は、第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」を参照してください。

Application Server Control の表示方法の詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください。OracleAS の CD からインストールされたコンポーネントを表示する方法は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください。

## 2.1.2 OracleBI スタンドアロン・インストールについて

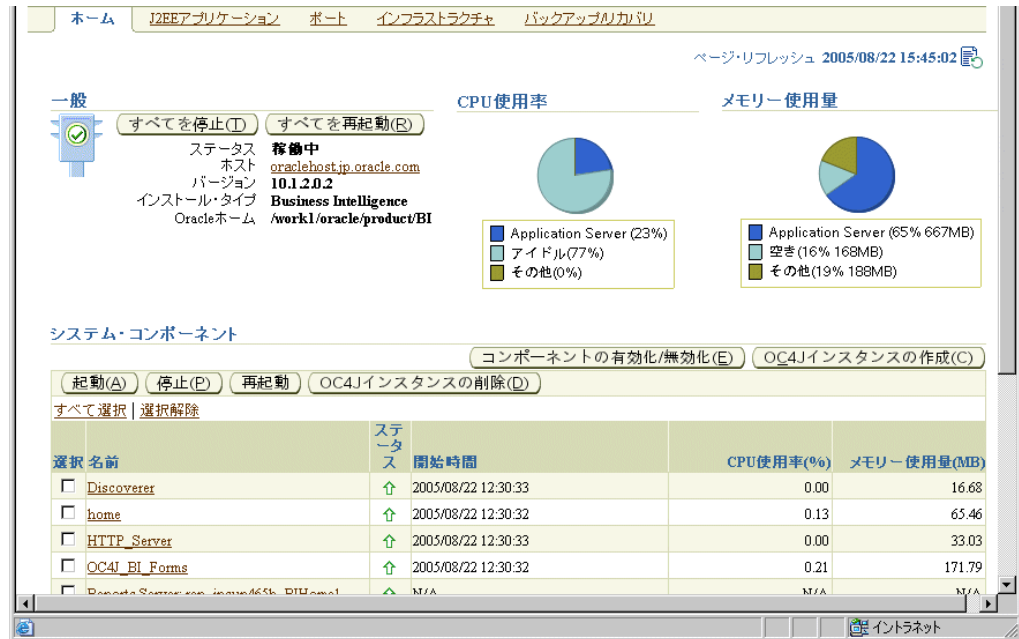
Oracle BI スタンドアロン・インストールには、次のコンポーネントが含まれます。

- Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP
- Discoverer Viewer
- Discoverer Portlet Provider (インストールされますが、Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられるまでは操作できません)
- OC4J
- Oracle HTTP Server
- OPMN
- Oracle Application Server Control
- OracleAS Web Cache

**注意:** エンド・ユーザーは直接ログインのページを使用して Discoverer を起動します。Discoverer 接続と OracleAS Single Sign-On は、OracleBI スタンドアロン・インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていないかぎり使用できません。

インストールが終了すると、Oracle Application Server Control ホームページのシステム・コンポーネント・リストに Discoverer が表示されます。

**図 2-2 Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストールでの Application Server Control ホームページ**



Application Server Control の表示方法の詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください。Oracle Business Intelligence スタンドアロンの CD からインストールされたコンポーネントを表示する方法は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください。

## 2.2 OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法

OracleBI スタンドアロン・インストールの場合、Discoverer を OracleAS の他のコンポーネント (Oracle Portal、Oracle Single Sign-On など) とともにデプロイするには、OracleBI スタンドアロン・インストールを Oracle Application Server Infrastructure に関連付けます。

OracleBI Discoverer は、OracleAS 9.0.4 Infrastructure または OracleAS 10.1.2 Infrastructure のいずれかに関連付けることができます。

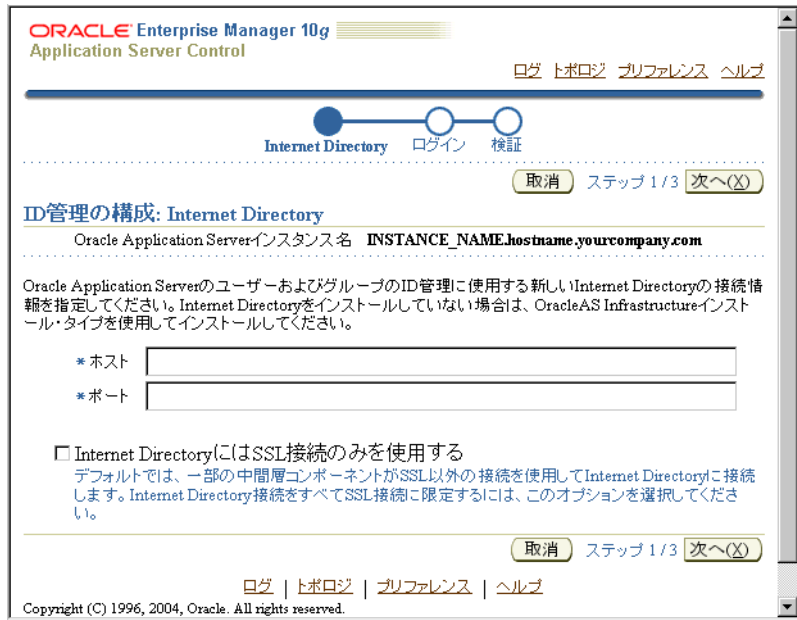
**注意:** OracleBI スタンドアロン・インストールを 9.0.4 の Infrastructure に関連付ける場合は、Discoverer Portlet Provider をデプロイするためにメタデータ・リポジトリの Discoverer 部分もアップグレードする必要があります (詳細は、第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」を参照してください)。

OracleBI スタンドアロン・インストールを OracleAS Infrastructure に関連付ける手順は次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、構成する OracleBI インストールの完全修飾ホスト名とドメインが含まれている Application Server Control URL を入力します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
2. 「インフラストラクチャ」タブを表示します。



3. 「ID 管理」領域で、次のいずれかの操作を実行します。
  - OracleBI インストールを関連付けるには、「構成」をクリックして「ID 管理の構成: Internet Directory」ページを表示します。
  - OracleBI インストールの関連付けを変更するには、「変更」をクリックして「ID 管理の変更: Internet Directory」ページを表示します。





4. 「ホスト」フィールドと「ポート」フィールドを使用して、OracleAS Infrastructure マシンの Oracle Internet Directory コンポーネントのホスト名 (infra.mycompany.com など) とポート番号 (389 など) を入力します。  
  
ヒント: 指定するホスト名とポート番号の値を確認するには、OracleAS Infrastructure マシンで Oracle Application Server Control を起動し、「インフラストラクチャ」タブを表示して「Internet Directory ホスト」フィールドと「Internet Directory ポート」フィールドの値を書き留めます。
5. 「次へ」をクリックして「ID 管理の構成: ログイン」ページを表示します。
6. 「ユーザー名」フィールドと「パスワード」フィールドを使用して、Infrastructure マシンの Oracle Internet Directory コンポーネントに対する管理ユーザー名とパスワードを入力します。  
  
ヒント: ユーザー名の値の前には cn= を付けます (cn=orcladmin など)。
7. 「次へ」をクリックして「ID 管理の構成: 検証」ページを表示します。
8. 「終了」をクリックします。  
  
ID 管理が構成され、メタデータ・リポジトリを構成できるようになります。
9. 「メタデータ・リポジトリ」領域で、「構成」をクリックして「リポジトリの構成: Internet Directory」ページを表示します。
10. 「リポジトリの構成: Internet Directory」または「リポジトリの変更: Internet Directory」ウィザードの手順に従い、次に「終了」をクリックします。

これで OracleBI スタンドアロン・インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられました。OracleAS の他のコンポーネント (つまり、Oracle Portal、Oracle Single Sign-On) とともに Discoverer をデプロイし、Discoverer 接続と Discoverer Portlet Provider を使用できるようになります。使用可能な Oracle Applications コンポーネントの詳細は、[第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)を参照してください。

## 2.3 Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法

OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 は、OracleAS Portal 10.1.2 または OracleAS Portal 9.0.4 のいずれかで使用できます。OracleBI Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal 10.1.2 で使用する方法的詳細は、[第 11 章「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」](#)を参照してください。

この項では、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を OracleAS Portal 9.0.4 で使用する手順を説明します。

OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を OracleAS Portal 9.0.4 で使用する場合は、この項の説明に従って upgradeMR スクリプトを使用して、OracleAS Metadata Repository (MR) 9.0.4 の OracleBI Discoverer 部分のみをアップグレードする必要があります。

upgradeMR スクリプトを使用して MR の OracleBI Discoverer 部分のみをアップグレードすると、OracleAS Portal は引続き MR に対して動作します。したがって、OracleAS Portal インスタンスを 10.1.2 にアップグレードする必要はありません。

OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant 10.1.2 を使用して 9.0.4 から 10.1.2 に OracleAS Metadata Repository をアップグレードした場合は、OracleAS Portal 9.0.4 スキーマも 10.1.2 にアップグレードされます。そのため、OracleAS Portal 9.0.4 が MR に対して動作しなくなります。引続き OracleAS Portal 9.0.4 を使用する場合は、OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant 10.1.2 を使用して OracleAS Metadata Repository をアップグレードしないでください。

OracleAS Portal 9.0.4 で OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を使用する手順は次のとおりです。

1. 使用する OracleAS Portal に関連付けられている Oracle Application Server Infrastructure に、Oracle Business Intelligence を関連付けます。  
詳細は、[第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」](#)を参照してください。
2. OracleAS Metadata Repository の OracleBI Discoverer 部分をアップグレードします。詳細は、[第 2.3.1 項「メタデータ・リポジトリの OracleBI Discoverer 部分のみのアップグレード方法」](#)を参照してください。
3. 次のいずれかを実行して、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を OracleAS Portal 9.0.4 に登録します。
  - OracleAS Portal に既存の OracleBI Discoverer Portlet Provider 9.0.4 が登録されている場合は、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 の URL を使用するよう、OracleBI Discoverer Portlet Provider の登録を変更します。

OracleBI Discoverer Portlet Provider の登録を OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 に変更するのは、MR の Discoverer 部分が 10.1.2 にアップグレードされると、OracleBI Discoverer Portlet Provider 9.0.4 が動作しなくなるためです。

- OracleAS Portal に既存の OracleBI Discoverer Portlet Provider が登録されていない場合は、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を OracleAS Portal に登録します。

Discoverer Portlet Provider の登録の詳細は、[第 11.3 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」](#)を参照してください。

#### 注意

- OracleAS Portal 9.0.4 で OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 を使用する場合は、次の点に注意してください。
  - カラー・ピッカーは使用できません。そのため、ゲージを作成するにはデフォルトの色しか使用できません。
  - 日付ピッカーは使用できません。このため、「リフレッシュ・オプションの設定」ページを使用してポートレットのリフレッシュ・スケジュールを指定する場合、「初回リフレッシュ日付」フィールドに日付をテキストで入力する必要があります (25-JAN-2005 など)。

## 2.3.1 メタデータ・リポジトリの OracleBI Discoverer 部分のみのアップグレード方法

upgradeMR スクリプトを使用して、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 で使用できるように OracleAS Metadata Repository 9.0.4 の OracleBI Discoverer 部分のみをアップグレードします。

OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 で使用できるように OracleAS Metadata Repository 9.0.4 をアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. スクリプトを実行する前に、ORACLE\_HOME 環境変数が OracleBI Discoverer のホーム・ディレクトリに設定されていることを確認します。
2. Oracle Business Intelligence マシンでコマンド・プロンプトを開き、upgradeMR スクリプトを実行します。

構成ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

たとえば、UNIX マシンの場合、次のコマンドを入力します。

```
upgradeMR.sh
```

OracleAS Metadata Repository の OracleBI Discoverer スキーマを 10.1.2 にアップグレードすることを確認するように要求されます。

3. プロンプトへの応答として `y` を入力します。  
ユーザー名とパスワードを入力するように要求されます。
4. OracleAS Metadata Repository があるデータベースの SYSTEM ユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。

スクリプトからの出力がコンソールに表示されます。また、`util` ディレクトリの `MRUpgrade.log` ファイルにも記録されます。たとえば、Solaris の場合、ログ・ファイルの場所は次のとおりです。

```
ORACLE_HOME/discoverer/util/MRUpgrade.log
```

**注意 :** OracleAS Metadata Repository の OracleBI Discoverer 部分をアップグレードした後で使用できるのは、OracleBI Discoverer Portlet Provider 10.1.2 のみです。この OracleAS Portal および OracleAS Infrastructure で OracleBI Discoverer Portlet Provider 9.0.4 を使用することはできません。



---

---

## OracleBI Discoverer の開始

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「[Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成](#)」を参照してください。

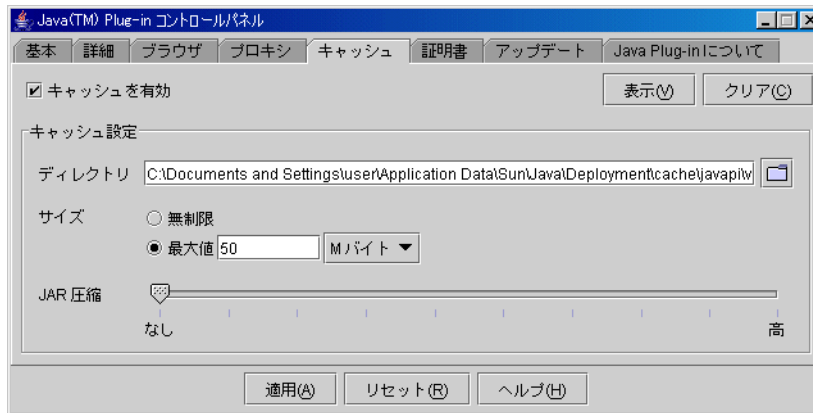
この章では、必要な Plug-in (Java Runtime Environment など) またはセキュリティ証明書をインストールして構成するために、OracleBI Discoverer をクライアント・ブラウザ・マシンで開始する方法を説明します。項目は次のとおりです。

- 第 3.1 項「[OracleBI Discoverer の開始の概要](#)」
- 第 3.2 項「[Discoverer でサポートしている Web ブラウザ・バージョン](#)」
- 第 3.3 項「[Discoverer の開始方法の制限](#)」
- 第 3.4 項「[Discoverer Plus および Discoverer Viewer の開始に必要なメモリ要件と権限](#)」
- 第 3.5 項「[HTTPS を使用した Discoverer の実行](#)」
- 第 3.6 項「[HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合](#)」
- 第 3.7 項「[Discoverer Plus の開始方法](#)」
- 第 3.8 項「[HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Microsoft Internet Explorer で初めて Discoverer Plus を開始する場合](#)」
- 第 3.9 項「[HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合](#)」
- 第 3.10 項「[HTTP を使用して UNIX クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合](#)」
- 第 3.11 項「[HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始](#)」

### 注意

- この章の説明は、Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていることを前提としています。Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていない場合、Discoverer の接続ページは表示されません。エンド・ユーザーは、「OracleBI Discoverer に接続」ページの「直接接続」領域を使用してログイン詳細を直接入力する必要があります。
- ユーザーが Discoverer を使用してリレーショナル・データを分析するには、データベースに Discoverer EUL リリース 5.1.x をインストールする必要があります。
- checkdiscoverer ユーティリティを使用して Discoverer の構成を確認し、障害または異常についてレポートできます (checkdiscoverer ユーティリティの詳細は、第 D.2.2 項「[checkdiscoverer ユーティリティ](#)」を参照してください)。
- クライアント・マシンから Discoverer Plus アプレットを削除する必要があることがあります。たとえば、Discoverer Plus をクリーンな環境で実行する場合などです。クライアント・マシンから Discoverer Plus アプレットを削除する手順は、次のとおりです。

- a. JVM のコントロール・パネルを表示します (たとえば、Windows マシンの場合は「コントロールパネル」を表示して、Java Plug-in のアイコンをダブルクリックします)。
- b. 「キャッシュ」タブを表示します。



- c. 「クリア」をクリックします。

または、Oracle Jar Cache ディレクトリからすべてのファイルを手動で削除します。たとえば、Windows の場合、C:\Documents and Settings\ユーザー名>\Oracle Jar Cache ディレクトリからすべてのファイルを削除します。

必要な場合は、ブラウザの一時ファイルも消去します (Internet Explorer では、「ツール」→「インターネット オプション」を選択し、「ファイルの削除」をクリックします)。

- 一部の環境では、クライアント・マシンから Java Runtime Environment (Plug-in) を削除する必要があることがあります。これを行うには、クライアント・マシンから Java 2 Runtime Environment SE と Oracle JInitiator の全バージョンを削除します。たとえば、Windows では、「コントロールパネル」を表示し、「アプリケーションの追加と削除」を選択します。
- ブラウザ・マシンの Java Plug-in は、Discoverer とともにインストールされた認証済の Java Plug-in バージョンに影響を与えずにアップグレードできます。たとえば、Windows にログインすると、Sun Java Plug-in のポップアップが表示されることがあります。このポップアップは、「はい」をクリックすることで新しいバージョンの Java Plug-in をダウンロードできることを知らせています。「はい」をクリックして新しいバージョンをダウンロードおよびインストールした場合、Discoverer は、そのマシンで Discoverer を最初に開始したときにインストールされた Java Plug-in バージョンで引続き使用されます。

## 3.1 OracleBI Discoverer の開始の概要

Discoverer Viewer は、インターネット・ブラウザがあれば開始できます。開始する手順は次のとおりです。

- HTTP で Discoverer Viewer を開始するには、インターネット・ブラウザを起動して、Discoverer Viewer HTTP の URL（例：`http://<host.domain>:<HTTP port>/discoverer/viewer`）を入力します。  
詳細は、第 3.11 項「[HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始](#)」を参照してください。
- HTTPS で Discoverer Viewer を開始するには、インターネット・ブラウザを起動して、Discoverer Viewer HTTPS の URL（例：`https://<host.domain>:<HTTPS port>/discoverer/viewer`）を入力します。  
詳細は、第 3.5 項「[HTTPS を使用した Discoverer の実行](#)」を参照してください。

マシンにインストールしているソフトウェアによっては、次の手順も実行しなければならない場合があります。

- クライアント・ブラウザ・マシンに JVM がインストールされていない場合は、JVM をインストールしてそのマシンの Discoverer Plus アプレットを初期化する必要があります。詳細は、第 3.6 項「[HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合](#)」を参照してください。
- HTTPS で Discoverer Plus を開始するには、事前に認証局からセキュリティ証明書をインストールする必要があります。詳細は、第 3.5 項「[HTTPS を使用した Discoverer の実行](#)」を参照してください。

### 注意

- Discoverer のデフォルト・ポート番号の確認は、第 5.8 項「[Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法](#)」を参照してください。

## 3.2 Discoverer でサポートしている Web ブラウザ・バージョン

Discoverer でサポートされる Web ブラウザのバージョンの詳細は、Oracle Business Intelligence のインストレーション・ガイドを参照してください。

Discoverer Viewer を Internet Explorer 5.0 で実行する場合は、次のことに注意してください。

- Internet Explorer 5.0 には、パラメータ画面などの Viewer 形式のページから情報を送信すると通信が途切れるという問題を引き起こす可能性のあるバグがあることがわかっています。
- 5.5 より前の Internet Explorer バージョンには、Microsoft Excel の特定のバージョンとの間に様々な互換性の問題があります。このため、Discoverer Plus および Discoverer Viewer で Microsoft Excel へのエクスポート機能と Internet Explorer の両方を使用する場合は、Internet Explorer 5.5 以上の使用を強くお勧めします。

**注意：**これらの問題は、Internet Explorer および Microsoft Excel の一般的な問題であり、Oracle 製品との使用に固有なものではありません。

## 3.3 Discoverer の開始方法の制限

セキュアな Discoverer 環境では、許可したエンド・ユーザーのみが Discoverer にアクセスできるようにします。たとえば、ユーザー・アクセスを Discoverer Plus を使用した読取り専用の Discoverer ワークブックへのアクセスにのみ限定できます。

セキュリティの要件に応じて、次のようなセキュアな Discoverer 環境を構築できます。

- 特定の Discoverer エンド・ユーザーについて、OracleBI Discoverer Administrator でクエリーの作成 / 編集権限を取り消し、Discoverer Plus を読取り専用モードで実行します（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください）。
- 中間層とデータベースの間の Oracle Advanced Security（以前の詳細セキュリティ・オプション）暗号化を有効にします。

この他の Discoverer セキュリティ機能の詳細は、第 14 章「OracleBI Discoverer のセキュリティ管理」を参照してください。

## 3.4 Discoverer Plus および Discoverer Viewer の開始に必要なメモリー要件と権限

OracleBI Discoverer Plus を開始するには、Discoverer Plus クライアント・マシン（つまり、ブラウザ・マシン）に次のものがが必要です。

- Java 仮想マシンをインストールするためのクライアント・マシンの管理権限
- 最低 50MB の Oracle Jar Cache 用ユーザー個人プロファイル領域
- JVM をインストールするための最低 100 ~ 150MB の空きディスク容量

OracleBI Discoverer Viewer を開始するための要件は、JavaScript および Cookie を有効にした標準 Web ブラウザ（Microsoft Internet Explorer など）が実行できることです。

## 3.5 HTTPS を使用した Discoverer の実行

HTTPS を使用して（つまり、Secure Sockets Layer (SSL) モードで）Discoverer を実行するには、事前に、OracleAS インスタンスの Oracle HTTP Server で、認証局（Verisign など）からセキュリティ証明書をインストールしておく必要があります。セキュリティ証明書のインストールの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』および『Oracle Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください。

OracleAS のインストールでは、HTTPS のデプロイを確認するために使用するダミーの証明書が OracleAS インスタンスに含まれます。OracleAS インスタンスでの通信をセキュアにするには、有効なセキュリティ証明書をインストールする必要があります。

セキュリティ証明書は、セキュリティ証明書の所持者としての身元を Discoverer クライアント・マシンに対して証明します。

HTTPS を使用した Discoverer の開始方法は、Discoverer Viewer と Discoverer Plus で次のように異なります。

- Discoverer Viewer を HTTPS で実行するには、Discoverer Viewer の URL で HTTPS を指定し、HTTPS ポート番号を指定します。

例：

```
https://<host.domain>:<HTTPS port>/discoverer/viewer
```

「セキュリティの警告」ダイアログが表示された場合は、「はい」をクリックし、使用している認証局から発行されたセキュリティ証明書を受け入れます。これで、Discoverer Viewer は HTTPS モードで起動します。Discoverer Viewer の起動の詳細は、第 3.11 項「HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始」を参照してください。

- Discoverer Plus を HTTPS で実行するには、Discoverer Plus を実行するすべてのクライアント・マシンの Java 仮想マシン (JVM) 証明書ストアに、Web サーバーのセキュリティ証明書をインストールします。詳細は、第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」を参照してください。

**注意：**HTTPS で Discoverer Plus をデプロイするには、Oracle Application Server Control で「セキュアなトンネリング」セキュリティ・プロトコルを選択する必要があります（詳細は、第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください）。

### 注意

- OracleAS をインストールする際、SSL は自動でインストールされますが、デフォルトでは有効になっていません。SSL を使用して Discoverer をデプロイするには、SSL を有効にする必要があります。SSL を有効にするには、opmn.xml の start-mode パラメータを 'ssl-enabled' に設定し、ssl\_enable 設定を 'true' にします。SSL の有効化の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。



### 3.5.1 Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法

初めて Discoverer Plus を HTTPS（つまり、Secure Sockets Layer（SSL）モード）で開始する際、Discoverer クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールします。

ヒント: クライアント・マシンに JVM がインストールされていない場合、Discoverer を最初に Secure Sockets Layer（SSL）モードで開始する前に、次のいずれかを実行します。

- Discoverer Plus を HTTP モードで実行します。これにより、JVM がクライアント・マシンにインストールされます（詳細は、第 3.6 項「[HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合](#)」を参照してください）。
- JVM をクライアント・マシンに手動でインストールします。

Discoverer Plus セキュリティ証明書をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、OracleAS のインストールで使用した完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む Discoverer Plus HTTPS の URL を入力します。

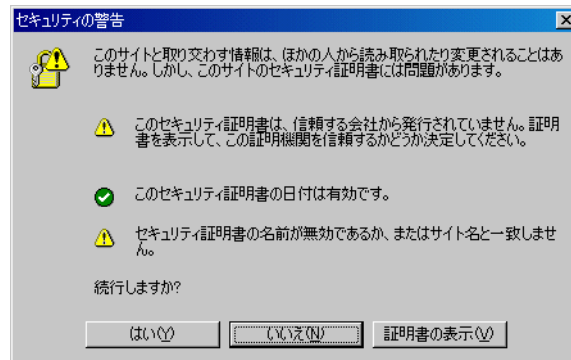
例:

`https://<host.domain>:<port>/discoverer/plus`

説明:

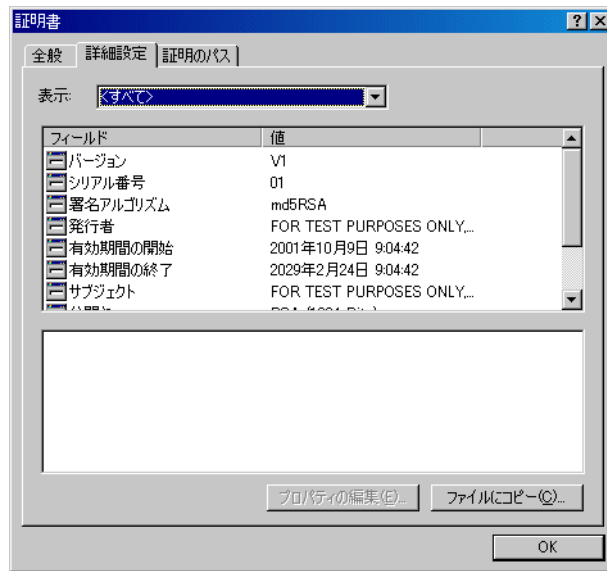
- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名およびドメインです。
- `<port>` は、Discoverer がインストールされている HTTPS ポート番号（デフォルトでは 4443）です。
- `/discoverer/plus` は、Discoverer Plus を起動する URL コマンドです。

「セキュリティの警告」ダイアログが表示されます。

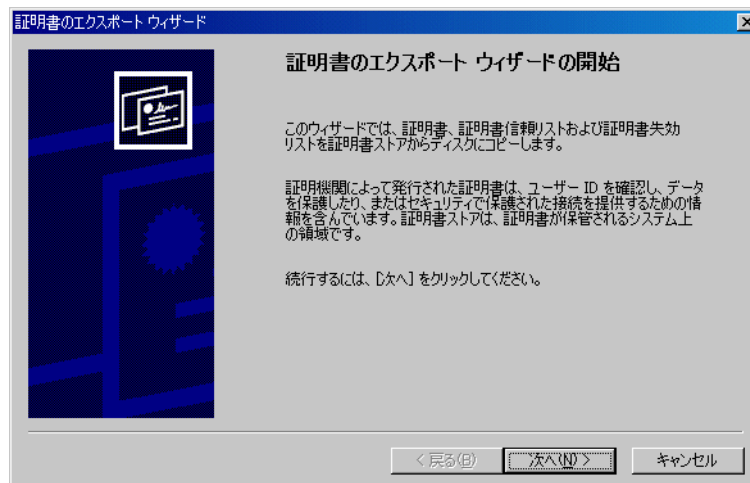


2. 証明書の表示をクリックし、「証明書」ダイアログを表示します。

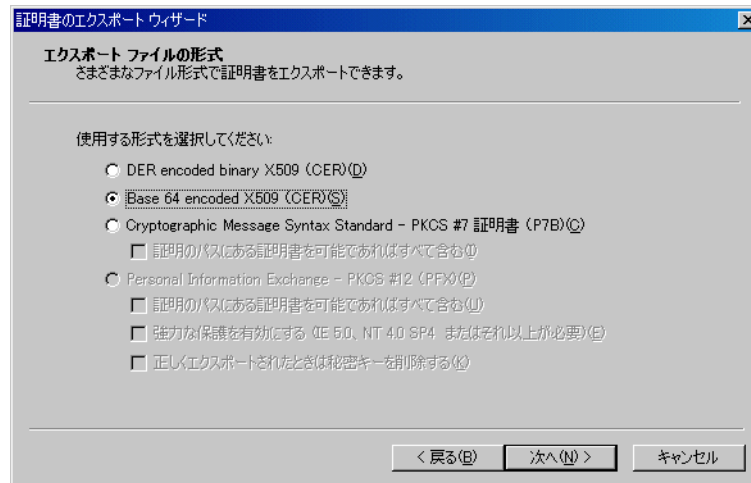
- 「詳細設定」タブを表示します。



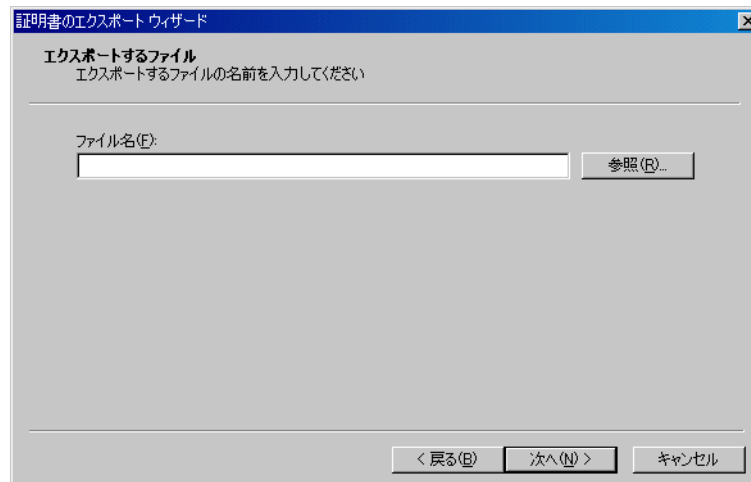
- ファイルにコピーをクリックし、「証明書のエクスポート ウィザード」を起動します。



5. 「次へ」をクリックし、「証明書のエクスポート ウィザード」の「エクスポートファイルの形式」ページを表示します。



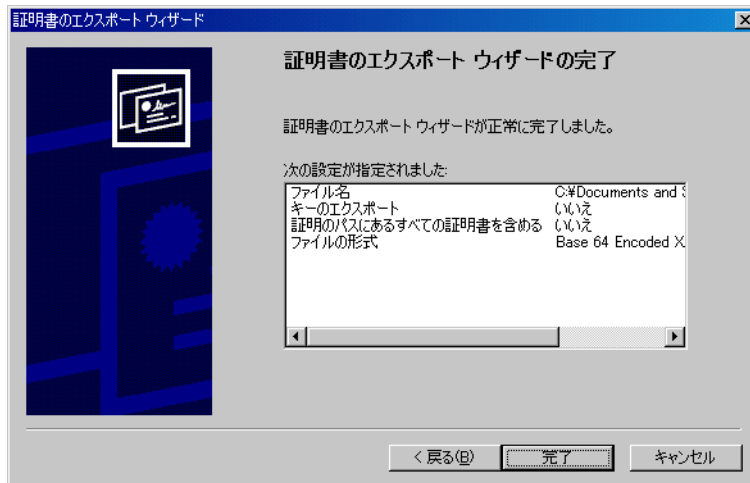
6. 「Base-64 エンコーディング X.509 (.CER)」ラジオ・ボタンを選択します。
7. 「次へ」をクリックし、「証明書のエクスポート ウィザード」の「エクスポートするファイル」ページを表示します。



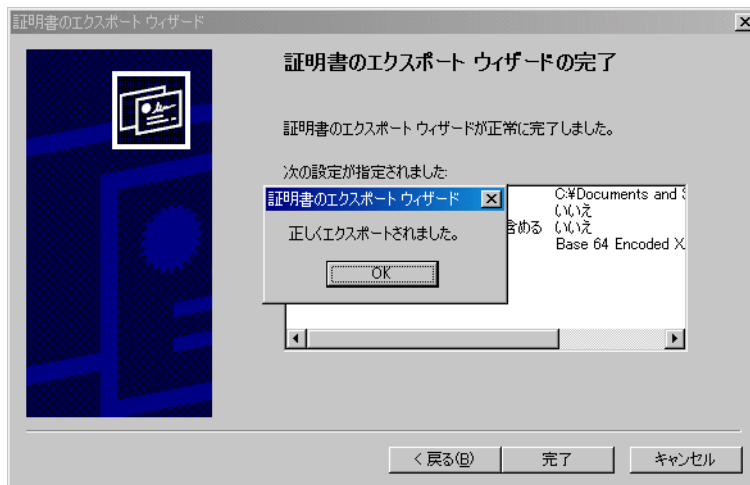
ここで、エクスポートする証明書ファイルの一時的な名前および場所を選択します。

8. 「ファイル名」フィールドに、エクスポートする証明書ファイルの場所および名前（拡張子 .cer を含む）を入力します（例：c:\tmp¥mycertificate.cer）。

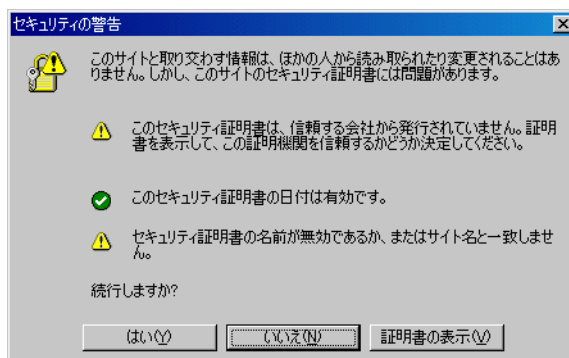
- 「次へ」をクリックして、「証明書のエクスポート ウィザード」の最後のページを表示します。



- 「完了」をクリックし、証明書のインストールを完了します。  
確認のダイアログが表示されます。



- 「OK」をクリックすると、確認ダイアログおよび「証明書のエクスポート ウィザード」が閉じ、「証明書」ダイアログの「詳細設定」タブに戻ります。
- 「証明書」ダイアログの「詳細設定」タブで「OK」をクリックし、「セキュリティの警告」ダイアログに戻ります。



13. 「セキュリティの警告」ダイアログは開いたままにしておきます。
14. 次を参照して、使用する JVM の証明書ストアに前述の手順で保存したセキュリティ証明書ファイルをインポートします。
  - JInitiator を使用する場合は、第 3.5.2 項「JInitiator 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法」を参照してください。
  - Sun Java Plug-in を使用する場合は、第 3.5.3 項「Java Plug-in 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法」を参照してください。
15. (オプション) エクスポートで一時的に保存した証明書ファイル (例 : c:\tmp\mycertificate.cer) を削除します。
16. 「セキュリティの警告」ダイアログで「はい」をクリックし、セキュリティ証明書を受け入れて Discoverer Plus を起動します。

Discoverer Plus が HTTPS モードで起動し、「OracleBI Discoverer に接続」ページが表示されます。

直接接続

---

**OracleBI Discovererに接続**

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択** 接続の作成(+)

詳細	接続	説明	更新	削除
	<a href="#">Annual summaries</a>	Annual reports by Region		
	<a href="#">Customer Reports</a>	Customer reports by Region		
	<a href="#">Monthly worksheets</a>	Monthly reports by Region		
	<a href="#">Weekly worksheets</a>	Weekly reports by Region		

**直接接続**  最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

**注意** : HTTPS モードでは、ブラウザのステータス・バーに閉じた鍵のマークが表示されません。これは、Web セッションが保護されていることを意味しています。

## 注意

- Java Plug-in 以外の JVM でセキュリティ証明書をインストールする際の詳細は、該当する JVM 独自のドキュメントを参照してください。
- Discoverer Plus の起動時に新しい JVM をインストールする場合、Discoverer Plus を実行するすべてのクライアント・マシンの JVM 証明書ストアに、Web サーバーのセキュリティ証明書を再インストールする必要があります。

### 3.5.2 JInitiator 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法

JInitiator を使用して HTTPS で実行するように Discoverer Plus を構成する場合、まず「証明書のエクスポート ウィザード」を使用して証明書ファイルをエクスポートしてから、JInitiator 証明書ストアに証明書詳細をインポートします（詳細は、[第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」](#)を参照してください）。

JInitiator 証明書ストアに証明書詳細をインポートする手順は、次のとおりです。

1. [第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」](#)で保存した証明書ファイル（例：`c:\tmp\mycertificate.cer`）を、テキスト・エディタで開きます。

次のスクリーンショットは、テキスト・エディタで開いた `mycertificate.cer` という名前の証明書ファイルです。

```

-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIC3zCCAkCAQEEwQYJKoZIhvcNAQEEBQAwgBMxCzAJBgNVBAYTAIVTMQswCQYD
VQIQTEwJPUIjERMA8GATUEBxMIUG9ydGxhbmd0xFzAVBgNVBAoTDk9SQUNMRSBERU
IENBMSAwHgYDVQQLExdETyBOT1QgVWVNFIEENTPTU1FukNJQUxMwTEiMCAgATUEA
xQZROVUITEEgUkVBTQCBDRVJUSUZJQ0FURSEhITEIMCMGCSqGSIb3DQEJARYWRk9S
IFRFU1QgUFVSUE9TRVMgT05MWTAEFw0wMTEwMDkxMDA0NDJhFw0yOTAyMjIwMDA0
NDJhMIG7MQswCQYDVQGEwJVUzELMAkGA1UECBMCT1IxEETAPBgNVBAcTCFVvcnR
sYw5kMSAwHgYDVQQLExdPukFDTEUgREVNTyBDRVJUSUZJQ0FURTEfMBOGATUEC
xMwTEk9UITEZPUjBET01NRVJDSUJFMIFVTRTEiMCAgATUEAxQZROVUITEEgUkVBT
QCBDRVJUSUZJQ0FURSEhITEIMCMGCSqGSIb3DQEJARYWRk9SIFRFU1QgUFVSUE9
TRVMgT05MWTcBnzANBkGchkiG9wOBAQEFAAQ0BjQAwwYkCgYEAyT9I7chavKG2yRou
isMIPytG3eulZom6bgQtEYHUo22RyLaBFzSfWN/fomIxMYyIU0/ONkyzjJmIHf0nb3
BLE9FXJTWpZLMT+/L/84ngJEA7M+J3/SEG5fmYzUQjHn3qngK9H5M3sIYss7ahMML64
d3LXSYq/0/1QZqGIMQITDMsCAwEAATANBgkqhkiG9w0BAQQFAAQBkDwXUuUwRkPgBi
WXLGM8DufnR8GdgJ/kDId3YPvWhY2s+51MCO/3UOGGp+yeNOCgUXX74Qvmsd3IIP2
tXvarLku9i1unUn1pUeF9QWaaD9ZDK36jkGLmti1Bn/3xI390JGwwdIvJhFtKv28
MumzZRRfk0i06qt08sqMkgtUYw==
-----END CERTIFICATE-----

```

JInitiator の証明書ストアは、`certdb.txt` というファイルに含まれています。

2. 別のテキスト・エディタ画面で、`certdb.txt` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
3. '-----BEGIN CERTIFICATE-----' および '-----END CERTIFICATE-----' のテキストを含め、証明書ファイル（例：`c:\tmp\mycertificate.cer`）の全コンテンツを `certdb.txt` ファイルの末尾にコピーします。
4. `certdb.txt` ファイルを保存します。

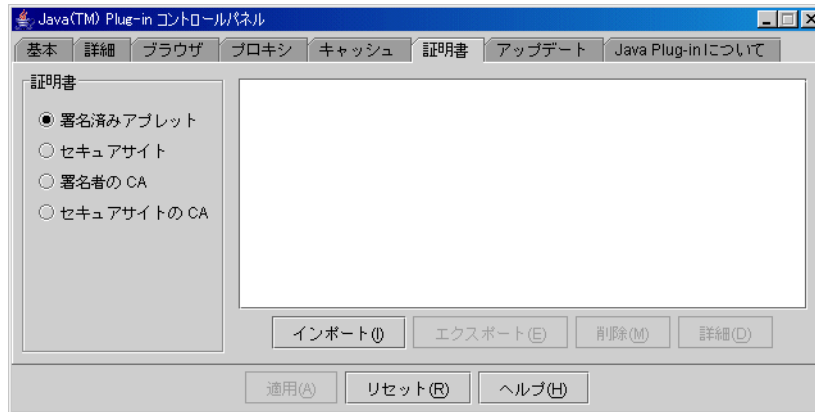
### 3.5.3 Java Plug-in 証明書ストアに証明書詳細をインポートする方法

Java Plug-in を使用して HTTPS で実行するように Discoverer Plus を構成する場合、まず「証明書のエクスポート ウィザード」を使用して証明書ファイルをエクスポートしてから、Java Plug-in 証明書ストアに証明書詳細をインポートします。

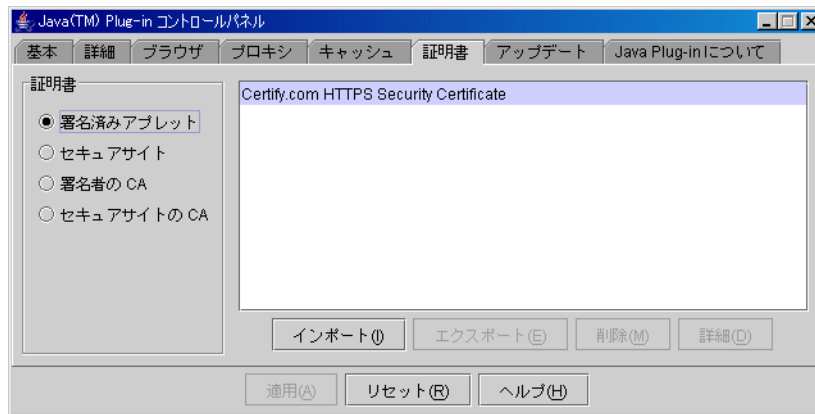
1. Java Plug-in コントロール・パネルを表示します。

たとえば、Windows の場合には、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」の順に選択して Windows のコントロールパネルを表示し、Java Plug-in のアイコンを選択します。

- 「証明書」タブを表示します。



- 「証明書」パネル内の「署名済みアプレット」ラジオ・ボタンを選択します（選択されていない場合）。
- 「インポート」をクリックして、第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」で保存した証明書ファイル（例：`c:\tmp\mycertificate.cer`）をインポートします。



Java Plug-in 証明書ストアの証明書のリストに、セキュリティ証明書が表示されます。

- 「適用」をクリックします。

## 3.6 HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合

クライアント・マシンで Discoverer Plus を初めて開始する場合、1 回かぎりの設定処理として、Java 仮想マシンをインストールし、Discoverer Plus ソフトウェアを初期化します。この処理は、通常次の場合に実行します。

- Discoverer の動作を確認する場合
- Discoverer エンド・ユーザーがクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を開始する場合

Discoverer をアップグレードする際、設定処理を繰り返す必要があることがあります。たとえば、新しいリリースの Discoverer Plus をインストールし、それに伴い新しいリリースの Java Runtime Environment もインストールする必要がある場合です。

OracleBI Discoverer では、Sun Java Plug-in (デフォルト) または Oracle JInitiator Plug-in がクライアント・ブラウザ・マシンにインストールされます。Discoverer で使用される Java Plug-in の変更の詳細は、[第 5.9.1 項「Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法」](#)を参照してください。

Discoverer Plus の初期化手順はブラウザごとに異なります。次のいずれかの手順を実行します。

- Windows クライアント上の Microsoft Internet Explorer については、[第 3.8 項「HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Microsoft Internet Explorer で初めて Discoverer Plus を開始する場合」](#)を参照してください。
- Windows クライアント上の Netscape Navigator については、[第 3.9 項「HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合」](#)を参照してください。
- UNIX クライアント上の Netscape Navigator については、[第 3.10 項「HTTP を使用して UNIX クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合」](#)を参照してください。
- Apple Mac クライアント上の Safari については、Apple Mac OS X 以上のオペレーティング・システムが必要です。Apple Mac OS X マシンには、Discoverer Plus に必要な Java Runtime Environment を含む Java 1.4.2 があらかじめインストールされています。そのため Discoverer Plus は、Java Runtime Environment を手動でインストールしなくても実行できます (詳細は、[第 3.7 項「Discoverer Plus の開始方法」](#)を参照してください)。

必要な Java Plug-in がクライアント・ブラウザ・マシンにインストールされていることを確認するには、Apple Macintosh の「Software Update」オプションを使用します。「Software Update」ダイアログのソフトウェア・リストに Java 1.4.2 が表示されます (次のスクリーンショットを参照してください)。Java 1.4.2 がインストールされていない場合は、「Automatic Update」オプションを使用して Java Plug-in の最新バージョンをインストールしてください。

図 3-1 Apple Mac OS X の「Software Update」ダイアログ



**注意:** Discoverer Plus ユーザーが Apple Mac OS X クライアント・マシンを使用している場合は、Discoverer 中間層で Java 仮想マシンとして Sun Java Plug-in を指定する必要があります (JVM の選択の詳細は、[第 5.9 項「異なる Java 仮想マシンでの Discoverer Plus の実行」](#)を参照してください)。

### 注意

- Single Sign-On が有効になっている場合は、Discoverer の接続ページが表示される前に、まず Single Sign-On ユーザーとしての認証が要求されます。



- Single Sign-On が有効になっていない場合、Discoverer エンド・ユーザーがプライベート接続を選択する際にデータベースのパスワードを入力するように要求されます。  
注意：Discoverer 接続では、ログイン情報が保存されます。
- Microsoft Internet Explorer で Discoverer Plus を開始するには、セキュリティ・レベルを「中」以下に設定するか、Microsoft Internet Explorer の「セキュリティ」ダイアログを使用して、それに相当するカスタム設定を適用します。
- Discoverer を開始した際セキュリティ警告ダイアログが表示された場合は、「はい」をクリックして、JVM をインストールおよび開始してください。オラクル社からのコンテンツを常に信頼するようにマシンが構成されている場合は、このダイアログは表示されません。

図 3-2 セキュリティ警告ダイアログ



注意：Discoverer Viewer を実行するために、クライアント・マシンに追加のソフトウェアをインストールする必要はありません。

- 56K のダイヤルアップ接続を介して Discoverer にアクセスしているときなど、Discoverer の初期化に時間がかかりセッションが時間切れになることがあります。このような場合は、中間層にある Pref.txt ファイル内の Timeout 値を増やし、その作業環境を適用します。詳細は、第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」を参照してください。

## 3.7 Discoverer Plus の開始方法

Discoverer ワークシートの管理および編集を有効にするには、Discoverer Plus を開始します。

Discoverer Plus を開始する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、インストールで使用した完全修飾ホスト名（必要な場合はポート番号を含む）を含む OracleAS Discoverer Plus の URL を入力します。

例：

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus`

説明：

- <host.domain> は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名およびドメインです。
- <port> は、Discoverer がインストールされているポート番号（通常は 7777）です。  
Discoverer のデフォルト・ポート番号の確認は、第 5.8 項「Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法」を参照してください。
- /discoverer/plus は、Discoverer Plus を起動する URL コマンドです。

「OracleBI Discoverer に接続」 ページが表示されます。

図 3-3 「OracleBI Discoverer に接続」 ページ

**OracleBI Discovererに接続**

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択** 接続の作成(C)

詳細	接続 ▾	説明	更新	削除
▶表示	Annual summaries	Annual reports by Region	✎	🗑
▶表示	Customer Reports	Customer reports by Region	✎	🗑
▶表示	Monthly worksheets	Monthly reports by Region	✎	🗑
▶表示	Weekly worksheets	Weekly reports by Region	✎	🗑

**直接接続** Ⓜ 最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

**注意:** 接続が表示されるのは、Oracle Business Intelligence インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合のみです。Single Sign-On が有効になっている場合は、最初に Single Sign-On ユーザーとしての認証が要求されます。

2. 次のいずれかを実行します。

- 「接続」列で接続を選択します。

ヒント: 「接続」列に接続が表示されない場合は、操作を続ける前に新しい接続を作成する必要があります。プライベート接続の作成の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Discoverer マネージャによって作成されたパブリック接続を使用することもできます (詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください)。

- 「直接接続」領域を使用してログイン詳細を直接入力し、「実行」をクリックします。  
(最初に必要な Plug-in をインストールした後で) Discoverer Plus が開始します。

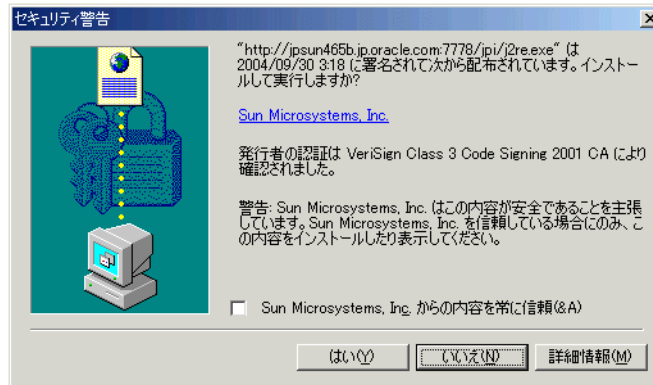
## 3.8 HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Microsoft Internet Explorer で初めて Discoverer Plus を開始する場合

Windows クライアント・マシンで Microsoft Internet Explorer を使用して Discoverer Plus を最初に開始する手順は、次のとおりです。

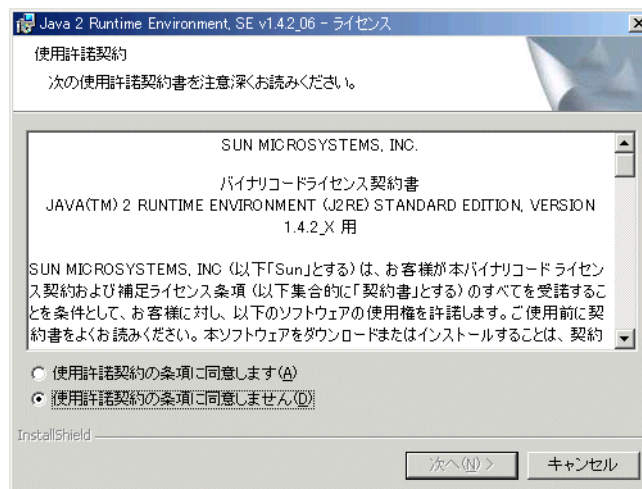
1. Discoverer Plus を起動します (詳細は、[第 3.7 項「Discoverer Plus の開始方法」](#)を参照してください)。
2. クライアント・マシンにすでにインストールされているソフトウェアによっては、Java Plug-in などの Java 仮想マシン (JVM) をダウンロードおよびインストールすることが必要な場合があります。JVM のダウンロードおよびインストールが要求されない場合には、手順 8 に進んでください。

ヒント: JVM のインストール処理に失敗する場合は、クライアント・マシン上の関係のない処理を終了してから再試行してください。

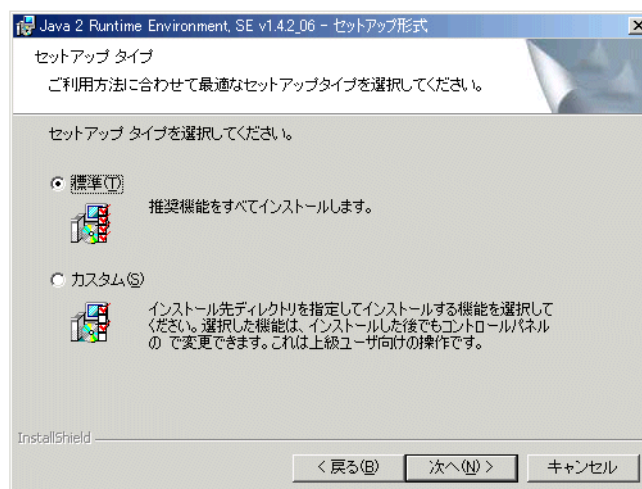
JVM のダウンロードおよびインストールが必要な場合は、「セキュリティ警告」ダイアログが表示されます。



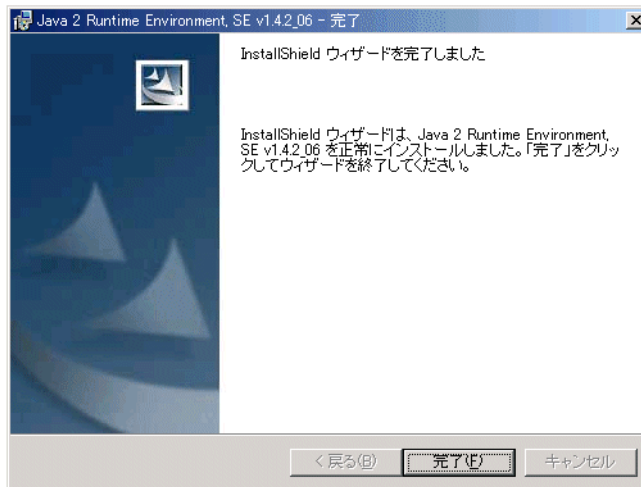
3. 「はい」をクリックして Plug-in のダウンロードを開始すると、「使用許諾契約」ページが表示されます。



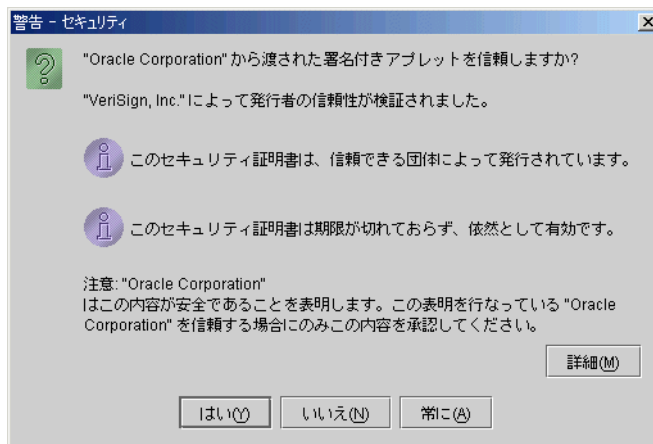
4. 「使用許諾契約の条項に同意します」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ」をクリックすると、「Java Runtime Environment - セットアップ形式」ダイアログが表示されます。



5. 「標準」ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックし、インストールを開始します。  
インストールが終了すると、「Java Runtime Environment - 完了」ページが表示されます。



6. 「完了」をクリックし、インストール・ウィザードを終了します。  
セキュリティ警告ダイアログが表示されます。

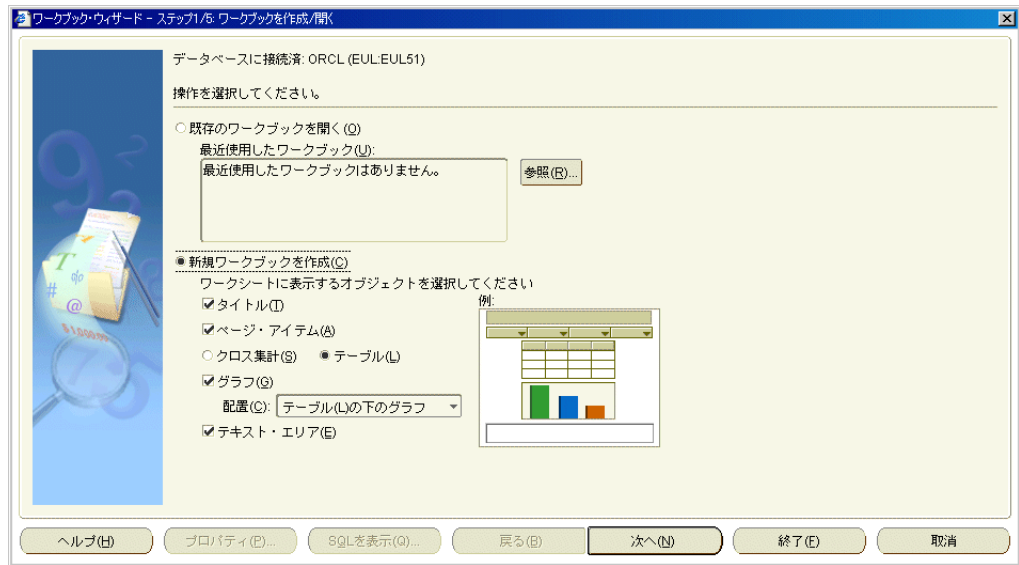


7. 「はい」をクリックし、セキュリティ証明書を受け入れて Discoverer Plus を開始します。

**注意:** クライアント・マシンに Discoverer Plus アプレットが新しくインストールされるたびに、「警告 - セキュリティ」ダイアログが表示されないようにするには、「常に」をクリックします。

「ワークブック・ウィザード」ダイアログが表示されます。

8. 「ワークブック・ウィザード」ダイアログの指示に従います。



これで、Discoverer Plus が実行されます。

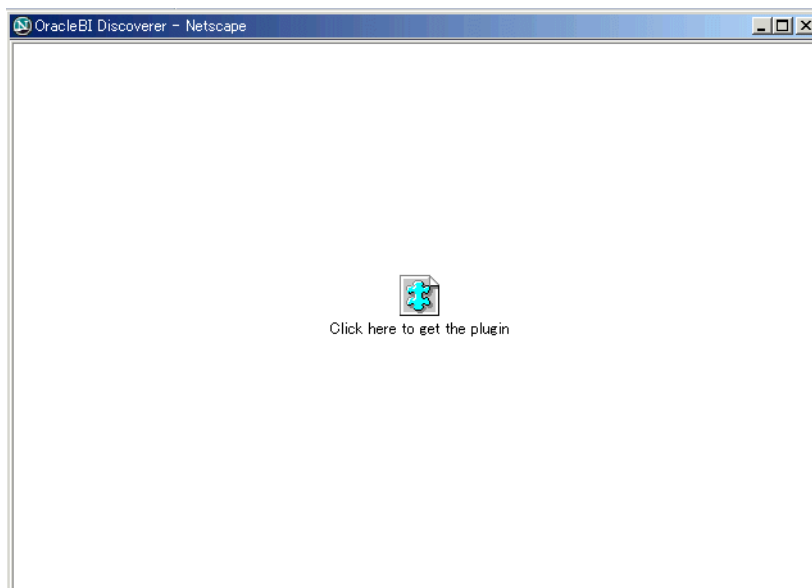
### 3.9 HTTP を使用して Windows クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合

Windows クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を最初に開始する手順は、次のとおりです。

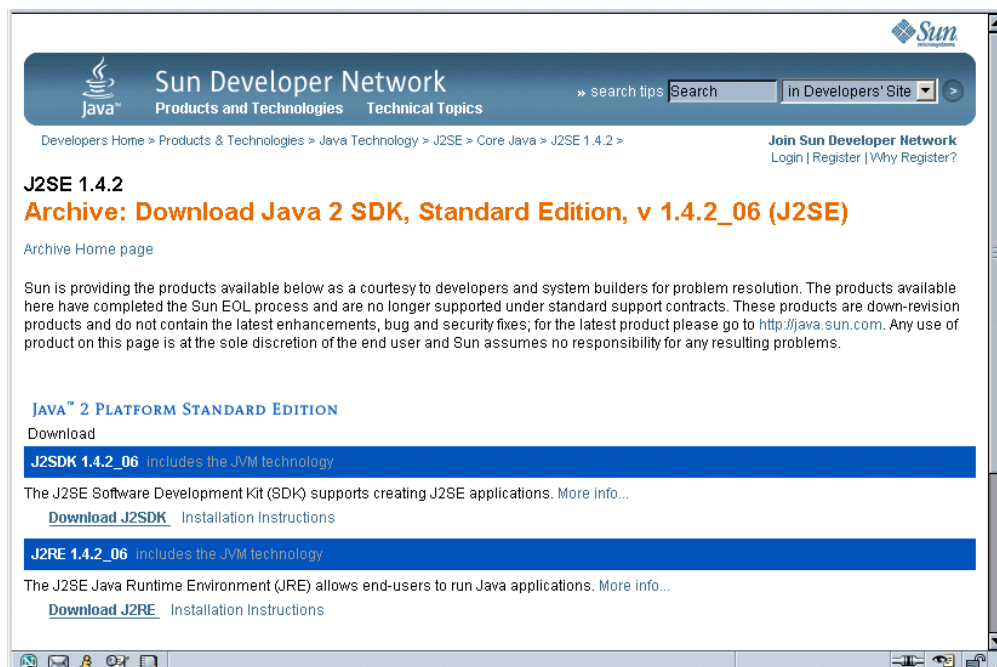
1. Discoverer Plus を起動します（詳細は、[第 3.7 項「Discoverer Plus の開始方法」](#)を参照してください）。

クライアント・マシンにすでにインストールされているソフトウェアによっては、Java Plug-in などの Java 仮想マシン (JVM) をダウンロードおよびインストールすることが必要な場合があります。JVM のダウンロードおよびインストールが要求されない場合には、手順 13 に進んでください。

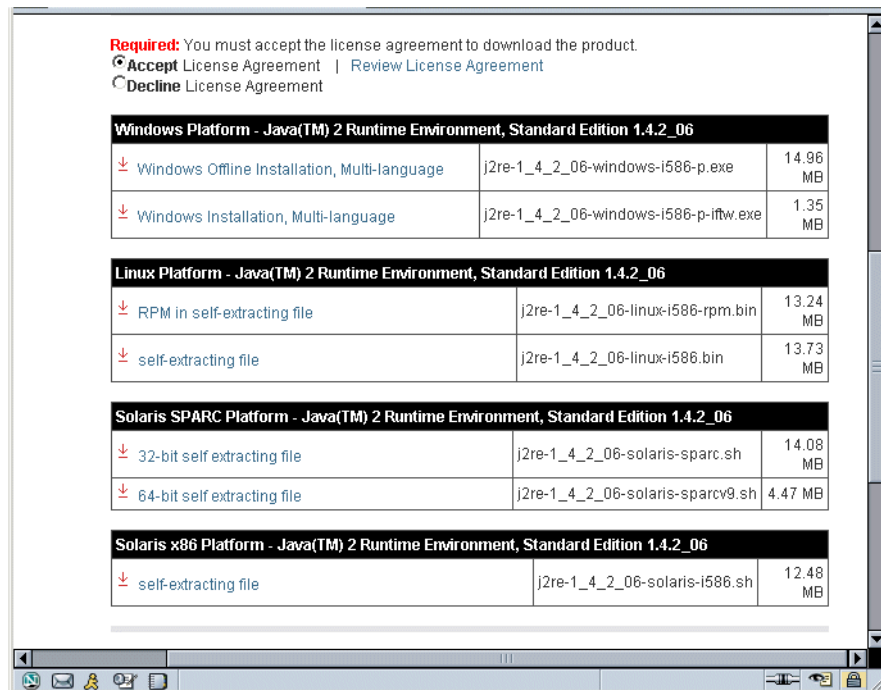
クライアント・ブラウザ・マシンに JVM がインストールされておらず、JVM をインストールする必要がある場合は、空のアプレット・ブラウザ・ウィンドウが表示されます。



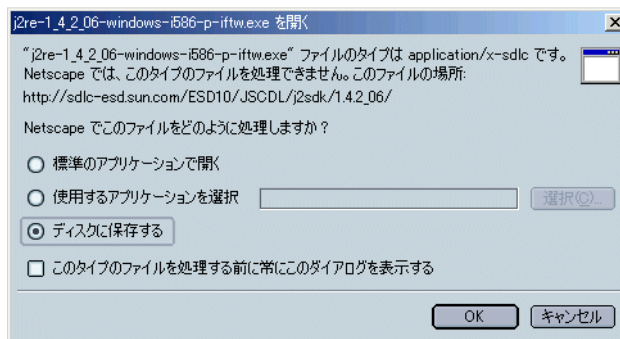
2. 空のアプレット・ブラウザ・ウィンドウ内でクリックして、別のブラウザ・ウィンドウに JVM の Sun Developer Network ダウンロード・ページを表示します。



3. JVM の Sun Developer Network ダウンロード・ページが表示されたブラウザ・ウィンドウで、「Download J2RE」リンクを選択して「Download」ページを表示します。

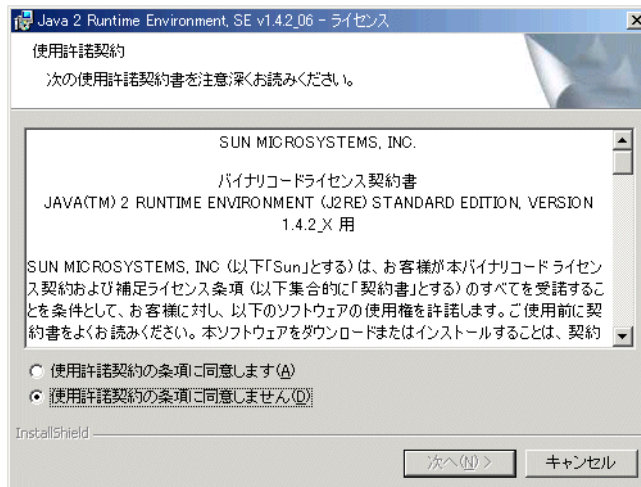


4. 「Accept License Agreement」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「Windows Platform」領域で、「Windows Installation, Multi-language」リンクを選択して「<JVM file>を開く」ダイアログを表示します。

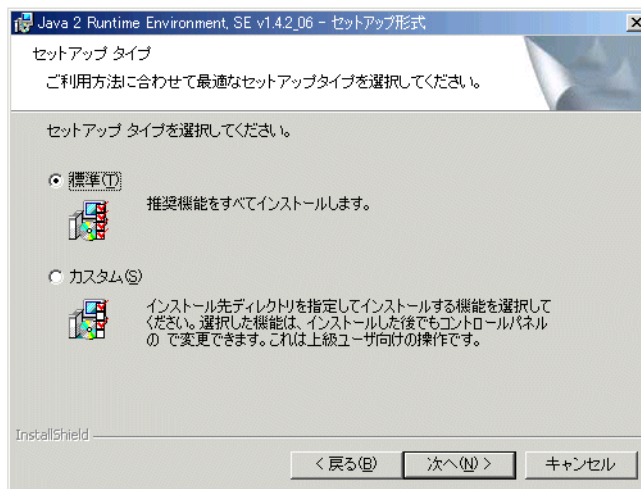


6. 「ディスクに保存する」ラジオ・ボタンを選択して「OK」をクリックします。
7. クライアント・ブラウザ・マシンの一時ディレクトリ（例：d:¥temp¥）にナビゲートし、「保存」をクリックします。  
ファイルのダウンロードが完了すると、ダウンロードのステータスが表示される「ダウンロードマネージャ」ダイアログが表示されます。
8. 「ダウンロードマネージャ」ダイアログを閉じます。
9. Windows のエクスプローラ・ダイアログを使用して、手順7で選択した一時ディレクトリに移動し、ダウンロードしたファイル（例：d:¥temp¥j2re-1\_4\_2-windows-i586-p-iftw.exe）をダブルクリックしてJVMのインストーラ・ウィザードを開始し、「使用許諾契約」ページを表示します。

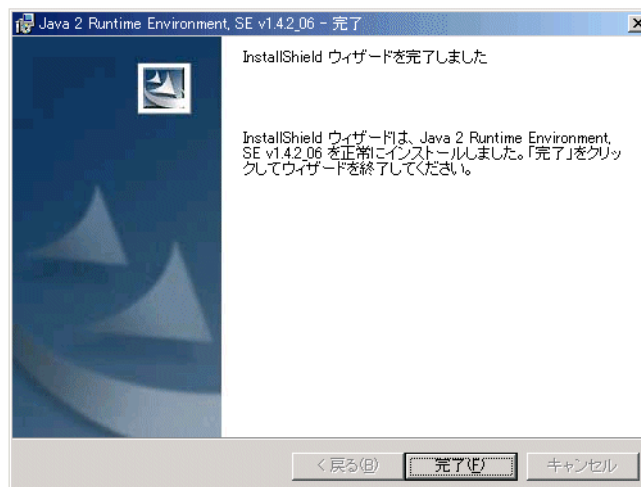




10. 「使用許諾契約の条項に同意します」 チェック・ボックスを選択し、「次へ」をクリックすると、「Java Runtime Environment - セットアップ形式」が表示されます。

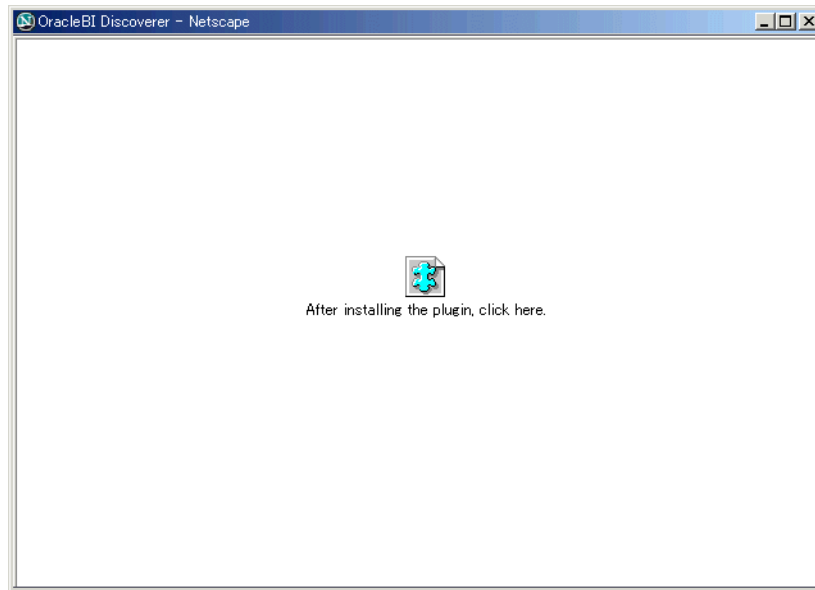


11. 「標準」 ラジオ・ボタンを選択して「次へ」をクリックし、インストールを開始します。  
インストールが終了すると、「Java Runtime Environment - 完了」 ページが表示されます。



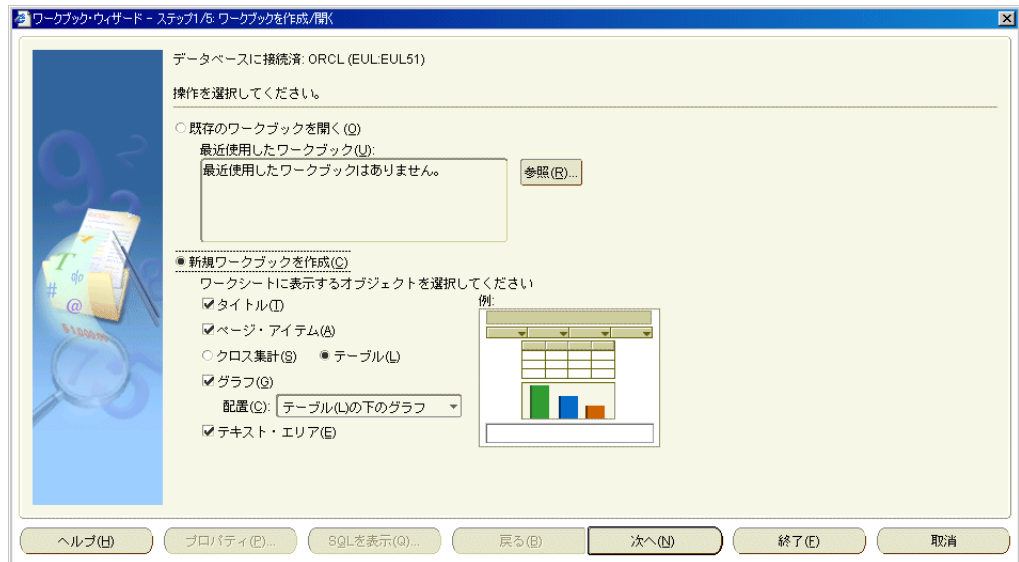


12. 空のアプレット・ブラウザ・ウィンドウ内でクリックして Discoverer Plus を開始します。



Discoverer Plus アプレットの初期化が終わるとキャッシュが行われ、「ワークブック・ウィザード」ダイアログが表示されます。

13. 「ワークブック・ウィザード」ダイアログの指示に従います。

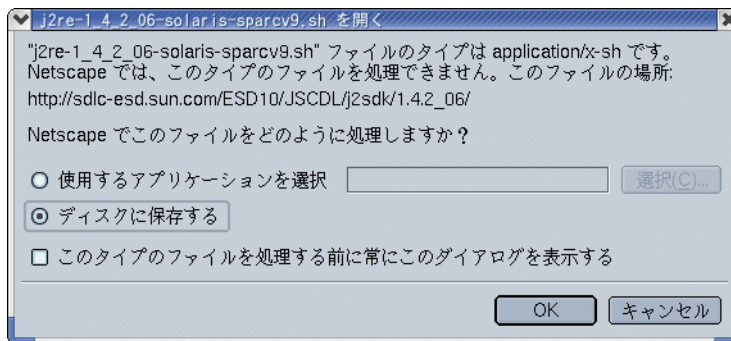


これで、Discoverer Plus が実行されます。

## 3.10 HTTP を使用して UNIX クライアント・マシンの Netscape Navigator で初めて Discoverer Plus を開始する場合

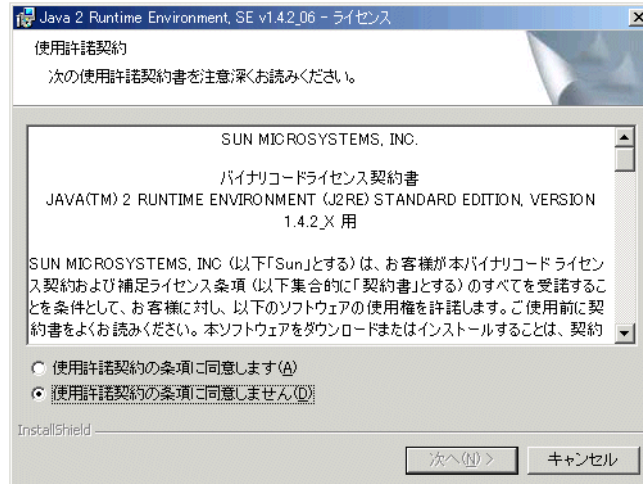
UNIX クライアント・マシンで Netscape Navigator を使用して Discoverer Plus を最初に開始する手順は、次のとおりです。

1. 次の手順に従って、JVM をクライアント・ブラウザ・マシンにインストールします。
  - a. Web ブラウザを起動し、次の URL に移動します。  
`http://java.sun.com/products/archive/j2se/1.4.2_06/index.html`
  - b. Windows/Linux/Solaris の「Download J2SE v 1.4.2\_06」オプションの JRE 列の「**DOWNLOAD**」リンクを選択して、「Download」ページを表示します。
  - c. 「**Accept License Agreement**」ラジオ・ボタンを選択します。
  - d. 適切な Solaris または Linux リンクを選択して、「<JVM file> を開く」ダイアログを表示します。



たとえば、Solaris クライアント・ブラウザ・マシンの場合、「**64-bit self-extracting file (j2re-1\_4\_2\_06-solaris-sparcv9.sh)**」リンクを選択します。

- e. 「ディスクに保存する」ラジオ・ボタンを選択して「OK」をクリックします。
- f. クライアント・ブラウザ・マシンの一時ディレクトリ（例：`temp¥`）にナビゲートし、「保存」をクリックします。  
 ファイルのダウンロードが完了すると、ダウンロードのステータスが表示される「ダウンロードマネージャ」ダイアログが表示されます。
- g. 「ダウンロードマネージャ」ダイアログを閉じます。
- h. ファイル管理ツールを使用して、手順 f で選択した一時ディレクトリに移動し、ダウンロードしたファイル（例：`tmp¥j2re-1_4_2_06-solaris-sparcv9.sh`）を実行して JVM のインストール・ウィザードを開始し、「使用許諾契約」ページを表示します。



- i. JVM のインストール・ウィザードの指示に従って、クライアント・マシンに JVM をインストールします。
2. Discoverer Plus を起動します（詳細は、[第 3.7 項「Discoverer Plus の開始方法」](#)を参照してください）。
3. Discoverer Plus アプレットが初期化されるのを待ちます。

Discoverer Plus アプレットが初期化を実行している間、製品の起動中 : Discoverer Plus ページが表示されます。

Discoverer Plus アプレットの初期化が終わるとキャッシュが行われ、「ワークブック・ウィザード」ダイアログが表示されます。

これで、Discoverer Plus が実行されます。

### 3.11 HTTP を使用した Discoverer Viewer の開始

OracleAS をインストール後、Discoverer の動作を確認するために、Discoverer Viewer を開始します。

HTTP を使用して Discoverer Viewer を開始する手順は次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、OracleAS のインストールで使用した完全修飾ホスト名（ポート番号を含む）を含む Discoverer Viewer の URL を入力します。

例：

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer`

説明：

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名およびドメインです。
- `<HTTP port>` は、Discoverer がインストールされているポート番号（通常は 7777）です。

Discoverer のデフォルト・ポート番号の確認は、[第 5.8 項「Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法」](#)を参照してください。

- `/discoverer/ viewer` は、Discoverer Viewer を起動する URL コマンドです。

Discoverer Viewer に接続ページが表示されます。

図 3-4 Discoverer Viewer に接続ページ



**注意** : Single Sign-On が有効になっている場合は、最初に Single Sign-On ユーザーとしての認証が要求されます。

2. 次のいずれかを実行します。

- 「**接続**」列で接続を選択します。

ヒント : 「**接続**」列に接続が表示されない場合は、操作を続ける前に新しい接続を作成する必要があります。プライベート接続の作成の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』を参照してください。Discoverer マネージャによって作成されたパブリック接続を使用することもできます (詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください)。

- 「**直接接続**」領域を使用してログイン詳細を直接入力し、「**実行**」をクリックします。

「ワークシート・リスト」ページが表示されます。

3. 「名前」列でワークシートを選択し、Discoverer Viewer でワークブックを表示します。

これで、Discoverer Viewer が実行されます。

**注意**

- HTTPS で Discoverer Viewer を開始するには、Discoverer Viewer HTTPS の URL (例 : `https://<host.domain>:<HTTPS port>/discoverer/viewer`) を入力します。HTTPS を使用した Discoverer Viewer の実行の詳細は、[第 3.5 項「HTTPS を使用した Discoverer の実行」](#)を参照してください。

---

---

## OracleBI Discoverer 接続の管理

**注意:** この章の内容は、Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合にのみ適用されます。詳細は、第 2.1 項「[Oracle Business Intelligence のインストールについて](#)」を参照してください。

Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていない場合、エンド・ユーザーは Discoverer 接続を使用できません。Oracle Infrastructure インストールへの Discoverer の関連付けの詳細は、第 2 章「[Oracle Business Intelligence インストールと OracleAS Infrastructure について](#)」を参照してください。

この章では、OracleBI Discoverer 接続を作成および管理する方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 4.1 項「[OracleBI Discoverer 接続](#)」
- 第 4.2 項「[Discoverer 接続のタイプ](#)」
- 第 4.3 項「[Discoverer 接続の管理](#)」
- 第 4.4 項「[Discoverer の接続ページ](#)」
- 第 4.5 項「[Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定](#)」
- 第 4.6 項「[パブリック接続の作成方法](#)」
- 第 4.7 項「[パブリック接続の削除方法](#)」
- 第 4.8 項「[Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかを指定する方法](#)」

## 4.1 OracleBI Discoverer 接続

OracleBI Discoverer 接続はデータベース・ログイン詳細の保存セットで、次のものから構成されています。

- データベース・ユーザー名 – Discoverer エンド・ユーザーを識別します。
- データベース・パスワード – Discoverer エンド・ユーザーを認証します。
- データベース名 – Discoverer エンド・ユーザーが分析する情報を含むデータベースを指定します。
- (オプション) Oracle Applications 職責 – Discoverer を Oracle Applications とともに使用する場合、Discoverer エンド・ユーザーの職責を指定します。
- (リレーショナル・データ・ソースのみ) EUL – 使用する End User Layer を指定します。
- 言語 – Discoverer で使用する言語を指定します。

Discoverer 接続により、Discoverer エンド・ユーザーは、Discoverer を起動するたびにデータベース・ログイン詳細を再入力することなく Discoverer を起動できます。

次の例では、「Customer Reports」という接続が作成されています。この接続には、レポートが格納されているデータベースに、ログイン詳細を入力せずに接続するためのログイン情報が含まれています。

図 4-1 OracleBI Discoverer Plus の接続ページ

**OracleBI Discovererに接続**

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択** 接続の作成(C)

詳細	接続	説明	更新	削除
▶表示	<a href="#">Annual summaries</a>	Annual reports by Region		
▶表示	<a href="#">Customer Reports</a>	Customer reports by Region		
▶表示	<a href="#">Monthly worksheets</a>	Monthly reports by Region		
▶表示	<a href="#">Weekly worksheets</a>	Weekly reports by Region		

**直接接続** 最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

### 注意

- 接続は、Discoverer Plus エンド・ユーザーおよび Discoverer Viewer エンド・ユーザーの両方に表示されます。
- ログイン詳細を接続に保存しない場合は、Discoverer の接続ページの「**直接接続**」領域を使用してログイン詳細を直接入力することで、Discoverer を起動できます。

## 4.1.1 Discoverer プライベート接続と OracleAS Single Sign-On

OracleAS Single Sign-On が有効になっている場合、Discoverer プライベート接続は次のように動作します。

- Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer プライベート接続を最初に選択したとき、OracleAS Single Sign-On の詳細情報を入力するプロンプトが表示されます（認証されていない場合）。
- Discoverer エンド・ユーザーが OracleAS Single Sign-On によって認証されると、Discoverer パスワードを確認しなくても Discoverer プライベート接続を選択できます。

OracleAS Single Sign-On の詳細は、第 14.7.1 項「OracleAS Single Sign-On との Discoverer の使用」を参照してください。

## 4.2 Discoverer 接続のタイプ

Discoverer 接続には、次の 2 つのタイプがあります。

- プライベート接続 – 第 4.2.1 項「プライベート接続」を参照してください。
- パブリック接続 – 第 4.2.2 項「パブリック接続」を参照してください。

### 4.2.1 プライベート接続

プライベート接続は、Discoverer エンド・ユーザーが作成および管理します。

プライベート接続には、次の特性があります。

- プライベート接続は、その接続を作成した Discoverer エンド・ユーザー専用の接続です。
- Discoverer エンド・ユーザーは、各自のプライベート接続を作成および管理します。  
Discoverer エンド・ユーザーが使用できる接続タイプの制御の詳細は、第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」を参照してください。
- Single Sign-On が有効になっている場合、Discoverer エンド・ユーザーは、任意のクライアント・マシンからユーザー自身のプライベート接続を使用できます。Single Sign-On が有効になっていない場合、プライベート接続は Cookie として保存され、その接続が作成されたマシンおよびブラウザでのみアクセス可能です。Single Sign-On の詳細は、第 4.1.1 項「Discoverer プライベート接続と OracleAS Single Sign-On」を参照してください。
- プライベート接続の作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 4.2.2 パブリック接続

パブリック接続は、Discoverer 中間層の管理者が作成および管理します。

**注意:** Discoverer Plus OLAP ユーザーはパブリック接続を使用できません。

たとえば、Discoverer エンド・ユーザーに Discoverer サンプル・ワークブックへのアクセスを提供する場合は、「Sample workbooks」というパブリック接続を作成できます。

パブリック接続には、次の特性があります。

- パブリック接続は、Discoverer Plus エンド・ユーザーと Discoverer Viewer エンド・ユーザーが使用できます。

**注意:** パブリック (OLAP) 接続 (つまり、マルチディメンション・データ・ソースへのパブリック接続) を作成した場合、そのパブリック接続を使用できるのは、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider のユーザーのみです。Discoverer Plus OLAP ユーザーは、パブリック OLAP 接続を使用できません。

- パブリック接続を使用すると、Discoverer Plus および Discoverer Viewer のエンド・ユーザーは、PUBLIC ロールがアクセス権を持つデータにアクセスできます。

- Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーは、パブリック接続を追加、編集および削除できません。

パブリック接続の作成方法の詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください。

### 4.3 Discoverer 接続の管理

中間層の管理者は、Application Server Control を使用して Discoverer 接続を次のように管理できます。

- Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーが Discoverer を起動できるように、パブリック接続を提供します（詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください）。
- Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーが、ユーザー自身のプライベート接続を作成して、Discoverer を起動できるようにします（詳細は、[第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」](#)を参照してください）。

#### 注意

- Oracle Business Intelligence インストール間での Discoverer 接続の移行方法は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Oracle Application Server Portal でのワークブック公開ガイド』を参照してください。

### 4.4 Discoverer の接続ページ

Discoverer の接続ページには次の 2 つがあります。

- Discoverer Viewer に接続ページ。保存されている一連のログイン詳細を使用するか、または直接接続して Discoverer Viewer を起動する場合に使用します。
- Discoverer Plus に接続ページ。保存されている一連のログイン詳細を使用するか、または直接接続して Discoverer Plus を起動する場合に使用します。

次の図は、Discoverer Plus に接続ページを示しています。



図 4-2 「OracleBI Discoverer に接続」 ページ

OracleBI Discovererに接続

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

接続の選択 接続の作成(C)

詳細	接続	説明	更新	削除
▶表示	Annual summaries	Annual reports by Region		
▶表示	Customer Reports	Customer reports by Region		
▶表示	Monthly worksheets	Monthly reports by Region		
▶表示	Weekly worksheets	Weekly reports by Region		

直接接続 最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

## 4.5 Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定

Discoverer エンド・ユーザーが各自のプライベート接続を作成できるようにするかどうかを指定できます（詳細は、第 4.8 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかを指定する方法」を参照してください）。

**注意：** Discoverer Plus OLAP ユーザーはパブリック接続を使用できません。プライベート接続を禁止した場合、Discoverer Plus OLAP ユーザーは、常に Discoverer に直接接続する必要があります。

Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にすると、エンド・ユーザーは次のことができるようになります。

- 新しく作成する接続に対し、任意のログイン詳細（ユーザー名、パスワード、データベース、EUL など）を指定できます。
- 接続できる任意の EUL で任意のワークブックを開くことができます（必要なデータベース権限を持っている場合）。

### 注意

- エンド・ユーザーがプライベート接続を作成する際は、次のことに注意してください。
  - エイリアスを使用してデータベースを指定すると、tnsnames.ora ファイルにエントリのあるデータベースに接続できます。
  - データベースの完全な tnsnames エントリ（SID、アドレス、ポートなど）を使用してデータベースを指定すると、Discoverer 中間層の tnsnames.ora ファイルにエントリのないデータベースに接続できます。

たとえば、「データベース」フィールドには次の文字列を入力できます。

```
(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=machine_a.company.com)(PORT=1521)))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=database1)))
```

ヒント：TNS 文字列から空白が削除されていることを確認してください。

tnsnames.ora ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください。

## 4.6 パブリック接続の作成方法

Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーに事前定義したログイン詳細を提供する場合は、パブリック接続を作成します。たとえば、チュートリアル・ユーザーとしてチュートリアル・データベースに接続できる「Start Tutorial」というパブリック接続を作成します。パブリック接続は、不要になった場合削除します。

**注意:** パブリック Discoverer Plus OLAP 接続（つまり、マルチディメンション・データ・ソースへのパブリック接続）を作成した場合、そのパブリック接続を使用できるのは、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider のユーザーのみです。Discoverer Plus OLAP ユーザーは、パブリック OLAP 接続を使用できません。

**ヒント:** セキュアな Discoverer 環境では、パブリック接続のみを使用して、データベースへのアクセスを特定のログイン詳細に制限します。つまり、Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を許可しません（詳細は、第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」を参照してください）。

パブリック接続を作成する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。

The screenshot shows the Discoverer Application Server Control interface. At the top, there are tabs for 'ホーム' (Home), 'パフォーマンス' (Performance), and '管理' (Management). The 'ホーム' tab is selected. Below the tabs, there is a 'ページ・リフレッシュ' (Refresh Page) button with the timestamp '2005/08/23 10:56:54'. The main content area is titled '一般' (General) and contains a status indicator (a green checkmark in a blue box) and two buttons: '停止' (Stop) and '再起動' (Restart). Below this, a table displays system information:

ステータス	UP
バージョン	10.1.2.48.18
開始時間	2005/08/22 12:30:33 JST
合計メモリー使用量(MB)	46.27
合計CPU使用率(%)	0.0

Below the table, there is a 'ヒント' (Hint) section with a checkmark icon, stating: 'メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。' (Memory usage and CPU usage are values related to Discoverer sessions and preferences.)

At the bottom, there is a 'コンポーネント' (Components) section with a '最初に戻る' (Return to Top) link. The text below explains that CPU and memory usage values are for Discoverer sessions only and do not include components used by sublets. It also notes that disabling components does not stop current users' work, but new users cannot use them, and stopping services will stop new sessions from starting.

## 3. 「管理」タブを表示します。

The screenshot shows the Discoverer web interface. At the top, there are three tabs: 'ホーム' (Home), 'パフォーマンス' (Performance), and '管理' (Management), with '管理' being the active tab. Below the tabs, there is a navigation menu on the left with links for 'Discoverer Catalog', 'インストール' (Install), 'アンインストール' (Uninstall), and '管理' (Management). Under '管理', there are sub-links for 'パブリック接続' (Public Connection), 'プライベート接続' (Private Connection), and 'サービス・ロギング' (Service Logging). On the right side, there is a 'Discoverer Catalog Overview' section with a text description. At the bottom, there are again three tabs: 'ホーム', 'パフォーマンス', and '管理'.

## 4. 「パブリック接続」リンクを選択し、「Discoverer パブリック接続」領域を表示します。

The screenshot shows the 'Discovererパブリック接続' (Discoverer Public Connections) management page. At the top, there is a title and a paragraph explaining that users can use public connections to access data without logging in, provided they have the necessary database permissions. Below this, there is a '接続の作成' (Create Connection) button. A table lists existing connections, with one entry 'パブリック接続サンプル' (Public Connection Sample) selected. The table has columns for '選択' (Select), '接続' (Connection), '説明' (Description), '更新' (Update), and '削除' (Delete). The '更新' and '削除' buttons for the selected connection are highlighted.

選択	接続	説明	更新	削除
<input checked="" type="checkbox"/>	パブリック接続サンプル			

**注意:** 「パブリック接続」リンクが表示されない場合は、Oracle Business Intelligence インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられていません。Oracle Business Intelligence インストールを OracleAS Infrastructure に関連付ける方法は、[第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」](#)を参照してください。

5. 「接続の作成」をクリックし、「パブリック接続の作成」ページを表示します。

**パブリック接続の作成**

取消 OK

**接続名および説明**  
覚えやすい名前または別名と、この接続の説明を入力し、データベース・ユーザー名を入力してください。

\* 必須フィールドを示します

ログイン方法 OracleBI Discoverer

\* 接続名

説明

ロケール 日本語  
このロケールは、URL(&ns)にロケールが明示的に指定されていない場合に使用されます。

接続の詳細の表示

**データベース・アカウントの詳細**  
接続情報を入力します

\* 必須フィールドを示します

\* End User Layer  
End User Layer名は大小文字が区別されます。

\* ユーザー名

パスワード

\* データベース

6. 接続の詳細を入力し、「OK」をクリックして詳細を保存します。

新しく作成した接続が、「Discoverer パブリック接続」リストに表示されます。

Discoverer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続して、この新しい接続を選択できます。

## 注意

- 接続の一意の ID を確認する方法は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#)を参照してください。
- データベースの完全な tnsnames エントリ (SID、アドレス、ポートなど) を使用してデータベースを指定すると、tnsnames.ora ファイルにエントリのないデータベースに接続できます。たとえば、「データベース」フィールドには次の文字列を入力できます。

```
(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=machine_a.company.com)(PORT=1521)))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=database1)))
```

ヒント: TNS 文字列から空白が削除されていることを確認してください。

## 4.7 パブリック接続の削除方法

Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーに事前定義したログイン詳細を提供しない場合は、パブリック接続を削除します。

パブリック接続を削除する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。

Discoverer

ホーム パフォーマンス 管理

ページ・リフレッシュ 2005/08/23 10:56:54

一般

停止 再起動

ステータス UP  
バージョン 10.1.2.48.18  
開始時間 2005/08/22 12:30:33 JST  
合計メモリー使用量(MB) 46.27  
合計CPU使用率(%) 0.0

ヒント メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。

コンポーネント [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止する際は、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

3. 「管理」タブを表示します。

Discoverer

ホーム パフォーマンス 管理

ページ・リフレッシュ 2005/08/23 11:42:21

Discoverer Catalog Overview

Discovererカタログは、Discoverer Plus OLAPで作成されたワークブック、ワークシート、およびその他のオブジェクトの定義を格納し、取り出すためのリポジトリです。これらのオブジェクトは、OLAPデータソースからデータにアクセスする際、Discoverer Plus OLAP、Discoverer Viewer、Discoverer Portlet Providerで使用します。また、コンテンツとユーザー・コミュニティの両方を活用してDiscovererカタログをBI Beansアプリケーションのカタログとして使用することもできます。

ホーム パフォーマンス 管理

4. 「パブリック接続」リンクを選択し、「Discoverer パブリック接続」領域を表示します。

Discovererパブリック接続

ユーザーがDiscovererにログインせずにデータを参照可能にする場合、パブリック接続を使用します。適切なく(制限された)データベース権限を持ったデータベース・アカウントを使用します。

接続の作成

削除

すべて選択 | 選択解除

選択	接続	説明	更新	削除
<input type="checkbox"/>	パブリック接続サンプル			

- 削除する接続の名前の横にある「削除」列のごみ箱アイコンをクリックして、「確認」ダイアログを表示します。
- 確認ページで「はい」をクリックして、接続を完全に削除します。

削除した接続は「Discoverer パブリック接続」リストから削除され、Discoverer Plus および Discoverer Viewer の Discover 接続のページに表示されなくなります。

Discoverer エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer に接続する際に、削除したパブリック接続を選択することはできません。

## 4.8 Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかを指定する方法

Discoverer Plus ユーザーおよび Discoverer Viewer ユーザーがプライベート接続を作成できるかどうかを指定する手順は、次のとおりです。

- Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
- Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。

The screenshot shows the 'Discoverer' application server control interface. It includes a navigation bar with 'ホーム', 'パフォーマンス', and '管理' tabs. The main content area displays system status under the '一般' (General) section, including a status icon (UP), version (10.1.2.48.18), start time (2005/08/22 12:30:33 JST), total memory usage (46.27 MB), and total CPU usage (0.0%). There are '停止' (Stop) and '再起動' (Restart) buttons. A note indicates that memory usage and CPU usage are for the Discoverer session and preferences. Below this is the 'コンポーネント' (Components) section with a '最初に戻る' (Return to top) link. A detailed note explains that CPU and memory usage values are for the Discoverer session only and do not include the values for the underlying server components.

- 「管理」タブを表示します。

The screenshot shows the 'Discoverer' application server control interface with the '管理' (Management) tab selected. The navigation bar shows 'ホーム', 'パフォーマンス', and '管理' tabs. The main content area displays the 'Discoverer Catalog Overview' section, which includes links for 'インストール', 'アンインストール', '管理', and '構成'. The '構成' (Configuration) section has links for 'パブリック接続', 'プライベート接続', and 'サービス・ロギング'. A detailed note explains that the Discoverer Catalog is a workspace, worksheet, and other objects defined, stored, and retrieved for the repository. These objects are OLAP data sources accessed through Discoverer Plus OLAP, Discoverer Viewer, or Discoverer Portlet Provider. It also mentions that the Discoverer Catalog can be used as a BI Beans application catalog.

- 「プライベート接続」リンクを選択し、「Discoverer プライベート接続」領域を表示します。

5. ユーザーがプライベート接続を作成できるかどうかを次のように指定します。
  - Discoverer エンド・ユーザーが各自のプライベート接続を作成できるようにするには、「ユーザーに、Discoverer Plus と Discoverer Viewer での専用のプライベート接続の定義と使用を許可します。」チェック・ボックスを選択します。
  - Discoverer エンド・ユーザーが作成されているパブリック接続のみを使用するには、「ユーザーに、Discoverer Plus と Discoverer Viewer での専用のプライベート接続の定義と使用を許可します。」チェック・ボックスの選択を解除します。
6. 「OK」をクリックして詳細を保存します。  
 Discoverer エンド・ユーザーがプライベート接続を作成できるようにした場合は、Discoverer の接続ページに「接続の作成」ボタンが表示されます。たとえば、次の図では「接続の作成」ボタンが使用可能になっています。

図 4-3 OracleBI Discoverer Plus の接続ページ

**OracleBI Discovererに接続**

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択** 接続の作成(C)

詳細	接続	説明	更新	削除
▶表示	Annual summaries	Annual reports by Region		
▶表示	Customer Reports	Customer reports by Region		
▶表示	Monthly worksheets	Monthly reports by Region		
▶表示	Weekly worksheets	Weekly reports by Region		

**直接接続** 最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

### 注意

- 「ユーザーに、Discoverer Plus と Discoverer Viewer での専用のプライベート接続の定義と使用を許可します。」チェック・ボックスを選択解除した場合は、次のことに注意してください。
- Discoverer エンド・ユーザーは、cn= URL パラメータを使用してパブリック接続の接続 ID を指定しないかぎり、URL パラメータで Discoverer を起動できません（詳細は、第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」を参照してください）。
- Discoverer の接続ページの「詳細」列は、Internet Explorer でのみ表示されます。





---

---

## OracleBI Discoverer の管理と構成

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「[Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成](#)」を参照してください。

この章では、OracleBI Discoverer を管理および構成する方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 5.1 項「[Oracle Enterprise Manager Application Server Control](#)」
- 第 5.2 項「[Application Server Control を使用した Discoverer コンポーネントの管理](#)」
- 第 5.3 項「[Discoverer サービスの起動および停止](#)」
- 第 5.4 項「[Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化](#)」
- 第 5.5 項「[Discoverer サブレットを起動および停止する方法](#)」
- 第 5.6 項「[Discoverer サービスおよび Discoverer クライアント層コンポーネントのオプションの構成](#)」
- 第 5.7 項「[Discoverer メトリックの監視](#)」
- 第 5.8 項「[Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法](#)」
- 第 5.9 項「[異なる Java 仮想マシンでの Discoverer Plus の実行](#)」
- 第 5.10 項「[Web クエリのフォーマットにエクスポートするための Discoverer の構成](#)」

## 5.1 Oracle Enterprise Manager Application Server Control

Oracle Enterprise Manager Application Server Control は、Oracle Enterprise Manager の一部で、Oracle 中間層製品を管理するための総合的なシステム管理プラットフォームを提供します。

Application Server Control には Web ベースの管理ツールが備わっており、このツールを使用して、OracleBI Discoverer、OracleAS Portal、OracleAS HTTP Server などの Oracle コンポーネントを監視および構成できます。アプリケーションのデプロイ、セキュリティの管理および Oracle Application Server クラスタの作成が可能です。

次の図は、「Application Server Control」メイン・ページを示しています。

図 5-1 「Application Server Control」メイン・ページ



### 注意

- Application Server Control を使用した OracleAS コンポーネントの管理の詳細は、Application Server Control のヘルプおよび『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。
- Application Server Control の表示方法の詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください。
- OracleAS のインストールの詳細は、第 7.2 項「Oracle Business Intelligence インストール」を参照してください。
- Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」を参照してください。

### 5.1.1 Discoverer で Application Server Control を使用する理由

Discoverer で Application Server Control を次の目的で使用します。

- コンポーネントの起動と停止
- 構成オプションの設定
- パフォーマンスの監視
- 問題の診断

次のテーブルは、Application Server Control を使用して実行できる Discoverer 構成タスクの一部を示しています。

Discoverer の管理タスク	タスクの詳細の参照先
Discoverer カタログの管理 (カタログのインストール、アンインストールおよび管理)	第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」
Discoverer Viewer のルック・アンド・フィールとページ・レイアウトのカスタマイズ	第 9 章「OracleBI Discoverer のカスタマイズ」
Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化または無効化	第 5.4 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化」
Discoverer Plus および Discoverer Viewer の接続の管理	第 4.3 項「Discoverer 接続の管理」
Discoverer メトリックの監視	第 5.7 項「Discoverer メトリックの監視」
Discoverer ログ・ファイルの検索と分析	第 D.2 項「Discoverer の診断およびロギングについて」
パブリック接続のロケールの選択	第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」
Discoverer Plus に対する異なる Java Plug-in (Sun Java Plug-in など) の指定	第 5.9.1 項「Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法」
Discoverer Plus および Discoverer Viewer のカスタマイズ (Discoverer Plus で使用するロゴの指定やデフォルトのルック・アンド・フィールの変更など)	第 9 章「OracleBI Discoverer のカスタマイズ」
Discoverer Viewer のキャッシュ設定の指定	第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」
Discoverer Plus 中間層の通信プロトコルの指定	第 14.6.3.3 項「Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する方法」
Discoverer Viewer の遅延時間の指定	第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」
Discoverer Viewer の PDF 設定の指定	第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」
Discoverer Viewer の印刷設定の指定	第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」
プールする Discoverer Portlet Provider セッションの最大数および Discoverer ワークシート・ポートレットで使用可能な汎用ポートレット・パラメータの数の指定	第 11 章「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」
Discoverer Viewer のキャッシュ設定、ロギング・レベル設定、印刷用紙サイズ設定、PDF 生成設定、電子メール設定および遅延時間 (クエリー進行状況ページおよびエクスポート完了用) の指定	Application Server Control ヘルプ
Discoverer サービスの起動と停止	第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」
Discoverer サーブレットの起動と停止	第 5.5 項「Discoverer サーブレットを起動および停止する方法」

## 5.1.2 Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法

OracleBI および OracleAS のコンポーネント (OracleBI Discoverer、OracleAS Portal など) の構成は、Application Server Control を使用して行います。たとえば、Discoverer サービスを起動または停止する場合は、現行のセッション詳細を表示するか、すべてのユーザーのデフォルト・ユーザー作業環境を構成します。

Application Server Control を表示する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動して、構成する OracleBI インストールの完全修飾ホスト名とドメインが含まれる Application Server Control の URL を入力します。

例：

http://<host.domain>:1810

ヒント：使用中のインストールの Oracle Application Server Control に対する URL を検出する方法は、<ORACLE\_HOME>/install/setupinfo.txt を参照してください。

2. プロンプトが表示されたら、Application Server Control のユーザー名とパスワードを入力します。
3. 「OK」をクリックします。

Oracle Business Intelligence インストールが OracleAS Infrastructure と関連付けられている場合は、Application Server Control のホーム・ファーム・ページが表示されます。

**ORACLE Enterprise Manager 10g**  
Application Server Control トポロジ プリファレンス ヘルプ

ファーム: [orcl.jp.oracle.com](#)

スタンドアロン・インスタンスを共通のリポジトリで構成することにより、インスタンスをグループ化して一緒に管理できます。このインスタンスの集合は、Oracle Application Serverファームと呼ばれます。

リポジトリ・タイプ データベース

**クラスタ** クラスタの作成(C)

選択	名前	ステータス	インスタンス
	このファームにはクラスタがありません。		

**スタンドアロン・インスタンス**

これらのインスタンスはファームに属しますが、クラスタの一部ではありません。

クラスタへの結合(J)

選択	名前	ホスト	Oracleホーム
<input checked="" type="radio"/>	041216_midPW_wptgja08.jp.oracle.com	wptgja08.jp.oracle.com	D:\OraHome_1
<input type="radio"/>	ias_admin_wptgja07.jp.oracle.com	wptgja07.jp.oracle.com	D:\OraHome_1

トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.  
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Controlバージョン情報

4. 「名前」列で、Oracle Business Intelligence のインストールが含まれているインスタンスを選択すると、Application Server のホームページが表示されます。

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager Application Server Control interface. The main content area is titled 'システム・コンポーネント' (System Components). It features a table with columns for selection, name, status, start time, CPU usage, and memory usage. The 'Discoverer' component is selected, and its details are shown in the '一般' (General) section above the table. The status is '移動中' (Moving), and the host is 'oraclehost.jp.oracle.com'. The version is '10.1.2.0.2' and the installation type is 'Business Intelligence'. The Oracle home is '/work1/oracle/product/BI'. To the right, there are two pie charts: 'CPU使用率' (CPU Usage) showing 23% for Application Server, 77% for Idle, and 0% for Other; and 'メモリー使用量' (Memory Usage) showing 65% (667MB) for Application Server, 16% (168MB) for Free, and 19% (188MB) for Other. The table below shows the following components:

選択	名前	ステータス	開始時間	CPU使用率(%)	メモリー使用量(MB)
<input type="checkbox"/>	Discoverer	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	16.68
<input type="checkbox"/>	home	↑	2005/08/22 12:30:32	0.13	65.46
<input type="checkbox"/>	HTTP_Server	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	33.03
<input type="checkbox"/>	OC4J_BI_Forms	↑	2005/08/22 12:30:32	0.21	171.79
<input type="checkbox"/>	Report Server...	↑	N/A	N/A	N/A

**注意** : Oracle Business Intelligence インストールがスタンドアロン・インストールの場合、Application Server Control のホーム・ファーム・ページは表示されず、直接 Application Server のホームページが表示されます。

### 注意

- OracleAS インストールの概要は、第 7.2 項「Oracle Business Intelligence インストール」を参照してください。
- 熟練した管理者であればデフォルト・ポートの変更は可能ですが、ほとんどの場合、Application Server Control 用に指定されるポートは 1810 です。

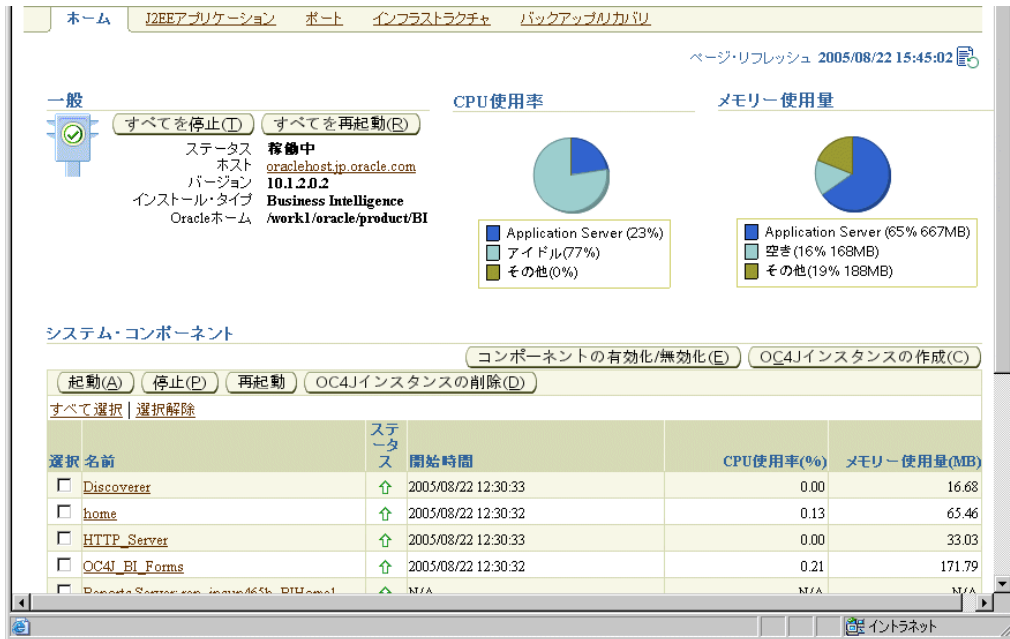
## 5.1.3 Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法

Discoverer インストールを構成および管理するには、Application Server Control Discoverer ホームページを表示します。

Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法は、次のとおりです。

1. Application Server Control を起動して、「システム・コンポーネント」ページに移動します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。

Application Server Control に、Oracle Business Intelligence インストールで使用可能な OracleAS システム・コンポーネント (Discoverer、OC4J、HTTP Server など) のリストが表示されます。



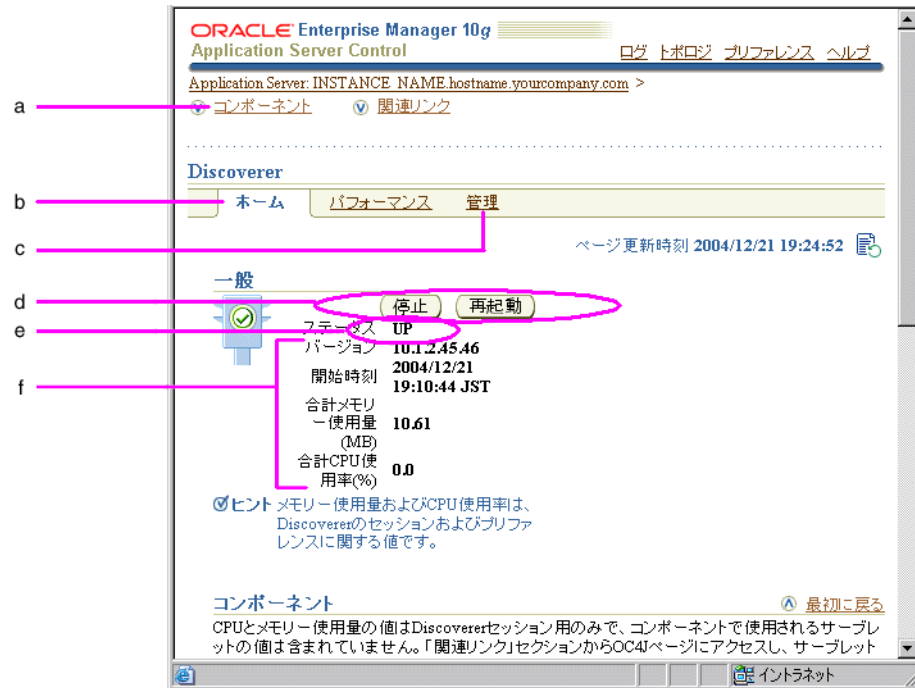
- 「名前」列で「Discoverer」リンクを選択すると、Application Server Control Discoverer ホームページが表示されます。



Application Server Control Discoverer ホームページから、Discoverer クライアント層コンポーネントの停止および再起動が可能で、Discoverer のすべてを管理できます (次の図を参照してください)。

**注意：**

- 次の図は、Application Server Control Discoverer ホームページの説明です。

**図 5-2 Application Server Control Discoverer ホームページ**

この図の符号の説明は次のとおりです。

- 「Discoverer コンポーネント」領域へのリンク（詳細は、第 5.2 項「Application Server Control を使用した Discoverer コンポーネントの管理」を参照してください）。
- Application Server Control Discoverer ページの「ホーム」タブ。
- Discoverer カタログの管理ページおよび Discoverer の構成ページを表示する「管理」タブ。
- Discoverer サービスを起動および停止するためのボタン。
- 「ステータス」インジケータ。Discoverer サービスが実行されている状態（「UP」）か、停止している状態（「DOWN」）かを示します。
- Discoverer コンポーネントの一般情報（メモリー使用量や CPU 使用率など）。

## 5.2 Application Server Control を使用した Discoverer コンポーネントの管理

中間層の管理者は、Application Server Control を使用して次の Discoverer コンポーネントを管理できます。

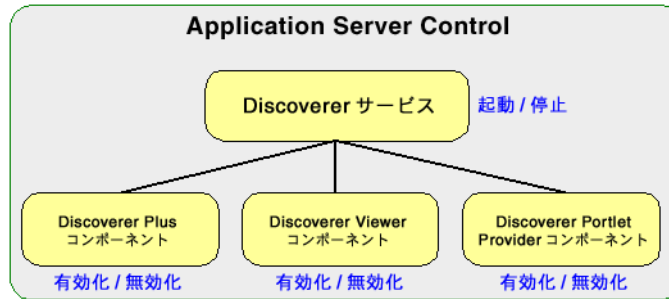
- Discoverer サービス
- Discoverer Plus コンポーネント
- Discoverer Viewer コンポーネント
- Discoverer Portlet Provider コンポーネント
- Discoverer サブレット（詳細は、第 5.5 項「Discoverer サブレットを起動および停止する方法」を参照してください。）

Application Server Control を使用して実行する主なタスクは次のとおりです。

- Discoverer サービスの停止および起動

- Discoverer Plus、Discoverer Viewer、Discoverer Portlet Provider の各コンポーネントの有効化および無効化

図 5-3 Application Server Control を使用した Discoverer コンポーネントの管理



次の図では、Application Server Control Discoverer ホームページに、Discoverer Plus コンポーネント、Discoverer Viewer コンポーネントおよび Discoverer Portlet Provider コンポーネントが表示されています。

図 5-4 Application Server Control Discoverer ホームページに表示される Discoverer コンポーネント

コンポーネント [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサーブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サーブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セッションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) 0.0  
共有セッション・メモリー使用量(MB) 0.0

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/>	Discoverer Plus	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Viewer	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Portlet Provider	有効	0	0	0

関連リンク [最初に戻る](#)

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム パフォーマンス 管理

ログ | トポロジ | プリフェレンス | ヘルプ

## 注意

- Discoverer Portlet Provider がコンポーネント・リストに表示されるのは、Discoverer インストールが Oracle Infrastructure インストールと関連付けられている場合のみです。詳細は、第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」を参照してください。
- Discoverer サービスの詳細は、第 1.8.2 項「Discoverer CORBA コンポーネント (Discoverer サービス)」を参照してください。
- Discoverer クライアント層コンポーネントの詳細は、第 1.7 項「Discoverer クライアント層」を参照してください。



## 5.2.1 Discoverer クライアント層コンポーネントを有効または無効にした際の動作

Discoverer クライアント層コンポーネントを有効または無効にした場合、Discoverer サービスが実行中かどうかにより動作が異なります。

Discoverer サービスの実行の有無	Discoverer クライアント層コンポーネントを有効にした際の動作	Discoverer クライアント層コンポーネントを無効にした際の動作
はい	Discoverer クライアント層コンポーネントは通常の操作を再開します。	既存の Discoverer セッションは正常に続行されますが、新規の Discoverer セッションは許可されません。Discoverer エンド・ユーザーに対し、コンポーネントが無効化されたことを知らせるメッセージが表示されます（詳細は、 <a href="#">第 5.4 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化」</a> を参照してください）。
いいえ	その時点では何も起こりません。 Discoverer サービスを起動すると、Discoverer クライアント層コンポーネントは通常の操作を再開します。	その時点では何も起こりません（詳細は、 <a href="#">第 5.4 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化」</a> を参照してください）。

## 5.3 Discoverer サービスの起動および停止

Discoverer サービスは次の要素で構成されます。

- Discoverer Session
- Discoverer Preference

Discoverer サービスの詳細は、[第 1.8.2 項「Discoverer CORBA コンポーネント \(Discoverer サービス\)」](#)を参照してください。

Application Server Control を使用して、マシンで実行中の Discoverer サービスの起動、停止および監視を行います。たとえば、Discoverer のパッチを適用するなどのメンテナンスの目的で、Discoverer サービスの起動および停止が必要です。

図 5-5 Discoverer サービス・オプションが表示されている Application Server Control Discoverer ホームページ



Discoverer サービスの起動または停止の詳細は、[第 5.3.1 項「マシン上で Discoverer サービスを停止または再起動する方法」](#)を参照してください。

**注意**

- Discoverer サービスを起動する場合は、次のことに注意します。
  - すべての Discoverer サブレットが実行中で、無効でない場合、Discoverer Viewer、Discoverer Plus および Discoverer Portlet Provider では Discoverer セッションに接続し、リクエストの処理を開始できます。たとえば、Discoverer Viewer を使用したワークブックへのアクセスや、Discoverer Plus を使用したワークシートの作成、Discoverer Portlet Provider を使用したポートレットの作成を実行できます。
  - 「ステータス」インジケータには、Discoverer サービスが実行中であることが示されず（「UP」）。
- Discoverer サービスの起動に失敗した場合は、次の処理が行われます。
  - 「ステータス」インジケータには、Discoverer サービスが停止中であることが示されず（「DOWN」）。
  - Application Server Control に、Discoverer サービスの起動に失敗した理由を示すエラー・メッセージが表示されます。
- Discoverer サービスを停止する場合は、次のことに注意します。
  - Discoverer Plus では、ユーザーが Discoverer Plus の URL にアクセスできなくなり、Discoverer サービスが停止中であることを知らせる「Web アプリケーション・サーバーからレスポンスがありません。」という情報メッセージが表示されます。
  - Discoverer Viewer では、ユーザーが Discoverer サブレットの URL にアクセスできなくなり、Discoverer サービスが停止中であることを知らせる「Web アプリケーションからレスポンスがありません。」というエラー・メッセージが表示されます。
  - Discoverer Portlet Provider では、ユーザーが新しいポートレットの公開、デフォルトの編集、ポートレットのカスタマイズおよびリフレッシュを行うことができなくなり、Discoverer サービスが停止中であることを知らせる「Web アプリケーション・サーバーからレスポンスがありません。」という情報メッセージが表示されます。
  - Discoverer サブレットでは、使用中のシステム・リソースが解放されます。
  - Discoverer では、Portal ページの既存のポートレットが、キャッシュされたデータを使用して表示されます。
  - すべての Discoverer セッションが停止します。
  - 次のプロセスが停止します（実行中の場合）。
    - \* Discoverer Session
    - \* Discoverer Preference
  - Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider では、Discoverer セッションへの接続もリクエストの処理もできません。たとえば、Discoverer Viewer を使用したワークブックへのアクセスや、Discoverer Plus を使用したワークシートの作成、Discoverer Portlet Provider を使用したポートレットの作成などが実行できません。
  - 「ステータス」インジケータには、Discoverer サービスが停止中であることが示されます（「DOWN」）。
- Discoverer サービスの停止に失敗した場合は、次の処理が行われます。
  - すべてのコンポーネントがまだ実行中の場合は、「ステータス」インジケータに Discoverer サービスが実行中であることが示されます。
  - すべてのコンポーネントが実行中でない場合には、「ステータス」インジケータに Discoverer サービスの状態が不明であることが示されます。
  - Discoverer は、Discoverer サービスの停止が失敗した理由を示すエラー・メッセージを表示します。

### 5.3.1 マシン上で Discoverer サービスを停止または再起動する方法

メンテナンスの後、Discoverer サービスを起動する必要がある場合があります。たとえば、Discoverer サービスを停止して Discoverer のパッチを適用した後などです。

マシン上で Discoverer サービスを起動および停止する手順は、次のとおりです。

1. 構成するマシンの Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「[Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法](#)」を参照してください）。

The screenshot shows the Discoverer Administration interface. At the top, there are tabs for 'Home', 'Performance', and 'Management'. The 'General' (一般) tab is selected. On the left, there is a status indicator (a blue square with a white checkmark) and a 'Restart' (再起動) button. The main area displays the following information:

- ステータス: UP
- バージョン: 10.1.2.48.18
- 開始時間: 2005/08/22 12:30:33 JST
- 合計メモリー使用量(MB): 46.27
- 合計CPU使用率(%): 0.0

Below this information, there is a warning icon and a message: 「ヒント」メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。 At the bottom, there is a 'Component' (コンポーネント) section with a link to 'Go back to the beginning' (最初に戻る).

2. 次のいずれかを実行します。
  - 「再起動」をクリックして Discoverer サービスを起動します。
  - 「停止」をクリックして Discoverer サービスを停止します。
3. 確認ページで「はい」をクリックします。

## 5.4 Discoverer クライアント層コンポーネントの有効化および無効化

Discoverer クライアント層コンポーネント（Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider）へのエンド・ユーザーのアクセスを、有効または無効にする必要がある場合があります。

たとえば、次のような場合です。

- 新しいユーザーが Discoverer へ接続しないようにします。  
ただし、既存のユーザーは作業を続行して完了できます。すべてのユーザーが切断したときに、Discoverer サービスを停止できます。
- Discoverer コンポーネントへのアクセスを制限します。  
セキュリティ上の制限またはその他のポリシーのため、Discoverer Plus、Discoverer Viewer または Discoverer Portlet Provider を無効にして、ユーザーが接続できないようにできます。

Discoverer クライアント層コンポーネントは、無効にすると次のように動作します。

- Discoverer Plus コンポーネントまたは Discoverer Viewer コンポーネントを無効にすると、Discoverer は次のように動作します。
  - 既存のすべての Discoverer Plus セッションまたは Discoverer Viewer セッションは、ユーザーがセッションを終了するまで維持されます。

- 新しいユーザー・セッションのリクエストは拒否されます。操作が行われなかったためセッションがタイムアウトしたユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Viewer の使用を続行できません。  
**注意:** ユーザー・タイムアウトの決定は、Discoverer Plus と Discoverer Viewer では次のように異なります。
  - Discoverer Plus では、ユーザー・タイムアウトはサーバー・プロセスに基づいて決定されます。
  - Discoverer Viewer では、ユーザー・タイムアウトはサブレットに基づいて決定されます。
- ユーザーが Discoverer Plus の URL または Discoverer Viewer の URL にアクセスを試みると、Discoverer はサービスが使用不可であることを知らせるエラー・メッセージを表示します。
- Discoverer Portlet Provider コンポーネントを無効にすると、Discoverer は次のように動作します。
  - Portal ページに新規 Discoverer ポートレットを追加できません。
  - 既存のポートレットで、「デフォルトの編集」オプションおよび「カスタマイズ」オプションを使用できません。
  - コンポーネントを無効にした時点で、ユーザーがすでにデフォルトを編集またはポートレットをカスタマイズ中である場合、その作業は完了できません。
  - 実行中のスケジュール済みリフレッシュは完了されます。ただし、まだ起動していないスケジュール済みリフレッシュは、Portlet Provider コンポーネントを有効にするまで実行されません。
  - ユーザーが新規ポートレットの追加、デフォルトの編集、または既存のポートレットのカスタマイズを試みると、Discoverer にはサービスが使用不可であることを知らせるメッセージを表示します。
  - Discoverer は、最後にキャッシュされたデータを使用して、既存の Discoverer ポートレットにデータを引き続き表示します。

### 5.4.1 Discoverer クライアント層コンポーネントを無効にする方法

メンテナンス作業のために、1 つ以上の Discoverer クライアント層コンポーネントを無効にする必要がある場合があります。たとえば、Discoverer のパッチを適用したり、Discoverer コンポーネントへのユーザー・アクセスを制限する場合などです。

Discoverer クライアント層コンポーネントを無効にする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください)。
2. 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。

**コンポーネント** [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサーブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サーブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**  
共有セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/> Discoverer Plus	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/> Discoverer Viewer	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/> Discoverer Portlet Provider	有効	0	0	0

**関連リンク** [最初に戻る](#)

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム | パフォーマンス | 管理

[ログ](#) | [トポロジ](#) | [プリファレンス](#) | [ヘルプ](#)

- 「コンポーネント」領域で、無効にする Discoverer コンポーネントの「選択」列のチェック・ボックスを選択します。

たとえば、Discoverer Plus を無効にする場合は、「Discoverer Plus」チェック・ボックスを選択します。

- 次の手順に従って、選択した Discoverer コンポーネントを無効にします。

- 「無効」をクリックします。

Application Server Control に警告メッセージが表示されます。

- 「はい」をクリックして、Discoverer コンポーネントを無効化するための処理を開始します。

Application Server Control に「処理中です」というメッセージが表示されます。

「ステータス」列に、選択した Discoverer コンポーネントの状態が「無効」と表示されます。

#### 注意

- 「名前」列のリンクをクリックして、選択したコンポーネントのホームページを表示し、「無効化」をクリックする方法もあります。

## 5.4.2 Discoverer クライアント層コンポーネントを有効にする方法

メンテナンスの後、1 つ以上の Discoverer クライアント層コンポーネントを有効にする必要がある場合があります。たとえば、Discoverer のパッチの適用後や、Discoverer コンポーネントへのユーザー・アクセスを有効にする場合などです。

Discoverer クライアント層コンポーネントを有効にする手順は、次のとおりです。

- Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。

- 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。

**コンポーネント** [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。  
 「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**  
 共有セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/>	<a href="#">Discoverer Plus</a>	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	<a href="#">Discoverer Viewer</a>	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	<a href="#">Discoverer Portlet Provider</a>	有効	0	0	0

**関連リンク** [最初に戻る](#)

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム | **パフォーマンス** | 管理

[ログ](#) | [トポロジ](#) | [プリファレンス](#) | [ヘルプ](#)

- 「コンポーネント」領域で、有効にする Discoverer コンポーネントの「選択」列のチェック・ボックスを選択します。  
 たとえば、Discoverer Plus を有効にする場合は、「Discoverer Plus」チェック・ボックスを選択します。
- 次の手順に従って、選択した Discoverer コンポーネントを有効にします。
  - 「有効」をクリックします。  
 Application Server Control に警告メッセージが表示されます。
  - 「はい」をクリックして、Discoverer コンポーネントを有効化するための処理を開始します。  
 Application Server Control に警告メッセージが表示されます。  
 「ステータス」列に、選択した Discoverer コンポーネントの状態が「有効」と表示されません。

#### 注意

- 「名前」列のリンクをクリックして、選択したコンポーネントのホームページを表示し、「有効化」をクリックする方法もあります。

## 5.5 Discoverer サブレットを起動および停止する方法

OracleAS コンポーネント・ファーム内のスタンドアロン・マシンで実行中の Discoverer サブレット (Discoverer J2EE コンポーネント) を、ファーム内の任意のマシンから起動および停止できます。たとえば、マシン上でメンテナンス作業を行う場合、Discoverer サブレットを停止する必要があります。

Discoverer サブレットの詳細は、[第 1.8.1 項「Discoverer J2EE コンポーネント」](#)を参照してください。

Discoverer サブレットを起動および停止する手順は、次のとおりです。

- Oracle Application Server Control を起動して、「システム・コンポーネント」ページを表示します (詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」](#)を参照してください)。

The screenshot shows the Oracle Application Server Control console. The main area displays the status of the Discoverer component, which is currently '稼働中' (Running). It shows the host as 'oraclehost.jp.oracle.com' and the version as '10.1.2.0.2'. There are two pie charts: 'CPU使用率' (CPU Usage) showing Application Server at 23%, Idle at 77%, and Other at 0%; and 'メモリー使用量' (Memory Usage) showing Application Server at 65% (667MB), Free at 16% (168MB), and Other at 19% (188MB). Below these is a table of system components.

選択名前	ステータス	開始時間	CPU使用率(%)	メモリー使用量(MB)
<input type="checkbox"/> Discoverer	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	16.68
<input type="checkbox"/> home	↑	2005/08/22 12:30:32	0.13	65.46
<input type="checkbox"/> HTTP_Server	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	33.03
<input type="checkbox"/> OC4J_BI_Forms	↑	2005/08/22 12:30:32	0.21	171.79
<input type="checkbox"/> Discoverer (java465k_BIForm1)	↑	N/A	N/A	N/A

2. 「名前」列で、「OC4J\_BI\_Forms」リンクを選択して「OC4J\_BI\_Forms」ページを表示します。
3. 次のいずれかを実行します。
  - 「開始」をクリックして OC4J\_BI\_Forms コンポーネントを起動します。これにより、Discoverer サブレット (Discoverer Plus、Discoverer Viewer、Discoverer Portlet Provider) が起動します。
  - 「停止」をクリックして OC4J\_BI\_Forms コンポーネントを停止します。これにより、Discoverer サブレット (Discoverer Plus、Discoverer Viewer、Discoverer Portlet Provider) が停止します。
  - 「再起動」をクリックして OC4J\_BI\_Forms コンポーネントを停止して起動します。これにより、Discoverer サブレット (Discoverer Plus、Discoverer Viewer、Discoverer Portlet Provider) が起動します。

## 5.6 Discoverer サービスおよび Discoverer クライアント層コンポーネントのオプションの構成

Application Server Control を使用して、Discoverer サービスおよび Discoverer クライアント層コンポーネントのオプションを次のように設定します。

- Oracle Application Server Control の「Discoverer 管理」タブでは、次の処理を実行できます。
  - Discoverer カタログのインストールと管理
  - パブリック接続の管理 (接続の作成、編集および削除)
  - ユーザーによるプライベート接続の作成の有効化
  - Discoverer セッションのロギングの構成
- Oracle Application Server Control の Discoverer コンポーネントページでは、次の処理を実行できます。
  - Discoverer Plus の通信プロトコル設定、ルック・アンド・フィール設定、Java Plug-in タイプ設定およびセッション・ロギング設定の指定



- Discoverer Viewer のキャッシュ設定、セッション・ロギング設定、遅延時間設定、印刷設定、電子メール設定、PDF 生成設定およびサポートされている接続設定の指定
- Discoverer Portlet Provider のセッション設定、セッション・ロギング設定、汎用パラメータ設定の指定 (Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合に使用可能)

Discoverer および Discoverer コンポーネント・オプションの構成方法の詳細は、第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」を参照してください。

## 5.6.1 Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法

Discoverer クライアント層コンポーネントに適用される構成オプションを個別に変更する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください)。
2. 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。

**コンポーネント** 🔍 最初に戻る

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサーブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サーブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止する際は、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) 0.0  
共有セッション・メモリー使用量(MB) 0.0

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/>	Discoverer Plus	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Viewer	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Portlet Provider	有効	0	0	0

**関連リンク** 🔍 最初に戻る

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム | **パフォーマンス** | 管理

ログ | トポロジ | プロパティ | ヘルプ

3. 「コンポーネント」領域の「名前」列で、構成する Discoverer コンポーネントのリンク (Discoverer Plus、Discoverer Viewer または Discoverer Portlet Provider) を選択します。  
Oracle Application Server Control に選択したコンポーネントのホーム構成ページが表示されます。たとえば、「Discoverer Plus」リンクを選択して、Discoverer Plus のホームページを開きます。
4. 「一般」領域で「構成」領域のいずれかのリンクを選択して、そのコンポーネントの構成ページを表示します。それぞれの構成ページは次のとおりです。
  - 「Discoverer Plus 構成」ページには、次のオプションがあります。
    - 「ロゴ」では、Discoverer Plus のロゴを変更できます。
    - 「ロック・アンド・フィール」領域では、Discoverer Plus のロック・アンド・フィールを変更できます (詳細は、第 9.1 項「Discoverer Plus のカスタマイズ」を参照してください)。
    - 「Java プラグイン」領域では、Discoverer Plus の様々な Java Plug-in を指定できます。



- 「通信プロトコル」領域では、JRMP、HTTP または HTTPS のいずれかのプロトコルを指定できます（詳細は、第 14.6.3.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」を参照してください）。
- 「Plus ロギング」領域では、Discoverer Plus ロギング・オプションを管理できます。
- 「Discoverer Viewer 構成」ページには、次のオプションがあります。
  - 「キャッシュ」領域では、OracleAS Web Cache を有効および無効にできます。
  - 「印刷用紙サイズ」領域では、印刷可能な用紙サイズを指定できます。
  - 「PDF 生成」領域では、PDF 解像度設定および最大メモリー設定を指定できます。
  - 「電子メール」領域では、電子メールを送信するための SMTP サーバーを指定できます（詳細は、第 D.1.10 項「Discoverer Viewer の SMTP サーバーの構成」を参照してください）。
  - 「Viewer 遅延時間」領域では、Discoverer Viewer によってクエリー進行状況ページが表示されるまでの待機時間、またはエクスポート完了のチェックの頻度を指定できます。
  - 「Viewer ロギング」領域では、Discoverer Viewer ロギング・オプションを設定できます。
- 「Discoverer Portlet Provider 構成」ページには、次のオプションがあります。
  - 「Discoverer セッション」領域では、Discoverer のパフォーマンスを最大限にするために Discoverer ポートレットのキャッシングを微調整できます。
  - 「ポートレット汎用パラメータ」領域では、Discoverer ワークシート・ポートレットで公表する汎用パラメータの数を指定できます。
  - 「Portlet Provider ロギング」領域では、Discoverer Portlet Provider ロギング・オプションを設定できます。

**注意:** 構成フィールドの詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。「Discoverer セッション」領域の設定の詳細は、第 A.2 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」および第 12.3.12 項「Discoverer Portlet Provider のパフォーマンスを向上させる方法」でも参照できます。

5. 必要に応じて、構成オプションを変更します。

各オプションの詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。

6. 「OK」をクリックして、変更内容を保存します。

**注意:** 構成の変更は、Discoverer ユーザーが次に Discoverer にログインした時点で有効になります。Discoverer サービスまたは Discoverer サブレットを再起動する必要はありません。

## 5.7 Discoverer メトリックの監視

Discoverer 中間層の管理者は、通常、様々な統計やメトリックを監視してシステムのパフォーマンスを分析する必要があります。この分析を通じて、Discoverer で使用されているリソース合計を、インストールされている他のアプリケーションおよびサービスで使用されているリソース合計と簡単に比較できます。

Application Server Control を使用して、次の Discoverer メトリックを監視できます。

- 現行ステータス
- 稼働時間
- メモリー使用量
- CPU 使用率
- セッション情報

Discoverer メトリックを表示するには、次の 2 つの方法があります。

- すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのサマリー・メトリックを表示します。
- 特定のクライアント層コンポーネントの個々のメトリックを表示します。

Discoverer メトリックの監視の詳細は、次の項目を参照してください。

- [第 5.7.1 項「すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのサマリー・メトリックを監視する方法」](#)
- [第 5.7.2 項「単一の Discoverer クライアント層コンポーネントのメトリックを監視する方法」](#)

## 注意

- メトリックは、Application Server Control ページに表示された時点のスナップショットで、自動的には更新されません。最新のメトリックを取得するには、ブラウザのリフレッシュ・オプションを選択します。

## 5.7.1 すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのサマリー・メトリックを監視する方法

すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのメトリックを監視する必要がある場合があります。たとえば、Discoverer システムが使用しているメモリーまたは CPU の合計量を表示する場合などです。

すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのサマリー・メトリックを監視する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。

The screenshot shows the Discoverer Application Server Control interface. At the top, there are tabs for 'ホーム' (Home), 'パフォーマンス' (Performance), and '管理' (Management). The '一般' (General) tab is selected. Below the tabs, there is a 'ページ・リフレッシュ' (Refresh Page) button with the timestamp '2005/08/23 10:56:54'. The main content area shows a status indicator (a green checkmark in a blue box) and two buttons: '停止' (Stop) and '再起動' (Restart). Below this, the following information is displayed:

ステータス	IP
バージョン	10.1.2.48.18
開始時間	2005/08/22 12:30:33 JST
合計メモリー使用量(MB)	46.27
合計CPU使用率(%)	0.0

Below the table, there is a hint: **ヒント** メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。

At the bottom, there is a section for 'コンポーネント' (Components) with a link '最初に戻る' (Return to Top). Below this, there is a detailed note: CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサーブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サーブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

Application Server Control Discoverer ホームページには、一般情報とサマリー・メトリックが表示されています。

次の点に注意してください。

- Discoverer サーブレット (Discoverer Viewer サーブレット、Discoverer Plus サーブレットおよび Discoverer Portlet Provider サーブレット) の CPU およびメモリーの消費量は、この値には含まれていません。
- 「ステータス」インジケータが「DOWN」の場合、Application Server Control には、「稼働時間」、「CPU 使用率」および「メモリー使用量」の値は表示されません。

- (オプション) 「関連リンク」領域で、「すべてのメトリック」リンクを選択して「すべてのメトリック」ページを表示します。

「すべてのメトリック」ページには、Discoverer のパフォーマンス・メトリックの拡張可能なリストが表示されます。個々のメトリックにドリルダウンすると、各パフォーマンス・メトリックの値を表示できます。たとえば、「Discoverer セッション」リンクを選択すると、すべての Discoverer セッションの「プライベート・メモリー使用量」や「共有メモリー使用量」に関するメトリックを監視できます。



- (オプション) すべての Discoverer クライアント層コンポーネントのセッション詳細を参照するには、「パフォーマンス」タブまたはページを表示します。

Discoverer

ホーム パフォーマンス 管理

ページ更新時刻 2004/12/28 13:55:59

Discovererセッション

セッション情報はDiscoverer Plus、Discoverer ViewerおよびDiscoverer Portlet Provider用です。Discoverer Plus OLAPIはJDBCを使用して直接データベースに接続し、中間層ではセッションを作成しません。

セッション 39

表示:  最上位  CPU使用率   すべてのセッション

セッションID	OSプロセスID	コンポーネント	合計CPU使用率(%)	合計メモリー使用量(MB)	データベース・ユーザー@DB - EUL	SSOユーザー	ログの表示
200412281349262236	4629	Viewer	0.35	5.72	admin@dsspm - EUL51	tshah	
200412281348591968	1968	Plus	0.49	19.97	admin@dssdev - EUL51	chbarron	
200412271158462478	7416	Viewer	1.35	19.18	chbarron@dsspm - EUL51	cdarlach	
200412280957256348	1462	Plus	8.45	45.24	video@orcl - EUL51	cleung	
200412270238469857	7958	Portlet Provider	0.88	14.27	smead@dsspm - EUL51	smead	
200412280756381968	6498	Viewer	6.31	11.97	admin@dss -	dsmuth	
200412272235492358	4628	Plus	8.14	24.07	admin@video - EUL51	jashley	

「パフォーマンス」タブまたはページには、次の情報が表示されます。

- セッションの合計数
- CPU使用率またはメモリー使用量のいずれかに基づく上位 N セッションのリスト

このページに表示される Discoverer セッション情報の詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。

- (オプション) 「パフォーマンス」ページの「ログの表示」列にあるファイル・アイコンをクリックすると、「ログの表示」ページが表示されます。

「ログの表示」ページには、選択した Discoverer セッションのすべてのログ情報が表示されます。

## 5.7.2 単一の Discoverer クライアント層コンポーネントのメトリックを監視する方法

単一の Discoverer コンポーネント (Discoverer Plus、Discoverer Viewer または Discoverer Portlet Provider) のメトリックを監視する必要がある場合があります。たとえば、Discoverer Viewer ユーザーと比較して、Discoverer Plus ユーザーが使用中の正確なセッション数を確認する場合などです。

単一の Discoverer クライアント層コンポーネントのメトリックを監視する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください)。

**Discoverer**

ホーム パフォーマンス 管理

ページ・リフレッシュ 2005/08/23 10:56:54

**一般**

停止 再起動

ステータス UP  
バージョン 10.1.2.48.18  
開始時間 2005/08/22 12:30:33 JST  
合計メモリー使用量(MB) 46.27  
合計CPU使用率(%) 0.0

セント メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。

コンポーネント [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

2. 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。

**コンポーネント** [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) 0.0  
共有セッション・メモリー使用量(MB) 0.0

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/>	Discoverer Plus	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Viewer	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Portlet Provider	有効	0	0	0

関連リンク [最初に戻る](#)

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム パフォーマンス 管理

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

3. 「コンポーネント」領域の「名前」列で、監視する Discoverer コンポーネントのリンクを選択します。

たとえば、「Discoverer Plus」リンクを選択して、Discoverer Plus のホームページを開きます。

Application Server Control に選択した Discoverer コンポーネントのホームページが表示されます。

各 Discoverer コンポーネントのホームページには、一般情報とサマリー・メトリックが表示されています。Discoverer コンポーネントのホームページのメトリックは、Application Server Control Discoverer ホームページのメトリックと似ていますが、Discoverer コンポーネントのホームページでは選択した Discoverer コンポーネントに固有のメトリックが表示されます。

4. (オプション) 選択した Discoverer コンポーネントのセッション詳細を参照するには、「パフォーマンス」ページを表示します。

「パフォーマンス」ページには、次の情報が表示されます。

- 選択した Discoverer コンポーネントの合計セッション数
- CPU 使用率またはメモリー使用量のいずれかに基づく、選択した Discoverer コンポーネントの上位 N セッションのリスト

このページに表示される Discoverer セッション情報の詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。

5. (オプション) 「パフォーマンス」ページの「ログの表示」列にあるファイル・アイコンをクリックすると、「ログの表示」ページが表示されます。

「ログの表示」ページには、選択した Discoverer セッションのログ情報が表示されます。

## 注意

- Discoverer サブレット (Discoverer Viewer サブレット、Discoverer Plus サブレット および Discoverer Portlet Provider サブレット) の CPU およびメモリーの消費量は、この値には含まれていません。
- 「ステータス」インジケータが「DOWN」の場合、Application Server Control には、「稼働時間」、「CPU 使用率」および「メモリー使用量」の値は表示されません。
- Discoverer Plus OLAP はデータベースに直接接続し、中間層にセッションを作成しません。

## 5.8 Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法

Discoverer では、Oracle HTTP Server と同じリスニング・ポート（タイプがリスニングまたはリスニング（SSL）の場合）を使用します。

Oracle Application Server が使用するポートのリストを表示する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Control を起動して、「システム・コンポーネント」ページを表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。

選択	名前	ステータス	開始時間	CPU使用率(%)	メモリー使用量(MB)
<input type="checkbox"/>	Discoverer	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	16.68
<input type="checkbox"/>	home	↑	2005/08/22 12:30:32	0.13	65.46
<input type="checkbox"/>	HTTP_Server	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	33.03
<input type="checkbox"/>	OC4J_BI_Forms	↑	2005/08/22 12:30:32	0.21	171.79
<input type="checkbox"/>	Oracle Server...	↑	N/A	N/A	N/A

2. 「ポート」タブを表示します。

コンポーネント	タイプ	使用中のポート	推奨されるポート範囲	構成
DCM Object Cache	Cache Discovery Port		7100-7199	
home	RMI	12401	12401-12500	
home	AJP	12501	12501-12600	
home	JMS	12601	12601-12700	
Log Loader	Management		44000-44099	
OC4J_BI_Forms	AJP	12502	12501-12600	
OC4J_BI_Forms	JMS	12602	12601-12700	
OC4J_BI_Forms	RMI	12402	12401-12500	
OPMN	ONS Remote	6200	6200-6299	

「コンポーネント」列の Oracle HTTP Server コンポーネントに対する「使用中のポート」列の値を参照します（タイプがリスニングまたはリスニング（SSL）の場合）。

OracleAS コンポーネントのデフォルト OracleAS ポートの変更の詳細は、[第 5.8.1 項「Discoverer のデプロイ先ポートの変更方法」](#)を参照してください。

## 5.8.1 Discoverer のデプロイ先ポートの変更方法

Discoverer のデプロイ先ポートを変更する手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Control を起動して、「システム・コンポーネント」ページを表示します（詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」](#)を参照してください）。

The screenshot shows the Oracle Application Server Control console. The 'System Components' section is active, displaying a table of components. The 'Discoverer' component is highlighted. The console also shows CPU and memory usage graphs.

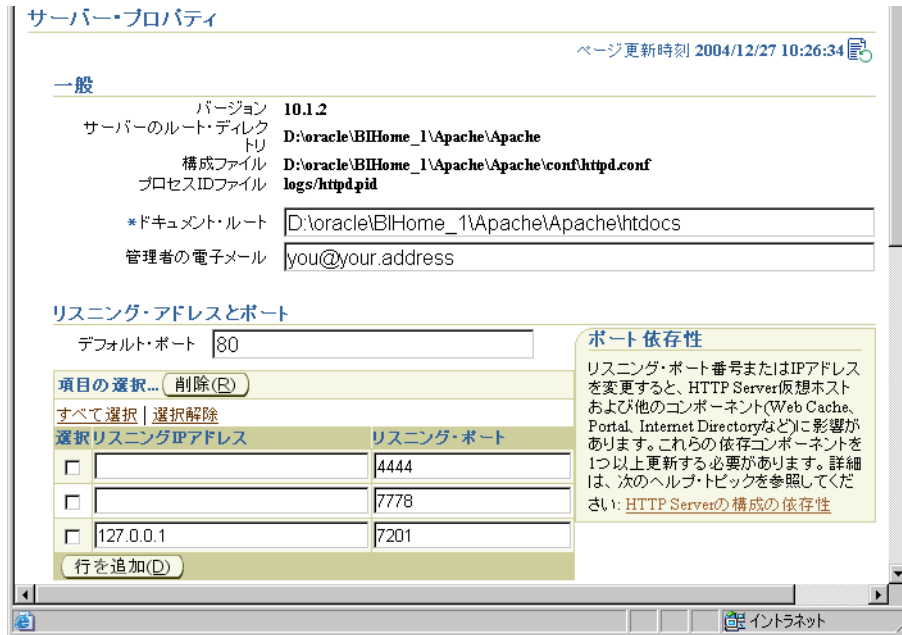
選択名	ステータス	開始時間	CPU使用率(%)	メモリー使用量(MB)
<input type="checkbox"/> Discoverer	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	16.68
<input type="checkbox"/> home	↑	2005/08/22 12:30:32	0.13	65.46
<input type="checkbox"/> HTTP_Server	↑	2005/08/22 12:30:33	0.00	33.03
<input type="checkbox"/> OC4J_BI_Forms	↑	2005/08/22 12:30:32	0.21	171.79
<input type="checkbox"/> Remote Server...	↑	N/A	N/A	N/A

2. 「ポート」タブを表示します。

The screenshot shows the Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control console with the 'Ports' tab selected. It displays a table of components and their associated ports.

コンポーネント	タイプ	使用中のポート	推奨されるポート範囲	構成
DCM Object Cache	Cache Discovery Port		7100-7199	
home	RMI	12401	12401-12500	
home	AJP	12501	12501-12600	
home	JMS	12601	12601-12700	
Log Loader	Management		44000-44099	
OC4J_BI_Forms	AJP	12502	12501-12600	
OC4J_BI_Forms	JMS	12602	12601-12700	
OC4J_BI_Forms	RMI	12402	12401-12500	
OPMN	ONS Remote	6200	6200-6299	

- Oracle HTTP Server コンポーネント（タイプがリスニングの場合）が含まれる行で、「構成」列の編集アイコンを選択し、コンポーネントの「サーバー・プロパティ」ページを表示します。



- 「リスニング・アドレスとポート」領域まで下へスクロールし、「デフォルト・ポート」フィールドのポート番号を変更します。
- 「OK」をクリックします。
- Oracle HTTP Server を再起動するプロンプトが表示されたら「はい」をクリックします。

Application Server Control の「サーバー・プロパティ」ページの詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。

ヒント: Discoverer ポート番号を変更する場合は、その Discoverer ポート番号を使用している他の OracleAS コンポーネントがすべて同期されていることを確認してください。

## 5.9 異なる Java 仮想マシンでの Discoverer Plus の実行

OracleBI Discoverer Plus では、次のデフォルト Java 仮想マシン (JVM) をサポートしています。

- Sun Java Plug-in (デフォルト)
- Oracle JInitiator

次のような状況では、JVM を変更する必要があります。

- パフォーマンスの改善のために、より新しいバージョンの JVM を使用する必要がある場合
- 別の JVM がすでにインストールされており、その JVM を使用する場合
- Discoverer Plus が、別の JVM を必要とする Windows 以外のブラウザにデプロイされている場合 (JInitiator が使用できない場合など)

**注意:** 異なる JVM を使用する場合は、Oracle Business Intelligence での動作が保証されていることを確認する必要があります。

Discoverer Plus ユーザーが Apple Mac OS X クライアント・マシンを使用している場合は、Discoverer 中間層で Sun Java Plug-in を指定する必要があります (詳細は、[第 5.9.1 項「Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法」](#)を参照してください)。



異なる JVM を指定するには、次の 2 つの方法があります。

- OracleBI とともにインストールされる Sun Java Plug-in または JInitiator のバージョンを切り替えるには、Oracle Enterprise Manager を使用します（詳細は、第 5.9.1 項「Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法」を参照してください）。
- 独自の Java Plug-in または JInitiator のバージョンを選択するには、configuration.xml ファイルを直接編集します（詳細は、第 5.9.2 項「Discoverer Plus に対する独自の Java 仮想マシンの指定方法」を参照してください）。

## 5.9.1 Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法

Discoverer Plus に対して異なる Java 仮想マシンを指定する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。

Discoverer

ホーム パフォーマンス 管理

ページリフレッシュ 2005/08/23 10:56:54

一般

停止 再起動

ステータス UP  
バージョン 10.1.2.48.18  
開始時間 2005/08/22 12:30:33 JST  
合計メモリー使用量(MB) 46.27  
合計CPU使用率(%) 0.0

ヒント メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。

コンポーネント [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサーブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サーブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

2. 「Discoverer Plus」リンクを選択して、Application Server Control Discoverer Plus ホームページを表示します。

ヒント：「Discoverer Plus」リンクを表示するには、「コンポーネント」領域までページを下にスクロールするか、「コンポーネント」リンクを選択します。

Discoverer Plus

ホーム パフォーマンス 管理

ページ更新時刻 2004/12/28 15:31:41

一般

有効化 無効化

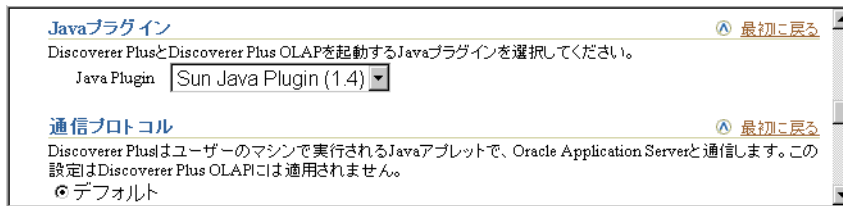
Discoverer Plusのステータス 有効  
Discovererのステータス 稼働中  
バージョン 10.1.2.45.46c  
セッションのメモリー使用量(MB) 0  
セッションのCPU使用率(%) 0

構成 ログ  
ルック・アンド・フィール  
Javaプラグイン  
通信プロトコル  
ロギング

ホーム パフォーマンス

イントラネット

3. 「Java プラグイン」リンクを選択して、「Java プラグイン」領域を表示します。



4. 「Java プラグイン」ドロップダウン・リストからオプション (Sun Java Plug-in <version> など) を選択します。

**注意:** Discoverer Plus ユーザーが Apple Mac OS X クライアント・マシンを使用している場合は、Sun Java Plug-in オプションを選択する必要があります (Apple Mac クライアント・ブラウザ・マシンでの Discoverer Plus の使用の詳細は、第 3.6 項「HTTP を使用してクライアント・マシンで初めて Discoverer Plus を実行する場合」を参照してください)。

5. 「OK」をクリックして、変更内容を保存します。

## 5.9.2 Discoverer Plus に対する独自の Java 仮想マシンの指定方法

Discoverer Plus に対して独自の Java 仮想マシンを指定する手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタまたは XML エディタで configuration.xml ファイルを開きます (構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください)。
2. plus 要素の jvm 属性を検索します。



3. plus 要素の jvm 属性を編集します。  
たとえば、JVM のバージョンまたは URL を変更します。

**ヒント:** Java Plug-in の詳細を変更するには、<jvm name = "sun" ...> エントリを編集します。JInitiator の詳細を変更するには、<jvm name = "jinitiator" ...> エントリを編集します。

4. configuration.xml ファイルを保存します。

指定した JVM が、Discoverer Plus セッションに対して使用可能になります。

**ヒント:** Oracle Application Server Control で適切な JVM を選択していることを確認してください。たとえば、configuration.xml に別の JInitiator のバージョンを指定する場合は、Oracle Application Server Control で JInitiator を選択していることを確認してください (詳細は、第 5.9.1 項「Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法」を参照してください)。

## 5.10 Web クエリのフォーマットにエクスポートするための Discoverer の構成

Microsoft Excel の Web クエリは Microsoft Excel の外部データ・フォーマットで、URL から動的データ (Discoverer ワークシートなど) を Microsoft Excel ワークシートに組み込むことができます。たとえば、ある日付範囲の Discoverer 売上高レポートが含まれる Microsoft Excel を作成し、この日付範囲は Microsoft Excel でワークシートを開くときに指定するとします。

Microsoft Excel ワークシートには、データが自動的にリフレッシュされるように、Discoverer データの取得に使用されるクエリーが格納されます。

データは、Discoverer Plus および Discoverer Viewer から Web クエリ・フォーマットにエクスポートできます。

**注意:** Web クエリ・フォーマットの Discoverer データにアクセスするには、Microsoft Excel 2000 以上が必要です。

Discoverer では、デフォルトの Discoverer の URL

"http://machine-name:port/discoverer/viewer" を使用して、Microsoft Excel の Web クエリ・フォーマットがデフォルトで有効になっています。Microsoft Excel の Web クエリ・フォーマットを無効にしたり、Discoverer の URL を変更する場合は、各 Discoverer のホストにある `pref.txt` に、次の作業環境を追加する必要があります。

- `ExportToWebquery=<0 または 1>`
- `WebQueryBaseURL=<Discoverer の URL>`
- `EnableWebqueryRun=<0 または 1>`

**注意:** `EnableWebqueryRun` 作業環境では、Microsoft Excel でクエリーが実行されるときに、Discoverer のレスポンスのオン / オフを切り替えることができます。

作業環境の詳細は、第 10 章「[OracleBI Discoverer 作業環境の管理](#)」を参照してください。

### 注意

- Discoverer で Web クエリへのエクスポートが有効になっている場合は、Discoverer エンド・ユーザーがワークシートをエクスポートするときに、エクスポート・タイプのリストに、Web クエリのオプション (つまり、「Microsoft Excel の Web クエリ (\*.iqy)») が表示されます。
- Discoverer エンド・ユーザーがエクスポートしたファイルを開く場合、Microsoft Excel では、IQY ファイルを開くときに IQY ファイルから XLS ファイルが作成されます。Discoverer エンド・ユーザーがエクスポート後にエクスポート・ファイルを保存する場合は、IQY ファイルを取得します。このファイルは、Microsoft Excel で次回 IQY を開くときに XLS ファイルに変換されます。Web クエリ・ファイルを保存するか、開くかを尋ねるプロンプトが表示されるようにするには、Discoverer エンド・ユーザーがマシンで次の処理を実行する必要があります。
  1. Windows のエクスプローラを起動します。
  2. 「フォルダ オプション」ダイアログを表示 (「ツール」 → 「フォルダ オプション」を選択) します。
  3. 「ファイルの種類」タブを表示します。
  4. 「IQY Microsoft Excel Web Query File」を選択し、「詳細設定」をクリックして「ファイルの種類編集」ダイアログを表示します。
  5. 「ダウンロード後に開く確認をする」チェック・ボックスを選択します。
  6. 「OK」をクリックして設定を保存します。
- Microsoft Excel の Web クエリ・フォーマットへのエクスポートは、Single Sign-On 経由で Discoverer にアクセスしているユーザーは使用できません。Discoverer エンド・ユーザーが Web クエリ・フォーマットにエクスポートできるようにするには、SSO を無効にする必要があります。詳細は、第 14.7.2.2 項「[Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方法](#)」を参照してください。

- Microsoft Excel の制限のため、Microsoft Excel エンド・ユーザーがデータベース・パスワードまたは Oracle E-Business Suite パスワードを入力した場合、パスワードはアスタリスクではなく判読可能なテキストで表示されます。
- Microsoft Excel の動的プロンプトの最大長は 257 文字です。Discoverer Plus でパラメータ用に動的プロンプトを定義するときは、257 文字の制限を超えないようにしてください。
- グラフィック・バーは、Microsoft Excel にエクスポートされません。
- Microsoft Excel で、ワークシート・データは、左から右に記述する HTML タグ (LTR) を使用して左から右の方向にフォーマットされます。Microsoft Excel では右から左に記述する HTML タグ (RTL) はサポートされていません。
- Netscape Navigator の制限のため、Discoverer ワークシートを Web クエリ・フォーマットにエクスポートするとき、Netscape ではブラウザ内で Microsoft Excel が起動されない場合があります。この場合、Microsoft Excel を別に実行して、エクスポートした Web クエリ・ファイル (\*.iqy) を開きます。
- Web クエリ・フォーマットにエクスポートした Discoverer ワークブックを、そのエクスポート・ファイルが Microsoft Excel で開かれている間に削除した場合、Excel では、その Excel セッションが再起動されるまで、削除したワークブックへのアクセスが継続されません。
- パブリック接続を使用している Discoverer ユーザーには、Discoverer のエクスポート・ウィザードの使用時に「**Excel ユーザーに接続情報の入力を要求しますか。**」ラジオ・ボタンが表示されません。このエクスポート・クエリー・ファイルにアクセスしている Excel エンド・ユーザーは常に、データベース・パスワードの入力を要求されます。つまり、Discoverer ユーザーは、データにアクセスする Excel エンド・ユーザーに、パブリック接続のパスワードを提供する必要があります。
- Microsoft Excel の制限のため、ヘッダーおよびデータのエクスポート・フォント・サイズは、ワークシートで指定された元のサイズより小さくなる場合があります。
- Discoverer で山カッコで表示されるようにフォーマットされた負の数 (<1,234>) は、Excel では山カッコが表示されなくなります。

---

---

## Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成

この章では、Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 6.1 項 「Discoverer カタログの概要」
- 第 6.2 項 「Discoverer カタログの管理方法」
- 第 6.3 項 「Discoverer カタログに対する承認ユーザーとロールの管理方法」
- 第 6.4 項 「Discoverer Plus OLAP のルック・アンド・フィールをカスタマイズする方法」
- 第 6.5 項 「エンド・ユーザーへの伝達事項」
- 第 6.6 項 「Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ」
- 第 6.7 項 「Discoverer Plus OLAP サブレットの URL パラメータ」
- 第 6.8 項 「Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ」

Discoverer Plus OLAP の詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』
- Discoverer Plus OLAP ヘルプ・システム

## 6.1 Discoverer カタログの概要

Discoverer Plus OLAP は、Discoverer Plus のインストール時に自動的にインストールされます。Discoverer Plus OLAP では、ユーザーによるデータの分析に必要なオブジェクトの格納に Discoverer カタログが使用されます。Discoverer カタログは自動的にインストールされません。かわりに、Application Server Control を使用して Discoverer カタログをインストールおよび管理します。

**注意:** Discoverer カタログが必要なのは、Discoverer Plus OLAP を使用する場合のみです。

**ヒント:** エンド・ユーザーが Discoverer Plus Relational を実行するときは、このガイドの別の項で説明されている EUL を使用します。Discoverer Plus OLAP を実行するときは、EUL ではなく Discoverer カタログを使用します。

### 6.1.1 Discoverer カタログ

Discoverer カタログは、Discoverer Plus OLAP 用のオブジェクトの定義を格納および取得するためのリポジトリです。データベースごとに 1 つの Discoverer カタログがあります。

Discoverer カタログは、Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) で作成されるアプリケーションで使用される場合もあります。Discoverer Plus OLAP では、エンド・ユーザーはワークブック、ユーザー定義アイテム、保存済選択などのオブジェクトを Discoverer カタログに格納し、Discoverer カタログにアクセス可能な他のユーザーと共有します。BI Beans アプリケーションでは、ユーザーはグラフを作成して、Discoverer カタログに格納できます。別のユーザーに適切なアクセス権がある場合、そのユーザーは Discoverer カタログに格納されたグラフを取得し、Discoverer Plus OLAP の新規ワークシートに挿入できます。Oracle Business Intelligence では、Discoverer カタログを格納するために、D4OSYS と呼ばれる、Oracle Business Intelligence 中間層インストールに新規ユーザーが作成されます。

Discoverer カタログでは、オブジェクト・レベルでセキュリティが提供され、ユーザーおよびシステム管理者は特定のオブジェクトに対する権限を指定できます。オブジェクトは、XML フォーマットで Oracle データベースに保存されます。

**注意:** オブジェクト定義が含まれる Discoverer カタログと、OLAP カタログを混同しないでください。

### 6.1.2 OLAP カタログ

OLAP カタログでは、スター・スキーマまたはスノーフレーク・スキーマのテーブル内の列、またはアナリティック・ワークスペース内のマルチディメンション・オブジェクトにマップ可能な論理的なマルチディメンション・オブジェクトが定義されます。各データベース・インスタンスには、OLAP カタログが 1 つのみ含まれます。

アナリティック・ワークスペースには、マルチディメンション・データ・オブジェクトと、OLAP DML で作成されるプロシージャが格納されます。OLAP DML は、Oracle OLAP 計算エンジンによって理解されるデータ操作言語です。OLAP DML は、SQL などのクエリー言語や OLAP API の分析機能を、予測、モデリングおよび what-if シナリオが含まれるように拡張します。

詳細は、『Oracle OLAP リファレンス』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

### 6.1.3 Discoverer カタログのオブジェクトに設定可能なプロパティ

Discoverer カタログのオブジェクトには、多数のプロパティが含まれます。「名前」、「説明」および「キーワード」プロパティは、エンド・ユーザーが変更できます。「作成日」、「作成者」、「変更日」、「変更者」および「タイプ」プロパティは、ユーザーによる変更はできません。これらのプロパティの値は、Discoverer Plus OLAP によって割り当てられます。

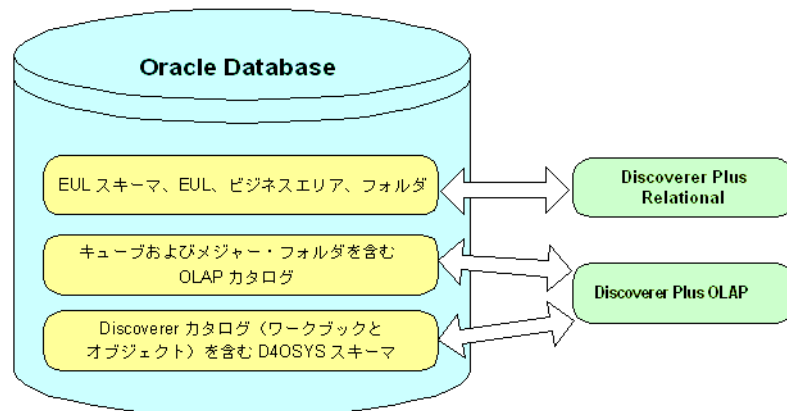
## 6.1.4 Discoverer カタログのアーキテクチャ

Discoverer カタログは、OLAP カタログや EUL スキーマとともに Oracle データベースに存在します。次のリストでは、Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP でこれらの情報にアクセスする方法を説明します。

- Discoverer Plus Relational は、データおよびワークブックに EUL からアクセスします。データベースには、複数の EUL、ビジネスエリアおよびフォルダが含まれます。
- Discoverer Plus OLAP は、データには OLAP カタログから、ワークブックと関連オブジェクトには Discoverer カタログからアクセスします。OLAP カタログには、OLAP データのメジャー・フォルダおよびキューブが含まれます。D4OSYS スキーマには、Discoverer カタログとそのオブジェクト（ワークブック、ユーザー定義アイテム、保存済選択など）が格納されます。

図 6-1 は、このアーキテクチャを視覚的に表現しています。

図 6-1 Discoverer カタログのアーキテクチャ



## 6.1.5 Discoverer カタログと BI Beans カタログの相違点

Discoverer カタログ内のオブジェクトは、BI Beans アプリケーションで使用できます。ただし、Discoverer カタログには、BI Beans カタログと異なる点があります。相違点は、次のとおりです。

- BI Beans カタログには、多数の種類オブジェクトが格納されます。Discoverer カタログに格納されるのは、フォルダ、ワークブック、保存済選択、ユーザー定義アイテム、ショートカット、ユーザー作業環境およびフォーマットのみです。
- データベース・インスタンスごとに Discoverer カタログは 1 つしか設定できませんが、BI Beans カタログは複数設定できます。Discoverer カタログは、D4OSYS と呼ばれる固有のスキーマにあります。Discoverer カタログ内のオブジェクトは、同じデータベース・インスタンス内の OLAP メタデータ・オブジェクトのみを参照します。
- BI Beans カタログには、それ自体にユーザーおよびロールの情報が格納されています。Discoverer カタログでは、ユーザーおよびロールの情報はデータベースから取得されます。データベース・ユーザーおよびロールは、D4OPUB ロールの割当てによって、Discoverer カタログの使用が承認される必要があります。
- BI Beans カタログではユーザー管理は提供されないため、アプリケーション開発者がユーザーを管理する必要があります。Discoverer カタログには、強力なユーザー管理機能があります。
- BI Beans では、リモートのカタログおよびローカル（ファイルベース）のカタログを使用できます。Discoverer カタログは、BI Beans のリモートのカタログと同様に機能します。Discoverer カタログの検索は、現行リリースでは Discoverer Plus OLAP で公開されていますが、Discoverer Viewer では使用可能です。

BI Beans カタログの詳細は、BI Beans ヘルプ・システムを参照してください。

## 6.2 Discoverer カタログの管理方法

Discoverer カタログの管理には Application Server Control を使用します。Discoverer カタログのインストール、アンインストール、エクスポート、インポート、および承認ユーザーとロールの管理などのタスクを実行します。Application Server Control では、Discoverer カタログに対してオブジェクトまたはフォルダの作成、削除、名前の変更、コピーまたは移動は実行しません。これらのタスクは Discoverer Plus OLAP で実行します。これらのタスクは Viewer でも実行しません。Viewer では、Discoverer カタログへのオブジェクトの保存のみを実行します。

### 6.2.1 D4OSYS ユーザーに割り当てられるデータベース権限

Discoverer カタログをインストールするときは、DBA ユーザーでログインし、次の特性を持つ D4OSYS ユーザーを作成します。

- Discoverer カタログの管理者
- OLAPDBA、OLAPSYS、RESOURCE および CONNECT のロールを所有
- Discoverer カタログ・ユーザーの承認およびユーザーへのロールの割当ての実行
- Discoverer カタログ内の全フォルダおよび全オブジェクトに対する完全制御権限の所有

### 6.2.2 Discoverer カタログのインストール方法

Discoverer カタログをインストールすると、D4OSYS ユーザーが自動的に作成され、D4OSYS スキーマに、ワークブック、ワークシートおよび Discoverer Plus OLAP のその他のオブジェクトに必要なスキーマ・オブジェクトが移入されます。

Discoverer カタログをインストールするためにログインすると、D4OSYS ユーザー用のパスワードを作成するように要求されます。パスワードを知っているユーザーは他にはいないため、パスワードは安全な場所に保管してください。

Discoverer カタログをインストールする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control のデータベース管理ツールを使用して、Discoverer カタログをインストールする表領域を作成します。第 6.2.2.1 項「Discoverer カタログをインストールする際のブロック・サイズの確認」の説明に従って、この表領域のブロック・サイズが適切であることを確認する必要があります。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。
3. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
4. 「インストール」をクリックして「カタログのインストール」ページを表示します。
5. 「カタログのインストール」ページで、データベースのホスト名、ポート番号、SID、およびシステムの DBA ユーザー名と適切なパスワードを入力します。
6. 「D4OSYS の詳細を指定」ページで、D4OSYS ユーザー用に使用するパスワードを入力します。「表領域」フィールドで、Discoverer カタログをインストールする表領域を選択します。この表領域は手順 1 で作成済です。
7. 「終了」をクリックします。別のページが表示され、Discoverer カタログのインストールの確認を求められます。「はい」をクリックし、インストール処理を完了します。

#### 6.2.2.1 Discoverer カタログをインストールする際のブロック・サイズの確認

アナリティック・ワークスペースの推奨ブロック・サイズは 8KB であるため、通常は Discoverer カタログをインストールする表領域のブロック・サイズの指定を使用します。ただし、場合によってはこのサイズでは足りない場合があります。あるいは、使用中のキャラクタ・セットなどの様々な要件によって、2KB または 4KB といったサイズで十分である場合もあります。



ブロック・サイズが 8KB のカスタム表領域を作成する場合、ブロック・サイズの値に 8192 を指定します。

ブロック・サイズが足りない場合は、Discoverer カタログをインストールしようとしたときに、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
oracle.dss.d4o.administration.D4OInstallationException: D4O-1125 インストール後の検証に失敗しました。すべての Discoverer カタログ・オブジェクトはインストールされていません。
<xx> 件必要ですが、<yy> 件が見つかりました。
```

この <xx> は、予期されたオブジェクト数を表し、<yy> は検出されたオブジェクト数を表します。このエラー・メッセージは、Discoverer カタログの作成中に、最大許容値を超えるキー・サイズを使用した索引を作成しようとしたことを示します。キー値は複数のブロックにまたがることできないため、索引キー・サイズはデータベースまたは表領域のブロック・サイズ値によって制限されます。

ヒント: 表領域およびデータベースのブロック・サイズの詳細は、データベース管理者に問い合わせてください。

### 6.2.3 Discoverer カタログのアンインストール方法

カタログをアンインストールすると、D4OSYS ユーザーと D4OPUB ロールがデータベースから削除されます。この結果、ワークブック、保存済選択、および Discoverer Plus OLAP で作成されたその他のオブジェクトもすべて削除されます。これらのオブジェクトを保存する場合は、アンインストールする前に Discoverer カタログをエクスポートします。

Discoverer カタログをアンインストールする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください)。
2. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「アンインストール」をクリックして「カタログのアンインストール」ページを表示します。
4. 「カタログのアンインストール」ページで、データベースのホスト名、ポート番号および SID、DBA ユーザー名とパスワード、D4OSYS パスワードを入力します。
5. 「OK」をクリックします。別のページが表示され、Discoverer カタログがアンインストールされることが警告されます。「OK」をクリックし、アンインストール処理を完了します。

### 6.2.4 Discoverer カタログのエクスポート方法

バックアップを実行するとき、または新規バージョンに移行するときは、Discoverer カタログの全コンテンツをエクスポートできます。エクスポート・ファイルのフォーマットは PXIF (Persistence XML Interchange File) です。エクスポートされた XML ファイルには、フォルダ構成、オブジェクト定義、プロパティおよび権限に関する情報が含まれます。エクスポートするときは、Discoverer カタログ全体をエクスポートします。

Discoverer カタログをエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください)。
2. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「管理」をクリックして、Discoverer カタログを管理するためにログイン・ページを表示します。
4. 「ログイン」ページで、データベースのホスト名、ポート番号、SID、および D4OSYS パスワードを入力します。
5. 「ログイン」をクリックして「カタログの管理」ページを表示します。
6. 「カタログのエクスポート」をクリックして、「ファイルのダウンロード」ダイアログを表示します。

7. 「ファイルのダウンロード」ダイアログで「保存」をクリックし、「名前を付けて保存」ダイアログを表示します。
8. 「名前を付けて保存」ダイアログでエクスポート・ファイルの保存場所とファイル名を指定し、「保存」をクリックします。

## 6.2.5 Discoverer カタログのインポート方法

Discoverer カタログの新規バージョンに移行するとき、またはバックアップからリストアするときは、カタログをインポートできます。カタログのインポート時には次の点に注意してください。

- Discoverer カタログまたは BI Beans カタログのエクスポートによって作成されたファイルからのみインポートできます。
- インポート処理では、新規オブジェクトが追加され、同じ名前の既存オブジェクトは上書きされます。
- エクスポート・ファイルとインポートされる Discoverer カタログのオブジェクトには、同じ OLAP スキーマおよびメタデータに対するアクセス権が設定されている必要があります。
- エクスポート・ファイルの全コンテンツをインポートします。エクスポート・カタログで承認された同じユーザーがターゲット・カタログで承認されていることを前提としています。オブジェクト定義はインポートしますが、ユーザー定義はインポートしません。したがって、ターゲット・カタログの使用が承認されていないユーザーが所有するオブジェクトが含まれているファイルからインポートした場合、そのユーザーのオブジェクトはインポートされません。

ファイルから Discoverer カタログをインポートする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「管理」をクリックして、Discoverer カタログを管理するためにログイン・ページを表示します。
4. 「ログイン」ページで、データベースのホスト名、ポート番号、SID、および D4OSYS パスワードを入力します。
5. 「ログイン」をクリックして「カタログの管理」ページを表示します。
6. 「カタログのインポート」をクリックして「カタログのインポート」ページを表示します。
7. 「カタログのインポート」ページで、エクスポート・ファイルのファイル名を指定します。
8. 「インポート」をクリックして、エクスポート・ファイルのコンテンツをインポートします。

## 6.3 Discoverer カタログに対する承認ユーザーとロールの管理方法

Discoverer カタログに対してユーザーとロールを承認するときは、新規のユーザーまたはロールを作成しません。かわりに、既存のデータベース・ユーザーとロールに対して Discoverer カタログへのアクセスを承認します。承認ユーザーは、自分のデータベース・ユーザー名を使用して Discoverer Plus OLAP にログインします。Application Server Control を使用して Discoverer カタログに対してユーザーとロールを承認すると、そのユーザーとロールには、D4OPUB ロールが自動的に割り当てられます。

### 6.3.1 Discoverer カタログのフォルダ構造の特性

承認されたユーザーとロールは、Discoverer カタログの既存のフォルダ構造内にフォルダを作成できます（Discoverer Plus OLAP を使用）。フォルダ構造には、次の特性があります。

- フォルダ構造は、Discoverer カタログのインストール時に自動的に作成されます。

- 各ユーザーとロールのフォルダは、そのユーザーとロールが承認されると、構造内に自動的に作成されます。
- フォルダ構造は、ユーザーが独自のオブジェクトを迅速に格納および検索できるように設計されていますが、オブジェクトの共有も可能です。

### 6.3.2 構造内のフォルダ

Discoverer カタログの構造は、1つのルート・フォルダとそれに含まれる次のいくつかのメイン・フォルダで構成されます。

- **ユーザー** : ユーザー・フォルダには、Discoverer Plus OLAP の使用が承認されている各ユーザーまたはロールのサブフォルダが含まれ、そのユーザーまたはロールのプライベート・オブジェクトの格納に使用されます。このサブフォルダの名前は、全大文字表記のユーザー名またはロール名です。最初は、各ユーザーとロールのサブフォルダに他のサブフォルダは含まれていませんが、ユーザーは Discoverer Plus OLAP を使用し、ニーズにあわせてサブフォルダを作成できます。各ユーザーまたはロールには、自分のサブフォルダに対する書き込み権限があります。D4OSYS ユーザーには、ユーザー・フォルダとそのすべてのサブフォルダに対する完全制御権限があります。他のユーザーまたはロールには、自分以外のユーザーまたはロールのサブフォルダに対する権限はありません。
- **共有** : 共有フォルダ内のサブフォルダでは、Discoverer Plus OLAP のユーザー間でオブジェクトを共有できます。共有フォルダには、Discoverer Plus OLAP の使用が承認されている各ユーザーまたはロールのサブフォルダが含まれます。最初は、各ユーザーとロールのサブフォルダに他のサブフォルダは含まれていません。ユーザーは自分のサブフォルダに対しては完全制御権限があるため、Discoverer Plus OLAP を使用し、ニーズにあわせてサブフォルダを作成できます。

各ユーザーとロールには、共有フォルダの下にある他のすべてのサブフォルダに対するリスト表示権限があります。これは、D4OPUB ロールにリスト表示権限があり、すべての Discoverer Plus OLAP ユーザーに D4OPUB ロールが設定されているためです。ユーザーは、そのユーザーまたはロールの共有サブフォルダ内にあるサブフォルダに対する読取り権限または書き込み権限を、他のユーザーとロールに付与できます。D4OSYS ユーザーには、共有フォルダとそのすべてのサブフォルダに対する完全制御権限もあります。

### 6.3.3 オブジェクトおよびフォルダに対する権限のタイプ

次のリストで、Discoverer カタログ内のオブジェクトおよびフォルダに対して使用可能な権限について説明します。ユーザーには、特定のオブジェクトおよびフォルダに対する権限もないことに注意してください。

- **フォルダに追加** : フォルダのコンテンツの表示、フォルダとその中のオブジェクトのオープン、新規フォルダまたはオブジェクトの作成が許可されます（フォルダにのみ適用）。
- **完全制御** : フォルダまたはオブジェクトに対する権限の変更、およびフォルダまたはオブジェクトの作成または変更が許可されます。
- **リスト表示** : フォルダのコンテンツの表示が許可されます（フォルダにのみ適用）。
- **読取り** : フォルダまたはオブジェクトのオープンが許可されます。
- **書き込み** : フォルダまたはオブジェクトの作成、削除または変更が許可されます。

権限は累積方式です。つまり、上位レベルの権限は、リスト内で下位の権限の制御を継承します。たとえば、書き込み権限は、読取り、リスト表示などの制御を継承します。

特定の権限が適用可能でない場合は、リスト内で次の下位の権限が取得されます。たとえば、あるフォルダに対する書き込み権限があり、Sam というユーザーには、そのフォルダに対するリスト表示権限（フォルダにのみ適用）があるとした場合、そのフォルダにオブジェクトを作成したとします。ユーザー Sam は、リスト表示権限の下位の権限を取得しますが、権限はないため、オブジェクトを参照することもできません。

### 6.3.4 D4OSYS ユーザーで権限を管理する方法

エンド・ユーザーには、自分の /Shared/<user-name> フォルダおよび /Shared/<role-name> フォルダ（そのロールが割り当てられている場合）内のすべてのフォルダとオブジェクトに対する完全制御権限があります。D4OSYS ユーザーには、/Shared フォルダと /Users フォルダ、およびそのすべてのサブフォルダとオブジェクトに対する完全制御権限があります。

D4OSYS ユーザーは、Discoverer カタログのインストール時にすべてのフォルダおよびオブジェクトに割り当てられたデフォルトの権限を変更できますが、このような処理の実行はお勧めしません。同様に、ユーザーは、完全制御権限を利用して、D4OSYS ユーザーの権限を縮小できます。このような処理は、D4OSYS ユーザーがユーザーのオブジェクトをバックアップできなくなるため、実行しないようにしてください。

### 6.3.5 ユーザーによる Discoverer Plus OLAP の使用が可能であることを確認する方法

ユーザーが Discoverer Plus OLAP を実行するには、そのユーザーが次の基準を満たしている必要があります。

- Discoverer カタログがインストールされているデータベースにアカウントがあること。
- D4OPUB ロールが割り当てられていること。つまり、そのデータベースの Discoverer Plus OLAP の使用が承認されていること。詳細は、[第 6.3.6 項「Discoverer カタログに対するユーザーとロールのアクセス権を承認する方法」](#)を参照してください。
- ユーザーが必要とする OLAP メジャーの使用が承認されていること。この場合、ユーザーは次の基準を満たしている必要があります。
  - OLAP\_USER が割り当てられていること。このロールは、D4OPUB ロールによって継承されます。
  - OLAP データに対するアクセス権があること。これは Oracle OLAP データベース管理者によって制御されます。

**注意：** Oracle E-Business Suite セキュリティで Discoverer Plus OLAP は使用できません。

さらに、Application Server Control の Discoverer 一般構成ページにある **Discoverer Plus および Discoverer Viewer でのプライベート接続の定義をユーザーに許可する** チェック・ボックスが選択解除されていないことを確認する必要があります。このボックスの選択が解除されている場合、プライベート接続は使用できません。Discoverer Plus OLAP にはプライベート接続が必要です。詳細は、[第 6.3.8 項「OLAP データへのアクセス時にプライベート接続またはパブリック接続を使用する方法」](#)を参照してください。

エンド・ユーザーに役立つ情報の詳細は、[第 6.5 項「エンド・ユーザーへの伝達事項」](#)を参照してください。

### 6.3.6 Discoverer カタログに対するユーザーとロールのアクセス権を承認する方法

ユーザーとロールに対して、特定のデータベースの Discoverer Plus OLAP へのログインを承認します。ユーザーまたはロールを直接承認すると、そのユーザーまたはロールに D4OPUB ロールが即時に割り当てられ、ユーザー・フォルダおよび共有フォルダに、適切な権限が設定されたフォルダが作成されます。別のロールを介して D4OPUB ロールを間接的に割り当てた場合、ユーザーとフォルダは、ユーザーが次回接続したときに Discoverer カタログに追加されます。

ユーザーとロールに Discoverer カタログへのアクセスを承認する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「管理」をクリックして、Discoverer カタログを管理するためにログイン・ページを表示します。

4. 「ログイン」ページで、データベースのホスト名、ポート番号、SID、および D4OSYS パスワードを入力します。
5. 「ユーザーとロールの承認」をクリックして、ユーザーの承認ページを表示します。
6. 「選択可能なユーザー / ロール」リストで、承認するユーザーまたはロールを 1 つ以上選択します。
7. 「移動」をクリックして、「選択可能なユーザー / ロール」リストから選択したアイテムを「選択済ユーザー / ロール」リストに移動します。
8. 「適用」をクリックして、ユーザーまたはロールに Discoverer カタログへのアクセス権を承認します。

### 6.3.7 Discoverer カタログに対するユーザーまたはロールのアクセス権を取り消す方法

アクセス権を取り消すときは、次の手順を実行します。

- D4OPUB ロールがそのユーザーまたはロールから取り消されます。
- そのユーザーまたはロールに割り当てられているすべての権限が削除されます。
- ユーザー関連のすべてのプロパティ（作成日や作成者など）が D4OSYS ユーザーを示すように更新されます。取り消されるユーザーまたはロールが作成したオブジェクトは削除されません。

D4OSYS ユーザーのアクセス権は取り消すことができません。D4OSYS ユーザーが削除されるのは、Discoverer カタログがアンインストールされる場合のみです。

ユーザーまたはロールのアクセス権を取り消す手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. 「管理」をクリックして「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「管理」をクリックして、Discoverer カタログを管理するためにログイン・ページを表示します。
4. 「ログイン」ページで、データベースのホスト名、ポート番号、SID、および D4OSYS パスワードを入力します。
5. 「ユーザーとロールの承認」をクリックして、ユーザーの承認ページを表示します。
6. 「選択済ユーザー / ロール」リストで、アクセス権を取り消すユーザーまたはロールを 1 つ以上選択します。
7. 「削除」をクリックして、「選択済ユーザー / ロール」リストから選択したアイテムを「選択可能なユーザー / ロール」リストに移動します。
8. 「適用」をクリックして、Discoverer カタログに対するユーザーまたはロールのアクセス権を取り消します。

### 6.3.8 OLAP データへのアクセス時にプライベート接続またはパブリック接続を使用する方法

ユーザーが Discoverer コンポーネントに接続するときは、パブリック接続またはプライベート接続を使用します。またエンド・ユーザーは、接続を使用または作成しなくても直接ログインできます。次のリストで、OLAP データへの接続時にユーザーがパブリック接続およびプライベート接続を使用する方法を説明します。

- プライベート接続：ユーザーは、Discoverer Plus OLAP への接続時にプライベート接続を使用する必要があります。また、OLAP データにアクセスするために Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider に接続するときもプライベート接続を使用できます。プライベート接続では、ユーザーは Single Sign-On を使用しても使用しなくても構いません。

Single Sign-On が有効な状態で作成されていないプライベート接続の場合、ユーザーはパスワードを再入力する必要があります。

- パブリック接続: Application Server Control を使用し、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider を介して OLAP データにアクセスするユーザー用にパブリック接続を作成できます。

パブリック接続およびプライベート接続の詳細は、第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」を参照してください。

## 6.4 Discoverer Plus OLAP のロック・アンド・フィールドをカスタマイズする方法

Discoverer Plus OLAP のロック・アンド・フィールドは、Application Server Control を使用してカスタマイズします。Discoverer Plus Relational を構成する場合と同じページを使用します。Discoverer Plus OLAP の次のアイテムを構成できます。

- Discoverer Plus OLAP のツールバーの右側に小さいアイコンで表示されるロゴ。自社のロゴを指定できます。
- Discoverer Plus OLAP のロック・アンド・フィールド。
- Discoverer Plus OLAP を起動するための Java Plug-in。

Discoverer Plus OLAP のこれらのアイテムを構成する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください)。
2. 「Discoverer Plus」コンポーネントをクリックして「Discoverer Plus」ページを表示します。
3. 「ロゴ」、「ロック・アンド・フィールド」または「Java Plug-in」をクリックして、「Discoverer Plus 構成」ページを表示します。
4. このページのフィールドを使用して、構成設定を指定します。
5. 「OK」をクリックして変更を適用します。

## 6.5 エンド・ユーザーへの伝達事項

Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP を構成した後は、Discoverer Plus OLAP を使用するための次の情報をユーザーが認識していることを確認する必要があります。

- Discoverer の接続ページへの URL。ユーザーは、このページでユーザー名やパスワードなどの情報を入力して、Discoverer Plus OLAP に接続します。

Discoverer の接続ページに関する詳細は、第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」を参照してください。

- Discoverer の接続ページの「データベース」フィールドにユーザーが入力する情報。次の文字列を入力する必要があります: <host>:<port>:<SID>
- ワークシート・コンシューマが Discoverer Plus OLAP からエクスポートしたワークシートを表示するときに必要とする Microsoft Excel のバージョン。ワークシート・コンシューマは Excel 2000 以上を使用する必要があります。
- 構成診断ユーティリティに関する情報。Discoverer Plus OLAP の実行時にデータベースへの接続で問題が発生した場合。このユーティリティの詳細は、第 6.6 項「Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ」を参照してください。

Discoverer カタログに関するエンド・ユーザー向けの情報は、Discoverer Plus OLAP ヘルプ・システムにあります。



## 6.6 Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ

Discoverer Plus OLAP には、OLAP 環境の構成を検査してレポートを作成するユーティリティがあります。このユーティリティの目的は、エンド・ユーザーが Discoverer Plus OLAP を実行するときに発生する問題を、管理者およびオラクル社カスタマ・サポート・センターが診断しやすいように、構成の情報を収集することにあります。

ユーザーが診断ユーティリティを実行する方法の詳細は、Discoverer Plus OLAP のヘルプを参照してください。ユーザーは、エラー・ダイアログ内のボタンをクリックして、メニュー・オプションを選択するのみです。表示されるダイアログ・ボックスでは、ユーティリティからの基本出力が提供され、エンド・ユーザーは、さらに詳細な出力を提供する別のテストを実行できます。ヘルプ項目によって、ユーザーは、支援が必要な場合は、出力をデータベース管理者と共有するように指示されます。

### 6.6.1 ユーティリティからの出力のフォーマット

ユーティリティでは、次のリストに示すように、2つのフォーマットの出力が生成されます。

- ユーザーがユーティリティを実行するダイアログに直接書き込まれる出力。詳細は、[第 6.6.2 項「ユーティリティからの出力の説明」](#)を参照してください。
- XML ファイル: ユーティリティを実行し、ダイアログで結果を表示した後、ユーザーはこのファイルに自由に名前を付けて格納します。ファイルには、ダイアログに表示された出力が含まれます。その内容は、様々なコンポーネントのバージョン情報、エラーの詳細なスタック・トレース、およびデータベースで検出されたフォルダ、メジャー、ディメンションのリスト (メタデータ) などです。このファイルを電子メールの添付ファイルとしてオラクル社カスタマ・サポート・センターに送信すると、問題を診断する上での助言が得られます。

### 6.6.2 ユーティリティからの出力の説明

次の各ラベルでは、ユーティリティによってダイアログおよび XML ファイルに表示されるアイテムについて記述します。ラベルは、ユーティリティが実行する様々なチェックの順にリストされています。多くのアイテムがバージョン番号に関係します。固有のバージョン番号の情報は、Discoverer のインストール時に使用したインストール・ガイドを参照してください。

#### 6.6.2.1 JDK のバージョン

使用されている JDK のバージョン番号。例: 1.4.2。

#### 6.6.2.2 BI Beans の内部バージョン

インストールされている BI Beans の内部バージョン番号。

#### 6.6.2.3 Discoverer Plus OLAP のバージョン

インストールされている Discoverer Server の内部バージョン番号。

#### 6.6.2.4 Discoverer のバージョン

インストールされている Discoverer Plus コンポーネントの内部バージョン番号。

#### 6.6.2.5 データベースに接続

ユーティリティによってデータベース接続を確立できたかどうかを示します。接続が確立された場合、結果は「成功」です。それ以外の場合、結果は「失敗」です。ユーティリティでデータベースに接続できない場合は、次のことを実行できます。

- ダイアログに表示されるエラーで詳細を検証します。
- すべての接続情報 (ユーザー名やパスワードなど) が正しいことを確認します。
- データベースが稼働中で接続を受け入れていることを確認します。

### 6.6.2.6 JDBC ドライバのバージョン

使用されている JDBC ドライバのバージョン。

### 6.6.2.7 JDBC JAR ファイルの場所

JDBC ドライバの JAR ファイルが含まれているディレクトリのフルパス名。

### 6.6.2.8 データベースのバージョン

Discoverer Plus OLAP が接続している Oracle データベースのバージョン。

### 6.6.2.9 OLAP カタログのバージョン、OLAP AW エンジンのバージョン、OLAP API サーバーのバージョン

様々な OLAP コンポーネントのバージョン。戻される値は、データベースのパッチ・リリースが原因で、「データベースのバージョン」と正確に一致しない可能性があります。特定の状況では、これらのバージョンは「N/A」で戻される場合がありますが、これは解決する必要のない問題です。

### 6.6.2.10 BI Beans カタログのバージョン

インストールされている BI Beans カタログの内部バージョン。BI Beans カタログがインストールされていない場合、この値は、「NA; *schema-name* にインストールされていません」です。

### 6.6.2.11 Discoverer カタログのバージョン

インストールされている Discoverer カタログの内部バージョン。Discoverer カタログがインストールされていない場合、この値は、「NA; *schema-name* にインストールされていません」です。Discoverer Plus OLAP では、Discoverer カタログがインストールされている必要があります。

### 6.6.2.12 Discoverer Plus OLAP に対する承認

ユーティリティを実行しているユーザーが Discoverer Plus OLAP の実行を承認されているかどうかを示します。

### 6.6.2.13 OLAP API JAR ファイルのバージョン

OLAP API クライアント JAR ファイルのバージョン。

### 6.6.2.14 OLAP API JAR ファイルの場所

OLAP API クライアント JAR ファイルが含まれているユーザーのインストールにあるディレクトリへのフルパス。

### 6.6.2.15 OLAP API メタデータのロード

ユーティリティがデータベースからメタデータをロードできたかどうかを示します。メタデータがロードされた場合、結果は「成功」です。それ以外の場合、結果は「失敗」です。

データベース管理者は、ビジネス・インテリジェンス・アプリケーションをサポートするために、Oracle データベースに適切なメタデータを定義する必要があります。OLAP メタデータの定義の詳細は、『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』または『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

メタデータがロードされなかった場合は、メタデータが正しいことを確認してください。問題が解決しない場合は、Oracle Technology Network の OLAP フォーラムを参照するか、またはオラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

### 6.6.2.16 メタデータ・フォルダ数

データベースのメタデータで検出されたフォルダ数。



### 6.6.2.17 メタデータ・メジャー数

データベースのメタデータで検出されたメジャー数。

### 6.6.2.18 メタデータ・ディメンション数

データベースのメタデータで検出されたディメンション数。

### 6.6.2.19 メタデータの説明

データベースの全メタデータの詳細説明。

### 6.6.2.20 エラー・メッセージの説明

エラーが発生した場合は、そのエラーに関する簡単な情報が、ダイアログの出力の適切な場所に表示されます。たとえば、ユーザーが名前またはパスワードを誤って入力した場合、この結果に対する情報は「データベースに接続」ラベルの直後に記述され、その後の出力は含まれません。出力の XML ファイルには、ダイアログ出力で提供されるより多くの詳細情報が含まれます。

## 6.7 Discoverer Plus OLAP サードプレットの URL パラメータ

表 6-1 「Discoverer Plus OLAP のパラメータ」では、Discoverer Plus OLAP の起動に使用できる URL パラメータについて説明します。

**注意:** URL パラメータを使用した Discoverer Plus OLAP の起動の例は、第 13.5.6 項「例 6: Discoverer Plus OLAP の起動」を参照してください。

表 6-1 Discoverer Plus OLAP のパラメータ

パラメータおよび値	説明	例
autoconnect=yes または no	すべてのパラメータが指定されているときに自動的に接続するかどうかを指定します。yes がデフォルトです。	autoconnect=no
brandimage=<logo file name>	Discoverer Plus OLAP 画面の右上隅にロゴを表示することを指定します。 このファイルの参照は、次の 2 つの方法で指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ サーバー上の d4o.jar ファイルの位置に対する相対的なパスの使用</li> <li>■ 絶対パスの使用</li> </ul>	brandimage=http://server.com:7777/discoverer/common/mylogo.gif

表 6-1 Discoverer Plus OLAP のパラメータ (続き)

パラメータおよび値	説明	例
framedisplaystyle=separate または embedded	Discoverer メイン・ウィンドウの起動方法を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Discoverer のメイン・ウィンドウを、ブラウザ (つまり Discoverer 接続リスト) とは別のフレームとして起動するには、'separate' を使用します。ブラウザ・ウィンドウには Discoverer の画像が含まれているため、Discoverer の使用中はブラウザ・ウィンドウを開いたままにしておく必要があります。</li> <li>Discoverer のメイン・ウィンドウを、現行のブラウザ内で起動するには、'embedded' を使用します。</li> </ul>	framedisplaystyle=separate
helpset=<path>/<locale>/<HS file>	デフォルトの Discoverer Plus OLAP ヘルプ・セットと異なるヘルプ・セットの位置を指定します。 <p>&lt;path&gt; = ヘルプ・セットが含まれるディレクトリ</p> <p>&lt;locale&gt; = 2 文字のロケール</p> <p>&lt;HS file&gt; = ヘルプ・セットのファイル名 (例: myhelp.hs)</p> <p><b>注意:</b> ヘルプ・セットは標準の 2 文字のロケールで名前が設定されたサブディレクトリに存在する必要があります。</p>	helpset=mypath/en/myhelp.hs
locale=<language[_country][_variant]>	Discoverer Plus OLAP で使用する言語を指定します。オプションで国およびバリエーション・コードも指定できます。このパラメータにより、エンド・ユーザーのクライアント・マシンのブラウザ言語設定がオーバーライドされます。 <p><b>ヒント:</b> 言語、国およびバリエーション・コードの指定には、ISO コードを使用します。</p>	locale=es_ES この例では、言語はスペイン語で国はスペインです。
loglevel=<type>	エンド・ユーザーに表示されるログ・メッセージのレベルを指定します。<type> の値の説明は、次のとおりです。 <p>none = メッセージなし (デフォルト)</p> <p>error = エラー・メッセージ</p> <p>warning = 警告メッセージ</p> <p>informational = 情報メッセージ</p> <p>trace = トレース・メッセージ</p>	loglevel=error

表 6-1 Discoverer Plus OLAP のパラメータ (続き)

パラメータおよび値	説明	例
lookandfeelname=<type>	ブラウザのルック・アンド・フィールを指定します。<type> の値は、system、metal、windows、motif、oracle および plastic です。  LAF の完全修飾 Java クラスを使用して、カスタム LAF を指定することもできます (例: javax.swing.plaf.metal.MetalLookAndFeel)。Discoverer の中間層でカスタム LAF を指定する方法の詳細は、第 9.1.4 項「Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法」を参照してください。	lookandfeelname=system
password=<string>	Discoverer Plus OLAP への接続に使用するユーザー名の認証を行うためのデータベース・パスワードを指定します。  <b>注意:</b> ユーザー名、パスワード、ホスト名、ポート番号および SID を指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは、不足しているログイン情報の入力を要求されます。	password=37282732
sheet=<worksheetname>	デフォルトで開くワークシートの名前を指定します。  <b>注意:</b> URL で Sheet パラメータが 2 度以上使用されている場合、Discoverer Plus OLAP は最後のパラメータを使用します。	sheet=Sales+Detail+Sheet
username=<database user name>	Discoverer Plus OLAP への接続に使用するデータベース・ユーザー名を指定します。  <b>注意:</b> ユーザー名、パスワード、ホスト名、ポート番号および SID を指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは、不足しているログイン情報の入力を要求されます。	username=video_user
windowheight=<number of pixels>	Discoverer Plus OLAP アプリケーション・フレームの高さをピクセルで指定します。このパラメータを使用しない場合、Discoverer Plus OLAP はデフォルト値を使用します。	windowheight=600
windowwidth=<number of pixels>	Discoverer Plus OLAP アプリケーション・フレームの幅をピクセルで指定します。このパラメータを使用しない場合、Discoverer Plus OLAP はデフォルト値を使用します。	windowwidth=800
workbookname=<workbookname>	ユーザーに対してデフォルトで表示されるワークブックの名前を指定します。	workbookname=Performance+Tracker

## 6.8 Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ

Discoverer Viewer で URL パラメータを使用して OLAP ワークシートにアクセスする場合、通常は、リレーショナル・ワークシートで使用する URL パラメータと同じものを使用できません (詳細は、第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」および第 13.9 項「Discoverer Viewer 固有の URL パラメータのリスト」を参照してください)。しかし、Discoverer Viewer で OLAP ワークシートを指定するための URL パラメータは異なります (詳細は、表 6-2「Discoverer Viewer における OLAP ワークシートのパラメータ」を参照してください)。

**表 6-2 Discoverer Viewer における OLAP ワークシートのパラメータ**

パラメータおよび値	説明	例
worksheetname=<name of folder, name of workbook, name of worksheet>	<p>開くワークシートが格納されているフォルダの場所、ワークブック名およびワークシート名を指定します。</p> <p>フォルダ名、ワークブック名およびワークシート名の先頭には、スラッシュ (/) (または URL エンコーディングされたスラッシュ文字値 '%2F') を付ける必要があります。たとえば、Discoverer カタログの Users/Jchan/ 領域に格納されている Workbook A ワークブックの Export 1 ワークシートを指定するには、</p> <p>「&amp;worksheetname=Users/Jchan/Workbook+A/Export+1」と入力します。</p> <p><b>注意:</b> ルート・フォルダ名の先頭にはスラッシュを付けません。たとえば、「&amp;worksheetname=/Users」と指定するのではなく、「&amp;worksheetname=Users」と指定します。</p> <p>たとえば、Discoverer カタログの Users/Jchan/ フォルダに格納されている Workbook A ワークブックの Export 1 ワークシートを開くには、次のように入力します。</p> <p>http://&lt;host.domain&gt;:&lt;HTTP port&gt;/discoverer/viewer?cn=cf_a102&amp;worksheetname=Users/Jchan/Workbook+A/Export+1</p>	worksheetname=Users/Jchan/Workbook+A/Export+1

**注意:** URL パラメータを使用した Discoverer Viewer の起動の例は、第 13.5.9 項「例 9: Discoverer Viewer での OLAP ワークシートの表示」を参照してください。

---

---

## 複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「[Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成](#)」を参照してください。

この章では、複数のマシン環境での OracleBI Discoverer の構成方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 7.1 項「[複数マシンの Discoverer 環境](#)」
- 第 7.2 項「[Oracle Business Intelligence インストール](#)」
- 第 7.3 項「[OracleAS Web Cache を使用して OracleBI Discoverer のロード・バランシングを行う際の前提条件](#)」
- 第 7.4 項「[OracleAS Web Cache Manager を使用した OracleBI Discoverer のロード・バランシングの構成](#)」
- 第 7.5 項「[OracleAS Web Cache を使用したロード・バランシングとともに OracleBI Discoverer をデプロイする方法](#)」
- 第 7.6 項「[複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント](#)」
- 第 7.7 項「[複数のマシン環境での tnsnames.ora ファイルの構成](#)」

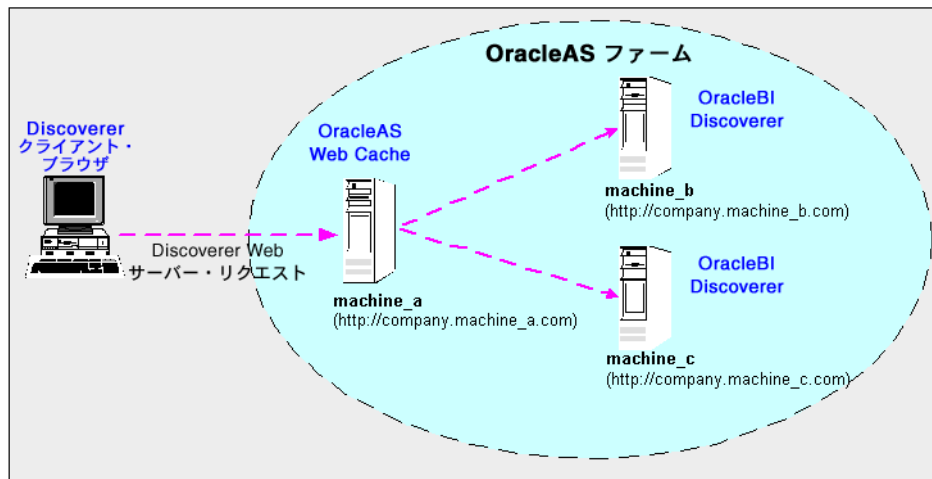
## 7.1 複数マシンの Discoverer 環境

複数マシンの Discoverer 環境とは、OracleBI Discoverer インストールを実行するマシンが 2 台以上ある Discoverer デプロイメントです。

典型的な複数マシンの Discoverer 環境では、市販の標準的なハードウェア・ルーターを使用して Discoverer Web トラフィックを複数の Discoverer 中間層マシンに分散します。これは、一般にロード・バランシングと呼ばれます。

ただし、OracleAS Web Cache をプロキシ・サーバーとして使用して Discoverer Web トラフィックを他の Discoverer 中間層マシンに分散する方法で、ロード・バランシングを行うこともできます。

ロード・バランシングによって、OracleBI Discoverer のパフォーマンス、スケーラビリティおよび可用性が向上します。



この図では、machine\_a (URL [http://company.machine\\_a.com](http://company.machine_a.com)) 上の OracleAS Web Cache によって、Discoverer Web トラフィックが machine\_b ([http://company.machine\\_b.com](http://company.machine_b.com)) および machine\_c ([http://company.machine\\_c.com](http://company.machine_c.com)) に分散されます。つまり、複数の Discoverer 中間層マシンで単一の Discoverer の URL を使用できます。

OracleAS Web Cache を使用したロード・バランシングの詳細は、[第 7.5.2 項「OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法」](#)を参照してください。

### 注意

- 複数のマシンの環境には、この他に次の 2 つのタイプがあります。
  - 可用性の高いロード・バランシング - OracleAS Web Cache サーバーの障害検出およびフェイルオーバーのサポートとともに、ロード・バランシングを実現する構成です。高可用性の実装の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
  - 非ロード・バランシング - 原則的に独立して稼働する、接続されていない複数の OracleBI Discoverer 中間層マシンによる構成です。つまり、各マシンが異なる Discoverer の URL を持ちます。たとえば、1 台のマシンに Discoverer Plus をデプロイし、別のマシンに Discoverer Viewer をデプロイするなどです。
- ロード・バランシングを使用して複数のマシンに OracleBI Discoverer をデプロイする場合、各マシンの他の OracleAS コンポーネントにもロード・バランシングが提供されます。たとえば、OracleAS Portal をロード・バランシングでデプロイできます。
- ロード・バランシングを使用して複数のマシンに OracleBI Discoverer をデプロイする場合、エンド・ユーザーに対する Discoverer インタフェースの一貫性を考慮して、必ず各マシンを同じ構成設定（ユーザー・インタフェースのカスタマイズやタイムアウトなど）にします。

## 7.2 Oracle Business Intelligence インストール

OracleBI Discoverer を複数のマシンにデプロイするには、OracleBI Discoverer インストールについての基本的な知識が必要です（Oracle Business Intelligence インストールについてすでに熟知されている方は、[第 7.3 項「OracleAS Web Cache を使用して OracleBI Discoverer のロード・バランシングを行う際の前提条件」](#)に進んでください）。

OracleBI Discoverer インストールには、次のいずれかの方式を使用できます。

- スタンドアロン Oracle Business Intelligence インストール
- OracleAS Infrastructure に関連付けられた Oracle Business Intelligence インストール（Discoverer の OracleAS Business Intelligence and Forms タイプ・インストールなど）

詳細は、[第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)を参照してください。

Oracle Business Intelligence の標準インストールには、次のものが含まれています。

- OracleAS 中間層コンポーネントに必要な、基礎となるデータベース、ディレクトリ・サーバーおよび管理サーバーを含む、1つの OracleAS Infrastructure インストール。  
**注意:** OracleAS ファームごとに1つの OracleAS Infrastructure インストールがあります。
- マシンごとに、1つ以上の Oracle Business Intelligence インストール。
- （オプション）1台のマシン上に、OracleAS Web Cache をプロキシ・マシンとして使用するのための J2EE and Web Cache タイプの OracleAS インストール（市販の標準ハードウェア・ルーターまたはロード・バランサを使用しない場合）。

中間層インストールは1台のマシン上に複数存在できます。たとえば、1つの OracleAS Infrastructure インストールと1つの Oracle Business Intelligence スタンドアロン CD インストールを同じマシンの別の Oracle ホームにインストールできます。詳細は、[第 7.2.1 項「1台のマシンへの Discoverer のインストール」](#)を参照してください。

### 注意

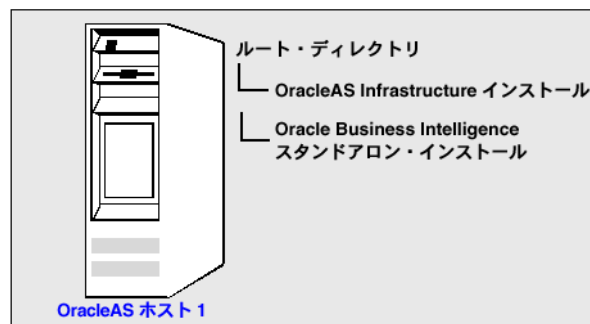
- OracleAS Infrastructure は1台のマシンに1つのみです。
- Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストールは1台のマシンに複数保持できます。

### 7.2.1 1台のマシンへの Discoverer のインストール

1台のマシンに Discoverer がデプロイされている場合、Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストールは、それ自体の Oracle ホームに配置されます。

Oracle Business Intelligence インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合、Infrastructure インストールは、独立した Oracle ホームにインストールされます（次の図を参照してください）。

図 7-1 1台のマシンへの OracleBI Discoverer のインストール



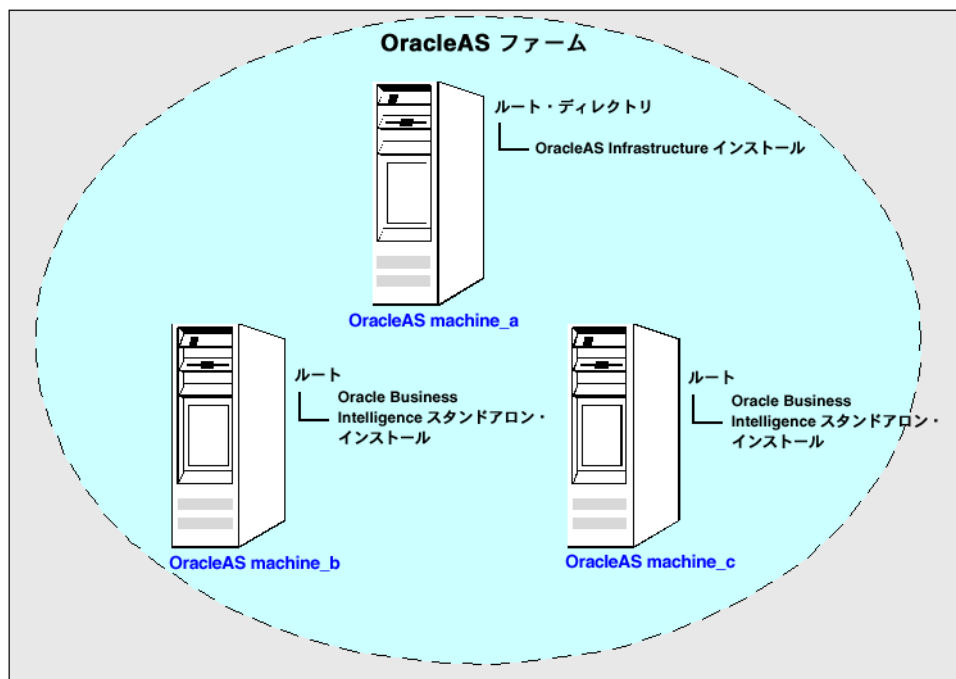
## 7.2.2 複数のマシンへの Discoverer のインストール

複数のマシンに Discoverer がデプロイされている場合は、通常、OracleAS Infrastructure インストールが1台のマシンにインストールされ、他のマシンには1つ以上の Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストールがインストールされます。これらのスタンドアロン・コンポーネントは、通常、1つの OracleAS ファームにリンクされます。

**注意:** OracleAS ファームとは、同一の OracleAS Infrastructure インストールを共有する Oracle インストール (OracleBI インストールなど) の集まりです。

次の図の OracleAS machine\_a には、OracleAS Infrastructure インストールがインストールされます。OracleAS machine\_b および OracleAS machine\_c には、Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストールがインストールされます。これらの3台のマシンは、1つの OracleAS ファームにリンクされます。

図 7-2 複数のマシンへの OracleBI Discoverer のインストール



OracleAS Web Cache をプロキシ・サーバーとして使用し、Discoverer Web サーバー・リクエストを OracleAS ファーム内の他の Discoverer 中間層マシンに分散できます。OracleAS Web Cache を使用したロード・バランシングの提供の詳細は、第 7.5.2 項「OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法」を参照してください。

## 7.2.3 Application Server Control を使用した複数マシンの管理

複数のマシンに Oracle Business Intelligence インストールをインストールする場合は、それらのインストールをまとめて1つの OracleAS ファームにリンクできます。

たとえば、次のようにインストールしたとします。

- ホスト 1 に、1つの OracleAS Infrastructure インストール (例: d:\oracle\infra10\_1\_2 内)
- ホスト 1 に、1つの Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストール (例: d:\oracle\bi\_ias\bi1 内)
- ホスト 2 に、1つの Oracle Business Intelligence スタンドアロン・インストール (例: d:\oracle\bi\_ias\bi2 内)



Application Server Control を使用して OracleAS ファームを管理します。次の画面は、前述のシナリオが Application Server Control でどのように表示されるかを示しています。各マシンが、「スタンドアロン・インスタンス」表の行に表示されます。



### 注意

- Application Server Control を使用した OracleAS ファームの管理の詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください。
- 複数のマシンに OracleBI Discoverer をインストールする場合、Discoverer Preferences コンポーネントは各マシンにインストールされます。ただし、使用されるのは1つの Preferences コンポーネントのみです（詳細は、第 1.8.2.2 項「Discoverer Preferences コンポーネント」および第 7.6 項「複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント」を参照してください）。

## 7.3 OracleAS Web Cache を使用して OracleBI Discoverer のロード・バランシングを行う際の前提条件

OracleAS Web Cache を使用してロード・バランシングを行うように OracleBI Discoverer を構成するには、事前に次のものがインストールされている必要があります。

- 異なる複数のマシン上に、2つ以上の Oracle Business Intelligence インストール
- 1台のマシンにインストールされた OracleAS Web Cache

注意：OracleAS Web Cache は、Oracle Business Intelligence インストールと J2EE and Web Cache タイプの OracleAS インストールの両方に含まれています。

### 注意

- ロード・バランシングを行う OracleBI Discoverer インストールは同一の OracleAS ファーム内に置くことをお勧めします。

## 7.4 OracleAS Web Cache Manager を使用した OracleBI Discoverer のロード・バランシングの構成

OracleAS Web Cache Manager を使用して、複数のマシン環境での OracleBI Discoverer のロード・バランシングを構成できます。たとえば、次のような環境だとします。

- OracleAS ファーム内に 3 台のマシン (machine\_a、machine\_b、machine\_c) があります。
- OracleAS Web Cache は machine\_a で実行されます。
- OracleBI Discoverer は machine\_b および machine\_c で実行されます。

OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成するには、次のような作業が必要です。

- プロキシ・マシンとして指定するマシンを選択し、そのマシン上で OracleAS Web Cache Manager を起動します。
- OracleAS Web Cache Manager の「Origin Servers」ページで、ロード・バランシングの対象とする OracleBI Discoverer 中間層マシンを定義します。詳細は、[第 7.5.2.1 項「オリジナル・サーバーの定義方法」](#)を参照してください。
- OracleAS Web Cache Manager の「OracleAS Web Cache Site to Server Mapping」ページで、OracleAS Web Cache インストールと OracleBI Discoverer インストールの間のロード・バランシング関係を定義します。詳細は、[第 7.5.2.2 項「サイトからサーバーへのマッピングの指定方法」](#)を参照してください。
- OracleAS Web Cache Manager の「Session Binding」ページで、「Default Session Binding」オプションを有効にします。詳細は、[第 7.5.2.3 項「セッション・バインディング値の指定方法」](#)を参照してください。
- OracleAS Web Cache Manager の「Cache Operations」ページで、OracleAS Web Cache を再起動します。

OracleAS Web Cache Manager を使用した OracleBI Discoverer のロード・バランシングの詳細は、[第 7.5.2 項「OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法」](#)を参照してください。

## 7.5 OracleAS Web Cache を使用したロード・バランシングとともに OracleBI Discoverer をデプロイする方法

OracleBI Discoverer をロード・バランシングとともにデプロイすることで、サポートする Discoverer エンド・ユーザーを増やし、Discoverer のパフォーマンスを向上できます。

OracleAS を使用したロード・バランシングとともに OracleBI Discoverer をデプロイする手順は、次のとおりです。

1. OracleAS ファームが作成されていない場合は、Application Server Control を使用して新しいファームを作成します (詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプを参照してください)。
2. Application Server Control を使用して、OracleBI Discoverer インストールをファームへ追加します (詳細は、Application Server Control のヘルプを参照してください)。

ヒント: マシンへのロード・バランシングを試行する前に、マシンから Discoverer を直接実行できることを確認してください。たとえば、machine\_b にインストールされた OracleBI Discoverer をロード・バランシングする場合、Web ブラウザを起動してマシンの Discoverer の URL ([http://machine\\_b:80/discoverer/viewer](http://machine_b:80/discoverer/viewer) など) を入力し、Discoverer が正常に機能するかどうかを確認します。

3. プロキシ・マシンとして指定するマシン上で OracleAS Web Cache Manager を起動します (詳細は、[第 7.5.1 項「OracleAS Web Cache Manager の起動方法」](#)を参照してください)。
4. Discoverer Web サーバー・リクエストを他の Discoverer 中間層マシンに転送するプロキシ・マシンとして機能するように、OracleAS Web Cache Manager を構成します (詳細は、[第 7.5.2 項「OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法」](#)を参照してください)。

5. Discoverer Web トラフィックが正しくルーティングされるか確認します（詳細は、[第 7.5.3 項「OracleAS Web Cache がロード・バランシング用に正しく構成されているかを確認する方法」](#)を参照してください）。
6. (オプション) 単一の中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントをデプロイできません（詳細は、[第 7.6 項「複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください）。
7. (オプション) 各マシンの tnsnames.ora ファイルに、同じデータベース名およびエイリアス情報が含まれていることを確認します（詳細は、[第 7.7 項「複数のマシン環境での tnsnames.ora ファイルの構成」](#)を参照してください）。

## 7.5.1 OracleAS Web Cache Manager の起動方法

マシン上の OracleAS Web Cache を構成および監視するには、そのマシンの OracleAS Web Cache Manager を起動します。たとえば、OracleBI Discoverer Web トラフィックを複数のマシンにルーティングするプロキシ・マシンとしてマシンを構成する場合などです。

OracleAS Web Cache Manager を起動する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動します。
2. OracleAS Web Cache を実行しているマシンの OracleAS Web Cache Manager の URL を、インストールで使用した完全修飾ホスト名およびドメイン名を使用して入力します。

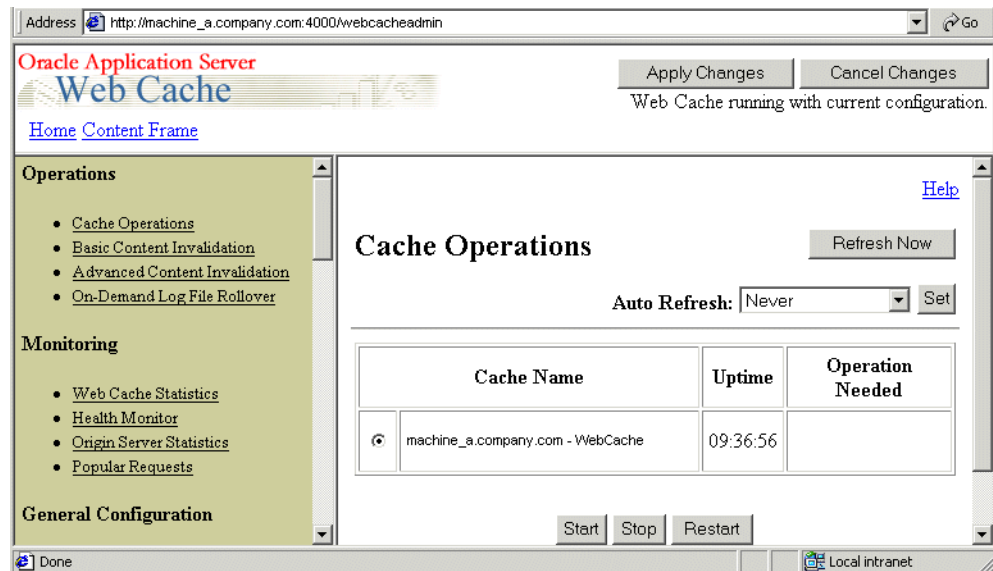
例：

`http://<host.domain>:4000/Webcacheadmin`

注意：OracleAS Web Cache のデフォルト・ポート番号は 4000 です。ポート番号は「OracleAS Ports」ページで確認できます（詳細は、[第 5.8 項「Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法」](#)を参照してください）。

「Enter Network Password」ページが表示されます。

3. OracleAS Web Cache Manager のユーザー名とネットワーク・パスワードを入力し、「OracleAS Web Cache - Cache Operations」ページを表示します。このとき、ユーザー名は、'administrator' または管理者権限を持つユーザー名のいずれかです。



これで、OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成できます（詳細は、[第 7.5.2 項「OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法」](#)を参照してください）。

## 7.5.2 OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する方法

OracleAS Web Cache Manager を使用して、OracleBI Discoverer などの Web アプリケーションのためのロード・バランシングを構成できます。OracleAS Web Cache Manager には、OracleAS Web Cache を様々に構成するためのページがあります。

たとえば、「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」領域内の「Origin Servers」ページでは、Web アプリケーションのロード・バランシングのために使用するマシンを指定できます。

**注意:** 作業を開始する前に、必要なコンポーネントがインストールされているかどうかを確認します（詳細は、第 7.3 項「OracleAS Web Cache を使用して OracleBI Discoverer のロード・バランシングを行う際の前提条件」を参照してください）。

OracleAS Web Cache をロード・バランシング用に構成する手順は、次のとおりです。

1. オリジナル・サーバーを指定します（詳細は、第 7.5.2.1 項「オリジナル・サーバーの定義方法」を参照してください）。
2. サイトからサーバーへのマッピングを指定します（詳細は、第 7.5.2.2 項「サイトからサーバーへのマッピングの指定方法」を参照してください）。
3. セッション・バインディング値を指定します（詳細は、第 7.5.2.3 項「セッション・バインディング値の指定方法」を参照してください）。

### 注意

- ロード・バランシング・マシンの容量値を変更する手順は、次のとおりです。
  - a. 「Origin Servers」ページを表示します。
  - b. 「Select」列で、ロード・バランシングするマシンの隣のラジオ・ボタンを選択します。
  - c. 「Edit Selected」をクリックして、「Edit Application Web Server」ページを表示します。
  - d. 「Capacity」フィールドの値を小さくします。
  - e. 「Submit」をクリックします。
  - f. 「Apply Changes」をクリックします。
  - g. 「Restart」をクリックします。
- OracleAS Web Cache Manager の使用の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

### 7.5.2.1 オリジナル・サーバーの定義方法

オリジナル・サーバーとしてロード・バランシングを行う Oracle Business Intelligence マシンを定義します。

オリジナル・サーバーを定義する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Web Cache Manager を起動します（詳細は、第 7.5.1 項「OracleAS Web Cache Manager の起動方法」を参照してください）。
2. ナビゲータ・ペインの「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」領域で「Origin Servers」リンクを選択し、「Origin Servers」ページを表示します。

Oracle Application Server  
Web Cache

Apply Changes Cancel Changes  
Web Cache running with current configuration.

Home Content Frame

**Ports**

- Listening Ports
- Operations Ports

**Origin Servers, Sites, and Load Balancing**

- Origin Servers
- Site Definitions
- Site to Server Mapping
- Apology Pages
- Session Binding
- Origin Server Wallet

**Rules for Caching, Personalization, and Compression**

- Caching, Personalization, and Compression Rules
- Expiration Policy Definitions
- Session Definitions
- Cookie Definitions

**Origin Servers**

Use this page to configure application Web server or proxy server settings. These settings are required for load balancing, failover, and site-to-server mappings ([Site-to-Server Mappings](#) page).

**Component Dependencies:** Modifying an origin server port number on this page also requires changing the port number in the origin server's configuration.

**Application Web Servers**

Select	Host	Port	Routing	Capacity	Failover Threshold	Ping URL	Ping Interval (seconds)	Protocol
<input type="radio"/>	machine_b.company.com	7778	ENABLED	50	5	/	10	HTTP
<input type="radio"/>	machine_c.company.com	7778	ENABLED	50	5	/	10	HTTP

Edit Selected... Delete Selected... Add...

**注意:** Application Server Control ではなく、OracleAS Web Cache Manager で「Origin Server」リンクを選択します。

「Origin Servers」ページで、ロード・バランシングのために使用する OracleAS マシンを指定および管理します。たとえば、machine\_b と machine\_c にインストールされた OracleBI Discoverer を使用する場合は、「Application Web Servers」表に machine\_b および machine\_c のエントリを追加します。

3. ロード・バランシングを行う OracleBI Discoverer 中間層マシンごとに、次の操作を行います。
  - a. 「Application Web Servers」表の下の「Add」をクリックして、「Add Application Web Server」ページを表示します。

Add Application Web Server - Microsoft Internet Explorer

Help

**Add Application Web Server**

In order for OracleAS Web Cache to forward requests to an application Web server, you must map a Web site to the server in the Site to Server Mapping page ([Origin Servers, Sites and Load Balancing > Site to Server Mapping](#)).

Hostname:

Port:

Routing:  ENABLE  DISABLE

Capacity:

Failover Threshold:

Ping URL:

Ping Interval (seconds):

Protocol:

Submit Cancel

- b. 「Hostname」フィールドに、マシンの完全修飾ホスト名（http://machine\_b.company.com など）を入力します。
- c. 「Port」フィールドに、マシンの Web Cache HTTP/HTTPS リスナー・ポート番号を次のようにして入力します。  
 ヒント：Web Cache HTTP/HTTPS リスナー・ポート番号を確認するには、Oracle Business Intelligence マシンの「OracleAS Ports」ページを表示して、Web Cache HTTP/HTTPS リスナー・ポート番号を取得します。詳細は、第 5.8 項「Oracle Application Server で使用されるポートのリスト表示方法」を参照してください。
- d. 「Capacity」フィールドに「100」と入力します（推奨の設定）。  
 注意：この値は、オリジナル・サーバーで受入れ可能な最大同時接続数を表します。容量値の指定の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
- e. 「Failover Threshold」フィールドに「5」と入力します（推奨の設定）。
- f. 「Ping URL」フィールドに / を入力します（推奨の設定）。
- g. 「Ping Interval」フィールドに「10」と入力します（推奨の設定）。
- h. 「Protocol」ドロップダウン・リストから、マシンで使用する通信プロトコルを選択します。  
 注意：OracleAS Web Cache HTTP リスナー（非 SSL）ポートを使用している場合は、HTTP を選択します。OracleAS Web Cache HTTPS リスナー（SSL）ポートを使用している場合は、HTTPS を選択します。
- i. 「Submit」をクリックすると詳細が保存され、「Origin Servers」ページが表示されます。

### 7.5.2.2 サイトからサーバーへのマッピングの指定方法

ロード・バランシングする Oracle Business Intelligence マシンに関する定義は完了しています。次に、OracleAS Web Cache と Oracle Business Intelligence マシンの間のロード・バランシング関係を定義します。たとえば、machine\_a によって Discoverer Web サーバー・リクエストが machine\_b および machine\_c に送られるように指定します。

サイトからサーバーへのマッピングを指定する手順は、次のとおりです。

1. ナビゲータ・ペインの「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」領域で「Site to Server Mapping」リンクを選択し、「Site to Server Mapping」ページを表示します。

The screenshot shows the Oracle Application Server Web Cache administration console. The main content area is titled "Site-to-Server Mapping". Below the title, there is a text box explaining the purpose of the page and a note. At the bottom, there is a table with the following data:

Select	Priority	Site			Origin Server		
		Host Name	Port	ESI Content Policy	Host Name	Port	Proxy
<input type="radio"/>	1	machine_a.company.com	7778	Unrestricted	machine_b.company.com	7778	No
					machine_c.company.com	7778	No
<input type="radio"/>	2	machine_a.company.com	4444	Unrestricted	machine_b.company.com	4445	No



「Site to Server Mapping」ページには、OracleAS Web Cache を実行しているマシンについてのエントリがあります。たとえば、OracleAS Web Cache を machine\_a で実行している場合は、machine\_a とそのデフォルト設定が表示されている行があります。

ヒント：「Enter Site Name」領域の「Port Number」フィールド内のポート番号は、「Ports」領域の「Listening Ports」ページに表示されている OracleAS Web Cache のリスニング・ポート番号である必要があります。

次の手順では、ロード・バランシングする OracleBI Discoverer 中間層マシンを指定します。

2. 「Select」列の、OracleAS Web Cache マシンの隣のラジオ・ボタンを選択します。
3. 「Edit Selected」をクリックして、「Edit/Add Site to Server Mapping」ページを表示します。

**Edit/Add Site to Server Mapping**

[Help](#)

**Edit Site Name**  
Select one of the following options to edit a Site Name

**Enter Site Name**

Host Name:  (Example: www.company.com, \*.company.com, \*)  
(hostname.domain)

Port Number:  (Examples: 80 for HTTP; 443 for HTTPS; \* for all ports)

**Select from Site Definitions**

Host Name : Port Number :

Select either application Web servers or proxy servers to which this Site is mapped

**Select Application Web Servers**

<input checked="" type="checkbox"/>	machine_b.company.com:7778	HTTP
<input type="checkbox"/>	machine_b.company.com:4444	HTTPS
<input checked="" type="checkbox"/>	machine_c.company.com:7778	HTTP

4. 「Select Application Web Servers」領域で、ロード・バランシングする各 OracleBI Discoverer 中間層マシンの隣のチェック・ボックスを選択します。

この領域には、「Origin Servers」ページの「Application Web Servers」表で定義したマシンが表示されます。

たとえば、OracleBI Discoverer を machine\_b および machine\_c にインストールした場合は、machine\_b および machine\_c の隣のチェック・ボックスを選択します。

5. 「Submit」をクリックすると詳細が保存され、「Site to Server Mapping」ページが表示されます。

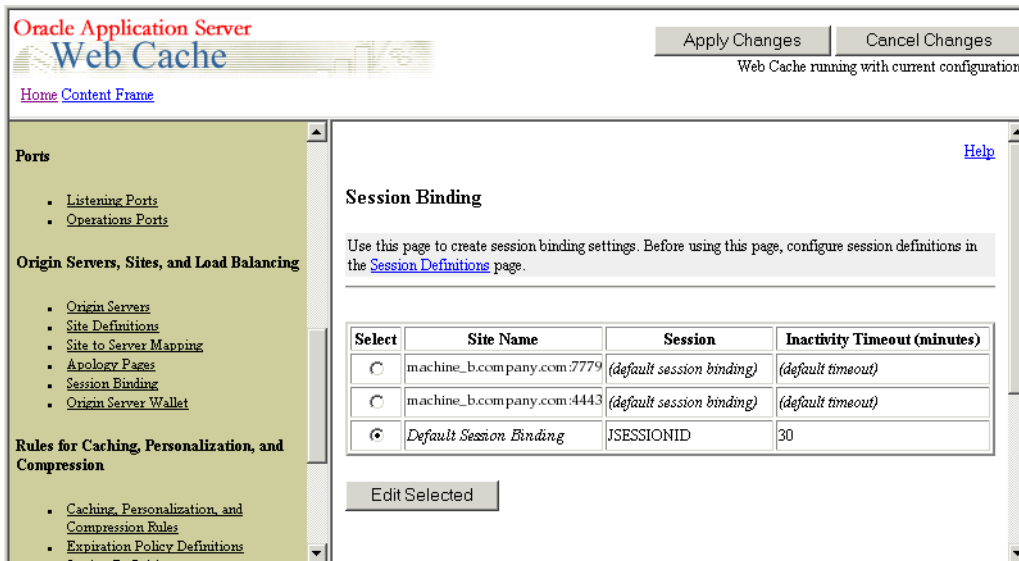
### 7.5.2.3 セッション・バインディング値の指定方法

セッション・バインディング値を指定して、ユーザー・セッションを特定の Web アプリケーション・サーバーにバインディングする方法を定義します。

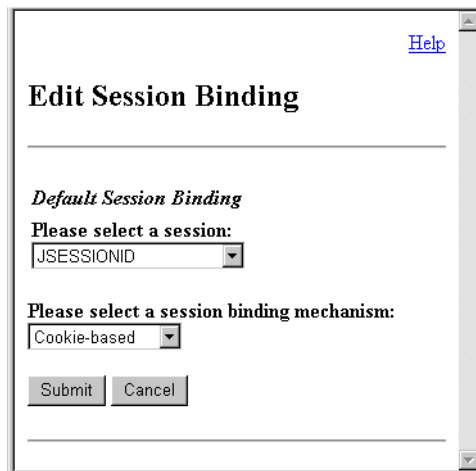
セッション・バインディング値を指定する手順は、次のとおりです。

1. ナビゲータ・ペインの「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」領域で「Session Binding」リンクを選択し、「Session Binding」ページを表示します。

2. 「Select」列の、「Site Name」列に「Default Session Binding」オプションがある行の隣のラジオ・ボタンを選択します。



3. 「Edit Selected」をクリックして、「Edit Session Binding」ページを表示します。



4. 「Default Session Binding」ドロップダウン・リストから JSESSIONID を選択します。
5. 「Please select a session binding mechanism」ドロップダウン・リストから Cookie Based を選択します。
6. 「Submit」をクリックすると詳細が保存され、「OracleAS Web Cache」ページが表示されます。

次の手順で、行った変更を適用して OracleAS Web Cache を再起動します。

7. 「OracleAS Web Cache」ページの一番上にある「Apply Changes」をクリックして、「Cache Operations」ページを表示します。
8. 「Restart」をクリックします。

OracleAS Web Cache が再開され、「Success」ページが表示されます。

この時点で、OracleAS Web Cache マシンに接続するブラウザ・セッションが、ロード・バランシングを指定した OracleBI Discoverer 中間層マシンの 1 つに正しくルーティングされるかを確認できます。詳細は、第 7.5.3 項「OracleAS Web Cache がロード・バランシング用に正しく構成されているかを確認する方法」を参照してください。



ヒント: 変更の適用が受け入れられない場合は、1つ以上のロード・バランシング・マシンに対して定義した容量が高すぎる可能性があります。たとえば、「Restart」をクリックすると、次のようなエラー・メッセージが表示される場合があります。

「opmnctl: stopping opmn managed processes... opmnctl: starting opmn managed processes...」 「Request failure: 0 of 1 processes started」

### 7.5.3 OracleAS Web Cache がロード・バランシング用に正しく構成されているかを確認する方法

OracleAS Web Cache がロード・バランシングのために正しく構成されているかを確認するには、OracleBI Discoverer Web トラフィックが正しいマシンにルーティングされているかを確認します。

たとえば、次の場所に接続する Discoverer ブラウザ・セッションを確認します。

http://machine\_a.company.com:80/discoverer/viewer

ルーティング先:

http://machine\_b.company.com:80/discoverer/viewer

または

http://machine\_c.company.com:80/discoverer/viewer

OracleAS Web Cache がロード・バランシングのために正しく構成されているかを確認する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Web Cache Manager を起動します（詳細は、第 7.5.1 項「OracleAS Web Cache Manager の起動方法」を参照してください）。
2. ナビゲータ・ペインの「Monitoring」領域で「Origin Server Statistics」リンクを選択し、「Origin Server Statistics」ページを表示します。

The screenshot shows the Oracle Application Server Web Cache Administration interface. The main content area is titled "Origin Server Statistics" and includes a "Refresh Now" button. Below the title, there are dropdown menus for "For Cache:" (set to "machine\_a.company.com-WebCache") and "Auto Refresh:" (set to "Never"). A table displays the statistics for two origin servers:

Origin Server		Up/Down Time		Completed Requests			
hostname	proxy server	up/down	since	number/sec	max/sec	avg/sec	total
machine_b.company.com:7778	NO	UP	Tue Sep 10 13:31:48 2002	0	0	0	0
machine_c.company.com:7778	NO	UP	Tue Sep 10 13:31:48	0	0	0	0

3. 次の点を調べて、Discoverer Web トラフィックが分散される OracleBI Discoverer 中間層マシンの状態を確認します。
  - 「Origin Server Statistics」表に各 OracleBI Discoverer 中間層マシンの行が含まれているかどうか。  
 たとえば、machine\_a および machine\_b で Discoverer セッションを実行している場合には、「Origin Server Statistics」表に machine\_a および machine\_b の行が表示されます。
  - 「hostname」列のアプリケーション・サーバー・ポート番号が正しいかどうか。
  - 「Up/Down Time」列の「up/down」設定が「UP」になっていること。
  - 「Active Sessions」の値が、各マシンで実行中の OracleBI Discoverer セッションの数と正しく対応しているかどうか。  
 たとえば、machine\_a と machine\_b で Discoverer セッションを実行している場合、「Active Sessions」の「now」列に、machine\_a の値 6 および machine\_b の値 4（合計で 10 セッション）などが表示されます。
  - 「Active Sessions」の値が、OracleBI Discoverer 中間層マシン間でのサーバー・リクエストの均等な分散（つまり、「Origin Servers」ページで行った各マシンの構成に従った分散）を示しているかどうか。  
 たとえば、machine\_a および machine\_b で 100 の Discoverer セッションが実行されている場合、「Active Sessions」の「now」列で、各マシンに対し同様なセッション数が表示されます。

### 注意

- 「Origin Server Statistics」ページの使用の詳細は、OracleAS Web Cache Manager のヘルプを参照してください。
- ナビゲータ・ペインの「Monitoring」領域で「Health Monitor」リンクを選択して、OracleBI Discoverer 中間層マシンで処理しているサーバー・リクエストのサマリーを表示することもできます。OracleAS Web Cache がロード・バランシング用に正しく構成されている場合には、すべての OracleBI Discoverer 中間層マシン間でサーバー・リクエストが均等に分散されます。

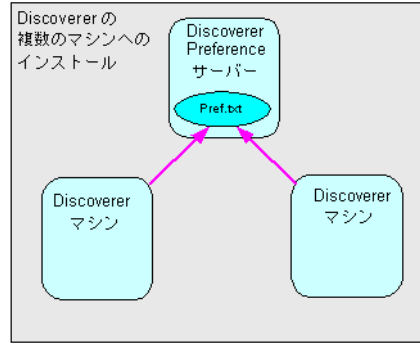
## 7.6 複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント

各 Discoverer インストールには、1つの Discoverer Preferences コンポーネントが含まれています。Discoverer Preferences コンポーネントには、その Discoverer インストールにアクセスする OracleBI Discoverer ユーザーの作業環境（ワークシートの軸スタイル、デフォルト EUL、自動クエリーの有効化など）が保存されています（詳細は、[第 1.8.2.2 項「Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください）。

複数のマシン環境では、すべての Discoverer エンド・ユーザーの作業環境を 1つの場所に格納できます。つまり、各 Discoverer インストールが同じ Discoverer Preferences コンポーネントを使用します。すべての Discoverer エンド・ユーザーの作業環境を 1つの場所に格納するには、中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントを指定します（詳細は、[第 7.6.1 項「中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントの指定方法」](#)を参照してください）。

### 7.6.1 中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントの指定方法

すべての Discoverer エンド・ユーザーの作業環境を 1つの場所に格納する場合、各 Discoverer インストールが、各インストール内の Preferences コンポーネントではなく、Preference サーバー・マシンで実行される Preferences コンポーネントを使用するように構成します。次の図は、各 Discoverer 中間層マシンが Preference サーバー・マシン上の作業環境を参照する様子を示します。



中央集中の Discoverer Preferences コンポーネントを指定する手順は、次のとおりです。

- Discoverer Preference サーバー・マシンとして使用するマシンを選択し、そのマシンのホスト名とポート番号を確認します（詳細は、[第 7.6.2 項「Preference サーバー・マシンのホスト名とポート番号の確認方法」](#)を参照してください）。
- 他のマシンで Discoverer Preference マシンを指定します（詳細は、[第 7.6.3 項「他のマシンでの Discoverer Preference サーバーの指定」](#)を参照してください）。
- Discoverer Preference サーバー・マシン以外のすべてのマシンで、Preferences コンポーネントを無効にします（詳細は、[第 7.6.4 項「マシン上で Preferences コンポーネントを無効にする方法」](#)を参照してください）。

### 注意

- 中央集中の Discoverer Preference サーバー・マシンを構成しない場合は、各マシンの作業環境設定は異なります。Discoverer エンド・ユーザーが異なるマシンに接続すると、そのマシンの作業環境設定の指定によって Discoverer の動作がそれぞれ異なる可能性があります。

## 7.6.2 Preference サーバー・マシンのホスト名とポート番号の確認方法

Preferences コンポーネントを実行するマシン（つまり、Discoverer Preference サーバー・マシンに指定するマシン）のホスト名とポート番号を確認する手順は、次のとおりです。

1. ホスト名を確認するには、次の操作を実行します。
  - a. Discoverer Preference サーバー・マシンでコマンド・プロンプトを開きます。
  - b. 「hostname」と入力し、表示された値を書き留めます。
2. Discoverer Preference サーバー・マシンのポート番号を確認するには、次の操作を実行します。
  - a. テキスト・エディタ（または XML エディタ）で opmn.xml ファイルを開きます。  
opmn.xml ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。
  - b. PREFERENCE\_PORT の可変 ID (variable id) を検索し、値を書き留めます。  
たとえば、ファイルの Discoverer 領域には、次のようなテキスト行があります。  

```
<variable id = "PREFERENCE_PORT" value = "16001">
```
  - c. opmn.xml ファイルを閉じます。

ここで、Discoverer Preference サーバー・マシンを使用するために、他のマシンで opmn.xml ファイルを変更する必要があります（詳細は、[第 7.6.3 項「他のマシンでの Discoverer Preference サーバーの指定」](#)を参照してください）。

### 7.6.3 他のマシンでの Discoverer Preference サーバーの指定

Preferences コンポーネントを実行するマシン（つまり、Discoverer Preference サーバー・マシン）のホスト名とポート番号を確認した後は、他のマシンが確実に Discoverer Preference サーバー・マシン上の Preferences コンポーネントを使用するようにします。

Discoverer Preference サーバー・マシンを使用するために他のマシンの opmn.xml ファイルを変更するには、インストール内の他のすべてのマシンに対して、次の操作を実行します。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
2. 「ホーム」タブの「名前」列で OC4J\_BI\_Forms を選択し、OC4J\_BI\_Forms\_page を表示します。
3. 「管理」タブを表示します。
4. 「インスタンス・プロパティ」領域で、「サーバー・プロパティ」リンクを選択し、「サーバー・プロパティ」ページを表示します。
5. 「コマンドライン・オプション」領域まで下へスクロールします。
6. 「Java オプション」フィールドで、次のテキストを既存のテキストに追加します。
 

```
-Doracle.disco.activation.preferencePort=<portno>
-Doracle.disco.activation.preferenceHost=<hostname>
```
7. OC4J\_BI\_Forms コンポーネントを再起動します。

ここで、Discoverer Preference サーバー・マシン以外のすべてのマシンで、Preferences コンポーネントを無効にする必要があります（詳細は、第 7.6.4 項「マシン上で Preferences コンポーネントを無効にする方法」を参照してください）。

### 7.6.4 マシン上で Preferences コンポーネントを無効にする方法

複数のマシン環境で、Discoverer を単一の Preference サーバー・マシンを使用するように構成するには、Preference サーバー・マシン以外のすべての Discoverer 中間層マシンで、Preferences コンポーネントを無効にする必要があります。

Preference サーバー・マシン以外のすべてのマシンで、Preferences コンポーネントを無効にする手順は、次のとおりです。

1. Preference サーバー・マシン以外の各マシンで、テキスト・エディタまたは XML エディタを使用して opmn.xml ファイルを開きます。
 

opmn.xml ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください。
2. Disco\_PreferenceServer エントリを見つけます。
3. Disco\_PreferenceServer エントリを有効から無効に変更します。
 

たとえば、次のように変更します。

```
<ias-component id="Disco_PreferenceServer" status="enabled">
```

変更後：

```
<ias-component id="Disco_PreferenceServer" status="disabled">
```
4. opmn.xml ファイルを保存します。
5. マシンの Discoverer サービスを停止します（詳細は、第 5.3.1 項「マシン上で Discoverer サービスを停止または再起動する方法」を参照してください）。
6. マシンの Discoverer サービスを起動します（詳細は、第 5.3.1 項「マシン上で Discoverer サービスを停止または再起動する方法」を参照してください）。

Discoverer が単一の作業環境セットを使用していることを確認するには、マシンから直接 Discoverer を実行し、Discoverer Preference サーバー・マシン上にある作業環境が使用されているかどうかを確認します。たとえば、Discoverer Preference サーバー・マシンが machine\_a の場合、machine\_b および machine\_c から直接 Discoverer Viewer を実行し (URL [http://machine\\_b.us.company.com:80](http://machine_b.us.company.com:80) および [http://machine\\_c.us.company.com:80](http://machine_c.us.company.com:80))、machine\_a の作業環境が Discoverer で使用されているかどうかを確認します。

## 7.7 複数のマシン環境での tnsnames.ora ファイルの構成

tnsnames.ora ファイルには、OracleBI Discoverer を使用してアクセス可能なすべてのデータベースの名前および別名が含まれています。

複数のマシン環境内の各 Discoverer マシンで、同じ tnsnames.ora ファイルを保持しているか、中央集中 tnsnames.ora ファイルを指定している必要があります (tnsnames.ora ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。

異なるマシン上の tnsnames.ora ファイルを同じにする手順は、次のとおりです。

- 1 つの Oracle Business Intelligence 中間層マシンから tnsnames.ora ファイルをコピーし、他のすべての Oracle Business Intelligence 中間層マシンの同じ場所に貼り付けて、既存のファイルと置き換えます。
- 同じデータベース名および別名を使用するように、各 Oracle Business Intelligence 中間層マシンの tnsnames.ora ファイルを編集します。

**ヒント:** マシンには、tnsnames.ora ファイルの複数のバージョンが存在する場合があります。必ず、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)にリストされている tnsnames.ora ファイルを使用してください。



---

---

# OracleAS Web Cache との OracleBI Discoverer Viewer の使用

この章では、OracleBI Discoverer Viewer のパフォーマンスを高める OracleAS Web Cache の使用方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- [第 8.1 項「OracleAS Web Cache の概要」](#)
- [第 8.2 項「OracleAS Web Cache の利点」](#)
- [第 8.3 項「OracleAS Web Cache の動作」](#)
- [第 8.4 項「OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合」](#)
- [第 8.5 項「OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する方法」](#)

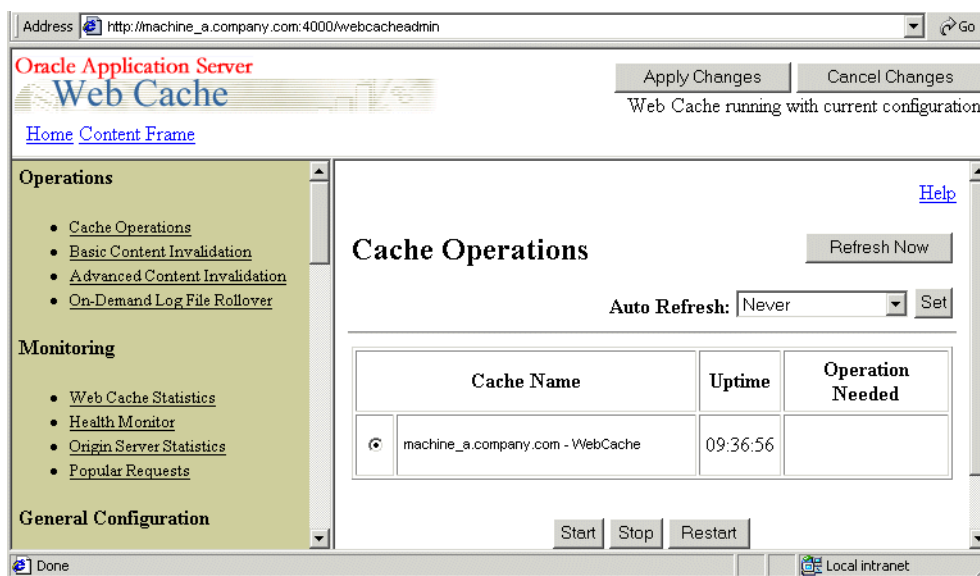
## 8.1 OracleAS Web Cache の概要

OracleAS Web Cache は、OracleAS 上で実行される Web サイトのパフォーマンス、スケーラビリティ、可用性を向上させる、コンテンツ対応サーバー・アクセラレータ（リバース・プロキシ・サーバー）です。OracleAS Web Cache が頻繁にアクセスするページをメモリーに格納することにより、そのページに対する処理リクエストを中間層サーバーおよびデータベースで繰り返す必要がなくなります。

また、OracleAS Web Cache は、複数のマシン環境での OracleAS マシンのロード・バランシングにも使用できます（詳細は、第 7 章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」を参照してください）。

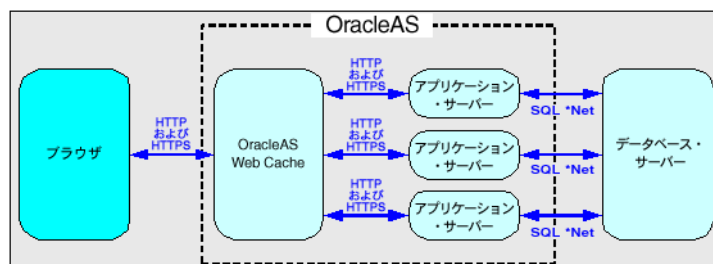
OracleAS Web Cache は、OracleAS Web Cache の管理ページを使用して管理します。

図 8-1 OracleAS Web Cache の管理ページ



OracleAS Web Cache は Web アプリケーション・サーバーの前に置かれ、Web サーバーのコンテンツをキャッシュして、Web ブラウザからのリクエストに応じてそのコンテンツを配信します。Web ブラウザが Web サイトにアクセスすると、Web ブラウザから HTTP プロトコルまたは HTTPS プロトコルのリクエストが OracleAS Web Cache に送信されます。リクエストを受信した OracleAS Web Cache は、Web アプリケーション・サーバーに対する仮想サーバーとして動作します。リクエストされるコンテンツが変更されると、OracleAS Web Cache は Web アプリケーション・サーバーから新しいコンテンツを取得します。

図 8-2 OracleAS Web Cache の概要



OracleAS Web Cache の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。



## 注意

- Discoverer をデプロイする際は、通常、OracleBI インストールを OracleAS ファームに追加し、OracleAS Web Cache をプロキシ・サーバーとして使用します（詳細は、第7章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」を参照してください）。

## 8.2 OracleAS Web Cache の利点

OracleAS Web Cache の使用には、次の利点があります。

- パフォーマンスの向上

安価なハードウェアで実行しても、OracleAS Web Cache を使用して Web サイトのスループットを大きく向上させることができます。さらに、OracleAS Web Cache は、ドキュメントをメモリーに格納したり、GZIP エンコーディングをサポートするブラウザにドキュメントの圧縮バージョンを供給して、ブラウザのリクエストへのレスポンス時間を大幅に短縮できます。

- スケーラビリティの向上

比類のないスループットに加え、OracleAS Web Cache は多数のブラウザ接続を同時に維持できます。その結果、負荷のピーク時でも、サイト訪問中の Web アプリケーション・サーバー・エラーがほとんど起こりません。

- 高可用性の提供

OracleAS Web Cache では、コンテンツ対応のロード・バランシングおよびフェイルオーバー検出をサポートしています。これらの機能により、キャッシュにないドキュメント（「キャッシュ・ミス」と呼ばれます）は、クラスタ内で可用性とパフォーマンスの最も高い Web サーバーにダイレクトされます。さらに、これらの機能により、Web アプリケーション・サーバーへの負荷が増加した場合にパフォーマンスの保証とサーージ保護が提供されます。

- コストの節約

トラフィック・スパイクおよび DoS 攻撃によって引き起こされる問題への対応を必要とする Web アプリケーション・サーバーが少なく済みます。結果として、OracleAS Web Cache は、各リクエストの Web サイト・コストを軽減する簡単で安価な方法を提供します。

- ネットワーク・トラフィックの軽減

ほとんどのリクエストが OracleAS Web Cache で解決されるため、Web アプリケーション・サーバーへのトラフィックを軽減できます。また、キャッシュにより、Web アプリケーション・サーバーだけでなく、コンピュータにあるバックエンド・データベースへのトラフィックも軽減されます。

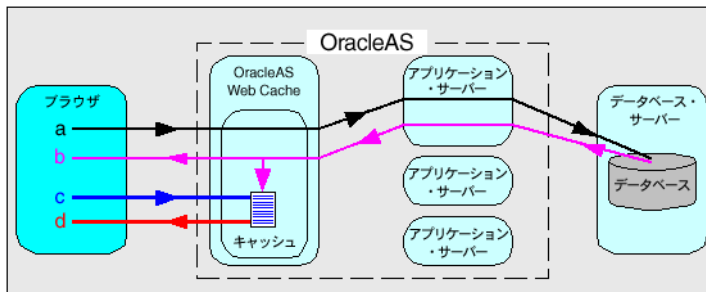
OracleAS Web Cache の使用による利点の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

## 8.3 OracleAS Web Cache の動作

OracleAS Web Cache は、キャッシュ・ルールを使用して、キャッシュするドキュメントを決定します。キャッシュ・ルールは、特定の URL 内で指定したドキュメントをキャッシュするか、キャッシュしないかを指定します。キャッシュ・ルールは、正規表現を使用して定義されます（Oracle の正規表現の実装の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください）。

キャッシュ・ルールに含まれる URL 内で指定されるドキュメントは、ブラウザがそのドキュメントをリクエストするまではキャッシュされません。

図 8-3 URL およびドキュメントのリクエスト処理



この図の符号の説明は次のとおりです。

- a. ブラウザが特定の URL に対して初めてリクエストを行うと、OracleAS Web Cache は必要なドキュメントがキャッシュされていないことを検出します（「キャッシュ・ミス」と呼ばれます）。OracleAS Web Cache はリクエストを Web アプリケーション・サーバーに転送し、Web アプリケーション・サーバーはそのリクエストをデータベースに送信します。
- b. データベースでは Web アプリケーション・サーバーにデータを返し、Web アプリケーション・サーバーがドキュメントとその URL を OracleAS Web Cache に転送します。その URL がキャッシュする対象の URL として指定されている場合は、OracleAS Web Cache により、以後のリクエストのためにドキュメントがキャッシュされます。
- c. ブラウザが次にその URL をリクエストすると、OracleAS Web Cache はドキュメントがすでにキャッシュされていることを検出します（「キャッシュ・ヒット」と呼ばれます）。
- d. OracleAS Web Cache は、ドキュメントをキャッシュからブラウザに送信します。

## 8.4 OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合

次のような場合は、Discoverer Viewer を OracleAS Web Cache とともに使用すると、Web サイトのパフォーマンス、スケーラビリティ、可用性が最も向上します。

- Web サイトでパブリック・ワークブックのみが使用されている場合。
- Web サイトが相対的に静的なデータにアクセスする場合。
- Discoverer マネージャやワークブックの作成者が OracleAS Web Cache にアクセスし、ワークブックの変更後にキャッシュをリフレッシュできる場合。

OracleAS Web Cache キャッシュ・ルールは、インストール時に Discoverer Viewer 用にあらかじめ自動的に構成されています。

セキュリティ上の理由により、OracleAS Web Cache でキャッシュされるのは、パブリック接続を使用してアクセスされる Discoverer Viewer ページのみです。

データへのアクセス制御が比較的重要でない場合（たとえば、複数のユーザーがワークブックにアクセスするために同じパブリック接続を使用するような場合）、OracleAS Web Cache は Discoverer Viewer のパフォーマンスを理想的に最適化します。データへのアクセス制御が必要な制限のある環境（たとえば、各ユーザーが各自のワークブックにアクセスするためにプライベート接続を使用するような場合）には、OracleAS Web Cache はあまり適しません。制限のある環境で OracleAS Web Cache を使用した場合、悪意のあるユーザーが他のユーザー用にキャッシュされたアクセス・ページにアクセスする可能性があることに注意してください（OracleBI Discoverer セキュリティ全般の詳細は、第 14 章「OracleBI Discoverer のセキュリティ管理」を参照してください）。

## 8.5 OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する方

OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用するには、次の操作を実行します。

- Single Sign-On (SSO) を無効にします。詳細は、[第 14.7.2.2 項「Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方](#)」を参照してください。
- 各 OracleBI 中間層インストールの Discoverer に対して 2 つのキャッシュ・ルールを作成します。詳細は、[第 8.5.1 項「Discoverer キャッシュ・ルールの作成方](#)」を参照してください。
- 各 OracleBI 中間層インストールの Discoverer Viewer に対して OracleAS Web Cache を有効化します。詳細は、[第 8.5.2 項「Discoverer Viewer に対し OracleAS Web Cache を有効にする方](#)」を参照してください。
- (オプション) 最大のキャッシュとなるように Discoverer Viewer を構成します。詳細は、[第 8.5.3 項「キャッシュの最大化を可能にする Discoverer Viewer の構成方](#)」を参照してください。

### 8.5.1 Discoverer キャッシュ・ルールの作成方

OracleAS Web Cache は OracleAS とともにインストールされますが、デフォルトでは無効になっています。OracleAS Web Cache を使用するには、キャッシュ・ルールを作成する必要があります。たとえば、Discoverer Viewer ページをキャッシュする場合、および 1 台の Discoverer 中間層マシンを使用してロード・バランシングを提供する場合に、OracleAS Web Cache を有効にします。

Discoverer Viewer に対して OracleAS Web Cache を有効にする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control に Discoverer ホームページを表示します (詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方および「システム・コンポーネント」ページの表示方](#)」を参照してください)。
2. 「コンポーネント」テーブルの「名前」列で、「Web Cache」リンクを選択し、Web Cache のホームページを表示します。
3. 「管理」タブを表示します。

- 「プロパティ」領域の「アプリケーション」で「ルール」リンクを選択し、「キャッシング」領域を表示します。

**ルール**

ルールによって各リクエストに対するキャッシュの処理方法が設定されます。ルールは「セレクタ」および「方法」の2つから構成されます。まずリクエストが「セレクタ」と比較されます。一致した場合、キャッシュは「方法」に従います。ルールが並べ替えられます。つまり、最初の一致ルールのみ適用されます。

ページの更新時刻: 2004/12/27 12:05:06

サイトの表示:  ビュー列:

選択	順序	名前	セレクタ・サマリー	使用可能	キャッシング	方法
<input checked="" type="radio"/>	1	cache_wireless_rm	正規表現: /ptg/rm	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	期限切れ: HTTPヘッダーの指定どおり, 更新: 即時 セッション: PAsid, PAconnxn, PAuserid
<input type="radio"/>	Global 1	cache image	正規表現: \.(gif jpe?g png bmp)\$	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 60分, 更新: 以内6分
<input type="radio"/>	Global 2	cache compress css	拡張子: .css	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	Netscape 4.x以外で圧縮 期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 5分, 更新: 即時
<input type="radio"/>	Global 3	cache uix-jdev.js	正規表現: /jsLibs/*\.js\$	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 5分, 更新: 即時
<input type="radio"/>	Global 4	cache compress.js	拡張子: .js	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	Netscape 4.x以外で圧縮 期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 5分, 更新: 即時
<input type="radio"/>	Global 5	cache compress.html	正規表現: \.html?\$	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	圧縮 期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 5分, 更新: 即時
<input type="radio"/>	Global 6	cache.swf	拡張子: .swf	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	期限切れ: キャッシュ内の最大時間, 60分, 更新: 以内6分

関連リンク: [有効期限ポリシー](#)

- 「作成」をクリックし、「ルールの作成」ページを表示します。

**ルールの作成**

ルールによって各リクエストに対するキャッシュの処理方法が設定されます。ルールは「セレクタ」および「方法」の2つから構成されます。まずリクエストが「セレクタ」と比較されます。一致した場合、キャッシュは「方法」に従います。ルールが並べ替えられます。つまり、最初の一致ルールのみ適用されます。

一般  高度なキャッシュ方法

\*名前:  サイト:

説明:   使用可能

**セレクタ**

このルールと一致するには、リクエストが「セレクタ」のすべての部分と一致する必要があります。

URL一致条件:  \*

[▶HTTPメソッドとパラメータの表示](#)

**方法**

**キャッシング**

キャッシュ  キャッシュしない

キャッシュされたレスポンスの有効期限:  [関連リンク: 有効期限ポリシー](#)

**圧縮**

Web Cacheはキャッシュされているかどうかにかかわらずレスポンスを圧縮できます。GIFおよびJPEGファイルのように、すでに圧縮されているオブジェクトは圧縮しないでください。Netscape 4.xブラウザでは、JavaScriptファイルなどのHTMLコンテンツにインクルードされるファイルは圧縮できません。

圧縮しない  すべてのブラウザで圧縮  Netscape 4.xを除くすべてのブラウザで圧縮

- 次の手順で新規ルールを作成します。
  - 「名前」フィールドに、「Discoverer caching rule」または同様の一意の名前を入力します。
  - 「URL一致条件」フィールドでドロップダウン・リストから「パス接頭辞」を選択し、隣のテキスト・ボックスに「/discoverer/app」と入力します。

その他のフィールドのデフォルト値は変更しないでください。

- c. 「OK」をクリックしてルールを保存します。

ルールが正しく作成されると、「ルール」ページ上部に、「ルールは正常に作成されました。この変更は、Web キャッシュを再起動するまで有効になりません。」というメッセージが表示されます。

7. 「作成」をクリックし、「ルールの作成」ページを表示します。

8. 次の手順で新規ルールを作成します。

- a. 「名前」フィールドに、「Discoverer caching rule 2」または同様の一意の名前を入力します。
- b. 「URL 一致条件」フィールドでドロップダウン・リストから「パス接頭辞」を選択し、隣のテキスト・ボックスに「/discoverer/servlet/GraphBeanServlet」と入力します。
- c. 「HTTP メソッドとパラメータの表示」をクリックし、HTTP メソッド詳細を表示します。

- d. 「問合せ文字列を含むGET」チェック・ボックスを選択します。
- e. 「POST」チェック・ボックスを選択します。
- f. 「OK」をクリックしてルールを保存します。

ルールが正しく作成されると、「ルール」ページ上部に、「ルールは正常に作成されました。この変更は、Web キャッシュを再起動するまで有効になりません。」というメッセージが表示されます。

- 「Web キャッシュの再起動」をクリックし、確認ページで「はい」をクリックします。  
これで、OracleAS Web Cache が Discoverer Viewer ページをキャッシュするようになり、Discoverer のパフォーマンスが向上します。

## 8.5.2 Discoverer Viewer に対して OracleAS Web Cache を有効にする方法

OracleAS Web Cache は Oracle Business Intelligence とともにインストールされますが、デフォルトでは Discoverer Viewer での使用は無効に設定されます。Discoverer で OracleAS Web Cache を使用するには、このキャッシュを有効にする必要があります。たとえば、Discoverer Viewer ページをキャッシュする場合、および 1 台の Discoverer 中間層マシンを使用してロード・バランシングを提供する場合に、OracleAS Web Cache を有効にします。

**注意:** Application Server Control の「コンポーネント」テーブルに、OracleAS Web Cache のステータスが「有効」と表示される場合がありますが、これは Discoverer Viewer でのこのキャッシュの使用が有効化されていることを意味しません。次の手順に従って、「Discoverer Viewer 構成」ページで「WebCache を使用する」チェック・ボックスを選択する必要があります。

Discoverer Viewer に対して OracleAS Web Cache を有効にする手順は、次のとおりです。

- Application Server Control に Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。

**Discoverer**

ホーム パフォーマンス 管理

ページ・リフレッシュ 2005/08/23 10:56:54

**一般**

停止 再起動

ステータス IP  
バージョン 10.1.2.48.18  
開始時間 2005/08/22 12:30:33 JST  
合計メモリー使用量(MB) 46.27  
合計CPU使用率(%) 0.0

☑ ヒント メモリー使用量およびCPU使用率は、Discoverer のセッションおよびプリファレンスに関する値です。

コンポーネント [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

- 「コンポーネント」テーブルの「名前」列で、「Discoverer Viewer」リンクを選択し、Discoverer Viewer のホームページを表示します。

**Discoverer Viewer**

ホーム パフォーマンス カスタマイズ

ページ更新時刻 2004/12/27 12:24:59

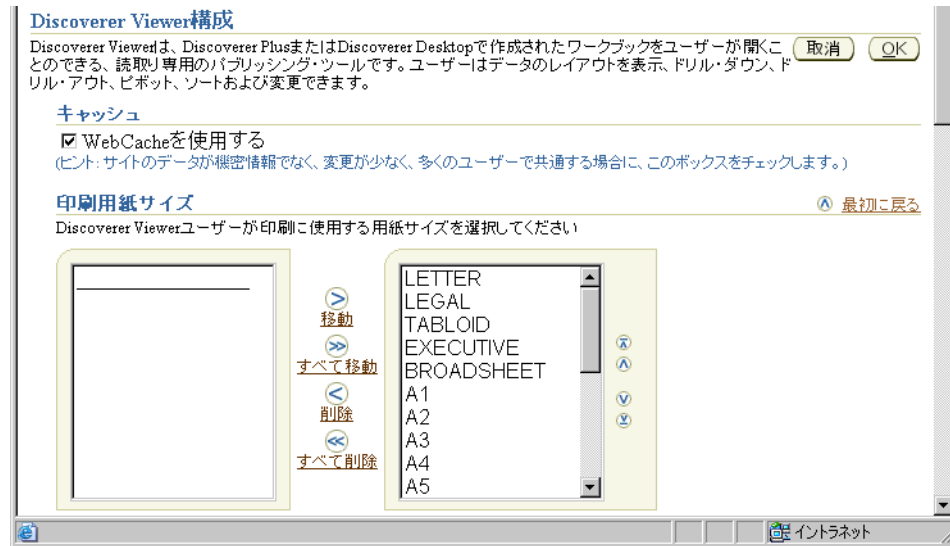
**一般**

有効 無効

Discoverer Viewerのステータス 有効  
Discovererのステータス 稼働中  
バージョン 10.1.2.45.46  
セッションのメモリー使用量(MB) 0  
セッションのCPU使用率(%) 0

構成 Caching  
印刷中  
PDE生成  
電子メール  
遅延  
ロギング

- 「キャッシュ」リンクを選択して、「キャッシュ」領域を表示します。



- 「WebCache を使用する」チェック・ボックスを選択します。
- 「OK」をクリックします。

これで、OracleAS Web Cache が有効化され、Discoverer Viewer ページのキャッシュが開始します。

### 8.5.3 キャッシュの最大化を可能にする Discoverer Viewer の構成方法

Discoverer Viewer ページのキャッシュを最大化するには、Discoverer Viewer で使用できるエンド・ユーザー・オプションを必要に応じて制限できます。たとえば、ワークシートのレイアウト・ツールバーを削除すると、各エンド・ユーザーに許可されるワークシートの操作量が制限され、OracleAS Web Cache がページを容易にキャッシュできるようになります。

キャッシュを最大化できるように Discoverer Viewer を構成する手順は、次のとおりです。

- 構成するマシンの Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。
- 「コンポーネント」テーブルの「名前」列で、「Discoverer Viewer」を選択し、Discoverer Viewer のホームページを表示します。





3. 「遅延」リンクを選択し、「Viewer 遅延時間」領域を表示します。
4. 「クエリーの進行状況ページ」の値と「リクエスト」の値を最高値（60 秒など）に設定します。
5. 「OK」をクリックし、Discoverer Viewer のホームページに戻ります。
6. 「カスタマイズ」タブを表示します。
7. 「カスタマイズ」ドロップダウン・リストから「レイアウト」を選択し、「実行」をクリックして「レイアウトのカスタマイズ」ページを表示します。



8. 「操作リンク」領域で、チェック・ボックスの選択を可能なかぎり解除し、エンド・ユーザーが必要なタスク（印刷、電子メールで送信など）を実行できるようにします。
9. 「その他」領域で、「ツールバー」チェック・ボックスの選択を解除します。
10. 「適用」をクリックして、変更内容を保存します。
11. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。



---

---

## OracleBI Discoverer のカスタマイズ

この章では、Discoverer のルック・アンド・フィール (LAF) をカスタマイズする方法について説明します。たとえば、Discoverer Viewer に表示される Oracle ロゴを別のロゴに置き換えたり、ユーザー・インタフェースの背景色を変更できます。

この章の項目は次のとおりです。

- [第 9.1 項 「Discoverer Plus のカスタマイズ」](#)
- [第 9.2 項 「Discoverer Viewer のカスタマイズ」](#)

**注意** : pref.txt の作業環境を使用して、Discoverer のユーザー・インタフェース・コンポーネントを表示または非表示にすることもできます。たとえば、EUL Object Navigator 作業環境を使用して、Discoverer Plus Relational の「選択可能なアイテム」ペインを表示または非表示にできます。使用可能な作業環境の詳細は、[第 10.6 項 「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」](#)を参照してください。

## 9.1 Discoverer Plus のカスタマイズ

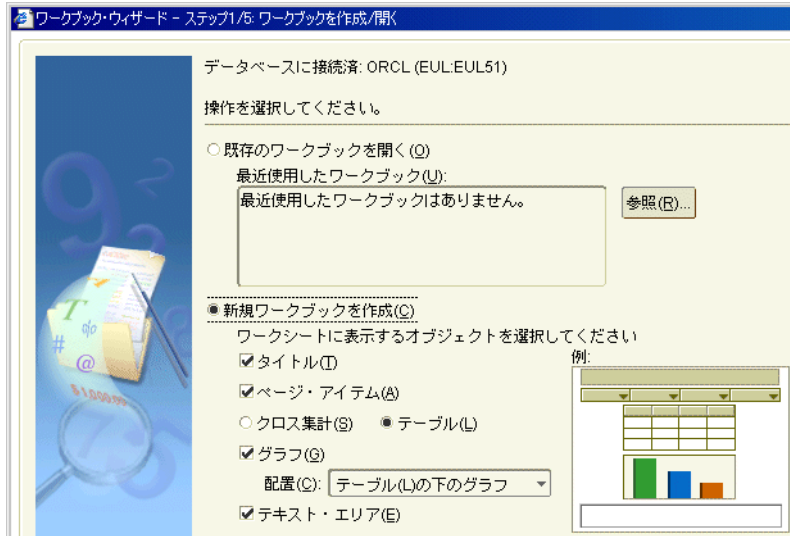
この項では、Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF をカスタマイズする方法について説明します。

### 9.1.1 Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP で使用可能な LAF スタイル

次の LAF スタイルを使用できます。

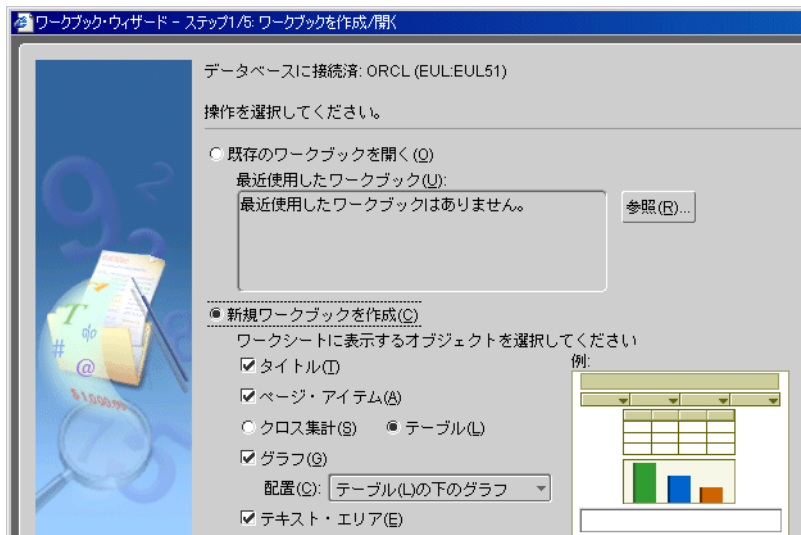
- ブラウザ

次のスクリーンショットに、ブラウザ LAF を示します。



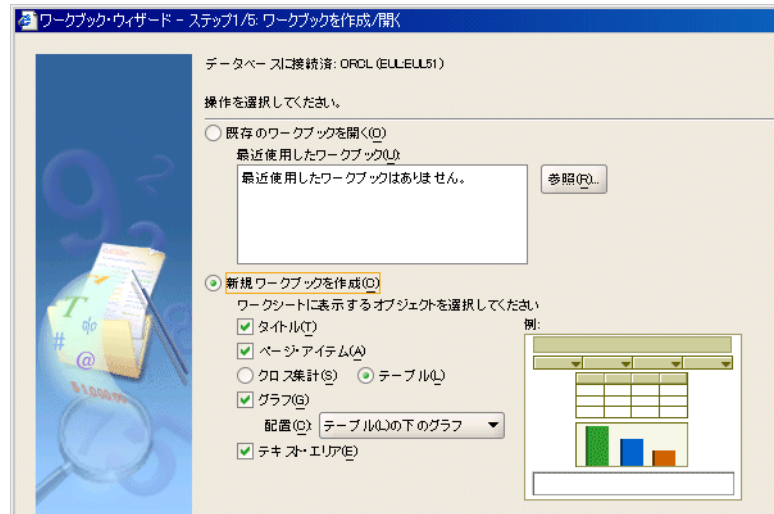
- Oracle

次のスクリーンショットに、Oracle LAF を示します。



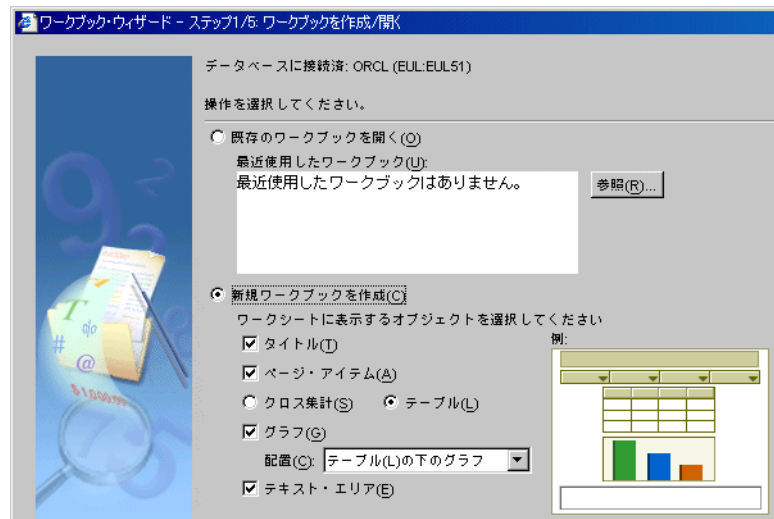
## ■ プラスチック

次のスクリーンショットに、プラスチック LAF を示します。



## ■ システム

次のスクリーンショットに、システム LAF を示します。



独自の LAF を作成し、この LAF をカスタムと呼ばれる LAF として使用することもできます。詳細は、第 9.1.4 項「[Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法](#)」を参照してください。

## 注意

- プラスチック・ルック・アンド・フィールは、Sun Java Plug-in JVM においてのみ機能します (JInitiator JVM では機能しません)。Discoverer Plus をプラスチック・ルック・アンド・フィールによってデプロイするには、次の点を確認する必要があります。
  - Oracle Application Server Control でルック・アンド・フィール・オプションとして「プラスチック」を選択します (詳細は、第 9.1.3 項「[すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法](#)」を参照してください)。
  - Oracle Application Server Control で JVM オプションとして Sun Java Plug-in を選択します (詳細は、第 5.9.1 項「[Discoverer Plus に対する異なる Java 仮想マシンの指定方法](#)」を参照してください)。

## 9.1.2 Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF スタイルの変更方法

Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF スタイルは、2 つの方法で変更できます。

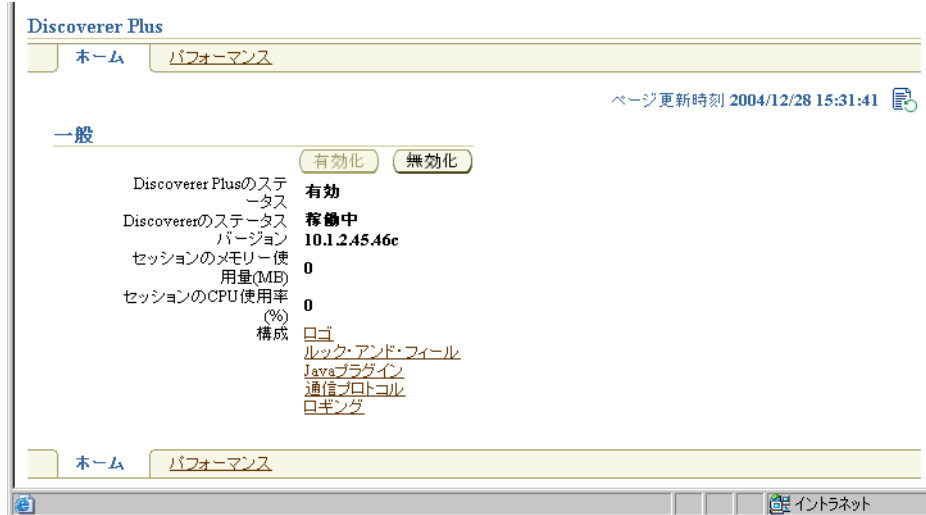
- Discoverer 中間層に LAF を指定することで、すべてのエンド・ユーザー（つまり、特定の OracleBI インストールに接続しているすべてのエンド・ユーザー）を対象にする方法（詳細は、第 9.1.3 項「すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法」を参照してください）。
- lookandfeelname URL パラメータを使用して、特定のエンド・ユーザーを対象にする方法（詳細は、第 13.8 項「Discoverer Plus 固有の URL パラメータのリスト」を参照してください）。

## 9.1.3 すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法

Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF を変更して、背景色、ボタン・スタイル、フォント・スタイルを変更します。使用可能なルック・アンド・フィールのタイプは、「プラスチック」、「システム」、「ブラウザ」、「Oracle」および「カスタム」（指定した場合）です。使用可能な LAF スタイルの詳細は、第 9.1.1 項「Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP で使用可能な LAF スタイル」を参照してください。

Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の LAF を変更する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。
2. 「コンポーネント」領域の「名前」列で、「Discoverer Plus」リンクを選択し、Discoverer Plus のホームページを表示します。



3. 「ルック・アンド・フィール」リンクを選択し、「ルック・アンド・フィール」領域を表示します。

4. 「ルック・アンド・フィール」ドロップダウン・リストを使用して、LAF スタイル（「システム」、「プラスチック」など）を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

エンド・ユーザーが Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP を起動すると、選択した LAF が使用されます。

## 9.1.4 Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法

独自の LAF（つまり、ブラウザ、プラスチックなどの Discoverer に付属する LAF とは異なる LAF）を使用して Discoverer をデプロイできるようにするには、Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP のカスタム LAF を定義します。

**注意:** 独自の LAF クラスを指定し、LAF クラスが格納されている JAR ファイルを <ORACLE\_HOME>/discoverer/lib ディレクトリにコピーする必要があります。

Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP のカスタム LAF をグローバルに定義する手順は、次のとおりです。

1. LAF クラスが格納されている JAR ファイルを <ORACLE\_HOME>/discoverer/lib ディレクトリにコピーします。
2. configuration.xml ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
3. Discoverer サブプレットの構成領域で、plus 要素を検索します（次の例では、要素部分が選択されています）。

```
<plus laf="browser" lafJar="" lafClass="" logLevel="error" plugin="sun" helpSet="he
<transport name="jrmf"/>
<transport name="http"/>
<logo rendered="true" src="url" url="" file=""/>
<jvm name="sun" classid="clsid:CAFEEFAC-0014-0002-0004-ABCDEFEDCBA" plugin_setup
<jvm name="jinitiator" classid="clsid:CAFECAFE-0013-0001-0009-ABCDEFABCDEF" plugi
<enablePlus status="true">Plus was stopped by your Administrator.</enablePlus>
</plus>
<!-- Portlet Provider configuration. -->
<portlet logKey="disco.portlet.fatal" logLevel="error">
  <enablePortlet status="true"/>
  <sessionPool maxSessions="20" useCachedSession="true" maxSessionAgeHour="35" maxS
</portlet>
</disco:configuration>
```

4. plus 要素で、laf 属性を「カスタム」に変更します。  
たとえば、<plus laf="browser" を <plus laf="custom" に変更します。
5. lafjar 属性を、LAF が格納されている JAR ファイル名（つまり、<ORACLE\_HOME>/discoverer/lib ディレクトリにコピーした JAR ファイル）で置換します。
6. lafClass 属性を、LAF の完全修飾 Java クラス名で置換します。  
たとえば、javax.swing.plaf.metal.MetalLookAndFeel を指定します。
7. configuration.xml ファイルを保存します。

エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Plus OLAP を起動すると、カスタム LAF が適用されます。

Oracle Application Server Control を使用して、Discoverer とともにインストールされた標準 LAF の 1 つに LAF を戻すことができます（詳細は、[第 9.1.3 項「すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法」](#) を参照してください）。

## 9.2 Discoverer Viewer のカスタマイズ

この項では、Discoverer Viewer をカスタマイズする方法について説明します。

### 9.2.1 Discoverer Viewer のカスタマイズ

Discoverer Viewer のカスタマイズは、レイアウトおよびルック・アンド・フィール（LAF）の 2 つのカテゴリに分類されます。レイアウトのカスタマイズでは、ページの要素（「終了」ボタン、「ヘルプ」ボタン、「操作リンク」など）を表示または非表示にしたり、一部のリンク先（「終了」ボタンに対する URL の指定など）を変更できます。LAF のカスタマイズでは、Viewer ページ（リンクで表示するテキストなど）で使用するフォント・サイズや色を変更できます。

たとえば、次のように Discoverer Viewer をカスタマイズできます。

- 組織のインターネット LAF と一致するように、Discoverer のインタフェース・フォント・スタイルと色を変更します。詳細は、[第 9.2.2 項「デフォルトの Discoverer Viewer の LAF の変更方法」](#) を参照してください。
- Discoverer Viewer のレイアウト（企業ロゴの変更、リンクの表示 / 非表示など）を変更します。詳細は、[第 9.2.3 項「デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトの変更方法」](#) を参照してください。

OracleAS Web Cache でのキャッシュが最大となるように、レイアウトを変更することもできます（詳細は、[第 8.5.3 項「キャッシュの最大化を可能にする Discoverer Viewer の構成方法」](#) を参照してください）。

**注意:** 複数のマシンに Discoverer をデプロイしている場合は、次の点に注意します。

- カスタマイズした同一の Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースをすべてのマシンにデプロイするには、各 Discoverer 中間層マシン上でカスタマイズ変更を繰り返す必要があります。

### 9.2.2 デフォルトの Discoverer Viewer の LAF の変更方法

カスタマイズした LAF をエンド・ユーザーに提供する場合は、Discoverer Viewer インタフェースのデフォルトの LAF を変更します。たとえば、ページの背景色やフォントを変更できます。

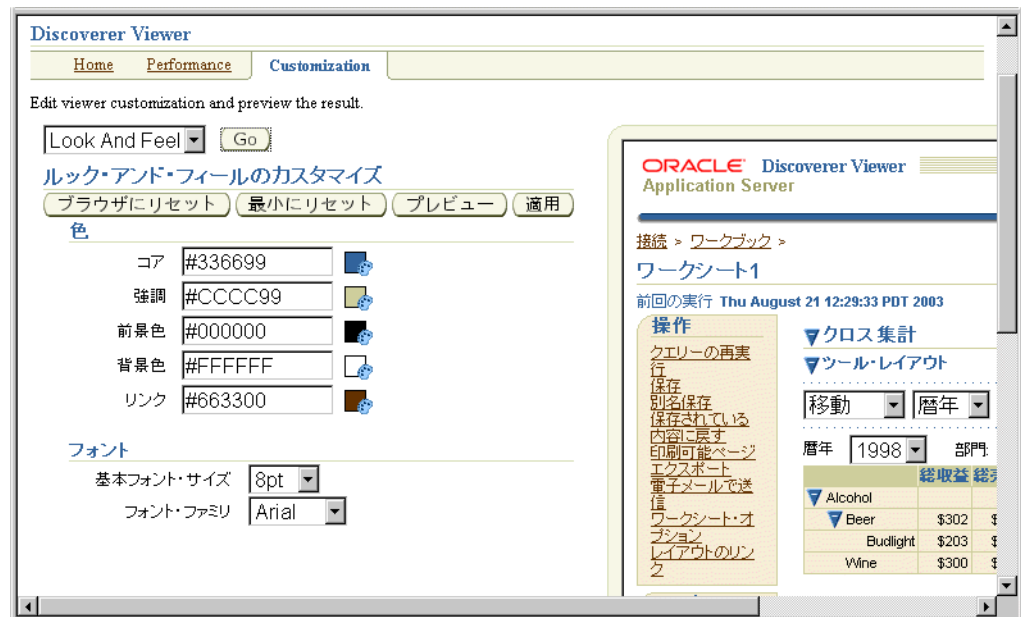
Discoverer Viewer のデフォルトの LAF を変更する手順は、次のとおりです。

1. 構成するマシンの Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#) を参照してください）。

- 「コンポーネント」テーブルの「名前」列で、「Discoverer Viewer」を選択し、Discoverer Viewer のホームページを表示します。



- 「カスタマイズ」タブを表示します。
- 「カスタマイズ」ドロップダウン・リストから「ルック・アンド・フィール」を選択し、「実行」をクリックして「ルック・アンド・フィールのカスタマイズ」ページを表示します。



- 必要に応じて変更を加えます。

たとえば、表示されるすべてのリンクの色を変更するには、「リンク」フィールドの隣のカラー・パレット・アイコンをクリックして、色を選択します。あるいは、適切なフィールドに16進数値を入力できます（#0000FFを入力して青色を使用するなど）。

**注意：**色とフォントに対する変更は、Discoverer Viewer ユーザー・インタフェースに適用されますが、ワークシートのテキスト・スタイルと色には適用されません。ワークシートのテキスト・スタイルと色は、Discoverer Plus Relational および Discoverer Plus OLAP で指定します。

- 「プレビュー」をクリックし、「プレビュー」領域に変更内容を表示します。
- 「適用」をクリックして、変更内容を保存します。
- Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。



**ヒント**: 既存の Discoverer Viewer セッションを実行中の場合は、ブラウザをリフレッシュすると、Discoverer Viewer が更新されて変更が反映されます。

LAF の変更は、Discoverer Viewer ブラウザの新規セッションまたはリフレッシュされたセッションすべてに適用されます。

## 注意

- LAF では、Discoverer Viewer のワークシート自体のテキスト・スタイルおよびセルの色はカスタマイズされません。ワークシートのテキスト・スタイルおよびセル色は、Discoverer Plus で定義します。

ワークシートのテキスト・スタイルおよびセル色を一定にする（すべてのワークシートで同じセル色とテキスト色を使用する）には、Discoverer Plus ユーザーがワークシートのセルのフォーマットを一定にする必要があります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Discoverer Viewer のリンク（「プリファレンス」リンクなど）を表示または非表示にするには、[第 9.2.3 項「デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトの変更方法」](#)を参照してください。

## 9.2.3 デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトの変更方法

カスタマイズしたレイアウトをエンド・ユーザーに提供する場合は、デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトを変更します。たとえば、企業のロゴを変更したり、「プリファレンス」リンクを非表示にできます。

デフォルトの Discoverer Viewer レイアウトを変更する手順は、次のとおりです。

1. 構成するマシンの Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. 「コンポーネント」テーブルの「名前」列で、「Discoverer Viewer」を選択し、Discoverer Viewer のホームページを表示します。



3. 「カスタマイズ」タブを表示します。
4. 「カスタマイズ」ドロップダウン・リストから「レイアウト」を選択し、「実行」をクリックして「レイアウトのカスタマイズ」ページを表示します。





5. 必要に応じて変更を加えます。

たとえば、別のグラフィック・ファイルを使用して、デフォルトの Discoverer Viewer のロゴを別のロゴに置換します。

- a. 「ロゴ」チェック・ボックスを選択します。
- b. 「ファイル」ラジオ・ボタンを選択します。
- c. 「参照」をクリックし、Viewer ページに表示する代替ロゴとして使用するグラフィック・ファイル (mycompanylogo.gif など) を検索します。

**注意:** Discoverer Viewer ロゴを変更した場合、新しいロゴは Discoverer Viewer に接続ページおよび Discoverer Plus に接続ページにも表示されます (詳細は、[第 4.4 項「Discoverer の接続ページ」](#)を参照してください)。

6. 「プレビュー」をクリックし、「プレビュー」領域に変更内容を表示します。

7. 「適用」をクリックして、変更内容を保存します。

8. Discoverer Viewer を実行してワークブックを開きます。

ヒント: 既存の Discoverer Viewer セッションを実行中の場合は、ブラウザをリフレッシュすると、Discoverer Viewer が更新されて変更が反映されます。

レイアウトの変更は、Discoverer Viewer ブラウザの新規セッションまたはリフレッシュされたセッションすべてに適用されます。

## 注意

- Discoverer Viewer の LAF (色やフォントなど) を変更するには、[第 9.2.2 項「デフォルトの Discoverer Viewer の LAF の変更方法」](#)を参照してください。



---

---

## OracleBI Discoverer 作業環境の管理

**注意:** この章の内容は、リレーショナル・ワークシートおよび OLAP ワークシートを使用する Discoverer Plus Relational および Discoverer Viewer にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」を参照してください。

この章では、OracleBI Discoverer 作業環境の管理方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 10.1 項「Discoverer 作業環境」
- 第 10.2 項「Discoverer システム作業環境の概要」
- 第 10.3 項「Discoverer ユーザー作業環境」
- 第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」
- 第 10.5 項「各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法」
- 第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」
- 第 10.7 項「Discoverer 作業環境ファイルを異なるプラットフォームの形式に変換する方法」
- 第 10.8 項「Discoverer 作業環境の移行」

## 10.1 Discoverer 作業環境

Discoverer 作業環境は、Discoverer 環境を定義したり、Discoverer Plus や Discoverer Viewer の動作の制御を行うための設定です。

Discoverer 作業環境には、次の 2 つの種類があります。

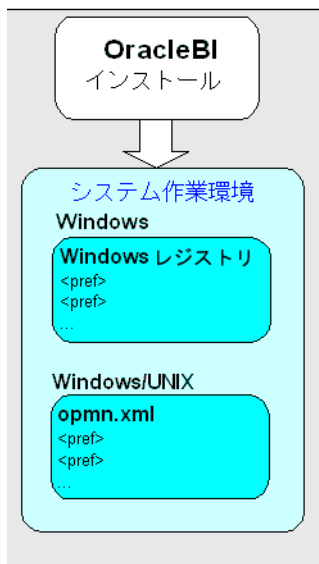
- Discoverer システム作業環境（詳細は、[第 10.2 項「Discoverer システム作業環境の概要」](#)を参照してください）。
- Discoverer ユーザー作業環境（詳細は、[第 10.3 項「Discoverer ユーザー作業環境」](#)を参照してください）。

## 10.2 Discoverer システム作業環境の概要

Discoverer システム作業環境は、インストール時に作成および設定されます。通常、Discoverer システム作業環境を変更する必要はありません。システム作業環境は、次の場所に格納されます。

- UNIX システムでは、Discoverer システム作業環境は opmn.xml ファイル内に格納されます。
- Windows システムでは、Discoverer システム作業環境は Windows レジストリおよび opmn.xml ファイル内に格納されます。

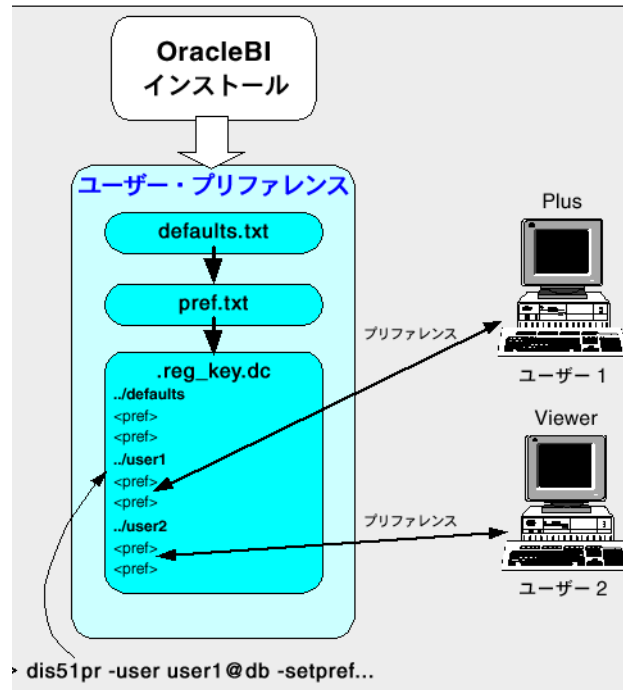
図 10-1 Discoverer システム作業環境



## 10.3 Discoverer ユーザー作業環境

インストール時に、工場出荷時のデフォルト値（defaults.txt に格納）ですべての Discoverer ユーザーのためのユーザー作業環境が作成されます。このユーザー作業環境は、pref.txt に格納されます。

図 10-2 Discoverer ユーザー作業環境



新しいユーザーが OracleBI Discoverer セッションを初めて開始する際、pref.txt ファイルに格納されている設定が、そのユーザーのデフォルト設定として使用されます。

インストールの完了後、ユーザー作業環境は次のような様々な方法で変更できます。

- Discoverer エンド・ユーザーは、Discoverer Plus または Discoverer Viewer 内のオプションを使用して各自のユーザー作業環境を変更できます。たとえば、Discoverer Viewer エンド・ユーザーは、「プリファレンス」をクリックして各自の作業環境を変更できます。各ユーザーが作業環境を変更すると、その変更内容は、Discoverer 中間層にある reg\_key.dc ファイルに格納されます（このファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください）。

各ユーザーの作業環境は、ユーザーごとに、データベースおよびユーザー ID の一意の組合せとして reg\_key.dc ファイルに格納され、ユーザーが新しいセッションを開始するたびにロードされます。したがって、ユーザーが別のクライアント・マシンからログインした場合でも、そのユーザーの設定が適用されます。

たとえば、Discoverer Plus のエンド・ユーザーが「ツール」→「オプション」を選択して「オプション」ダイアログを表示し、「1 ページの行数」値を 15 に変更したとします。すると、そのユーザーの reg\_key.dc には、次のようなエントリが格納されます。

```
"RowsPerHTML"=D4:4:00,00,00,0F
```

'0F' は 15 の 16 進データ値です。

**注意:** ユーザーが作業環境値を変更しないかぎり、作業環境の値は pref.txt ファイルで指定されているものとなります。

- `pref.txt` ファイルの値を変更することで、Discoverer エンド・ユーザーに提示されるデフォルトの作業環境の値を変更できます。変更した設定を有効にするには、変更を適用する必要があります。デフォルト作業環境値の変更の詳細は、[第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」](#)を参照してください。
- Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティを使用して、個々のユーザーの作業環境を変更できます。行った変更は、`reg_key.dc` ファイルに格納されます（各ユーザーの作業環境の変更の詳細は、[第 10.5 項「各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法」](#)を参照してください）。

### 注意

- UNIX 実装では、`.reg_key.dc` は隠しファイルです（ファイル名が `!` で始まります）。隠しファイルを表示するには、コマンド `ls -al` を使用します。
- `reg_key.dc` ファイルを直接編集しないでください。`reg_key.dc` の値は、必ず Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティ `dis51pr` を使用して変更する必要があります（このファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
- `reg_key.dc` ファイルを削除すると、Discoverer エンド・ユーザーによって設定された作業環境、または Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティを使用して設定した作業環境が失われ、`pref.txt` に格納されているデフォルトの作業環境が適用されます。
- `pref.txt` の工場出荷時のデフォルト値は、`defaults.txt` ファイルに含まれています（このファイルの場所は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。`pref.txt` ファイルの編集に誤りがある場合（あるいはこのファイルが消失または破損した場合）、`defaults.txt` を参照して `pref.txt` の内容を元の値に戻してください。
- 数値作業環境の最大値は、`pref.txt` ファイル内に記載されています。
- `pref.txt` ファイルは、Preferences コンポーネントをシャットダウンせずに編集できます。つまり、管理者が `pref.txt` ファイルを編集している間、ユーザーは操作を続行できます。
- Discoverer を複数のマシンにデプロイする場合、中央集中の Discoverer 作業環境のセットを使用できます。これを行うには、Discoverer Preference サーバー・マシンを指定して、他のマシンの Discoverer Preferences コンポーネントを無効にします。詳細は、[第 7.6 項「複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください。

## 10.4 すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法

Discoverer をグローバルに構成する場合、すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定します。すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定するには、Discoverer Preference サーバー上の `pref.txt` ファイルを編集します（Discoverer Preference サーバーの詳細は、[第 7.6 項「複数のマシン環境での Discoverer Preferences コンポーネント」](#)を参照してください）。

**注意:** デフォルトのユーザー作業環境に対して行った変更は、新規エンド・ユーザーまたは自身の設定を変更していないエンド・ユーザーに適用されます。この変更は、自身の設定をすでに変更しているエンド・ユーザーに影響を与えません。

すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する手順は、次のとおりです。

1. ホスト・マシン上で、テキスト・エディタを使用して `pref.txt` ファイルを開きます（`pref.txt` ファイルの場所は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください）。
2. 必要に応じて `pref.txt` ファイル内の項目を編集します。
3. `pref.txt` ファイルを保存します。
4. OracleBI Discoverer サービスを停止します（詳細は、[第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」](#)を参照してください）。

5. applypreferences スクリプトを実行して、作業環境への変更を適用します (applypreferences スクリプトの詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。

applypreferences スクリプトは、ホスト・マシンから実行する必要があります。

**ヒント:** 作業環境が正しく適用されたかを確認するには、現行のディレクトリで error.txt ファイルのエラー・メッセージをチェックします (構成ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。

6. OracleBI Discoverer サービスを起動します (詳細は、[第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」](#)を参照してください)。

## 10.5 各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法

各ユーザーのユーザー作業環境を設定する手順は、次のとおりです。

1. コマンド・プロンプトから、Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティ dis51pr が格納されているディレクトリに移動します (このファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください)。
2. Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティを使用して、次の構文に従ってコマンド・プロンプトにコマンドを入力します。

```
dis51pr -user <user> -setpref <"preference category"> <"preference name">
<"preference value">
```

説明:

- <user> は、作業環境値を設定するユーザーの名前です。その後に @ 記号およびデータベースの名前が続きます (jchan@salesdb など)。
- <"preference category"> は、変更する作業環境のカテゴリです ("Database" など)。
- <"preference name"> は、変更する作業環境の名前です ("DefaultEUL" など)。
- <"preference value"> は、作業環境に設定する値です。

例:

- たとえば、ユーザー jchan のデフォルト EUL を Sales に設定する場合、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
dis51pr -user jchan@salesdb -setpref "Database" "DefaultEUL" ¥¥"Sales¥¥"
```

- ユーザー jchan に対し、データ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリの最大量として 512000 を設定する場合、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
dis51pr -user jchan@salesdb -setpref "Application" "MaxVirtualHeapMem" 512000
```

### 注意

- Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティのオンライン・ヘルプを表示するには、スクリプト名の後ろに -help を付けて入力します (dis51pr -help など)。
- 作業環境の名前および値では、大文字と小文字が区別されます。
- 文字列を作業環境値として指定する場合は、文字列の前に ¥¥" を付け、文字列の後にも ¥¥" を付けます。たとえば、Sales という作業環境値では、「¥¥"Sales¥¥"」と入力します。
- Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティを使用して設定できる Discoverer 作業環境のリストは、[第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」](#)を参照してください。

## 10.6 Discoverer ユーザー作業環境のリスト

このテーブルは、Discoverer ユーザー作業環境のカテゴリ、説明、デフォルト値、および有効な値を示します。

注意：作業環境の最大値は、pref.txt ファイル内に記載されています。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
AdjustPlusFontSize	Application	Java 仮想マシンで、フォント・サイズが他の Windows アプリケーションよりも小さくなる不一致を訂正するために、Discoverer Plus Relational でフォント・サイズを調整するかどうかを指定します。  Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP の間の整合性を維持するには、この値を FALSE に設定する必要があります。	FALSE	TRUE = フォント・サイズを調整する。  FALSE = フォント・サイズを調整しない。
AggregationBehavior	Application	ローカルで集計できない値を、Discoverer によって線形集計するかどうかを指定します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
AllowAggregationOverRepeatedValues	Application	繰返し値を集計するかどうか指定します。0 に設定すると、集計不可のラベル (N/A など) が表示されます。	0	0 = 繰返し値を集計しない。 1 = 繰返し値を集計する。
AppsFNDNAM	Database	Oracle Applications のデータを格納する際のスキーマを指定します。	APPS	有効な Apps Foundation Name
AppsGWYUID	Database	AOL セキュリティ DLL のパブリック・ユーザー名およびパブリック・パスワードを指定します。	APPLSYSPUB/ PUB	有効な Apps ユーザー名およびパスワード
AvoidServerWildcardBug	Database	Discoverer ではデータベースでのワイルドカードの発行を避けるかどうかを指定します。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
Axis Grid Style	Crosstab	アイテム・ラベルのグリッドを 3 次元 (3D) スタイルで表示するかどうかを指定します。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
Axis Labels	Crosstab	アイテム・ラベルを表示するかどうかを指定します。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
AxisLabelBehavior	Application	Discoverer が軸ラベルをワークシートの一部としてエクスポートするかどうかを指定します。	1	1 = 軸ラベルをエクスポートする。 2 = 軸ラベルをエクスポートしない。 3 = Discoverer Desktop と同じエクスポート・フォーマットを使用する。
Axis Style	Crosstab	クロス集計の軸位置を指定します。	2	1 = インライン 2 = アウトライン



ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
BusinessAreaFastFetchLevel	Database	ビジネスエリアを取り出す際に事前にキャッシュするコンポーネントやアイテムの量を指定します。	1	1
CacheFlushPercentage	Application	キャッシュがいっぱいになった場合に、消去するキャッシュの割合(パーセント)を指定します。	25	ユーザー指定
CellGridColor	Application	Discoverer のデフォルトのセル色を指定します。値は、0xrrggbb フォーマットで RGB 色コードの整数値に設定する必要があります。このフォーマットの意味は、次のとおりです。 rr = 赤の 16 進データ値 gg = 緑の 16 進データ値 bb = 青の 16 進データ値	0	ユーザー指定
CellPadding	Application	表示または印刷するときの、テーブルまたはクロス集計内の各セル値の周囲の余白を指定します (ピクセル単位)。たとえば、0=0 ピクセル、1=1 ピクセル、2=2 ピクセルです。 <b>注意:</b> この値を 0 に設定すると余白がなくなり、印刷されるレポートのサイズが小さくなります。 <b>ヒント:</b> レポートの印刷サイズの縮小の詳細は、PrintHeadersOnce 作業環境を参照してください。	1	ユーザー指定 <b>ヒント:</b> ワークシートのレイアウトの問題を避けるため、5 を超える値を指定しないでください。
Cell XGridline	Application	水平罫線および垂直罫線を表示するかどうかを指定します。 <b>注意:</b> 水平罫線および垂直罫線の両方を非表示にするには、Cell XGridline および Cell YGridline を両方とも 0 に設定する必要があります。Cell XGridline または Cell YGridline のいずれかに 1 が設定されていると、水平罫線と垂直罫線はどちらも表示されます。	0	0 = 表示しない。 1 = 表示する。
Cell YGridline	Application	水平罫線および垂直罫線を表示するかどうかを指定します。 <b>注意:</b> 水平罫線および垂直罫線の両方を非表示にするには、Cell XGridline および Cell YGridline を両方とも 0 に設定する必要があります。Cell XGridline または Cell YGridline のいずれかが 1 に設定されていると、水平罫線と垂直罫線はどちらも表示されます。	0	0 = 表示しない。 1 = 表示する。
ColsPerPage	Application	次のスクロールの前に Discoverer Viewer に表示する列数を指定します。	128	ユーザー指定
Column Headings	Application	列ヘッダーを表示するかどうかを指定します。	1	0 = オフ 1 = オン
Column Width	Application	デフォルトの列幅をピクセルで指定します。	100	1 より大きい

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
Data Format	Application	ワークシート・データ・セルに HTML フォーマットを適用するかどうかを指定します。	'<fontFormat fontName="Dialog' pitch='11' bold='false' italic='false' underline='false' strikethrough='false' foreground='0,0,0' background='255,25 5,255' halign='right' valign='top' wordWrap='true'>< /fontFormat>'	ユーザー指定
DefaultEUL	Database	すべてのユーザーが接続する EUL を指定します。各ユーザーは、Discoverer Plus の「オプション」ボックスからこのデフォルトを変更できます。	作成した任意の EUL	任意の有効な EUL
DefaultExportPath	Application	Discoverer Plus Relational にデフォルトのエクスポート・パスを指定します。  "" に設定すると、エクスポートされたファイルはクライアント・ブラウザ・マシンのホーム・ディレクトリ（Windows のプロファイル・ディレクトリ）に保存されます。たとえば、Windows XP クライアント上では、このパスは c:\Documents and Settings\<Windows ユーザー名 > のようになります。	""	ユーザー指定
DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh	Database	リフレッシュの際に、更新したアイテムの説明を破棄して元の説明に置き換えるか、または更新した説明を保持するかを指定します。	0	0 = 更新した説明を使用する。 1 = 元の説明を使用する。
DefaultTextArea	Application	新規ワークシートのテキスト・エリアにデフォルトのワークシート・テキストを指定します。	< 空白 >	ユーザー指定
DefaultTitle	Application	新規ワークシートにデフォルトのワークシート・タイトルを指定します。	< 空白 >	ユーザー指定
DisableAlternateSortOptimization	Database	最適化した Alternate Sort クエリを Discoverer で書き込むかどうかを指定します。  <b>ヒント</b> : 外部で登録したサマリーを使用する場合のみ 1 に設定します。	0	0 = 最適化した Alternate Sort クエリを書き込まない。 1 = 最適化した Alternate Sort クエリを書き込む。
DisableAutoOuterJoinsOnFilters	Database	適用する条件に外部結合が含まれるクエリを実行する場合の Discoverer の動作を指定します。  この設定による影響の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	0	0 = フィルタで外部結合を無効にしない。 1 = フィルタで外部結合を無効にする。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
DisableAutoQuery	Database	ワークシートを開いたときに自動的にクエリーを実行し、ワークシート・データを表示するかどうかを指定します。	0	0 = クエリーを実行する。 1 = クエリーを実行しない。
DisableClassicExports	Application	Discoverer Plus からのデータのエクスポートを許可するかどうかを指定します。この値が FALSE に設定されている場合、Discoverer Plus では SLK、DIF および WKS フォーマットへのエクスポートは無効です。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
DisableFanTrapDetection	Database	解決不能なファントラップに関するユーザーのクエリーを検出する機能を無効にするかどうかを指定します。	0	0 = ファントラップ検出を有効にする。 1 = ファントラップ検出を無効にする。
DisableFanTrapResolution	Database	ファントラップを解決するかどうかを指定します。Discoverer でのファントラップの解決の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	0	0 = ファントラップを解決する。 1 = ファントラップを解決しない—純粋なデカルト積が取得されます。
DisableMultiJoinDetection	Database	Discoverer Plus でワークシートを作成する際、複数の結合パスの検出を使用するかどうかを指定します。  この設定が 1 の場合、ワークシートを作成する際、Discoverer Plus によりすべての結合オプションが選択されます。  この設定が 0 で、複数結合が存在する場合は、Discoverer Plus により「フォルダの結合」ダイアログが表示され、Discoverer Plus ユーザーはこのダイアログでワークシートに使用する結合を選択します。 <b>注意:</b> Discoverer が正確な結果データを表示できるように、使用可能なすべての結合を選択することをお勧めします。	0	0 = 複数結合検出を無効にしない。 1 = 複数結合検出を無効にする。
EnableTriggers	Database	データベース・トリガーを無効にするかどうかを指定します。  たとえば、Discoverer はリフレッシュ中に検出されたすべての新規の列に対してデータベース・コールを試みます。この値を 0 (ゼロ) に設定すると、Discoverer はデータベース・コールを行いません。	0	0 = データベース・トリガーを無効にする。 1 = データベース・トリガーを有効にする。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
EnableWebQueryRun	Application	Microsoft Excel でクエリーを実行する場合、Microsoft Excel に Discoverer のレスポンス・メッセージを表示するかどうかを指定します。 ExportToWebQuery、WebQueryBaseURL も参照してください。	該当なし	0 = オフ 1 = オン
EnhancedAggregationStrategy	Database	拡張データ集計操作を使用するかどうか、また、使用する場合はどの SQL 生成方法を使用するかを指定します。 この値の設定の詳細は、第 10.6.1 項「EnhancedAggregationStrategy ユーザー作業環境設定」を参照してください。	1	0 = オフ 1 = 厳格なグルーピング・セット 2 = 最適化 3 = キューブ 4 = 自動判別
EUL Object Navigator	Application	Discoverer Plus Relational に「選択可能なアイテム」ペインをデフォルトで表示するかどうかを指定します。 「選択可能なアイテム」ペインがデフォルトで表示されない場合、エンド・ユーザーは、「表示」→「選択可能なアイテム・ウィンドウ」を選択してこれを表示できます。 「選択済アイテム」ペインの表示および非表示の詳細は、Selected Object Navigator も参照してください。	1	0 = デフォルトで表示しない。 1 = デフォルトで表示する。
EuroCountries	Application	ユーロ通貨を使用する国の Java ロケールのカンマ区切りのリストを指定します (en_IE など)。	ユーロを使用する国のリスト (de,de_AT,de_DE,de_LI など)	ユーロ通貨を使用する国の Java ロケールのカンマ区切りのリスト (en_IE など)
ExcelExportWithMacros	Application	Excel ファイルのエクスポート時にマクロをエクスポートするかどうかを指定します。 <b>注意:</b> ピボット・テーブルを機能させるにはマクロを有効にする必要があります。	1	0 = マクロはエクスポートしない。 1 = マクロもエクスポートする。
Exception Format	Application	ワークシートで例外としてフォーマットされたセルに適用する HTML フォーマットを指定します。	'<fontFormat fontName='Dialog' pitch='11' bold='false' italic='false' underline='false' strikethrough='false' foreground='0,0,0' background='247,247,231' halign='left' valign='top' wordWrap='true'>	ユーザー指定

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ExportGroupSortedItemsAsBlank	Application	Discoverer クロス集計ワークシートの左側の繰返し値を表示するか、または NULL に置換するかを指定します。たとえば、左の軸に Month (月) を表示している場合、ワークシートを CSV フォーマットにエクスポートする際、各行に月名を繰返して必要なデータをすべてエクスポートできます。	1	0 = 繰返し値を表示する。 1 = 繰返し値を NULL 値として表示する。
ExportJoinFromMaster	Database	ビジネスエリアをエクスポートする場合、マスター・フォルダからの結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	0 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートする。 0 以外の値 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートしない。
ExportToWebQuery	Application	Discoverer Plus および Discoverer Viewer のエンド・ユーザーがワークシートを Web クエリ (*.IQY) のフォーマットにエクスポートできるかどうかを指定します。  通常、この作業環境を追加して値を 0 (ゼロ) に設定し、Web クエリのフォーマットへのエクスポートを無効にします。  この作業環境が指定または適用されない場合、デフォルト値は 1 です。  Web クエリへのエクスポートが有効な場合は、Discoverer エンド・ユーザーがワークシートをエクスポートすると、使用可能なエクスポート・タイプのリストにこのフォーマットが表示されます。  WebQueryBaseURL、EnableWebQueryRun も参照してください。	1	0 = オフ 1 = オン
genericHeaderScroll	Application	Discoverer Plus Relational でエンド・ユーザーが長いヘッダーをスクロールできるようにするかどうかを指定します。  クロス集計に長い行ヘッダーが含まれる場合、ヘッダー内でスクロールができないと、データの表示が困難になることがあります。	FALSE	FALSE = ヘッダー内でのスクロールを有効にしない。 TRUE = ヘッダー内でのスクロールを有効にする。
GraphAxesAutoScaledFromZero	Application	グラフの軸スケールのデフォルト最小値を 0 にするかどうかを指定します。  1 に設定すると、最小スケール値は 0 に設定されます。そうでない場合は、Discoverer によって最小スケール値が自動的に選択されます。	1	0 = スケールを 0 にしない。 1 = スケールを 0 にする。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
GraphDataModel	Application	散布図の表示に使用するデータ・モデルを指定します。	0	0 = Discoverer Plus スタイル 1 = Discoverer Desktop スタイル 2 = Excel (テーブル) スタイル
GraphShowRollup Aggregates	Application	グラフに ROLLUP 集計を表示するかどうかを指定します。たとえば、アウトライン・クロス集計ワークシートで、グラフにドリルダウン値のみを表示し、ROLLUP 集計値を表示しないようにできます。  たとえば、2003 年度の売上をドリルダウンして各月の値を表示する場合、グラフには各月 (1 月、2 月など) の値のみが必要で、2003 年度の集計値を表示する必要はありません。	1	0 = 表示しない。 1 = 表示する。
Grid Line Color	Application	グラフのグリッド線にデフォルトの色を指定します。	黒	ユーザー指定
Heading Format	Application	ワークシートのヘッダー・セルに適用する HTML フォーマットを指定します。	'<fontFormat fontName='Dialog' pitch='11' bold='false' italic='false' underline='false' strikethrough='false' foreground='0,0,0' background='247,247,231' halign='left' valign='top' wordWrap='true'> </fontFormat>'	ユーザー指定
ItemClassDelay	Database	値のリストを取り出す際のタイムアウト値 (秒) を指定します。	15	ユーザー指定
MaterializedViewRedirectionBehavior	Database	マテリアライズド・ビューのリダイレクションを使用するかどうかを指定します。	0	0 = 利用できる場合は常に使用する。 1 = サマリー・データが失効していない場合は常に使用する。 2 = 使用しない。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
MaxRowsPerFetch	Database	データベースからの各フェッチで取得されるデータベース行の数を、次のように指定します。  MaxRowsPerFetch の値が RowsPerFetch の値よりも大きい場合は、RowsPerFetch の値を使用する。  MaxRowsPerFetch の値が RowsPerFetch の値よりも小さいか等しい場合は、MaxRowsPerFetch の値を使用する。  RowsPerFetch の値が設定されていない場合は、MaxRowsPerFetch の値を使用する。  RowsPerFetch も参照してください。	250	ユーザー指定 最小値 = 1 最大値 = 1000
MaxVirtualDiskMem	Application	データ・キャッシュに使用できるディスク・メモリの最大容量を (バイト単位で) 指定します。 最小値 = 0。最大値 = 4GB。	1024000000	ユーザー指定
MaxVirtualHeapMem	Application	データ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリの最大容量を (バイト単位で) 指定します。 最小値 = 0。最大値 = 4GB。	5120000	ユーザー指定
MeasurementUnits	Application	「ページ設定のマージン」ダイアログおよび「列の幅」ダイアログ (Discoverer Plus) のワークシート・マージンに測定単位を指定します。  <b>注意:</b> Discoverer Viewer ではポイントは使用しません。	0	0 = ポイント 1 = インチ 2 = センチメートル
MRUEnabled	Application	Discoverer Plus Relational で最近使用されたワークブックのリストを表示するかどうかを指定します。	1	0 = 表示しない。 1 = 表示する。
NonAggregableValue	Application	ワークシートの集計不可のセルに表示されるデフォルト値を指定します。  適用した集計関数が集計対象の値に対し矛盾したものである場合、そのセルは集計不可とされます。	"N/A"	ユーザー指定
NotifyNewRunsOnConnect	Application	新しいスケジュール済ワークシートの結果が使用可能な場合、ログインしているエンド・ユーザーに通知するかどうかを指定します。	0	0 = 新しいスケジュール・ワークシートの結果が使用可能な場合に通知しない。  1 = 新しいスケジュール・ワークシートの結果が使用可能な場合に通知する。
NullValue	Application	ワークシートに NULL 値を表示する方法を指定します。たとえば NULL、N/A、0 などです。	NULL	ユーザー指定

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ObjectsAlwaysAccessible	Database	ビジネスエリアのオブジェクトおよびアイテムを、それらの基礎となるデータベース・テーブルが存在しない場合（または、別の理由によってアクセスできない場合）にも表示するかどうかを指定します。	1	0 = 検証する。 1 = 検証を行わず、オブジェクトおよびアイテムが存在するものとみなす。
PredictionThresholdSeconds	Database	予測クエリー時間が超過すると Discoverer エンド・ユーザーに警告する時間しきい値（秒）を指定します。	60	ユーザー指定
PredictionThresholdSecondsEnabled	Database	PredictionThresholdSeconds を使用するかどうかを指定します。	1	0 = 使用しない。 1 = 使用する。
PrintHeadersOnce	Application	列ヘッダーを各ページに印刷するか、最初のページのみ印刷するかを指定します。 <b>注意:</b> この値を 1 に設定すると、Discoverer Plus が生成するページ数が減少します（ヘッダーが繰り返されるクロス集計ワークシートの場合など）。 <b>ヒント:</b> レポートの印刷サイズの縮小の詳細は、CellPadding 作業環境を参照してください。	0	0 = 列ヘッダーを各ページに印刷する。 1 = 列ヘッダーを 1 回のみ印刷する。
PrintPercentageOfTitle	Application	ワークシートのタイトルが長すぎて 1 ページに印刷できない場合、印刷するワークシート・タイトルの割合（パーセント）を指定します。 たとえば、60 に設定すると、タイトルが長すぎる場合、ページの 60% までの位置で切り捨てられます。 0 に設定すると、タイトルは印刷されません。設定された値が有効範囲外の場合は、直近の最小値または最大値がデフォルトで使用されます。たとえば、80 に設定すると、Discoverer により最大値 (60) がデフォルトで使用されます。	60	ユーザー指定 最小値 = 0 最大値 = 60



ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ProtocolList	Application	<p>Discoverer Plus のドリル・リンクに使用できるインターネット・プロトコルのリストを指定します。この指定は Discoverer Plus のデフォルトのインターネット・プロトコル (HTTP、HTTPS、FTP) よりも優先されます。たとえば、次のように指定します。</p> <p>ProtocolList=mailto,gopher,telnet,https</p> <p>この作業環境を指定しない場合は、リストに含まれているインターネット・プロトコルのみが許可されます。たとえば、この作業環境が ProtocolList=https に設定されている場合、他のすべてのプロトコル (HTTP、FTP など) は許可されません。</p> <p>pref.txt ファイルでこの作業環境を指定しない場合、Discoverer では HTTP、HTTPS および FTP が許可されます。</p>	該当なし	ユーザー指定の有効なインターネット・プロトコル
QPPAvgCostTimeAlgorithm	Database	クエリー統計に基づくクエリー予測時間の計算方法を指定します。	2	<p>1 = コストにかかわらず、算出された見積りの前後 5 つの統計を使用する。</p> <p>2 = コストに基づいて直近の 10 の統計を使用する。</p>
QPPCBOEnforced	Database	クエリー予測 SQL にコスト・ベースのオプティマイザを強制的に使用するかどうかを指定します。	2	<p>0 = クエリー予測 SQL にコスト・ベースのオプティマイザを強制的に使用しない。</p> <p>1 = クエリー予測 SQL にコスト・ベースのオプティマイザを強制的に使用する。</p> <p>2 = リソース 8.1.7 以前のデータベースでのみ、クエリー予測 SQL にコスト・ベースのオプティマイザを強制的に使用する。</p>
QPPCreateNewStats	Database	1 に設定すると、新規の統計が記録されます。	1	<p>0 = FALSE</p> <p>1 = TRUE</p>
QPPEnable	Database	1 に設定した場合、クエリー予測 / パフォーマンス (QPP) を使用します。	1	<p>0 = FALSE</p> <p>1 = TRUE</p>
QPPLoadStatsByObjectUseKey	Database	1 に設定すると、同じオブジェクトの統計が最初に記録されます。	1	<p>0 = FALSE</p> <p>1 = TRUE</p>

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
QPPMaxObjectUseKey	Database	クエリー予測用にメモリーにキャッシュする統計量を決定します。	30	ユーザー指定
QPPMaxStats	Database	設定値の数のみ、以前の統計がロードされます。	500	ユーザー指定
QPPMinActCpuTime	Database	CPU 時間がこの値より大きい統計のみ記録または使用します。	0	ユーザー指定
QPPMinActElapsedTime	Database	実際の経過時間がこの値より大きい統計のみ記録または使用します。	0	ユーザー指定
QPPMinCost	Database	コストがこの値より大きい統計のみ記録または使用します。	0	ユーザー指定
QPPMinEstElapsedTime	Database	推定経過時間がこの値より大きい統計のみ記録または使用します。	0	ユーザー指定
QPPObtainCostMethod	Database	クエリーのコストの取得方法を制御します。	1	0 = 実行計画を使用してコストを取得する。 1 = 動的ビューを使用してコストを取得する。
QPPUseCpuTime	Database	クエリー予測のアルゴリズム内で CPU 時間を使用します。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
QueryBehavior	Application	ワークブックを開いた後のアクションを指定します。	0	0 = クエリーを自動で実行する。 1 = クエリーを実行しない。 2 = クエリーを実行するかどうかを確認する。
QuerySQLFastFetchLevel	Database	SQL 生成中に行われる事前キャッシュの量を制御します。	1	0 = 高速フェッチなし 1 = 高速フェッチ (低速) 2 = 高速フェッチ (標準速) 3 = 高速フェッチ (高速) 4 = 高速フェッチ (最高速)
QueryTimeLimit	Database	クエリー時間の上限 (秒) を指定します。	1800	ユーザー指定 最小値 = 1 最大値 = なし
QueryTimeLimitEnabled	Database	クエリー時間の制限を無効 (0) または有効 (1) にします。	1	0 = 無効にする。 1 = 有効にする。
RdbFastSQLOff	Database	Oracle RDB データベースに対して fast SQL オプションをオフにするかどうかを制御します。	0	0 = オフ 1 = オン
Row Headings	Table	テーブル形式のワークシート上に行番号を表示します。	0	0 = 表示しない。 1 = 表示する。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
RowFetchLimit	Database	取り出す行の最大数を指定します。	10000	ユーザー指定 最小値 = 1 最大値 = なし
RowFetchLimitEnabled	Database	RowFetchLimit パラメータを無効 (0) または有効 (1) にします。	1	0 = 無効にする。 1 = 有効にする。
RowsPerFetch	Database	データベースから一度に取り出す行数。 RowsPerFetch の値が MaxRowsPerFetch の値よりも小さいか等しい場合は、RowsPerFetch の値が使用されます。 RowsPerFetch の値が MaxRowsPerFetch の値よりも大きい場合は、MaxRowsPerFetch の値が使用されます。 RowsPerFetch の値が設定されていない場合は、MaxRowsPerFetch の値が使用されます。	250	ユーザー指定 最小値 = 1 最大値 = 10000
RowsPerHTML	Session Manager	次のスクロールの前に Discoverer Viewer に表示する行数を指定します。 たとえば、データが 10 行ある場合、Discoverer では 2 ページにまたがって表示されます。	25	ユーザー指定
SaveLastUsedParamValue	Application	ワークブックを保存する際、最も最近使用されたパラメータ値を保存するか、または次にワークブックを開いたときにデフォルトのパラメータ値に戻すかを指定します。	0	0 = 最も最近使用されたパラメータ値を保存せず、次にワークブックを開いたときはデフォルトのパラメータ値を使用する。 1 = 最も最近使用されたパラメータ値を保存し、次にワークブックを開いたときにこの値を適用する。
ScatterGraphDataModel	Application	Discoverer での散布図の描画に使用するデータ・モデルを指定します。	0	0 = Discoverer Plus スタイル 1 = Discoverer Desktop スタイル 2 = Microsoft Excel スタイル

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
Selected Object Navigator	Application	Discoverer Plus Relational に「選択済のアイテム」ペインをデフォルトで表示するかどうかを指定します。 「選択済のアイテム」ペインがデフォルトで表示されない場合、エンド・ユーザーは、「表示」→「選択済アイテム・ウィンドウ」を選択してこれを表示できます。 「選択可能なアイテム」ペインの表示および非表示の詳細については、EUL Object Navigator も参照してください。	1	0 = デフォルトで表示しない。 1 = デフォルトで表示する。
SetNULLItemHeadingOnBulkLoad	Database	バルク・ロードを実行する際に、アイテム・ヘッダーをアイテム表示名と同じ値に設定するか、または NULL に設定するかを指定します。	0	0 = アイテム・ヘッダーをアイテム表示名に設定する。 1 = アイテム・ヘッダーを NULL に設定する。
Show Axis Grids	Crosstab	アイテム・ヘッダーに罫線を表示するかどうかを指定します。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
ShowDialogBitmaps	Application	エンド・ユーザーの「Discoverer Plus」ダイアログに、ビットマップ・グラフィックを表示するかどうかを指定します。	1	0 = オフ 1 = オン
ShowDrillIcon	Application	ワークシートのドリル・アイコンを表示または非表示にします。	TRUE	TRUE FALSE
ShowExpiredRunsOnExit	Application	終了時に、エンド・ユーザーに期限切れまたは削除されたスケジュール済ワークシートの結果について通知するかどうかを指定します。	0	0 = 期限切れまたは削除されたスケジュール・ワークシートの結果について通知しない。 1 = 期限切れまたは削除されたスケジュール・ワークシートの結果について通知する。
ShowFormatToolBar	Application	Discoverer Plus にデフォルトで「フォーマット・バー」ツールバーを表示するかどうかを指定します。	TRUE	TRUE = ツールバーを表示する。 FALSE = ツールバーを表示しない。
ShowGraphToolBar	Application	Discoverer Plus に「グラフ」ツールバーをデフォルトで表示するかどうかを指定します。	TRUE	TRUE = ツールバーを表示する。 FALSE = ツールバーを表示しない。
ShowJoins	Application	Discoverer アイテム・ナビゲータに結合情報を表示するかどうかを指定します。たとえば、Discoverer Plus の「選択可能なアイテム」ペイン内です。	FALSE	TRUE = 結合情報を表示する。 FALSE = 結合情報を表示しない。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
ShowStandardToolBar	Application	Discoverer Plus に「標準」ツールバーをデフォルトで表示するかどうかを指定します。	TRUE	TRUE = ツールバーを表示する。 FALSE = ツールバーを表示しない。
ShowTextArea	Application	Discoverer Plus (および Viewer) にテキスト・エリアをデフォルトで表示するかどうかを指定します。	TRUE	0 = オフ 1 = オン
ShowTitle	Application	Discoverer Plus (および Viewer) にタイトル・エリアをデフォルトで表示するかどうかを指定します。	TRUE	0 = オフ 1 = オン
SQLTrace	Database	Discoverer により、分析のため SQL 文をトレース・ファイルにコピーするかどうかを指定します。 詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	0	0 = FALSE 1 = TRUE
SQLFlatten	Database	Discoverer で SQL のフラット化を試行し、クエリー SQL のインライン・ビューの使用を最小化するかどうかを指定します。 詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
SQLItemTrim	Database	Discoverer により、無関係なアイテムまたは使用されていないアイテムの SQL の切捨てを試行するかどうかを指定します。 詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
SQLJoinTrim	Database	Discoverer により、使用されていない結合の SQL からの削除を試行するかどうかを指定します。 詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	1	0 = FALSE 1 = TRUE
SQLType	Database	Discoverer Plus の「SQL インспекタ」ダイアログに表示する SQL スタイルを指定します。 詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。	2	0 = フラット化 2 = フラット化しないデフォルト SQL 3 = オブジェクト別名のないフラット化 SQL
SummaryObjectsUseCachedAccessibility	Database	キャッシュ内のサマリー導出オブジェクトにアクセスするかどうかを指定します。	0	0 = 無効にする。 1 = 有効にする。
SummaryThreshold	Database	サマリー・テーブルがこの日数以内に更新されている場合にのみ、サマリー・テーブルを使用します。	60	ユーザー指定 または 0 = サマリーを使用しない。

ユーザー作業環境名	カテゴリ	説明	デフォルト値	有効な値
SummaryThreshold Enabled	Database	有効 (1) にすると、SummaryThreshold で指定した値が使用されます。そうでない場合、Discoverer は使用できる限りサマリー・テーブルを使用します。	1	0 = 無効にする。 1 = 有効にする。
Timeout	Session Manager	Discoverer Plus がアイドル・セッションを切断するまでの時間 (秒数) を指定します。最小時間は 180 秒です (詳細は、第 10.6.2 項「Discoverer のタイムアウト値の設定」を参照してください)。  Discoverer Viewer のタイムアウトを設定するには、web.xml ファイル内の session-timeout 値を設定します (詳細は、第 10.6.3 項「Discoverer Viewer のタイムアウト値の設定方法」を参照してください)。	1800	ユーザー指定 最小値 = 180
Totals Format	Application	ワークシート内の総計セルに HTML フォーマットを適用します。	"<fontFormat fontName="Dialog" pitch="11" bold="false" italic="false" underline="false" strikethrough="false" foreground="0,0,0" background="247,247,231" valign="top" wordWrap="true"> </fontFormat>"	ユーザー指定
UseOptimizerHints	Database	オブティマイザ・ヒントを SQL に追加するかどうかを指定します。	0	0 = オフ 1 = オン
WebQueryBaseURL	Application	基になる Discoverer の URL (http://machine-name:port#/discoverer/viewer など) を指定します。指定または適用されない場合、Discoverer ではデフォルトの Discoverer Viewer URL が使用されます。  ExportToWebQuery、EnableWebQueryRun も参照してください。	<Discoverer Viewer URL>	ユーザー指定

## 10.6.1 EnhancedAggregationStrategy ユーザー作業環境設定

EnhancedAggregationStrategy ユーザー作業環境では、Discoverer Plus および Discoverer Viewer が Oracle9i 以上のデータベースの拡張集計操作機能をどのように使用するかを指定します。

この設定により、クエリー用に生成される SQL を制御します。この設定で、データベースから取得する集計レベルとクライアントのリクエストとが正確に一致している必要があるかどうか、あるいはクライアントからのリクエストより多くの集計レベルをデータベースから取得するかどうかを指定できます。

次のテーブルは、EnhancedAggregationStrategy ユーザー作業環境設定の詳細です。

値	説明
0	<p>オフ</p> <p>生成された SQL は、標準の GROUP BY 句を含みます。</p>
1	<p>厳格なグルーピング・セット</p> <p>生成された SQL は、Discoverer による GROUPING SET リクエストに正確に一致する GROUPING SET リクエストを含みます。Discoverer が行うリクエストは、エンド・ユーザーがワークシートをどのように作成したかによって決まります。</p> <p>たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。</p> <p>GROUP BY GROUPING SETS( (Department, Region, Year),(Department),())</p> <p><b>注意:</b> パフォーマンスを最大化する場合は、この値を使用します。この値がデフォルトです。</p>
2	<p>最適化</p> <p>生成された SQL は、追加の ROLLUP 関数を持つ GROUPING SET リクエストを含みます。ROLLUP 関数を使用すると、SQL によって、Discoverer のリクエストより多くの集計レベルを取り出すことができます。これにより、エンド・ユーザーがデータベースに再度クエリーを行うことなく、総計の集計およびピボットが可能です。</p> <p>たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。</p> <p>GROUP BY GROUPING SETS(ROLLUP(Department, Region, Year), ROLLUP(Region, Year))</p> <p><b>注意:</b> ワークシートの使用時にユーザーがドリルダウンやピボット操作を頻繁に行う場合に、この値を使用します。</p>
3	<p>キューブ</p> <p>生成された SQL は、リクエストされたアイテムの CUBE のための GROUPING SET リクエストを含みます。これは、データベースから取り出す集計レベルについての最高のプリフェッチ方針です。クエリー時間とリソースの利用が拡大し、パフォーマンス・オーバーヘッドの重大な問題が発生する可能性があるため、注意して使用する必要があります。</p> <p>たとえば、生成された GROUP BY 句は次のようになります。</p> <p>GROUP BY GROUPING SETS(CUBE(Department, Region, Year))</p>
4	<p>自動判別</p> <p>Discoverer が使用する方針を、前述の 1、2、3 の中から自動的に判別します。</p>

## 10.6.2 Discoverer のタイムアウト値の設定

Discoverer タイムアウトを指定すると、指定した時間内にユーザーからのアクションが何もなかった場合、Discoverer セッションを自動でシャットダウンします。この場合、Discoverer がシャットダウンする前に、警告メッセージが表示されます。たとえば、Discoverer セッションが 10 分間使用されないと、Discoverer セッションはシャットダウンします。Discoverer を再度使用するには、Discoverer エンド・ユーザーは接続しなおす必要があります。

Discoverer のタイムアウト値は次のように指定します。

- Discoverer Plus では、`pref.txt` ファイル内の `Timeout` 値にタイムアウトの値を指定します（詳細は、第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」の `Timeout` 作業環境を参照してください）。
- Discoverer Viewer では、`web.xml` ファイルの `session-timeout` 値でタイムアウトの値を指定します（詳細は、第 10.6.3 項「Discoverer Viewer のタイムアウト値の設定方法」を参照してください）。

## 10.6.3 Discoverer Viewer のタイムアウト値の設定方法

Discoverer Viewer のタイムアウトの値を設定する手順は、次のとおりです。

1. XML エディタまたはテキスト・エディタで `web.xml` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください）。
2. `session-timeout` タグを見つけます。たとえば、次のようなタグです。

```
<session-timeout>10</session-timeout>
```

- `web.xml` ファイルに `session-config` タグが含まれている場合は、必要に応じて `session-timeout` 値（分単位）を更新します。
- `web.xml` ファイルに `session-config` タグが含まれていない場合は、ファイル末尾の `</web/app>` の直前に、次のテキストを追加します。

```
<session-config>
<session-timeout>10</session-timeout>
</session-config>
```

**注意:** 必要に応じて、10 分を指定している値 '10' を変更します。

3. `web.xml` ファイルを保存します。
4. Discoverer コンポーネントを再起動します（詳細は、第 5.5 項「Discoverer サブレットを起動および停止する方法」を参照してください）。

Discoverer Viewer を次に再起動すると、指定したタイムアウト値が適用されます。

## 10.7 Discoverer 作業環境ファイルを異なるプラットフォームの形式に変換する方法

Oracle Business Intelligence Discoverer では、レジストリ設定は `reg_key.dc` ファイルに格納されます。Discoverer のインストールをあるプラットフォームから別のプラットフォーム（Windows から Solaris など）に移動する場合、`reg_key.dc` ファイルを変換して整数値の形式を変換（BigEndian 形式から LittleEndian 形式に）する必要があります。整数値の形式を変更するには、Oracle Business Intelligence とともにインストールされる `convertreg.pl` スクリプトを使用します。構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください。

次のプラットフォームの間で移動する場合は、`reg_key.dc` ファイルを変換する必要があります。

- Windows/Linux から Solaris/HPUX/AIX
- Solaris/HPUX/AIX から Windows/Linux



**注意:** Windows と Linux の間では、reg\_key.dc ファイルの変更に convertreg.pl スクリプトを使用しないでください。

Discoverer 作業環境ファイルを異なるプラットフォームの形式に変換するには、次のようにします。

1. reg\_key.dc ファイルをソース・マシンからターゲット・マシン (Windows マシンから Solaris マシンなど) にコピーします。
2. ターゲットの Oracle Business Intelligence インストールの際に、コマンド・プロンプトで convertreg.pl スクリプトを実行します。

```
perl convertreg.pl <古いファイル名> <新しいファイル名>
```

説明:

- <古いファイル名> は元の reg\_key.dc ファイルの名前です。
- <新しいファイル名> は、convertreg.pl スクリプトで生成されるファイルに付ける名前です。

**注意:** 構成ファイルの場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

たとえば、ソース・ファイルの名前が windows\_reg\_key.dc であれば、次のように入力できます。

```
pl convertreg.pl windows_reg_key.dc solaris_reg_key.dc
```

3. 必要に応じて、ターゲット・ファイルの名前を変更します。

ターゲット・ファイルに solaris\_reg\_key.dc という名前を付けた場合、このファイル名を reg\_key.dc に変更します。

これで、reg\_key.dc はターゲット・プラットフォーム用の正しい形式に変換されました。

## 10.8 Discoverer 作業環境の移行

Discoverer を新しいリリースにアップグレードする際は、OracleBI Discoverer 作業環境の移行を行います。たとえば、OracleBI Discoverer リリース 9.0.4 からリリース 10.1.2 にアップグレードする場合などです。

Discoverer 作業環境の移行方法は、使用している Discoverer のリリースによって次のように異なります。

- OracleBI Discoverer リリース 9.0.2 またはリリース 9.0.4 からリリース 10.1.2 にアップグレードする場合は、OracleAS Upgrade Assistant を使用します (OracleAS Upgrade Assistant の使用の詳細は、[第 B.6 項「Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法」](#)を参照してください)。
- Discoverer リリース 4.1 から OracleBI Discoverer リリース 10.1.2 にアップグレードする場合は、作業環境ファイルを手動でコピーします (詳細は、[第 B.7 項「Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法」](#)を参照してください)。



---

---

# OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の 使用

**注意:** この章の内容は、Discoverer インストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合にのみ適用されます。詳細は、[第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)を参照してください。

Discoverer のインストールが 9.0.4 の OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合は、メタデータ・リポジトリ (MR) を 10.1.2 の Discoverer ポートレットとともに動作するように構成する必要があります (詳細は、[第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」](#)を参照してください)。

この章では、OracleAS Portal とともに OracleBI Discoverer を使用方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- [第 11.1 項「OracleAS Portal の概要」](#)
- [第 11.2 項「OracleAS Portal とともに OracleBI Discoverer を使用方法」](#)
- [第 11.3 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」](#)
- [第 11.4 項「Discoverer Portlet Provider の編集方法」](#)

## 11.1 OracleAS Portal の概要

Oracle Application Server Portal は、企業クラスのポータルの開発、デプロイ、管理および構成に使用される Oracle Application Server のコンポーネントです。OracleAS Portal では、ポータル構築のフレームワークがセルフサービスの公開機能に統合されており、この機能によって、ポータル内部での情報の作成、公開および管理が可能になります。ポータルでは、データベースおよびその他のソースからの情報公開、内部および外部の顧客に対する情報の提供および収集、そしてそれらの顧客が利用するコンテンツの管理が可能です。

ポータルは、多数の異なるタイプのコンテンツをホスティングするページのグループで構成され、それらのコンテンツも多数の様々なソースから提供されますが、すべての情報が単一の場所、つまりポータルから提供されます。Oracle AS Portal で構築されたポータルの基本構造となるコンポーネントには、ページ・グループ、ページ、タブ、リージョン、ポートレットおよびアイテムなどがあります。

ポートレットとは、様々なタイプの情報ソースを要約し、それらのソースへのアクセスを可能にする再利用可能な情報コンポーネントです。ポートレットの外観は、ユーザーごとまたはグループごとを基準としてカスタマイズできます。ポートレットの例には、動的に更新される四半期利益レポート、Discoverer ワークシート検索フィールドやボタン、およびユーザーによる簡単な投票などがあります。

Discoverer Portlet Provider は、Discoverer のデータを OracleAS Portal で公開するために使用されるコンテンツ配信メカニズムです。Discoverer Portlet Provider を使用して、ポータル・ユーザーは次の 3 種類の Discoverer ポートレットを公開できます。

- Discoverer ワークシート、および分析リンクを表示するワークシート・ポートレット。分析リンクによって Discoverer Viewer にワークシートが表示されます。
- Discoverer ワークシートへのリンクを表示する、ワークシートのリスト・ポートレット。
- Discoverer ワークシートを 1 つ以上の半円形で表示するゲージ・ポートレット。ゲージのルック・アンド・フィールは速度計に似ています。

**注意:** Discoverer ポートレットの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

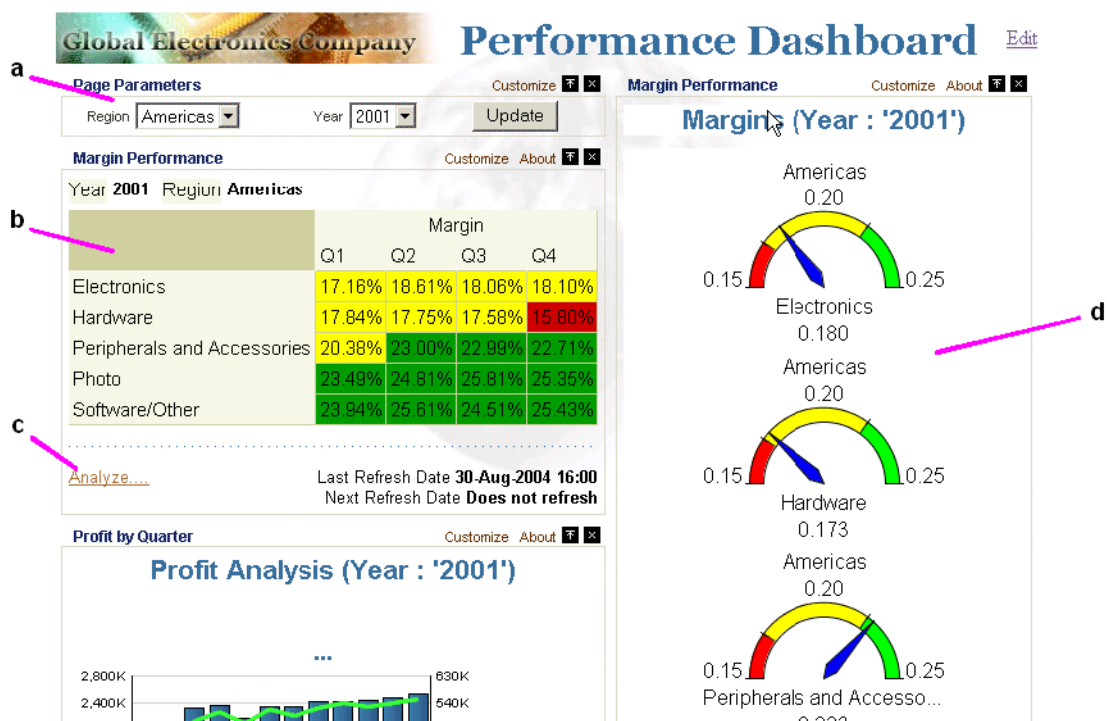
次の図は、Analyze Sales Reports (強調表示) という名前のワークシートのリスト・ポートレットを含むポータル・ページを示しています。Analyze Sales Reports には Discoverer ワークシートへのリンクがあり、ポータル・ユーザーはこのリンクを使用して Discoverer Viewer を起動し、Discoverer レポートにすばやくアクセスできます。

図 11-1 ワークシートのリスト・ポートレットを含む OracleAS Portal

Name	Updated	Accessed	Scheduled	Description
<a href="#">Video Analysis</a>	28-MAY-2000	03-JUN-2000	28-JUN-2000	Sales for each...
<a href="#">Regional Analysis</a>	11-JUN-2000	14-JUN-2000	24-JUN-2000	Sales and profi...
<a href="#">Mike's sales areas</a>	12-JUN-2000	15-JUN-2000	25-JUN-2000	Best and worst...

また、ダッシュボード・アプリケーションで Discoverer ポートレットを使用することもできます（次の図を参照してください）。

図 11-2 Discoverer ポートレットを表示しているダッシュボード・アプリケーション



この図の符号の説明は次のとおりです。

- a. シンプル・パラメータ・フォーム・ポートレット。
- b. Discoverer ワークシート・ポートレット。
- c. Discoverer Viewer にワークシートを表示する分析リンク。このリンクの表示はオプションです。
- d. Discoverer ゲージ・ポートレット。

## 注意

- OracleAS Portal の詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。
- リレーショナル・ワークシートでは、ワークシート・データまたはグラフ・データ（あるいはその両方）を表示できます。マルチディメンション・ワークシートでは、ワークシート・データおよびグラフ・データを表示します。
- OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On とともに使用した場合の OracleBI Discoverer の動作の詳細は、第 14.7.2.3 項「OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On とともに使用した場合の Discoverer の動作の例」を参照してください。
- OracleAS Portal とともに Discoverer を使用する場合、必ず mod\_osso.conf ファイルの OssoIPCheck パラメータ値を FALSE に設定してください（構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください）。

## 11.2 OracleAS Portal とともに OracleBI Discoverer を使用する方法

ポータル・ユーザーが OracleAS Portal に Discoverer ポートレットを追加する前に、まず OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する必要があります。

Discoverer Portlet Provider の登録には、OracleAS Portal の「ポートレット・プロバイダの追加」ページを使用します。

OracleAS Portal とともに OracleBI Discoverer を使用する手順は、次のとおりです。

1. (オプション) インターネット・ブラウザに次の URL を入力して、Discoverer Portlet Provider が正しくインストールされていることを確認します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/portletprovider/`

Discoverer Portlet Provider が正しくインストールされている場合は、JPKD テスト・ページに「Congratulations! You have successfully reached your Provider's Test Page」というメッセージが表示され、使用可能な Discoverer ポートレット・タイプのリストが表示されます。

2. OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録します (詳細は、[第 11.3 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」](#)を参照してください)。

**注意:** このタスクは、Oracle Business Intelligence スタンドアロン CD のインストール中またはインストール後、1 回のみ実行します。

3. OracleAS Portal を使用して、Discoverer ポートレットをポータル・ページに追加します。これは、通常、Discoverer Plus ユーザーまたは Discoverer Viewer ユーザーが行います。

Discoverer ポートレットをポータル・ページに追加する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## 11.3 OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法

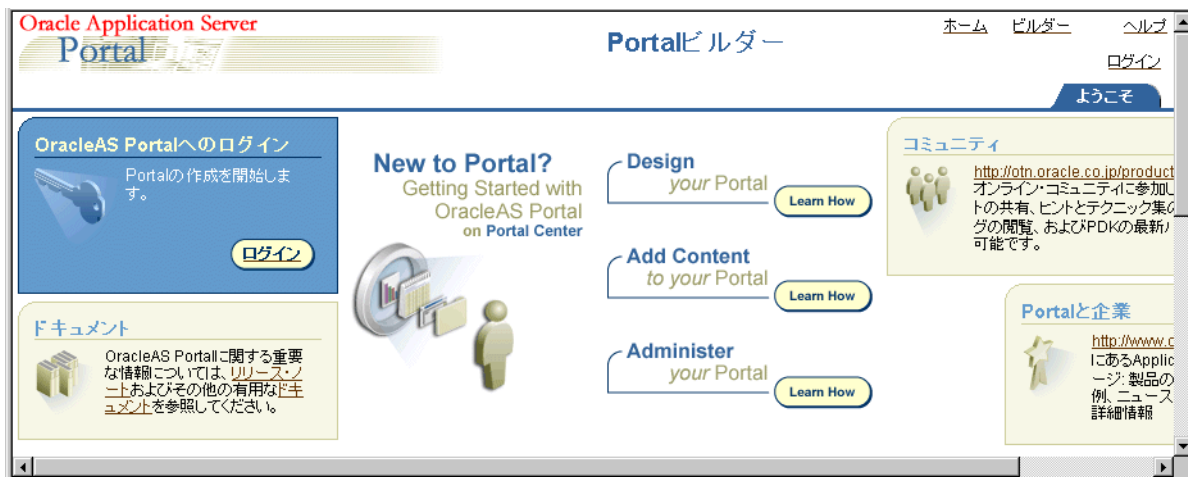
Discoverer Portlet Provider を登録して、OracleAS Portal エンド・ユーザーが各自のポータル・ページに Discoverer ビジネス・インテリジェンス・ポートレットを追加できるようにします。

OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動し、OracleAS Portal の URL を入力します。

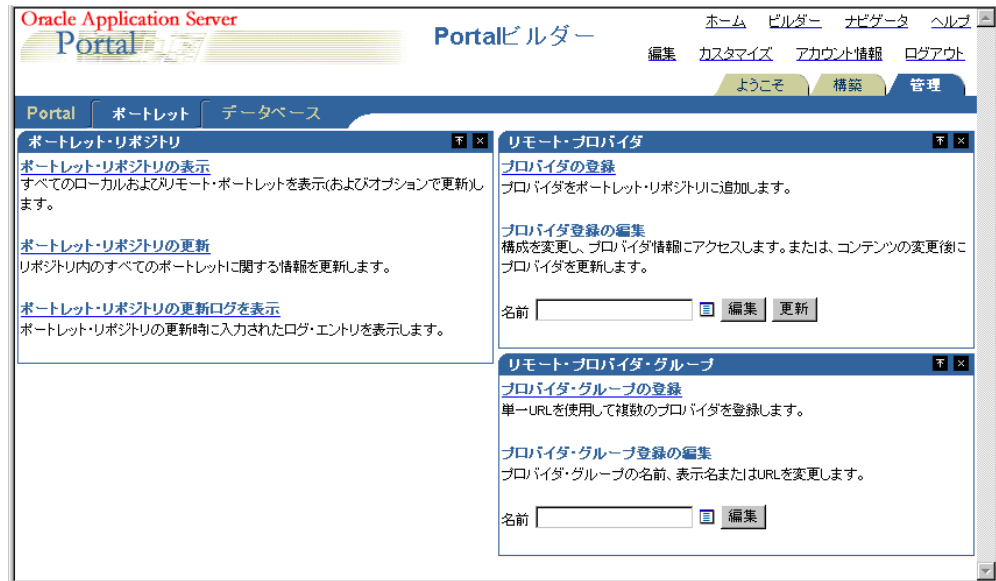
たとえば、次のように入力します。

`http://<host.domain>:<port>/pls/portal`

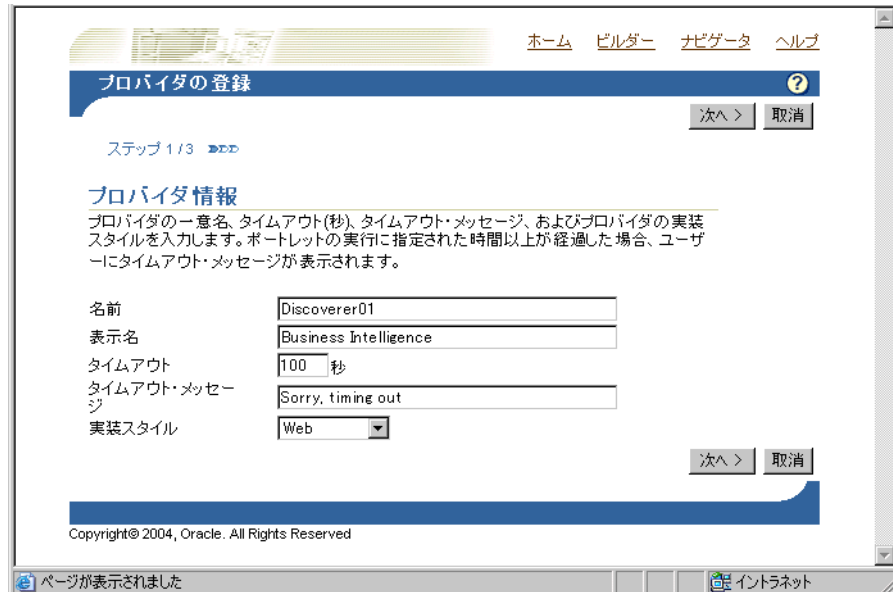


OracleAS Portal メイン・ページの表示で問題がある場合は、OracleAS Portal 管理者に問い合わせてください。

- 「ログイン」リンクを選択し、Portal 管理者として接続します。
- 「管理」タブを表示します。
- 「ポートレット」サブタブを表示します。



- 「プロバイダの登録」リンクを選択して「プロバイダ情報」ページを表示します。



- Discoverer Portlet Provider の詳細を入力します。

必要に応じて、Discoverer Portlet Provider の名前および表示名を入力できます。名前と表示名は同じでなくても構いません。

**ヒント:** Portlet Provider の表示名は、ユーザーがポータル・ページに Discoverer ポートレットを追加する際に表示されます。そのため、表示名には意味のあるわかりやすい名前を入力してください。

- 「実装スタイル」ドロップダウン・リストから Web を選択します。

8. 「次へ」をクリックして、「接続の定義」 ページ内の「一般プロパティ」 ページを表示します。

9. 次のように、Portlet Provider の一般プロパティを入力します。
- フォーム内の「URL」フィールドに、Discoverer Portlet Provider の URL を次のように入力します。  
`<http | https>://<host.domain>:<port>/discoverer/portletprovider`  
 たとえば、`http://myserver:80/discoverer/portletprovider` のようになります。  
**注意:** HTTPS 環境に Oracle Business Intelligence をデプロイしている場合は、この「URL」フィールドに HTTPS URL を指定してください。つまり、OracleAS Portal ユーザーが Discoverer ポートレットの下で「分析」リンクを選択すると、Discoverer Viewer が HTTPS モードで起動されます。
  - 「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」チェック・ボックスを選択解除します。
  - 「ユーザーは、Web プロバイダ・アプリケーション内とシングル・サインオン認証内とで、同じ識別情報を保持します。」ラジオ・ボタンを選択します。
  - 「ユーザー / セッション情報」領域で、「ユーザー」ラジオ・ボタンを選択し、「ログイン周期」フィールドから「ユーザー・セッションごとに 1 回」オプションを選択します。  
**注意:** その他のフィールドのデフォルト値は変更しないでください。



10. 「次へ」をクリックして、「アクセス制御」ページを表示します。



11. (オプション) 必要に応じて、デフォルトのアクセス制御設定を変更します。  
 12. 「終了」をクリックします。

これで、エンド・ユーザーは、Discoverer Portlet Provider を使用して OracleAS Portal ページにポータルレットを追加できます。

**注意:** Discoverer ポータルレットの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## 注意

- Discoverer エンド・ユーザーがパブリック接続を使用してワークブックおよびワークシートを公開する場合は、Oracle Application Server Control を使用して、ユーザーが使用できるパブリック接続を作成します (パブリック接続の作成の詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください)。

## 11.4 Discoverer Portlet Provider の編集方法

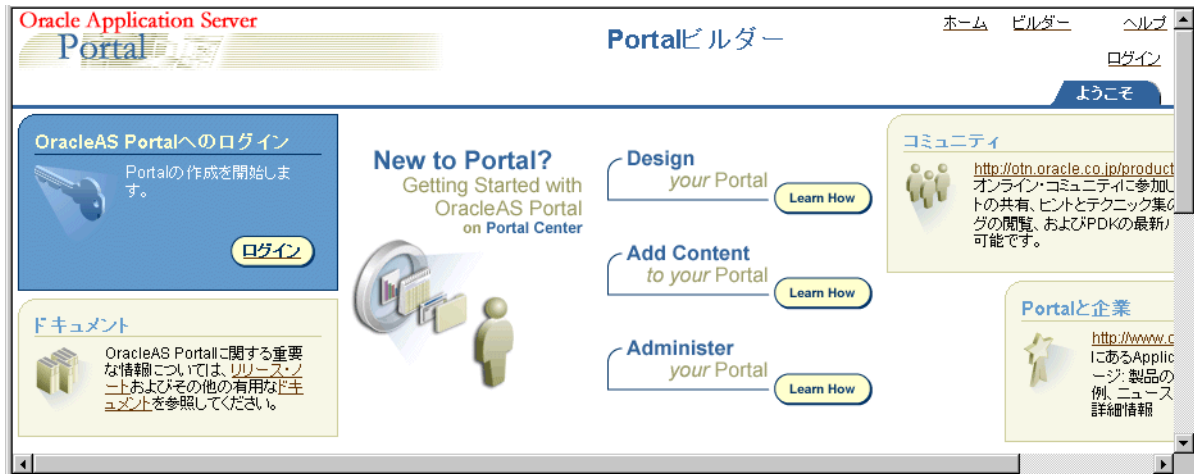
Discoverer Portlet Provider の動作は、編集して変更できます。たとえば、Discoverer Portlet Provider の表示名やアクセス制御設定を変更できます。

Discoverer Portlet Provider を編集する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動し、OracleAS Portal メイン・ページの URL を入力します。

例：

```
http://<host.domain>:<port>/pls/portal
```



OracleAS Portal メイン・ページの表示で問題がある場合は、OracleAS Portal 管理者に問い合わせてください。

2. 「ログイン」リンクを選択し、Portal 管理者として接続します。
3. 「管理」タブを表示します。
4. 「ポータルレット」サブタブを表示します。



5. 「リモート・プロバイダ」領域で、「名前」フィールドに Discoverer Portlet Provider の名前（表示名）を入力し、「編集」をクリックして「プロバイダ情報」ページを表示します。

ヒント: Discoverer Portlet Provider の表示名がわからない場合の手順は、次のとおりです。

- a. 「名前」フィールドの右側にある「プロバイダをブラウズ」アイコンをクリックします。
- b. 表示された Portlet Providers のリストから、Discoverer Portlet Provider 名を選択します。

ヒント: ここで選択する名前は、Discoverer Portlet Provider の登録時に指定した表示名です（詳細は、[第 11.3 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」](#)を参照してください）。

- c. 「編集」をクリックして、「ポートレット・プロバイダの編集」ページを表示します。
6. 必要に応じて、次のように変更します。
    - 「メイン」タブを使用して、プロバイダ情報（Discoverer Portlet Provider の表示名など）を変更します。
    - 「接続」タブを使用して、一般プロパティ（Discoverer Portlet Provider の URL など）を編集します。
    - 「アクセス」タブを使用して、アクセス権限（Discoverer Portlet Provider のアクセス制御設定など）を変更します。

7. 「OK」をクリックして、変更内容を保存します。

変更内容に従って Discoverer Portlet Provider が更新されます。



---

---

## OracleBI Discoverer のパフォーマンスおよび スケーラビリティの最適化

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer にのみ適用されます。  
Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、[第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」](#)を参照してください。

この章では、Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティを最適化する方法について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- [第 12.1 項「Discoverer のパフォーマンス」](#)
- [第 12.2 項「Discoverer のスケーラビリティ」](#)
- [第 12.3 項「Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.4 項「OracleAS のスケーラビリティ機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法」](#)

## 12.1 Discoverer のパフォーマンス

Discoverer システムのパフォーマンスとは、Discoverer が特定のタスクを完了するためにかかる時間を指します。パフォーマンスを示す時間は、次のようなタスクにかかる時間です。

- クエリーの結果を返す（ワークシートを表示する）。
- ピボットまたはドリルを実行する。
- システムに新しいユーザーを追加する。

## 12.2 Discoverer のスケーラビリティ

Discoverer システムのスケーラビリティとは、パフォーマンスを低下せずに、ユーザーまたはタスクの増加に対応する能力を指します。

Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを十分に活用するには、Discoverer を複数のマシンにインストールして、マシン間でワークロードを分担します。詳細は、[第 7 章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」](#) を参照してください。

Discoverer のスケーラビリティを決定する主な要因は、次のとおりです。

- サーバー CPU の数
- CPU 間の処理の分散
- サーバーの総メモリー（RAM および仮想メモリー）
- 各ユーザーからリクエストされる特定のタスク（個々のワークロード）
- Discoverer 中間層のマシンの数

## 12.3 Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer のパフォーマンスは、データベースの設計とクエリーのチューニングによって大きく左右されます。データベースを適切に設定することによって、パフォーマンスが大幅に向上します。また、次の要素を正しく使用することにより、パフォーマンスがさらに向上します。

- サマリー・テーブルおよびマテリアライズド・ビュー
- 索引
- データベース・パラメータの設定
- ネットワークの帯域幅

適切に設計およびチューニングされているデータベースにおいて、さらにパフォーマンスを向上させる方法は、次の項で説明します。

- [第 12.3.1 項「ワークシートおよびページ・アイテムを適切に使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.2 項「ビジネスエリアおよびフォルダの表示にかかる時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.3 項「サマリー・フォルダを使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.4 項「Discoverer で生成される SQL を最適化してクエリーのパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.5 項「Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.6 項「「保存形式」アイテム・プロパティを適切に設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)
- [第 12.3.7 項「データベースからのフェッチ行で使用する配列サイズを拡大して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」](#)

- 第 12.3.8 項「重複しない値を含むテーブルに基づいて値リストを生成して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」
- 第 12.3.9 項「システムのキャッシュ設定を変更して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」
- 第 12.3.10 項「ワークシートを夜間を実行するようにスケジューリングして、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法」
- 第 12.3.11 項「OracleAS Web Cache を使用して Discoverer Viewer のパフォーマンスを向上させる方法」
- 第 12.3.12 項「Discoverer Portlet Provider のパフォーマンスを向上させる方法」
- 第 12.3.13 項「Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティのトラブルシューティング」

### 12.3.1 ワークシートおよびページ・アイテムを適切に使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

クエリーおよびデータの表示にかかる時間は、ワークシートのレイアウト（テーブルまたはクロス集計）、およびワークシートのレイアウトでページ・アイテムが使用されているかどうかにかかわらず左右されます。

例：

- ページ・アイテムを含まないテーブル形式のワークシートの移入では、Discoverer は増分フェッチ（100 行を一度に取得するなど）を使用するので、サイズの大きな結果セット全体をロードする必要がありません。  
ページ・アイテムを表示する際のようにキャッシュしたアイテムに索引付けする必要がないため、ページ・アイテムを含まないテーブル形式のデータはより迅速に表示されます。
- ページ・アイテムまたはクロス集計を含むテーブル・ワークシートを移入する場合、一度にフェッチする行数に関係なく、データの表示により長い時間がかかります。これは、キャッシュした結果セット上でページ・アイテムごとに索引を作成する時間が余分にかかり、データの表示までの時間が長くなるためです。

パフォーマンスを向上させるには、Discoverer Plus ユーザーが Discoverer ワークブックを設計する際、次のガイドラインに従うようにします。

- クロス集計レポートよりもテーブル形式のレポートを使用する。
- レポート内のページ・アイテムの数を最小限にする。
- 広範囲のクロス集計レポートを避ける。
- 膨大な行数が返されるレポートを作成しないようにする。
- 生成されるデータの量を減らすためのパラメータを指定する。
- ワークブック内のワークシートの数を最小限にする。
- ワークブックから無関係なワークシートを削除する（特に、エンド・ユーザーが Discoverer のエクスポート・オプションを頻繁に使用する場合）

**注意：**エンド・ユーザーが Discoverer Plus または Discoverer Viewer のデータをエクスポートする場合、現行のワークシートまたはすべてのワークシートのいずれかをエクスポートできます。つまり、エクスポートされるワークシートを選択することはできません。エンド・ユーザーがすべてのワークシートをエクスポートする際に不要なデータが含まれないように、無関係なワークシートは削除しておきます。

次のワークシート設定はすべて、索引作成でのオーバーヘッドを増やすため、Discoverer のパフォーマンスに影響します。

- 広範囲のクロス集計
- ページ軸アイテム
- 値の多いページ軸アイテム

## 12.3.2 ビジネスエリアおよびフォルダの表示にかかる時間を短縮して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer Plus エンド・ユーザーがクエリーを作成する際、ユーザーがアクセス権を持つビジネスエリア、フォルダおよびアイテムのリストが、Discoverer によって Discoverer Plus Item Navigator に表示されます（詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。このリストの表示前に、フォルダ内で参照されているテーブルへのアクセス権がユーザーにあるかどうかを確認するため、データベース・セキュリティ・チェックが行われます。このセキュリティ・チェックにより、ユーザーが実行できないワークブックを作成することは確実になくなります。すべてのビジネスエリアおよびフォルダについてチェックが行われるため、リストが表示されるまでの時間は長くなります。

データベースのセキュリティ・チェックを遅延処理するには、`pref.txt` ファイルを編集して、次のように `ObjectsAlwaysAccessible` を 1 に設定します。

```
ObjectsAlwaysAccessible = 1
```

**注意:** `pref.txt` ファイルを編集した後は、作業環境の変更を適用するために `applypreferences` スクリプトを実行する必要があります（詳細は、第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」を参照してください）。その後、Oracle BI Discoverer サービスを一度停止して再起動します（詳細は、第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」を参照してください）。

`ObjectAlwaysAccessible` の値が 0 以外の場合は、クエリーの作成時にはセキュリティ・チェックは実行されず、ユーザーはテーブルへのアクセス権を持っているものと見なされます。

**注意:** データベース・セキュリティは常に考慮されます。セキュリティ・チェックは、クエリー作成時ではなく、クエリー実行時に行われます。

その結果、フォルダのリストの表示にかかる時間が短縮されます。ユーザーのアクセス権があまり変更されないシステムでは、セキュリティ・チェックを無効にすることをお勧めします。

**注意:** ユーザーがデータベース・アクセス権を持たないテーブルに基づくフォルダを選択しても、クエリーの実行時にデータベース・セキュリティが適用されて行は返されません。

## 12.3.3 サマリー・フォルダを使用して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer サマリー・フォルダを正しく使用すると、クエリー・レスポンス時間が大幅に短縮します。たとえば、サマリー・フォルダを使用しないでクエリーを実行した場合、結果が返されるまでに数時間かかるケースでも、サマリー・フォルダを使用することで結果が数秒で返されることがあります。サマリー・フォルダの管理は、Discoverer 実装でパフォーマンスを向上させるための重要な要素となります。

サマリー・フォルダは、マテリアライズド・ビューまたはサマリー・テーブルを基礎にすることができ、動作に関して次のように異なります。

- Discoverer のクエリーに、マテリアライズド・ビューを基礎としたサマリー・フォルダが含まれている場合、データベースによって、マテリアライズド・ビューを使用するようにクエリーが自動的に書きなおされます。
- Discoverer のクエリーに、サマリー・テーブルを基礎としたサマリー・フォルダが含まれている場合、Discoverer によって、サマリー・テーブルを使用するようにクエリーが自動的に書きなおされます（サマリー・テーブルが EUL に登録されていることを前提とします）。

「SQL インспекタ」ダイアログを使用してクエリーのパスを表示し、データベースによってクエリーが書きなおされたかどうかを確認できます。

Discoverer サマリー・フォルダの管理方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。



## 12.3.4 Discoverer で生成される SQL を最適化してクエリーのパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer では、クエリーのパフォーマンスを向上させるため、次の 3 つの領域で、生成する SQL を最適化できます。

- アイテムの切捨て

クエリー SQL 内の無関係なまたは使用されていない列および式への参照を削除して、パフォーマンスを向上させます。アイテムの切捨てを有効にするには、ユーザー作業環境 `SQLItemTrim` の値を 1 に設定します。

- 結合の切捨て

結果セットに影響を与えずに、クエリーから結合を検出および削除して（可能な場合）、クエリーパフォーマンスを向上させます。結合の切捨てを有効にするには、ユーザー作業環境 `SQLJoinTrim` の値を 1 に設定します。

- フラット化

クエリー SQL 内のインライン・ビューの使用を最小限にし、データベースでより簡単に SQL を解析し、最適な実行パスを選択できるようにします。フラット化を有効にするには、ユーザー作業環境 `SQLFlatten` の値を 1 に設定します。

詳細は、次の資料を参照してください。

- ユーザー作業環境 `SQLItemTrim`、`SQLJoinTrim` および `SQLFlatten` の詳細は、[第 10.6 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」](#) を参照してください。
- パフォーマンスの向上のために選択する結合プロパティの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

## 12.3.5 Discoverer Administrator のヒントを使用して Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer のパフォーマンスを向上させるため、Discoverer Administrator の SQL 文にヒントを追加して（カスタム・フォルダなどを使用）、データベース・オプティマイザに特定のパスを使用するように強制できます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

## 12.3.6 「保存形式」アイテム・プロパティを適切に設定して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

ユーザーがクエリーに条件を追加する場合、「大文字と小文字の区別」オプションを選択できます。「大文字と小文字の区別」オプションを選択しない場合、条件の両側に `UPPER` 関数を置くことにより、大文字と小文字を区別して検索を実行できます。たとえば、次のような条件があるとします。

```
where Department in ('VIDEO SALES', 'VIDEO RENTALS')
```

これが次のようになります。

```
where Upper(Department) in (Upper('VIDEO SALES'), Upper('VIDEO RENTALS'))
```

ただし、`UPPER` 関数を使用すると、データベースの索引を使用できなくなります。したがって、索引を使用してパフォーマンスを向上する方法は利用できません。

データがすべて大文字またはすべて小文字でデータベースに保存されていることがわかっている場合は、Discoverer Administrator を使用してアイテムの「保存形式」プロパティを設定します。

たとえば、データベース内の Region データがすべて大文字で保存されていることがわかっている場合は、Discoverer Administrator で、Region アイテムの「保存形式」プロパティを「すべて大文字」に設定します。これで、データがすべて大文字で保存されていて、条件の左側には UPPER 関数が置かれていない（列名が UPPER 関数で囲まれていない）と想定されます。たとえば、次のような条件があるとします。

```
where Department in ('VIDEO SALES', 'VIDEO RENTALS')
```

これが次のようになります。

```
where Department in (Upper('VIDEO SALES'), Upper('VIDEO RENTALS'))
```

列名が UPPER 関数で囲まれていないため、クエリーでデータベースの索引を使用できます。

### 12.3.7 データベースからのフェッチ行で使用する配列サイズを拡大して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

データベースから多数の行（数千単位など）を取り出す可能性が高い場合は、Discoverer によって使用されるフェッチ行の配列サイズを拡大することにより、パフォーマンスが向上します。

配列のデフォルト・サイズを変更するには、pref.txt ファイルを編集して、RowsPerFetch を次のように必要な値に設定します。

```
RowsPerFetch = <array size>
```

多数の行を取得する可能性が高い場合は、RowsPerFetch を「500」または「1000」に設定して配列サイズを増やします。

**注意:** Discoverer エンド・ユーザーは、pref.txt で RowsPerFetch によって指定されているデフォルト値を、次のように上書きできます。

- Discoverer Plus では、「ツール」→「オプション」→「クエリー管理」の順に選択し、「データを取り出すときの単位」フィールドを使用します。
- Discoverer Viewer では、「プリファレンス」リンクを選択して「プリファレンス」ページを表示し、「データを取り出すときの単位」フィールドを使用します。

#### 注意

- テーブル・ワークシートの場合は、RowsPerFetch の値を小さく設定したほうが早く結果が得られます。テーブル・ワークシートでは、最初の配列が取得された後すぐデータが表示されるので、RowsPerFetch を「100」に設定した方が、RowsPerFetch を「1000」に設定した場合よりも Discoverer のエンド・ユーザーに最初の 100 行が早く表示されるためです。
- pref.txt ファイルを編集した後は、作業環境の変更を適用するために applypreferences スクリプトを実行する必要があります（詳細は、[第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」](#)を参照してください）。その後、OracleBI Discoverer サービスを一度停止して再起動します（詳細は、[第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」](#)を参照してください）。

### 12.3.8 重複しない値を含むテーブルに基づいて値リストを生成して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

デフォルトでは、Discoverer の値リスト (LOV) は、基礎となるデータ・テーブルについてクエリーの SELECT DISTINCT 文を使用して生成されます。LOV を生成するために、重複しない値のリストを表示できるように、すべての行がスキャンされます。ただし、このデフォルトのクエリーは、行数が多いが重複しない値は相対的に少ない列から LOV を生成する場合には、効率がよくありません。

パフォーマンスを向上させるには、ファクト・テーブルの列に基づくアイテムで LOV を作成しないようにします。そのかわりに、次のオプションの使用を検討します。

- ファクト・テーブルに添付された小さな 'ディメンション' テーブル (正当な重複しない値のみが含まれるテーブル) の列に基づくアイテムで、LOV を作成する。このようなテーブルが存在しない場合は、SQL\*Plus を使用してテーブルを作成して値を移入します。
- 正当な値のリストが小さい場合や変更されることが比較的少ない場合は、SYS.DUAL から正当な値を選択する SQL 文に基づくカスタム・フォルダを作成して、Discoverer Administrator 内で LOV を定義します。

たとえば、Video Stores データ内のすべての地域を含む LOV を作成する手順は、次のとおりです。

1. 次の SQL 文に基づいて、すべての地域をリストするカスタム・フォルダを作成します。

```
Select 'NORTH' Region FROM sys.dual
UNION
Select 'SOUTH' Region FROM sys.dual
UNION
Select 'EAST' Region FROM sys.dual
UNION
Select 'WEST' Region FROM sys.dual
```

2. 作成したカスタム・フォルダを値リストとして使用するよう、Region アイテムのアイテム・クラスを編集します。

カスタム・フォルダとアイテム・クラスの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

### 12.3.9 システムのキャッシュ設定を変更して、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

各ユーザー・セッションについて、データベースから取得されるデータが中間層の Discoverer キャッシュに格納されます。キャッシュにより、Discoverer の回転機能、ドリル機能およびローカル計算機能がサポートされます。

キャッシュの動作は、pref.txt ファイル内の次の設定を使用して制御します (構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください)。

設定名	デフォルト値	説明
CacheFlushPercentage	25	キャッシュがいっぱいになった場合に、フラッシュされるキャッシュの割合 (%)。
MaxVirtualDiskMem	1024000000	データ・キャッシュに使用できるディスク・メモリの最大量。
MaxVirtualHeapMem	5120000	データ・キャッシュに使用できるヒープ・メモリの最大量。

使用可能なメモリーを活用できるように、デフォルトのキャッシュ・サイズは大きく設定されています。システムでより多くのリソースが利用可能な場合、デフォルトのメモリー値を増やすことができます (ただし、これはクエリーが大きな結果セットを返す場合にのみ利点があります)。デフォルト値は、各ユーザーに対して設定する必要がありますが、Discoverer 作業環境のコマンドライン・ユーティリティ `dis51pr` を使用して、特定のユーザーの値を変更できます (詳細は、第 10.5 項「各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法」を参照してください)。

#### 注意

- `pref.txt` ファイルを編集した後は、作業環境の変更を適用するために `applypreferences` スクリプトを実行し、その後 OracleBI Discoverer サービスを一度停止して再起動する必要があります (詳細は、第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」を参照してください)。

- 1 人の Discoverer ユーザーについて使用可能なシステム・リソースを増やした場合、他の Discoverer ユーザーまたは他の OracleAS アプリケーションのユーザーに弊害が生じる場合があります。

### 12.3.10 ワークシートを夜間に実行するようにスケジュールして、Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法

一日ごとに正確なデータを取得する必要がある場合は、オフピーク時にワークシートを処理するようにスケジュールしてピーク時のサーバーへの負荷を軽減することにより、Discoverer のパフォーマンスを向上できます。ワークブックのスケジュールの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

### 12.3.11 OracleAS Web Cache を使用して Discoverer Viewer のパフォーマンスを向上させる方法

ワークブックが比較的安定した状態で維持される場合は、OracleAS Web Cache を使用して Discoverer Viewer のパフォーマンスを大幅に向上させることができます。OracleAS Web Cache の詳細は、第 8 章「OracleAS Web Cache との OracleBI Discoverer Viewer の使用」を参照してください。

### 12.3.12 Discoverer Portlet Provider のパフォーマンスを向上させる方法

Discoverer Portlet Provider のパフォーマンスを向上させるには、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページで次の設定値を調整します。

- 最大セッション数 (20 など)
- 最大セッション停止時間 (10 など)
- 最大セッション継続時間 (2 など)
- 最大待機時間 (120 など)

詳細は、第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」を参照してください。

**注意:** また、opmn.xml の maxprocs 設定の値を設定して、同時に実行できる Discoverer セッションの最大数 (Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider の場合) も指定できます (詳細は、第 A.2 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」および第 A.3 項「opmn.xml 内の構成設定のリスト」を参照してください)。

### 12.3.13 Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティのトラブルシューティング

この項でのパフォーマンスのヒントを実行してもパフォーマンスの問題が解決しない場合、次の 1 つまたは複数を実行してください。

- Discoverer のクエリー予測機能が Discoverer のパフォーマンスに影響を与えている場合、まず、EXPLAIN PLAN を使用するようにクエリー予測モードを変更します。EXPLAIN PLAN を使用するようにクエリー予測モードを変更してもパフォーマンスが向上しない場合、クエリー予測をオフにします。

Discoverer Plus で EXPLAIN PLAN を使用するようにクエリー予測モードを変更するには、QPPObtainCostMethod 作業環境の値を 0 に設定します (詳細は、第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」を参照してください)。

Discoverer Plus でクエリー予測をオフにするには、QPPEnable 作業環境の値を 0 に設定します (詳細は、第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」を参照してください)。クエリー予測の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

- Discoverer Administrator で必要に応じてサマリーがリフレッシュされることを確認します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

- Discoverer データ・キャッシュに利用可能なメモリー容量を増やします (pref.txt の MaxVirtualDiskMem 作業環境を使用します)。詳細は、[第 10.4 項「すべてのユーザーに対するデフォルトのユーザー作業環境を設定する方法」](#)を参照してください。
- Discoverer のワークブック・ダイアログは更新に時間を要するため (「データベースからワークブックを開く」ダイアログなど)、古いワークブックとワークシートが不要になれば、Discoverer エンド・ユーザーによって削除するようにします。
- Discoverer のユーザー・ダイアログは更新に時間を要するため (Discoverer Plus Relational の「ワークブックの共有」ダイアログなど)、古いデータベース・アカウントとロールが不要になれば、Discoverer マネージャによって削除するようにします。
- 記録される Discoverer ログ情報の量を最小にします。記録されるログ情報の量を変更する方法の詳細は、[第 D.2.5 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする方法」](#)および[第 D.2.6 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする方法」](#)を参照してください。
- Discoverer サーバーが稼働中であれば、Discoverer 中間層マシン上で、利用可能なメモリーの容量を増やすか、スワップ領域の容量を増やします。詳細は、Discoverer 中間層マシンのオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

#### 注意

- Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドの一部は、Discoverer Administrator での同等のコマンドまたは操作よりも、実行に時間を要することがあります。
- Discoverer のパフォーマンスの問題を診断する場合、使用中のネットワークのタイプ、および OracleBI マシンとクライアント・ブラウザ・マシンとの間の距離によってパフォーマンスが影響を受けることに注意してください。たとえば、一般に、LAN 経由で Discoverer を使用すると、インターネット経由で Discoverer を使用するよりも動作が高速になります。

## 12.4 OracleAS のスケーラビリティ機能を使用して、Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャを活用する方法

OracleAS のスケーラブルなアーキテクチャにより、Discoverer サービス層を複数のマシンにインストールできます (複数のマシンへの OracleBI Discoverer のインストールの詳細は、[第 7 章「複数のマシン環境への OracleBI Discoverer のインストール」](#)を参照してください)。

次のいずれかを使用して、複数のマシン間でロード・バランシングを行うことができます。

- OracleAS Web Cache
- 標準の HTTP/IP ルーター・ロード・バランサ

### 12.4.1 OC4J のメモリー使用量パラメータを指定して、Discoverer のスケーラビリティを向上させる方法

詳細は、『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』の第 6 章「OC4J での J2EE アプリケーションの最適化」を参照してください。

### 12.4.2 OC4J 処理の数を指定して、Discoverer のスケーラビリティを向上させる方法

詳細は、『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』の第 6 章「OC4J での J2EE アプリケーションの最適化」を参照してください。



---

---

## URL パラメータを使用した OracleBI Discoverer の起動

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus Relational および Discoverer Viewer（リレーショナル・ワークシートおよび OLAP ワークシートとともに使用する）にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、[第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」](#)を参照してください。

この章では、URL パラメータで OracleBI Discoverer を使用する方法を説明します。この章の項目は次のとおりです。

- [第 13.1 項「URL パラメータで Discoverer を使用する理由」](#)
- [第 13.2 項「URL パラメータの構文」](#)
- [第 13.3 項「URL パラメータを使用したログイン情報の指定について」](#)
- [第 13.4 項「URL パラメータを使用したワークブックおよびワークシートの指定について」](#)
- [第 13.5 項「URL パラメータの使用例」](#)
- [第 13.6 項「URL パラメータ・テーブルで使用される構文および表記法」](#)
- [第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」](#)
- [第 13.8 項「Discoverer Plus 固有の URL パラメータのリスト」](#)
- [第 13.9 項「Discoverer Viewer 固有の URL パラメータのリスト」](#)



## 13.1 URL パラメータで Discoverer を使用する理由

エンド・ユーザーは、通常、手動で Discoverer 接続を選択（または直接接続）してワークシートを開き、オプションでワークブックのパラメータ値を選択して、OracleBI Discoverer を起動します。この手順を短縮するために、特定の設定（ログイン詳細、ワークブック ID、ワークシート ID、パラメータ値など）で OracleBI Discoverer を起動する URL をパラメータで作成できます。たとえば、Discoverer エンド・ユーザーに、Discoverer に自動的にログインして特定のワークシートを開くための URL を提供できます。Discoverer URL パラメータ例については、[第 13.5 項「URL パラメータの使用例」](#)を参照してください。

必要な条件に合った URL を作成することで、次のことが可能になります。

- エンド・ユーザーに、Web ブラウザの「アドレス」ボックスに入力する URL を提供できます。
- エンド・ユーザーがホット・リンクを選択すると Discoverer を起動できるように、Web サイトにリンクを行う URL を追加できます。

## 13.2 URL パラメータの構文

URL パラメータは、次の構文に従う必要があります。

```
http://<host.domain>:<port>/<Discoverer application name>?
arg1=value1...&argN=valueN
```

説明：

- *host.domain* は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名およびドメインです。
- *port* は、Oracle HTTP Server がインストールされているポート番号です。  
**注意：** Discoverer Plus OLAP を起動するには、ポート番号の後に SID も指定する必要があります。
- *Discoverer application name* は、Discoverer Plus または Discoverer Viewer のどちらを起動するかによって、次のいずれかになります。
  - discoverer/plus
  - discoverer/viewer
- ?-疑問符は、後続のテキストが URL パラメータであることを示します。
- arg1=value1 は、最初のパラメータとそのパラメータに指定する値です。これに続く URL パラメータは、アンパサンド文字 (&) で始まっていることに注意してください。

### 注意：

- URL パラメータには、大文字と小文字の区別がありません。たとえば、'Locale=' と 'locale=' は同じ URL パラメータです。
- 一方、URL パラメータの値には、大文字と小文字の区別があります。たとえば、'workbooksouce=Database' と 'workbooksouce=DataBase' は、異なる URL パラメータ値です。
- URL パラメータの順序は重要ではありません。
- ログイン詳細を指定する場合は、ユーザー名、データベースおよび EUL を指定するか、または Discoverer 接続の接続 ID を指定できます。ユーザー名、データベースおよび EUL (http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?us=video5&db=db1&eul=VIDEO5 など) を指定する場合、エンド・ユーザーは Discoverer を起動する前にデータベース・パスワードの指定を要求されます。

Discoverer 接続の接続 ID を使用してログイン詳細を指定する場合、接続を作成する際に EUL を指定します。



- 次の必須パラメータが URL に指定されていないと、エンド・ユーザーに対し入力が必要とされます。
  - ユーザー名
  - 職責 (Oracle Applications へのログインの場合)
  - セキュリティ・グループ (Oracle Applications へのログインの場合)
- 名前が複数の単語で構成される場合、単語間のスペースはプラス記号 (+) で置き換えられます。たとえば、'January Analysis 2003' という名前のワークブックの URL パラメータは、&wb=January+Analysis+2003 となります。
- URL にその他の特殊文字を挿入する場合は、それに相当する ASCII (または UNICODE) コードで置換します。この処理は、URL エンコーディングと呼ばれます。たとえば、垂直バー (|) を使用するには、~7c に置き換えます。次のリストに含まれない文字は、URL エンコーディングが必要です。
  - 大文字 (A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z)
  - 小文字 (a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z)
  - 数字 (0 1 2 3 4 5 6 7 8 9)
  - 一部の特殊文字 (例: \_!~()\*'')

Discoverer は、固有のエンコーディング・メカニズムを使用しています。これは、HTTP URL エンコーディングと似ていますが、パーセント記号 (%) のかわりに波形記号 (~) を使用することのみが異なります。URL エンコーディングの詳細は、標準の HTML ガイドを参照してください。
- URL に入力できる文字の最大数は、使用する Web ブラウザによって次のように異なります。
  - Internet Explorer 4 以上 - 2048 文字
  - Netscape Navigator 4 以上 - 制限なし

注意: Oracle HTTP Server が基礎とする Apache Web サーバーでは、文字数は 8192 文字に制限されます。

### 13.2.1 URL パラメータとフォーマット・マスク

日付および数値のフォーマット・マスクを指定する際は、次の点に注意します。

- Discoverer では、Discoverer Desktop または Discoverer Plus でワークブックを作成したときに指定したフォーマット・マスクが使用されます。
- ワークシートの数値および日付アイテムにデフォルトのフォーマット・マスク値が指定されている場合は、オプションの URL パラメータが指定されていない限り、指定されたブラウザ環境のデフォルトフォーマット・マスクが使用されます。
- フォーマット・マスクにオプションの URL パラメータが指定されていない場合は、Discoverer Administrator などを使用して EUL を作成したときに指定したフォーマット・マスクが使用されます。

## 13.3 URL パラメータを使用したログイン情報の指定について

次のいずれかの方法で、URL にログイン情報を指定できます。

- 次の URL パラメータを使用して、ログイン詳細を個別に指定します。
  - データベース・ユーザー名を指定する `us=<database user name>`
  - データベース名を指定する `database=<database name>` (Discoverer Plus の場合) または `db=<database name>` (Discoverer Viewer の場合)
  - Discoverer End User Layer を指定する `eul= <EUL name>`

**注意:** セキュリティ上の理由により、URL パラメータを使用してデータベース・パスワードを指定することはできません。

URL パラメータを使用してログイン詳細を指定する例は、[第 13.5 項「URL パラメータの使用例」](#)を参照してください。

- Discoverer 接続の接続 ID を指定します。

パブリックの Discoverer 接続を使用する場合、エンド・ユーザーはデータベースのパスワードを求められません。

プライベートの Discoverer 接続を使用すると、エンド・ユーザーは常に最低一回以上データベースのパスワードを求められます。また、reuseConnection URL パラメータを使用して、同じブラウザ・セッションでログイン詳細を再使用することもでき、このようにすれば、エンド・ユーザーは、同じ Discoverer プライベート接続に対してデータベース・パスワードを繰り返し入力する必要がなくなります。

接続 ID を使用してログイン情報を指定する方法は、[第 13.3.2 項「Discoverer 接続を使用したログイン情報の指定方法」](#)を参照してください。

**注意:** ログイン情報を指定しなければ、Discoverer はエンド・ユーザーにログイン詳細（ユーザー名など）の入力を求めます。

### 13.3.1 プライベート接続での URL パラメータの使用

URL パラメータに接続情報を指定する際は、次の制限に注意します。

- Discoverer Plus または Discoverer Viewer で、Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成が許可されていない場合、エンド・ユーザーはパブリック接続情報を含む URL パラメータのみを使用できます。言い換えると、エンド・ユーザーはパブリック接続を使用してしか Discoverer を起動できないため、URL パラメータ文字列にパブリック接続用の接続 ID を含める必要があります。
- Discoverer URL パラメータ文字列が機能しない場合、プライベート接続が許可されていないのにプライベート接続を使用しようとしている可能性があります。つまり、Application Server Control の「Discoverer 構成」ページの「ユーザーに、Discoverer Plus と Discoverer Viewer での専用のプライベート接続の定義と使用を許可します。」チェック・ボックスが選択解除されています。

Discoverer エンド・ユーザーは、必要な Discoverer ワークシートに移動し、各自のブラウザに URL をブックマークとして保存する必要があります。

Application Server Control の「ユーザーに、Discoverer Plus と Discoverer Viewer での専用のプライベート接続の定義と使用を許可します。」チェック・ボックスの詳細は、[第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」](#)を参照してください。

接続 ID の詳細は、[第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」](#)の cn=URL パラメータを参照してください。

### 13.3.2 Discoverer 接続を使用したログイン情報の指定方法

既存の Discoverer 接続で格納されたログイン詳細を使用して Discoverer を起動できます。

**注意:** Discoverer 接続を使用するには、OracleBI のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている必要があります（詳細は、[第 2 章「Oracle Business Intelligence インストールと OracleAS Infrastructure について」](#)を参照してください）。

接続を使用してログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer 接続をまだ作成していない場合は、開くワークシートにアクセスするログイン詳細を使用して、Discoverer 接続を作成します。

パブリック接続の作成方法は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください。プライベート接続の作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- Discoverer 接続の接続 ID を確認します（詳細は、第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」を参照してください）。

たとえば、接続 ID は cf\_a156 です。

- cn=URL パラメータを使用して、次のように URL を作成します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=<connection ID value>`

たとえば、接続 ID が cf\_a156 の場合、次のように URL パラメータを作成します。

`http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a156`

これで、エンド・ユーザーはこの URL を使用して Discoverer を起動できます。パブリック接続を使用する場合、エンド・ユーザーはデータベース・パスワードを求められません。プライベート接続を使用する場合、エンド・ユーザーはデータベース・パスワードを求められます。

## 13.4 URL パラメータを使用したワークブックおよびワークシートの指定について

URL パラメータを使用してワークブックおよびワークシートを指定する場合、一意の ID（推奨）、またはワークブックかワークシートの名前を使用できます。

**ヒント:** エンコーディングの問題、および長いワークブック名またはワークシート名による問題を避けるため、一意の ID を使用してワークブックおよびワークシートを指定することをお勧めします（詳細は、第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」および第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」を参照してください）。

**注意:** Discoverer Plus OLAP では、ワークブックおよびワークシートの識別にワークブック名およびワークシート名のみを使用します。詳細は、第 6.7 項「Discoverer Plus OLAP サーブレットの URL パラメータ」を参照してください。

次のテーブルは、Discoverer ワークブックおよびワークシートを指定するために使用する各 URL パラメータです。

ワークブックを指定するために使用する URL パラメータ	ワークシートを指定するために使用する URL パラメータ
Discoverer Plus では、 <code>opendbid=&lt;workbook ID&gt;</code> を使用します  (または、下位互換性のために <code>opendb=&lt;workbook name&gt;</code> を使用します)。	Discoverer Plus では、 <code>sheetid=&lt;worksheet ID&gt;</code> を使用します  (または、下位互換性のために <code>sheet=&lt;worksheet name&gt;</code> を使用します)。
リレーショナル・ワークブックを使用した Discoverer Viewer では、 <code>use wbk=&lt;workbook ID&gt;</code> を使用します  (または、下位互換性のために <code>wb=&lt;workbook name&gt;</code> を使用します)。	リレーショナル・ワークシートを使用した Discoverer Viewer では、 <code>use wsk=&lt;worksheet ID&gt;</code> を使用します  (または、下位互換性のために <code>ws=&lt;worksheet name&gt;</code> を使用します)。
Discoverer Plus OLAP では、 <code>workbookname=&lt;workbook name&gt;</code> を使用します。	Discoverer Plus OLAP では、 <code>sheet=&lt;worksheet name&gt;</code> を使用します。

### 注意

- Discoverer Viewer で OLAP ワークシートを開くには、`worksheetname=<name of folder, name of workbook, name of worksheet>` を使用します（詳細は、第 6.8 項「Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ」を参照してください）。
- `opendbid` および `wbk` URL パラメータを使用するには、指定するワークブックの一意の ID を確認する必要があります（詳細は、第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」を参照してください）。

- `sheetid` および `wsk URL` パラメータを使用するには、指定するワークシートの一意の ID を確認する必要があります（詳細は、[第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」](#)を参照してください）。

### 13.4.1 ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法

一意のワークブック ID を使用して Discoverer URL でワークブックを指定するには、ワークブックの一意のワークブック ID を確認する必要があります。

**注意:** エンコーディングの問題および長いワークブック名による問題を避けるには、ワークブック名ではなく、ワークブック ID を使用してワークブックを識別することをお勧めします（詳細は、[第 13.4 項「URL パラメータを使用したワークブックおよびワークシートの指定について」](#)を参照してください）。

Discoverer Plus でワークブックの一意の ID を確認する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動します。
2. Discoverer Plus を実行し、「ワークブック・ウィザード」を表示します。
3. 「参照」をクリックして、「データベースからワークブックを開く」ダイアログを表示します。
4. ワークブック上で右クリックし、「プロパティ」オプションを選択して「ワークブック・プロパティ」ページを表示します。
5. 「識別子」フィールドの値を書き留め、ワークブックの一意の ID を確認します。

#### 注意

- あるいは、Discoverer Plus でワークブックをすでに開いている場合は、「ファイル」→「ワークブック・プロパティ」を選択して「ワークブック・プロパティ」ダイアログを表示し、「識別子」フィールドの値を書き留めます。
- ワークブック ID の値を使用してワークブックを指定する方法は、次のとおりです。

- Discoverer Plus URL で、`opendbid=<workbook ID>` を使用します。
- Discoverer Viewer URL で、`wbk=<workbook ID>` を使用します。

使用例は、[第 13.5 項「URL パラメータの使用例」](#)を参照してください。

### 13.4.2 ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法

一意のワークシート ID を使用して Discoverer URL でワークシートを指定するには、ワークシートの一意のワークシート ID を確認する必要があります。

**注意:** エンコーディングの問題および長いワークシート名による問題を避けるには、ワークシート名ではなく、ワークシート ID を使用してワークシートを識別することをお勧めします（詳細は、[第 13.4 項「URL パラメータを使用したワークブックおよびワークシートの指定について」](#)を参照してください）。

Discoverer Plus でワークシートの一意の ID を確認する手順は、次のとおりです。

1. Web ブラウザを起動します。
2. Discoverer Plus を実行してワークシートを開きます。
3. 「編集」→「ワークシート・プロパティ」を選択して、「ワークシート・プロパティ」ダイアログを表示します。
4. 「一般」タブを表示して、「識別子」フィールドの値を確認します。

#### 注意

- ワークシート ID の値を使用してワークシートを指定する方法は、次のとおりです。
  - Discoverer Plus URL で、`sheetid=<worksheet ID>` を使用します。

- Discoverer Viewer URL で、wsk=<worksheet ID> を使用します。  
使用例は、第 13.5 項「URL パラメータの使用例」を参照してください。

### 13.4.3 接続の接続 ID を確認する方法

接続の詳細を指定しないで Discoverer を起動するには、接続の接続 ID を確認する必要があります。接続 ID は、接続キーとも呼ばれます。たとえば、エンド・ユーザーに接続詳細を要求せずに、Discoverer を起動する場合があります（詳細は、第 13.5.4 項「例 4: 接続詳細を要求しない Discoverer の起動」を参照してください）。

**注意:** パブリック接続を使用する場合、エンド・ユーザーはデータベース・パスワードを求められません。プライベート接続を使用する場合、エンド・ユーザーはデータベース・パスワードを求められます。また、reuseConnection URL パラメータを使用して、同じブラウザ・セッションでログイン詳細を再使用することもでき、このようにすれば、エンド・ユーザーは、同じ接続に対してデータベース・パスワードを繰り返し入力する必要がなくなります。

Discoverer Viewer または Discoverer Plus のいずれでも、接続の接続 ID を確認できます。

接続の接続 ID を確認する手順は、次のとおりです。

- Web ブラウザを起動します。
- Discoverer を起動して、使用する接続を含む接続ページを次のように表示します。
  - Discoverer Viewer を使用する場合は、Discoverer Viewer に接続ページを表示します。
  - Discoverer Plus を使用する場合は、Discoverer Plus に接続ページを表示します。

次の図は、Discoverer Plus に接続ページを示しています。

**OracleBI Discovererに接続**

OracleBI Discovererに接続するには、接続名をクリックするか、接続の詳細を直接入力します。

**接続の選択** 接続の作成(C)

詳細	接続	説明	更新	削除
▶表示	Annual summaries	Annual reports by Region		
▶表示	Customer Reports	Customer reports by Region		
▶表示	Monthly worksheets	Monthly reports by Region		
▶表示	Weekly worksheets	Weekly reports by Region		

**直接接続** Ⓜ 最初に戻る

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先

\* ユーザー名

\* パスワード

\* データベース

End User Layer

ロケール

- 「詳細」列で、接続の隣にある「表示」リンクを選択して接続の詳細を展開します。  
ヒント: 「表示」リンクは、Netscape Navigator では使用できません。Microsoft Internet Explorer を使用して接続ページを表示します。
- 「接続キー」の値を書き留めます。  
これで、cn= URL パラメータで「接続キー」の値を使用できます。

**注意**

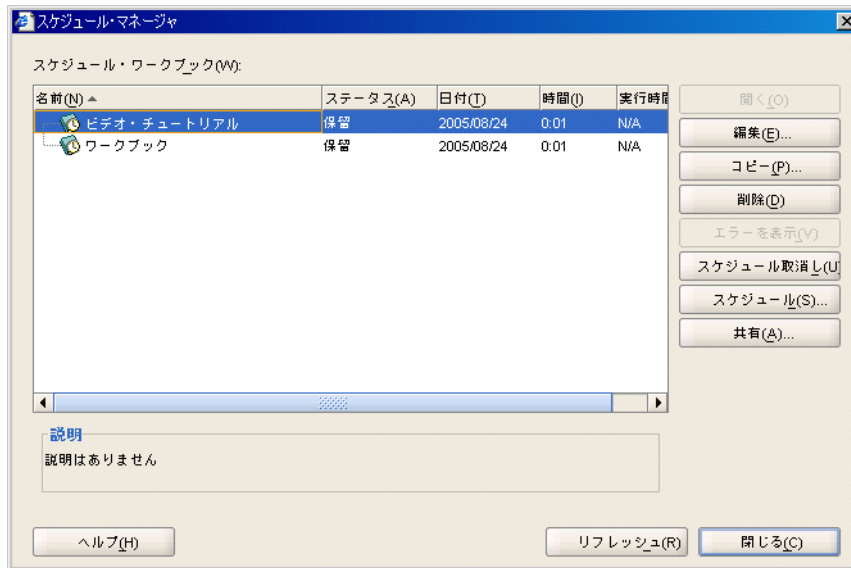
- 例については、第 13.5.7 項「例 7: Discoverer Plus の起動およびスケジュール済ワークブックの表示」を参照してください。

**13.4.4 スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認する方法**

ワークブックの結果からなるセットを自動的に開く場合は、スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認します。

スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認するには、次の操作を実行します。

1. Discoverer Plus Relational を起動します（Discoverer Plus Relational を起動する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください）。
2. 「ツール」→「スケジュールの管理」を選択して「スケジュール・マネージャ」ダイアログを表示します。
3. 「名前」列で、使用する結果セットを含むスケジュール・ワークブックを展開します。



4. 「名前」列の「結果: {0}」ラベルの右側に表示された番号を書き留めます。

たとえば、結果のセットの番号は 61796 となることがあります。

これで、この値は、次の構文を使用して結果のセットを指定するときに、<run ID> として使用できます。

```
&wbk=<unique workbook ID>&<run ID>&wsk=<unique worksheet ID>
```

**注意:** スケジュール・ワークブックの結果の一意の実行 ID を使用する高度な例は、第 13.5.8 項「例 8: Discoverer Viewer の起動およびスケジュール・ワークブックの結果セットの表示」を参照してください。

## 13.5 URL パラメータの使用例

この項では、Discoverer で URL パラメータを使用する場合の例を示します。使用例には次のようなものがあります。

- 第 13.5.1 項「例 1: Discoverer Viewer の起動」
- 第 13.5.2 項「例 2: ワークシート・パラメータを使用した Discoverer Viewer の起動」
- 第 13.5.3 項「例 3: Discoverer Plus の起動」
- 第 13.5.4 項「例 4: 接続詳細を要求しない Discoverer の起動」
- 第 13.5.5 項「例 5: Discoverer Viewer の起動およびパスワードの要求」
- 第 13.5.6 項「例 6: Discoverer Plus OLAP の起動」
- 第 13.5.7 項「例 7: Discoverer Plus の起動およびスケジュール済ワークブックの表示」
- 第 13.5.8 項「例 8: Discoverer Viewer の起動およびスケジュール・ワークブックの結果セットの表示」

**注意:** 例 1～4 では、パブリック接続を使用してログイン詳細を指定します。これらの例のパブリック接続には、ID 値 `cf_a156` があります。例 5 では、`us=`、`db=` および `eul=` を使用してログイン詳細を指定します。例 6 では、OLAP データ・ソースへのパブリック接続を使用します。パブリック接続の作成方法は、第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」を参照してください。

### 13.5.1 例 1: Discoverer Viewer の起動

Discoverer Viewer を起動し、`jchan` として自動で接続し、Monthly Analysis ワークブック内の January Analysis ワークシートを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a156&wbk=MONTHLY_ANALYSIS&wsk=179
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。  
接続 ID の確認の詳細は、第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」を参照してください。
- `wbk=<value>` は、Discoverer ワークブックのワークブック ID を指定します。
- `wsk=<value>` は、Discoverer ワークシートのワークシート ID を指定します。
- この例では、`MONTHLY_ANALYSIS` が Monthly Analysis ワークブックのワークブック ID で、`179` が January Analysis ワークシートのワークシート ID です。ワークブック ID およびワークシート ID の確認の詳細は、第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」および第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」を参照してください。

### 13.5.2 例 2: ワークシート・パラメータを使用した Discoverer Viewer の起動

Discoverer Viewer を起動し、`jchan` として Sales EUL に自動で接続し、Monthly Analysis ワークブック内の January Analysis ワークシートを開いて、ワークシート・パラメータ値 `East` を入力するには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a156&wbk=MONTHLY_ANALYSIS&wsk=179&qp_regionparam=East
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。



接続 ID の確認の詳細は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#) を参照してください。

- `wbk=<value>` は、Discoverer ワークブックのワークブック ID を指定します。
- `wsk=<value>` は、Discoverer ワークシートのワークシート ID を指定します。
- `qp_regionparam=<value>` は、`regionparam` という名前のパラメータの値を指定します。
- この例では、MONTHLY\_ANALYSIS が Monthly Analysis ワークブックのワークブック ID で、179 が January Analysis ワークシートのワークシート ID です。ワークブック ID およびワークシート ID の確認の詳細は、[第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」](#) および [第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」](#) を参照してください。

### 13.5.3 例 3: Discoverer Plus の起動

Discoverer Plus を起動し、`jchan` として Sales EUL に自動で接続し、Monthly Analysis ワークブック内の January Analysis ワークシートを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?cn=cf_a156&opendbid=MONTHLY_ANALYSIS&sheetid=179
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?` は、Discoverer Plus URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。  
接続 ID の確認の詳細は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#) を参照してください。
- `opendbid=<value>` は、Discoverer ワークブックのワークブック ID を指定します。
- `sheetid=<value>` は、Discoverer ワークシートのワークシート ID を指定します。
- この例では、MONTHLY\_ANALYSIS が Monthly Analysis ワークブックのワークブック ID で、179 が January Analysis ワークシートのワークシート ID です。ワークブック ID およびワークシート ID の確認の詳細は、[第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」](#) および [第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」](#) を参照してください。

### 13.5.4 例 4: 接続詳細を要求しない Discoverer の起動

接続 ID が `cf_a157` の Sales Data という接続を使用して Discoverer Viewer を起動するには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a157
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。  
接続 ID の確認の詳細は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#) を参照してください。
- `cn=<value>` で指定された接続がパブリック接続であれば、エンド・ユーザーはパスワードを要求されません。`cn=<value>` で指定された接続がプライベート接続であれば、エンド・ユーザーはパスワードを要求されます。パブリック接続は Oracle Enterprise Manager を使用して作成します (詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#) を参照してください)。
- プライベート接続が許可されていない場合、パブリック接続の接続 ID のみ使用できます (詳細は、[第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」](#) を参照してください)。



### 13.5.5 例 5: Discoverer Viewer の起動およびパスワードの要求

この例では、エンド・ユーザーが Discoverer にアクセスする前にパスワードの指定を要求されるようにします。そのため、ユーザー名、データベースおよび EUL を URL に指定します。

Discoverer Viewer を起動し、video5 として自動で接続し、Monthly Analysis ワークブック内の January Analysis ワークシートを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?us=video5&db=db1&eul=VIDEO5&wbk=MONTHLY_ANALYSIS&wsk=179
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `us=<value>` は、データベース・ユーザー名を指定します。
- `db=<value>` は、データベースを指定します。
- `eul=<value>` は、End User Layer (EUL) を指定します。
- `wbk=<value>` は、Discoverer ワークブックのワークブック ID を指定します。
- `wsk=<value>` は、Discoverer ワークシートのワークシート ID を指定します。
- この例では、MONTHLY\_ANALYSIS が Monthly Analysis ワークブックのワークブック ID で、179 が January Analysis ワークシートのワークシート ID です。ワークブック ID およびワークシート ID の確認の詳細は、[第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」](#) および [第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」](#) を参照してください。

### 13.5.6 例 6: Discoverer Plus OLAP の起動

Discoverer Plus OLAP を起動しログイン・ページを表示するために、次の URL が使用できます。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?db=host1:1521:ora925
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?` は、Discoverer Plus URL および Plus OLAP の URL です。
- `db=host1:1521:ora925` は、ホスト名 (host1)、ポート番号 (1521) および SID (ora925) です。

Discoverer Plus OLAP の URL パラメータの詳細は、[第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」](#) を参照してください。

### 13.5.7 例 7: Discoverer Plus の起動およびスケジュール済ワークブックの表示

Discoverer Plus を起動し、jchan として Sales EUL に自動で接続し、スケジュール済ワークブックを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?cn=cf_a156&opendbid=SALES_ANALYSIS2&sheetid=42&workbooksource=Scheduled
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/plus?` は、Discoverer Plus URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。  
接続 ID の確認の詳細は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#) を参照してください。
- `opendbid=<value>` は、Discoverer スケジュール済ワークブックのワークブック ID を指定します。

- `sheetid=<value>` は、Discoverer スケジュール済ワークシートのワークシート ID を指定します。
- `workbooksources=Scheduled` は、ワークブックをスケジュール済として識別します。

### 13.5.8 例 8: Discoverer Viewer の起動およびスケジュール・ワークブックの結果セットの表示

Discoverer Viewer を起動し、jchan として Sales EUL に自動で接続し、スケジュール・ワークブックの結果セットを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a156&wbk=MONTHLY_ANALYSIS&3&wsk=179
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `cn=<value>` は、Discoverer 接続の接続 ID を指定します。  
接続 ID の確認の詳細は、[第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」](#)を参照してください。
- `wbk=<value>` は、Discoverer スケジュール・ワークブックのワークブック ID を指定します。
- `<number>` は Discoverer 結果セットの一意の実行 ID（この例では 3 番）を指定します。  
**注意:** Discoverer 結果セットの一意の実行 ID を確認する方法の詳細は、[第 13.4.4 項「スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認する方法」](#)を参照してください。
- `wsk=<value>` はワークシート ID を指定します。

### 13.5.9 例 9: Discoverer Viewer での OLAP ワークシートの表示

Discoverer Viewer を起動し、Discoverer カタログの Users\JChan フォルダにある Workbook A という名前のワークブックに格納された、Export 1 という名前の OLAP ワークシートを開くには、次の URL を使用します。

```
http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?cn=cf_a102&worksheetname=Users/JChan/Workbook+A/Export+1
```

#### 注意

- `http://<host.domain>:<port>/discoverer/viewer?` は、Discoverer Viewer URL です。
- `&worksheetname` は、OLAP ワークシートのフォルダの場所と名前を指定します。  
Discoverer Plus OLAP の URL パラメータの詳細は、[第 6.8 項「Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ」](#)を参照してください。

## 13.6 URL パラメータ・テーブルで使用される構文および表記法

このドキュメントの URL パラメータ・テーブルでは、次の構文および表記規則を使用します。

- パラメータ名は標準体（例：`framedisplaystyle=`）
- 変数パラメータ値はイタリック体（例：`cn=connection ID`）
- リテラル値は標準体（例：`framedisplaystyle=<separate or embedded>`）

## 13.7 Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト

このテーブルは、Discoverer Plus および Discoverer Viewer で使用できる Discoverer URL の汎用パラメータの定義を示します。

パラメータおよび値	説明	例
cn=<connection ID>	Discoverer の起動に使用するログイン詳細を含む接続を指定します（接続の接続 ID を確認する方法の詳細は、第 13.4.3 項「接続の接続 ID を確認する方法」を参照してください）。 例については、第 13.5.4 項「例 4: 接続詳細を要求しない Discoverer の起動」を参照してください。 URL での Discoverer 接続の使用の詳細は、第 13.3 項「URL パラメータを使用したログイン情報の指定について」を参照してください。 テーブルの下にある注意も参照してください。	cn=cf_m2
cs=[APPS_SECURE]<dbc file name>	保護モードで接続するかどうかを指定します。<dbc file name> は、Applications 接続情報を含む Applications DBC ファイルです。	cs=[APPS_SECURE]genledger_payables
eul=<EUL name>	接続先の EUL の名前を指定します。このパラメータを指定するのは、デフォルトの EUL を変更する場合のみです。 <b>注意:</b> EUL 名には、大文字と小文字の区別があります。	eul=myEUL
nls_date_format=<date format>	セッションのデフォルト日付フォーマットを指定します。	nls_date_format='MM/DD/YY'
nls_date_language=<date language>	Discoverer に表示する月名および曜日に使用する言語を指定します。	nls_date_language=Spanish
nls_lang=<language>	Discoverer で使用する言語および地域を指定します。 言語および地域の指定には、Oracle ネーミング規則を使用します。	nls_lang=spanish_spain
nls_numeric_characters=<separator characters>	小数点およびグループ・セパレータとして使用するデフォルトの文字を指定します。 最初に小数点を指定し、続けてグループ・セパレータを指定する必要があります。	nls_numeric_characters='.,'
nls_sort=<sort name または binary>	次のように、ORDER BY クエリーおよび文字列比較時のセッション照合順番を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アルファベット順のソート順序を指定するには、&lt;sort name&gt; を使用します。</li> <li>■ バイナリ・ソートを指定する場合は、'binary' を使用します。</li> </ul>	nls_sort=binary
nls_sort=<sort type>	文字ソート・シーケンスを指定します。 nls_sort コマンドの詳細は、『Oracle Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。	nls_sort=XSpanish

パラメータおよび値	説明	例
reuseConnection=<true または false>	<p>ブラウザ・セッションで同じログイン詳細を含む URL リンクを使用するときに、エンド・ユーザーが常にパスワードを入力する必要があるかどうかを指定します。</p> <p><b>注意:</b> この作業環境はプライベート Discoverer 接続で使用してください。エンド・ユーザーは、パブリック Discoverer 接続を使用するときに、データベース・パスワードを要求されません。</p> <p>Discoverer は、エンド・ユーザーがブラウザ・セッションでデータベース・パスワードをすでに指定しているかどうかを確認し、指定している場合は、さらにユーザーにデータベース・パスワードを再度要求するかどうかを確認します。</p> <p>たとえば、ある Web ページに、5 つの Discoverer ワークシートへの URL リンクが含まれているとします。エンド・ユーザーが 1 番目のワークシートを選択し、データベース・パスワードを入力した場合、Web ページに戻り、他の 4 つのワークシート・リンクから選択する際に、パスワードの再入力を不要にすることが考えられます。</p> <p>エンド・ユーザーが常にパスワードを入力するようにするには、'false' を使用します。</p> <p>エンド・ユーザーが、ブラウザ・セッションで最初にプライベート接続を使用するときのみ、パスワードを入力する場合、'true' を使用します。</p>	reuseConnection=true
sg=<security group>	<p>接続する際の Oracle Applications セキュリティ・グループを指定します。</p> <p><b>注意:</b> ユーザー名、職責またはセキュリティ・グループを指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは不足しているログイン情報の入力を要求されます。</p>	sg=securityGroup
us=<database user name>	<p>Discoverer への接続に使用するデータベース・ユーザー名を指定します。</p> <p><b>ヒント:</b> このパラメータを使用して、データベースおよびユーザー名を 1 つのパラメータとして指定することもできます。</p> <p><b>注意:</b> ユーザー名を指定しないと、Discoverer エンド・ユーザーはユーザー名の入力を要求されます。</p>	us=video5

### 注意

- cn= URL パラメータを使用する場合は、次のことに注意してください。
  - Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成が許可されていない場合、指定する接続はパブリック接続である必要があります。詳細は、[第 4.5 項「Discoverer エンド・ユーザーによるプライベート接続の作成を有効にするかどうかの指定」](#)を参照してください。

## 13.8 Discoverer Plus 固有の URL パラメータのリスト

このテーブルは、第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」の汎用 URL パラメータ以外の、Discoverer Plus 固有の URL パラメータの説明です。

ヒント: Discoverer Plus URL パラメータを、Discoverer Viewer URL パラメータと同じ URL で使用しないでください。

注意: Discoverer Plus OLAP の URL パラメータの詳細は、第 6.7 項「Discoverer Plus OLAP サブレットの URL パラメータ」を参照してください。

パラメータおよび値	説明	例
<code>_plus_popup=&lt;true または false&gt;</code>	<p>Discoverer Plus を新しいブラウザ・ウィンドウで起動するか、Discoverer 接続ページで起動するかを次のように指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ true (デフォルト) に指定すると、Discoverer Plus は新しいブラウザ・ウィンドウで起動します。</li> <li>■ false に指定すると、Discoverer Plus は現在のブラウザ・ウィンドウで起動します。</li> </ul> <p>この URL パラメータは <code>framedisplaystyle</code> とともに使用できます (詳細は、<code>framedisplaystyle=</code> を参照してください)。</p>	<code>_plus_popup=true</code>
<code>database=&lt;database name または alias&gt;</code>	<p>Discoverer の起動時に接続するデータベースを指定します。</p> <p>ヒント: また、接続 URL パラメータを使用して、データベースおよびユーザー名を 1 つのパラメータとして指定することもできます。</p>	<code>database=mydb</code>

パラメータおよび値	説明	例
framedisplaystyle=<separate または embedded>	<p>Discoverer メイン・ウィンドウの起動方法を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Discoverer のメイン・ウィンドウを、ブラウザ（たとえば、Discoverer 接続ページ）とは別のフレームとして起動するには、'separate' を使用します。ブラウザ・ウィンドウには Discoverer の画像が含まれているため、Discoverer の使用中はブラウザ・ウィンドウを開いたままにしておく必要があります。</li> <li>■ Discoverer のメイン・ウィンドウを、現行のブラウザ内で起動するには、'embedded' を使用します。</li> </ul> <p>_pop_up を framedisplaystyle= とともに使用する場合、可能な組合せは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ _plus_popup=true と framedisplaystyle=embedded の組合せ：Discoverer Plus は、Plus アプレットが埋め込まれた新しいポップアップ・ブラウザ・ウィンドウで起動します。</li> <li>■ _plus_popup=true と framedisplaystyle=separate の組合せ：新しいポップアップ・ブラウザ・ウィンドウが開き、Discoverer Plus が新しいアプレット・ウィンドウで起動します。 この組合せでは、元のブラウザ・ウィンドウ（Discoverer 接続ページ）、Discoverer の画像を含む新しいブラウザ・ウィンドウ、および Discoverer Plus アプレットを含む JFrame ウィンドウの3つのウィンドウが起動します。</li> <li>■ _plus_popup=false と framedisplaystyle=embedded の組合せ：Discoverer Plus は現行のブラウザ・ウィンドウで起動します。</li> <li>■ _plus_popup=false と framedisplaystyle=separate の組合せ：Discoverer Plus は JFrame ウィンドウで起動します。Discoverer 画像は現行のブラウザ・ウィンドウに含まれます。</li> </ul>	framedisplaystyle=separate
helpset=<path>/<locale>/<HS file>	<p>デフォルトの Discoverer Plus ヘルプ・セットとは異なるヘルプ・セットの場所を指定します。</p> <p><b>注意：</b>ヘルプは、標準の2文字ロケールで名前が指定されたサブディレクトリに格納する必要があります。</p> <p><b>ヒント：</b>ヘルプ・セットの URL パラメータを使用してヘルプをカスタマイズするかわりに、plusug.hs ファイルとその関連ファイルを編集します。</p>	helpset=Plus_files/My_custom_help (Plus_files/My_custom_help ディレクトリには、/en、/es、/fr などの言語フォルダが含まれます)

パラメータおよび値	説明	例
lookandfeelname=<system または oracle または browser または plastic または custom>	<p>ルック・アンド・フィールを指定します。たとえば、ユーザーが Windows のルック・アンド・フィールを使用して Discoverer Plus を実行するように指定できます。</p> <p>この設定は、Oracle Application Server Control で指定されている LAF よりも優先されます（詳細は、第 9.1.3 項「すべてのエンド・ユーザーを対象にした Discoverer Plus の LAF の変更方法」を参照してください）。</p> <p>lookandfeelname 値に 'custom' を指定する場合、Discoverer では configuration.xml ファイルで指定した LAF クラスおよび JAR が使用されます。</p> <p>Discoverer の中間層でカスタム LAF を指定する方法の詳細は、第 9.1.4 項「Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法」を参照してください。</p>	lookandfeelname=plastic
opendb=<workbook name>	<p>開くワークブックの名前を指定します（スケジュール済以外で、データベースに格納されていることを前提とします）。URL で opendb パラメータが 2 度以上使用されている場合、Discoverer は最後のパラメータを使用します。</p> <p><b>ヒント:</b> この URL パラメータは下位互換性のために含まれます。ワークブックは opendbid を使用して指定することをお勧めします。</p> <p><b>注意:</b> 'opendb=Video+Sales+Workbook' は 'workbookname=Video+Sales+Workbook&amp;workbooksource=Database' と等価です。</p> <p>workbookname および workbooksource も参照してください。</p>	<p>opendb=Video+Sales+Workbook</p> <p><b>注意:</b> ワークブック・ソースも指定する必要があります (workbooksource=Database または Scheduled)。例: workbooksource=Scheduled&amp;opendb=Video+Sales+Workbook</p>
opendbid=<unique ID>	<p>開くワークブックの一意の ID を指定します。</p> <p>Discoverer ではワークブックが、スケジュール済ワークブックとしてではなく、データベースに格納されていることを前提とします。</p> <p>ワークブックの一意の ID を確認する方法の詳細は、第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」を参照してください。</p> <p>使用例は、第 13.5 項「URL パラメータの使用例」を参照してください。</p>	<p>opendbid=JanuarySales</p> <p><b>注意:</b> ワークブック・ソースも指定する必要があります (workbooksource=Database または Scheduled)。例: workbooksource=Scheduled&amp;opendbid=JanuarySales</p>
param_<parameter_name>=<parameter_value>	<p>パラメータの値を指定します。</p> <p><b>注意:</b> ワークブックにその名前パラメータが含まれていない場合、Discoverer はそのパラメータを無視します。</p>	param_regionparam=East
responsibility=<responsibility name>	<p>Oracle Applications エンド・ユーザーの Oracle Applications 職責を指定します。</p> <p><b>注意:</b> ユーザー名、職責またはセキュリティ・グループを指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは不足しているログイン情報の入力を要求されます。</p>	<p>responsibility=Manager</p> <p>(つまり、Discoverer は「職責」ダイアログを省略して、エンド・ユーザーに管理者の Oracle Applications 職責を割り当てます)</p>

パラメータおよび値	説明	例
sheet=<worksheetname>	<p>デフォルトで開くワークシートの名前を指定します。</p> <p><b>注意:</b> URL で Sheet パラメータが 2 度以上使用されている場合、Discoverer は最後のパラメータを使用します。</p> <p><b>ヒント:</b> この URL パラメータは下位互換性のために含まれます。ワークシートは sheetid を使用して指定することをお勧めします。</p>	sheet=Sales+Detail+Sheet
sheetid=<unique ID>	<p>開くワークシートの一意の ID を指定します。</p> <p>ワークシートの一意の ID を確認する方法の詳細は、第 13.4.2 項「ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法」を参照してください。</p> <p><b>注意:</b> また、opendbid を使用してワークブックを指定する必要もあります。</p> <p>使用例は、第 13.5 項「URL パラメータの使用例」を参照してください。</p>	sheetid=7
username=<database user name>	<p>Discoverer への接続に使用するデータベース・ユーザー名を指定します。</p> <p><b>ヒント:</b> 接続パラメータを使用して、データベースおよびユーザー名を 1 つのパラメータとして指定することもできます。</p> <p><b>注意:</b> ユーザー名、職責またはセキュリティ・グループを指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは不足しているログイン情報の入力を要求されます。</p>	username=video_user
windowheight=<number of pixels>	<p>Discoverer アプリケーション・フレームの高さをピクセルで指定します。このパラメータを使用しない場合、デフォルトの値が使用されます。</p>	windowheight=600
windowwidth=<number of pixels>	<p>Discoverer アプリケーション・フレームの幅をピクセルで指定します。このパラメータを使用しない場合、デフォルトの値が使用されます。</p>	windowwidth=800
workbookname=<workbookname>	<p>開く Discoverer ワークブックの名前を指定します。</p> <p><b>ヒント:</b> この URL パラメータは workbooksource とともに使用します。たとえば、'workbookname=Video+Sales+Workbook&amp;workbooksource=Database' は 'opendb=Video+Sales+Workbook' と等価です。</p> <p><b>ヒント:</b> この URL パラメータは下位互換性のために含まれます。ワークブックは opendbid を使用して指定することをお勧めします。</p>	workbookname=Video+Sales+Workbook



パラメータおよび値	説明	例
workbooksouce=<Database または Scheduled>	<p>開くワークブックが保存されている場所を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Database は、ワークブックがデータベースに保存されていることを示します。</li> <li>'Scheduled' は、ワークブックがスケジュール・ワークブックで、定期的に更新されることを示します。</li> </ul> <p>ヒント: この URL パラメータは <code>opendbid</code> または <code>workbookname</code> とともに使用します。</p> <p>高度な例については、第 13.5.7 項「例 7: Discoverer Plus の起動およびスケジュールワークブックの表示」を参照してください。</p>	workbooksouce=Database

## 13.9 Discoverer Viewer 固有の URL パラメータのリスト

このテーブルは、第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」の汎用 URL パラメータ以外の、Discoverer Viewer 固有の URL パラメータの説明です。

**注意:** Discoverer Viewer で OLAP ワークシートを開くときに使用する URL パラメータの詳細は、第 6.8 項「Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ」を参照してください。

**ヒント:** Discoverer Viewer URL パラメータを、Discoverer Plus URL パラメータと同じ URL で使用しないでください。

パラメータおよび値	説明	例
anlsdf=<date format>	Oracle Applications エンド・ユーザーのセッションでの日付フォーマットを指定します ( <code>nls_date_format</code> と同義です)。	anlsdf='MM/DD/YY'
anlsdl=<date language>	Oracle Applications エンド・ユーザー用の曜日、月名および日付関連略語 (AM、PM、AD、BC) に使用する言語を指定します ( <code>nls_date_language</code> と同義です)。	anlsdl=fr
anlsl=<language>	Oracle Applications エンド・ユーザー用のセッション言語を指定します ( <code>nls_lang</code> と同義です)。	anlsl=en-gb
anlsnc=<separator characters>	Oracle Applications エンド・ユーザーのグループ・セパレータおよび小数点として使用するデフォルトの文字を指定します。 最初に小数点を指定し、続けてグループ・セパレータを指定する必要があります。	anlsnc=',.'
anlss=<sortname または binary>	Oracle Applications エンド・ユーザー用の、ORDER BY クエリーおよび文字列比較時のセッション照合順番を指定します ( <code>nls_sort</code> と同義です)。 値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>アルファベット順のソート順序の名前</li> <li>バイナリ・ソートを指定する場合には <code>binary</code></li> </ul>	anlss=binary
db=<database name>	Discoverer の起動時に接続するデータベースを指定します。	db=video

パラメータおよび値	説明	例
lm=<applications または discoverer>	ログイン方法を次のように指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Oracle Applications ユーザーとして接続するには applications を指定します。</li> <li>Discoverer ユーザーとして接続するには discoverer を指定します。</li> </ul>	lm=applications
pi_<page item name>=<page item value>	ページ・アイテムの名前と、選択する値を指定します。	pi_Region=West
qp_<parameter name>=<parameter value>	パラメータの値を指定します。	qp_City=Denver
rs=<responsibility>	接続する際の Oracle Applications 職責を指定します。 <b>注意:</b> ユーザー名、職責またはセキュリティ・グループを指定しない場合、Discoverer エンド・ユーザーは不足しているログイン情報の入力を要求されます。	rs=Manager
wb=<workbook name>	開く Discoverer ワークブックの名前を指定します。 <b>ヒント:</b> この URL パラメータは下位互換性のために含まれます。ワークブックは <b>wbk</b> を使用して指定することをお勧めします。 <b>注意:</b> ワークブック名内のスペースは + で表します。	wb=My+Workbook
wbk=<unique ID>	開くワークブックの一意の ID を指定します。 <b>Discoverer</b> ではワークブックが、スケジュール済ワークブックとしてではなく、データベースに格納されていることを前提とします。 ワークブックの一意の ID を確認する方法の詳細は、 <a href="#">第 13.4.1 項「ワークブックの一意のワークブック ID を確認する方法」</a> を参照してください。 <b>注意:</b> スケジュール・ワークブックの結果セットを指定する場合は、 <b>&amp;wbk=&lt;unique workbook ID&gt;&amp;&amp;unique run ID&gt;&amp;wsk=&lt;unique worksheet ID&gt;</b> の構文を使用して、スケジュール・ワークブックの結果セットの一意の実行 ID も指定する必要があります（詳細は、 <a href="#">第 13.4.4 項「スケジュール・ワークブックの結果からなるセットの一意の実行 ID を確認する方法」</a> を参照してください）。 高度な例については、 <a href="#">第 13.5.8 項「例 8: Discoverer Viewer の起動およびスケジュール・ワークブックの結果セットの表示」</a> を参照してください。	wbk=JanuarySales

パラメータおよび値	説明	例
ws=<worksheet name>	<p>デフォルトで開くリレーショナル・ワークシートの名前を指定します。</p> <p><b>注意:</b> OLAP ワークシートを指定するためには、worksheetname URL パラメータを使用します。詳細は、第 6.8 項「<a href="#">Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ</a>」を参照してください。</p> <p><b>注意:</b> この URL パラメータは下位互換性のために含まれます。ワークシートは wsk を使用して指定することをお勧めします。</p>	ws=My+Worksheet
wsk=<unique ID>	<p>開くリレーショナル・ワークシートの一意の ID を指定します。</p> <p><b>注意:</b> OLAP ワークシートを指定するためには、worksheetname URL パラメータを使用します。詳細は、第 6.8 項「<a href="#">Discoverer Viewer における OLAP ワークシートの URL パラメータ</a>」を参照してください。</p> <p>ワークシートの一意の ID を確認する方法の詳細は、第 13.4.2 項「<a href="#">ワークシートの一意のワークシート ID を確認する方法</a>」を参照してください。</p> <p><b>注意:</b> wbk を使用してワークブックを指定する必要もあります。</p> <p>使用例は、第 13.5 項「<a href="#">URL パラメータの使用例</a>」を参照してください。</p>	wsk=7



---

---

## OracleBI Discoverer のセキュリティ管理

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus および Discoverer Viewer にのみ適用されます。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「[Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成](#)」を参照してください。

この章では、機密上重要なリソースを保護するために Discoverer で使用される様々なセキュリティ機構について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 14.1 項「[Discoverer とセキュリティ](#)」
- 第 14.2 項「[Discoverer とデータベース・セキュリティ・モデル](#)」
- 第 14.3 項「[Discoverer と Discoverer EUL セキュリティ・モデル](#)」
- 第 14.4 項「[Discoverer と Oracle Applications セキュリティ・モデル](#)」
- 第 14.5 項「[Discoverer と OracleAS Security モデル](#)」
- 第 14.6 項「[OracleAS Framework Security との Discoverer の使用](#)」
- 第 14.7 項「[Oracle Identity Management Infrastructure との Discoverer の使用](#)」
- 第 14.8 項「[Discoverer による Single Sign-On 詳細情報のサポート](#)」
- 第 14.9 項「[セキュリティに関するよくある質問](#)」

## 14.1 Discoverer とセキュリティ

Discoverer では、次のような機密上重要な種々のリソースが使用されており、これらを保護する必要があります。

- データ（ユーザーが許可されている情報以外は参照できないようにするなど）
- メタデータ（ユーザーがアクセス権のないワークブックを編集できないようにするなど）
- Discoverer 接続（暗号化によって安全性が確保されない限り、データベース・ログイン詳細を転送または保持されないようにするなど）
- システム・リソース（CPU、メモリーなど）
- ネットワーク・リソース（より厳密には、ネットワークで転送される際のデータの保護）

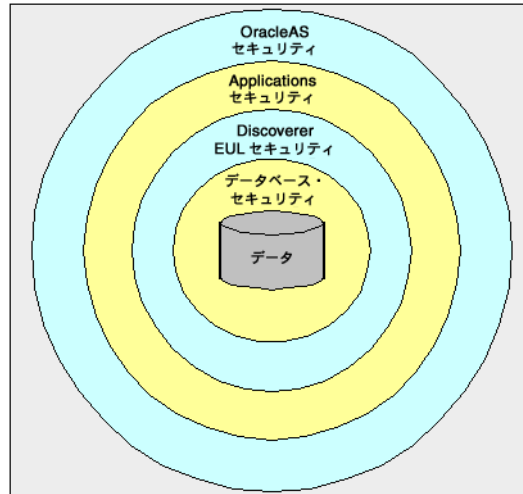
次のテーブルは、機密上重要なリソースの使用および保護の状況を、各 Discoverer コンポーネントごとに示します。

機密上重要なリソース	Discoverer Plus による使用および保護	Discoverer Viewer による使用および保護	Discoverer Portlet Provider による使用および保護	Discoverer Administrator による使用および保護	Application Server Control の Discoverer ページによる使用および保護
データ	はい	はい	はい	はい	いいえ
メタデータ	はい	はい	はい	はい	はい
Discoverer 接続	はい	はい	はい	いいえ	はい
システム・リソース	はい	はい	はい	はい	はい
ネットワーク・リソース	はい	はい	はい	はい	はい

Discoverer では、複数のセキュリティ機構によって、機密上重要なリソースへの不正なアクセスを防止します。これらのセキュリティ機構は、次のセキュリティ・モデルにより提供されます。

- データベース・セキュリティ・モデル
- Discoverer EUL セキュリティ・モデル
- Oracle Applications セキュリティ・モデル
- OracleAS Security モデル

次の図は、Discoverer で採用している複合的なセキュリティ機構を示したものです。これらの機構すべてによって、データやシステム・リソースが不正なアクセスから最大限保護されます。



Discoverer が適用するセキュリティ機構は、次のような（使用している Discoverer 製品によって定義される）Discoverer ユーザーのカテゴリによって異なります。

- Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider のユーザー（Discoverer エンド・ユーザー）
- OracleBI Discoverer Administrator ユーザー（Discoverer マネージャ）
- Application Server Control を使用して Discoverer を管理するユーザー（Discoverer 中間層管理者）

次のテーブルは、セキュリティ・モデルの使用状況を、各 Discoverer コンポーネントごとに示します。

セキュリティ・モデル	Discoverer Plus での使用	Discoverer Viewer での使用	Discoverer Portlet Provider での使用	Discoverer Administrator での使用	Application Server Control の Discoverer ページによる使用
Database	はい	はい	はい	はい	いいえ
Discoverer EUL	はい	はい	はい	はい	いいえ
Applications	はい	はい	はい	はい	いいえ
OracleAS	はい	はい	はい	いいえ	はい

## 14.2 Discoverer とデータベース・セキュリティ・モデル

最も基本的なレベルとして、データベース内のデータはデータベース自体のセキュリティ・モデルにより不正なアクセスから保護されます。Oracle データベースの場合、このセキュリティ・モデルは次のものから構成されます。

- データベース・ユーザーおよびデータベース・ロール
- データベース権限

データベース・ユーザーに直接付与されるデータベース権限（またはデータベース・ロールを介して間接的に付与されるデータベース権限）に従って、ユーザーがアクセスできるデータが決まります。通常、データベース・セキュリティは、SQL\*Plus またはデータベース管理ツールを使用して設定します。

Discoverer では、データベース自体のセキュリティ・モデルを使用して、ユーザーがデータベース・アクセス権のない情報を参照しないように確実に保護します。

データベース・セキュリティ・モデルと Discoverer での使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

**注意:** Discoverer は、Oracle データベース（リリース 8.1.7 以上）によって提供される Oracle Advanced Security Option (ASO) の暗号化技術で認証されます。認証には、4 つの暗号化タイプ (RC4、DES、Triple-DES および AES) があります。Oracle ASO 暗号化によるパフォーマンスへのオーバーヘッドはほとんどありません。ただし、パフォーマンスは、複数の要因 (オペレーティング・システム、暗号化アルゴリズムなど) によって変わります。Oracle ASO 暗号化の詳細は、Oracle データベースのドキュメントを参照してください。

## 14.3 Discoverer と Discoverer EUL セキュリティ・モデル

Discoverer マネージャは、次の目的で、Discoverer アクセス権限およびタスク権限をデータベース・ユーザーに直接 (または間接的にデータベース・ロールを介して) 付与します。権限の付与には、Discoverer Administrator を使用します。

- Discoverer アクセス権限の付与により、ビジネスエリアを表示および使用できるユーザーを制御します。
- Discoverer タスク権限の付与により、各ユーザーに対し実行を許可するタスクを制御します。

Discoverer Administrator で付与されたアクセス権限およびタスク権限にかかわらず、Discoverer エンド・ユーザーがフォルダを表示できるのは、ユーザーに対し (直接またはデータベース・ロールを介して間接的に) 次のデータベース権限が付与されている場合のみです。

- フォルダで使用される基礎となるテーブルのすべてに対する SELECT 権限
- フォルダで使用される任意の PL/SQL ファンクションに対する EXECUTE 権限

Discoverer ユーザー間でワークブックを共有している場合でも、各ユーザーはデータベース・アクセス権を持っていない情報は参照できません。

また、Discoverer マネージャは、Discoverer Administrator を使用して次のようにシステム・リソースを保護できます。

- スケジュール・ワークブックに制限を設定し、エンド・ユーザーが使用できるシステム・リソースを制御します。
- エンド・ユーザーによるクエリーの実行時間を、指定した最大時間内に制限します。
- エンド・ユーザーによるクエリーで返される行数を、指定した行数以内に制限します。

Discoverer マネージャは、独自の PL/SQL ファンクションを登録して Discoverer の機能を拡張できます。ただし、登録できるのは、EXECUTE データベース権限を持っている PL/SQL ファンクションのみです。

Discoverer EUL セキュリティ・モデルの詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

### 注意

- Discoverer ワークブックに対する読取り専用アクセス権を強制するには、特定の Discoverer エンド・ユーザーについて、OracleBI Discoverer Administrator でクエリーの作成 / 編集権限を取り消し、Discoverer Plus を読取り専用モードで実行します (詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください)。
- Discoverer に付属して供給される一部の EUL メンテナンス・スクリプトでは、Discoverer マネージャおよび PUBLIC ユーザーにデータベース権限が付与されます (詳細は、付録 C 「OracleBI Discoverer 管理アカウント情報」を参照してください)。



## 14.4 Discoverer と Oracle Applications セキュリティ・モデル

Discoverer の一般的な使用では、Oracle Applications データベースへの非定型クエリー権限を提供します。このようなアクセス権を提供するために、Discoverer マネージャは、Discoverer Administrator を使用して Applications モデル EUL を作成できます。

Discoverer エンド・ユーザーは、Oracle E-Business Suite のユーザー ID および職責を使用して Oracle Applications データベースに接続できます。詳細は、[第 15.1 項「Discoverer 接続と Oracle E-Business Suite」](#)を参照してください。

Oracle Applications モード EUL は、Oracle Applications スキーマ（Oracle Applications の FND (Foundation) テーブルおよびビューを含む）に基づく Discoverer End User Layer です。

Oracle Applications EUL では、次の Oracle Applications セキュリティ・モデル機能が使用されています。

- Oracle Applications ユーザーおよび職責
 

標準的な EUL ではデータベースのユーザーおよびロールが使用されていますが、Oracle Applications EUL では Oracle Applications のユーザー名および職責が使用されます。Oracle Applications モードで Discoverer Administrator を実行している Discoverer マネージャは、ロールのかわりに Oracle Applications 職責に対しアクセス権限またはタスク権限を付与します。
- Oracle Applications の行レベル・セキュリティ
 

Oracle Applications のテーブルとビューの多くは、アクセスするユーザーまたは職責に応じて返される結果が異なるため、ユーザー依存です。Discoverer では、これらのユーザー依存のテーブルとビューを考慮して、クエリーが適切に実行されます。
- Oracle Applications の複数組織
 

Oracle Applications の複数組織サポートを使用すると、Discoverer で複数の組織からのデータを処理できるようになります。Discoverer エンド・ユーザーは、アクセス権を付与されている一連の組織からのデータについて、クエリーおよび分析を実行できます。EUL 内のフォルダは、Oracle Business Views (Oracle Applications 11i で使用可能) に基づいている必要があります。

Oracle Applications セキュリティ・モデルと Discoverer での使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

### 注意

- Oracle Application Server Single Sign-On は、BIS、EDW または DBI の Web ページ内では機能しません。

## 14.5 Discoverer と OracleAS Security モデル

**注意:** この項は、Discoverer のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合にのみ適用されます。詳細は、[第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)を参照してください。

OracleAS Security は、次のような機能を備えた統合管理およびセキュリティ・フレームワークです。

- 所有者のトータル・コストを削減する、OracleAS および Oracle 環境の中央管理機能。
- 不測のダウン・タイムおよびパフォーマンス障害をなくす、すぐに使用できる監視、アラートおよび診断機能。
- Web アプリケーションについてのエンドツーエンドのパフォーマンス監視機能、およびパフォーマンス・ボトルネックを解消するための原因解析機能。
- ユーザー管理、プロビジョニング、Single Sign-On およびパブリック・キー・インフラストラクチャのための、完全に統合された ID 管理インフラストラクチャ。
- デプロイされている Web アプリケーションについてのエンドツーエンドのセキュリティを確保する、拡張セキュリティ機能および ID 管理機能。

OracleAS Security モデルは次のもので構成されています。

- OracleAS Framework Security
- Oracle Identity Management Infrastructure
- Oracle Advanced Security

Discoverer で OracleAS Security モデルを十分に活用するには、次のような条件があります。

- OracleAS Framework Security により提供される HTTPS サービスを使用する（詳細は、第 14.6 項「OracleAS Framework Security との Discoverer の使用」を参照してください）。
- Oracle Identity Management Infrastructure により提供される Single Sign-On サービスを使用する（詳細は、第 14.7 項「Oracle Identity Management Infrastructure との Discoverer の使用」を参照してください）。

OracleAS Security モデルは、Discoverer 接続メカニズムの基盤でもあります（詳細は、第 14.5.1 項「Discoverer パブリック接続と OracleAS Security モデル」を参照してください）。

OracleAS Security の詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Application Server セキュリティ・ガイド』
- 『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』

### 14.5.1 Discoverer パブリック接続と OracleAS Security モデル

Discoverer マネージャは、Oracle Application Server Control を使用してパブリック接続を作成することで、ユーザーに情報へのアクセスを提供できます。各接続では、1 つ以上のビジネスエリアを含む EUL が指定されます。

パブリック接続を使用するユーザーを制限したり、ユーザーにプライベート接続を作成する権限を与えることで、ユーザーの情報へのアクセスを制御できます。

接続の詳細は、第 4 章「OracleBI Discoverer 接続の管理」を参照してください。

## 14.6 OracleAS Framework Security との Discoverer の使用

OracleAS Framework Security は、次のサービスを含め、多数のサービスを提供します。

- HTTPS/SSL サポート（Oracle HTTP Server を使用）
- ユーザーの認証および認可（Java Authentication and Authorization Service（JAAS。JAZN とも呼ばれる）を使用）
- 暗号化（Java Cryptography Extension（JCE）を使用）

Discoverer サーバーと Discoverer クライアント層コンポーネントとの間の通信に使用する通信プロトコルとして、Oracle HTTP Server により提供される HTTPS/SSL サポートを使用するように指定できます。詳細は、次の項目を参照してください。

- 第 14.6.1 項「Discoverer の通信プロトコルの指定」
- 第 14.6.2 項「Discoverer Viewer のセキュリティと通信プロトコル」
- 第 14.6.3 項「Discoverer Plus のセキュリティと通信プロトコル」

OracleAS Framework Security の詳細は、『Oracle Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください。

### 注意

- Oracle Business Intelligence をインストールすると、SSL が自動的にインストールされ、デフォルトで有効になります（つまり、opmn.xml の start-mode パラメータが 'ssl-enabled' に設定されます）。詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

## 14.6.1 Discoverer の通信プロトコルの指定

Discoverer は、異なる通信プロトコル (JRMP、HTTP、HTTPS) を使用したり、ファイアウォールを設置するまたは設置しないなど、様々なネットワーク環境で使用できます。

最適なネットワーク環境は、企業の既存のネットワーク方針と、次の要件によって決まります。

- パフォーマンス (情報の表示にかかる時間)
- アクセス可能性 (ファイアウォールを経由してデータにアクセスする必要があるかどうか)
- セキュリティ (転送中に必要なデータのセキュリティ・レベル)

ネットワーク全体を通して機密上重要な情報 (パスワードやデータなど) を安全に転送するには、HTTPS を使用する必要があります。

Discoverer Viewer と Discoverer Plus では、必要なセキュリティ構成が異なります。

- Discoverer Viewer のセキュリティ構成の詳細は、第 14.6.2 項「Discoverer Viewer のセキュリティと通信プロトコル」を参照してください。
- Discoverer Plus のセキュリティ構成の詳細は、第 14.6.3 項「Discoverer Plus のセキュリティと通信プロトコル」を参照してください。

### 注意

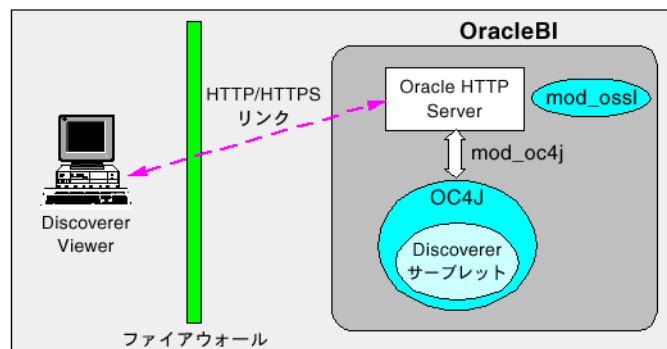
- OracleBI Discoverer を OracleAS Web Cache とともにデプロイしている場合、制限のあるユーザー環境ではセキュリティに影響することがあります。

詳細は、次の項目を参照してください。

- 第 8.4 項「OracleAS Web Cache とともに Discoverer Viewer を使用する場合」
- 『Oracle Application Server セキュリティ・ガイド』
- Discoverer を複数のマシン環境にデプロイしている場合、Discoverer 中間層のマシンごとに別の通信プロトコルを指定することがあります。たとえば、次のような場合があります。
  - Discoverer Plus ユーザーがファイアウォールの内側で作業するためのマシンでは、JRMP プロトコルを使用する。
  - 他の 2 台のマシンでは、Discoverer Viewer ユーザーが Web 経由でレポートにアクセスするため、HTTPS プロトコルを使用する。

## 14.6.2 Discoverer Viewer のセキュリティと通信プロトコル

Discoverer Viewer では、標準の HTTP または HTTPS プロトコルを使用して Discoverer Viewer クライアントを Discoverer サーブレットに接続します。



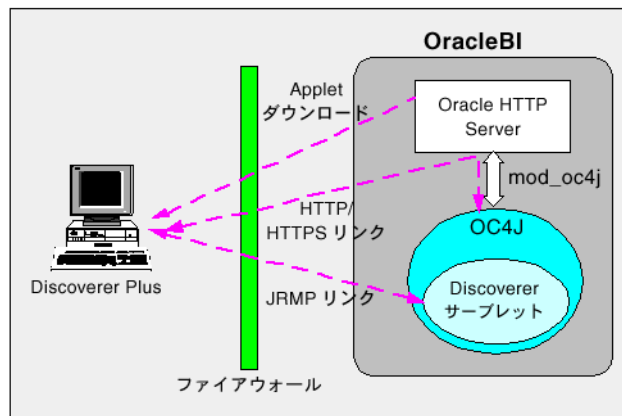
注意: Discoverer Viewer クライアント・マシンで Discoverer Viewer を実行する際に必要となるのは、標準の Web ブラウザのみです。

デフォルトの OracleAS インストールでは、Discoverer Viewer は次のように構成されます。

- HTTP 環境では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。ファイアウォールを使用している場合は、OracleAS で使用している Oracle HTTP Server ポート（ポート 80 など）に対しファイアウォールを開きます。
- ファイアウォールを使用している場合は、OracleAS で使用している Oracle HTTP Server SSL ポート（ポート 4443 など）に対しファイアウォールを開きます。HTTPS 環境では、Discoverer Viewer によってクライアント・マシンのブラウザで SSL セキュリティ証明書が使用されます。標準以外のまたはプライベートな SSL 署名認証を使用している場合は、ブラウザにルート証明書をインストールする必要があります。HTTPS を使用する Discoverer Viewer のデプロイの詳細は、第 3.5 項「HTTPS を使用した Discoverer の実行」を参照してください。

### 14.6.3 Discoverer Plus のセキュリティと通信プロトコル

Discoverer Plus では、標準の JRMP (Java Remote Method Protocol) プロトコル、HTTP プロトコルまたは HTTPS プロトコルを使用して、クライアントを Discoverer サブレットに接続します。



Discoverer Plus では、次の 2 つの通信チャンネルが使用されます。

- Discoverer Plus クライアントが最初に Discoverer サブレットに接続する際、Discoverer Plus アプレットがクライアント・マシンにダウンロードおよびインストールされます。
- Discoverer Plus アプレットが Discoverer クライアント・マシンにインストールされると、Discoverer Plus クライアント・マシンは JRMP、HTTP または HTTPS のいずれかを使用して、Discoverer サブレットと通信します。

デフォルトの OracleAS インストールでは、Discoverer Plus は環境に応じて次のように構成されます。

- イン트라ネット環境（ファイアウォールの内側）では、特別なセキュリティ構成は必要ありません。Discoverer Plus クライアントは、JRMP プロトコルを使用して Discoverer サブレットに接続します。

デフォルトの Discoverer Plus 通信プロトコル（「デフォルト」）が選択されていることを確認してください（詳細は、第 14.6.3.4 項「デフォルト通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください）。

- HTTPS 環境では、Discoverer Plus によってクライアント・マシンのブラウザでセキュリティ証明書が使用されます。Discoverer Plus を最初に HTTPS プロトコルで（つまり、SSL (Secure Sockets Layer) モードで）実行する際、Discoverer Plus を実行するすべてのクライアント・マシンで、Web サーバーのセキュリティ証明書を Java 仮想マシン (JVM) 証明書ストアにインストールする必要があります。

**注意:** HTTPS を使用して Discoverer Plus をデプロイするには、Oracle Application Server Control で「セキュアなトンネリング」セキュリティ・プロトコルを選択する必要があります（第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」）。

HTTPS を使用する Discoverer Plus のデプロイの詳細は、第 3.5 項「HTTPS を使用した Discoverer の実行」を参照してください。

標準以外の SSL 署名認証を使用している場合は、クライアント・マシン上の certdb.txt ファイルの構成が必要になることがあります（詳細は、第 14.6.3.1 項「標準以外の SSL 署名認証を使用するための Discoverer Plus の構成」を参照してください）。ファイアウォールを使用している場合は、OracleAS で使用している Oracle HTTP Server SSL ポート（UNIX 中間層のポート 4443 または Windows 中間層のポート 443 など）に対してファイアウォールを開きます。

## 注意

- Discoverer アプレットをダウンロードするには、通常、Discoverer サーブレットとの通信に使用するプロトコルと同じ通信プロトコルを使用します（詳細は、第 14.6.3.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」を参照してください）。

### 14.6.3.1 標準以外の SSL 署名認証を使用するための Discoverer Plus の構成

標準以外のまたはプライベートな SSL 署名認証を使用して Discoverer Plus をデプロイしている場合は、各クライアント・マシン上の certdb.txt ファイルにルート証明書情報が含まれている必要があります（詳細は、付録 A「OracleBI Discoverer の構成ファイル」を参照してください）。Discoverer Plus では、ブラウザの署名認証は無視され、Oracle の SSL 技術が使用されるため、証明書情報が certdb.txt ファイル内にあることが必要となります。

Discoverer と SSL の詳細は、第 3.5 項「HTTPS を使用した Discoverer の実行」を参照してください。

### 14.6.3.2 Discoverer Plus 通信プロトコルの指定

Discoverer Plus アプレット（Discoverer クライアント）および Discoverer サーブレット（Discoverer 中間層）が通信に使用する通信プロトコルは、Application Server Control を使用して指定できます。次の 3 つの通信プロトコル・オプションがあります。

- デフォルト

Discoverer Plus アプレットが、Discoverer サーブレットと通信するために、まず JRMP の使用を試み、失敗した場合に HTTP または HTTPS（URL による）の使用を試みるように設定する場合は、このオプションを指定します。

「デフォルト」通信プロトコル・オプションの利点は、クライアント・ブラウザがファイアウォールの内側または外側のどちらで実行されているかにかかわらず、Discoverer Plus が動作する点です。ただし、JRMP が最初に試行されるため、ファイアウォールの外側からの初期接続時は動作が遅くなります。

このオプションの指定の詳細は、第 14.6.3.4 項「デフォルト通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください。

- トンネリング

アプレット自体のダウンロードで使用されたプロトコルと同じプロトコル（URL によって HTTP または HTTPS）で、Discoverer Plus クライアントが Discoverer サーブレットと通信するように設定する場合は、このオプションを指定します。ファイアウォールが使用されているかどうかにかかわらず、このオプションは動作します。

「トンネリング」通信プロトコル・オプションの利点は、JRMP が最初に試行されて失敗した場合に HTTP または HTTPS が再度試行されるというプロセスがないため、「デフォルト」オプションよりも動作が迅速になる点です。

このオプションの指定の詳細は、第 14.6.3.5 項「トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください。

- セキュアなトンネリング

Discoverer Plus クライアントで、Discoverer サブレットとの通信に常に HTTPS を使用する場合は、このオプションを指定します。

「セキュアなトンネリング」通信プロトコル・オプションの利点は、JRMP が最初に試行されて失敗した場合に HTTPS が再度試行されるというプロセスがないため、「デフォルト」オプションよりも動作が迅速になる点です。

このオプションの指定の詳細は、第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください。

**注意:** HTTPS を使用する Discoverer Plus をデプロイする場合、エンド・ユーザーは HTTPS の URL を使用する必要があります。エンド・ユーザーが HTTP の URL を使用すると、Discoverer は起動しません (HTTPS の問題に関するトラブルシューティングの詳細は、第 D.1.7 項「Discoverer Plus で RMI エラーがレポートされる問題」を参照してください)。

### 14.6.3.3 Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する方法

Discoverer Plus の通信プロトコルは、Application Server Control で Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを使用して指定します。たとえば、Discoverer Plus データを暗号化する場合は、Discoverer Plus で HTTPS 通信プロトコルを使用するように構成します。

Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する手順は、次のとおりです。

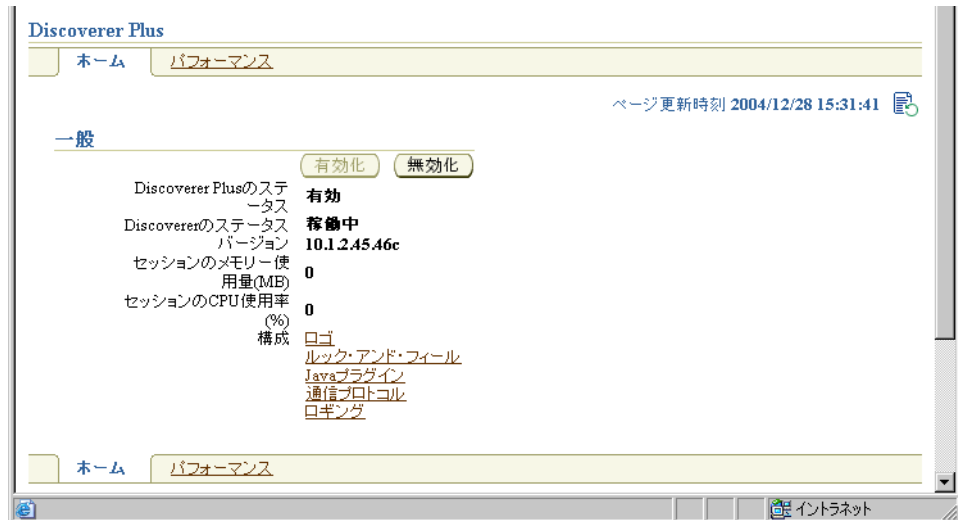
1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します (詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください)。



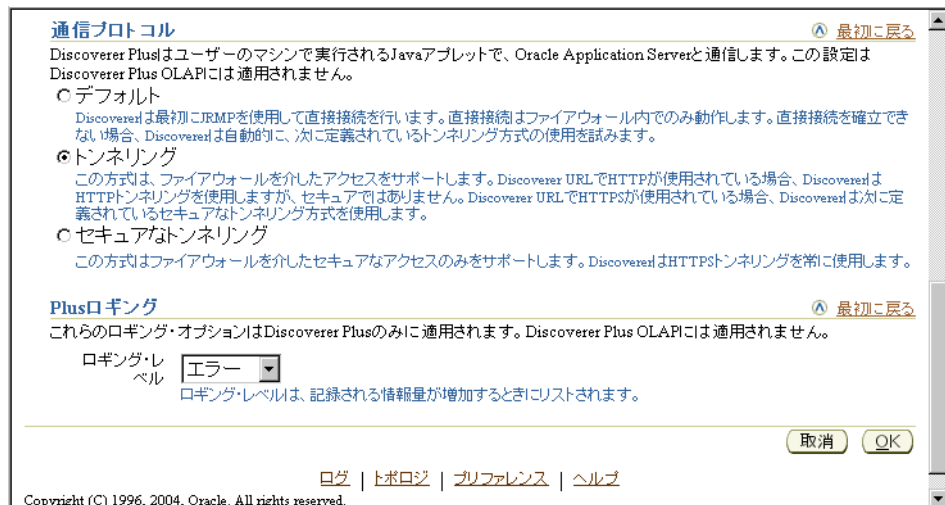
2. Discoverer Plus のリンクを選択して、Application Server Control Discoverer Plus ホームページを表示します。

**ヒント:** Discoverer Plus のリンクを表示するには、「コンポーネント」領域までページを下にスクロールするか、「コンポーネント」リンクを選択します。





3. 「通信プロトコル」リンクを選択して、「通信プロトコル」ページを表示します。



#### 14.6.3.4 デフォルト通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

デフォルト通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示して、OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページに移動します（詳細は、第 14.6.3.3 項「Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する方法」を参照してください）。
2. 「通信プロトコル」オプションで「デフォルト」ラジオ・ボタンを選択します。
3. 「OK」をクリックして詳細を保存します。
4. Discoverer Plus のユーザーに、Discoverer サーブレットの URL を提供します。たとえば、次のような URL です。

`http://<host.domain>:80/discoverer/plus`

Discoverer Plus アプレットは、JRMP を使用するよう試みます。JRMP が使用できない場合は、Discoverer サーブレットとの通信には HTTP または HTTPS (URL による) が使用されます。

**注意:** アプレットがファイアウォールの内側または外側で実行されているかにかかわらず、このオプションは動作します。ただし、JRMP が最初に試行されるため、ファイアウォールの外側からでは動作が遅くなります。このページにある他のオプションの詳細は、第 14.6.3.2 項「Discoverer Plus 通信プロトコルの指定」を参照してください。

### 14.6.3.5 トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

HTTP を使用して Discoverer Plus を実行する場合は、「セキュアなトンネリング」オプションを使用します。

トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示して、OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページに移動します（詳細は、第 14.6.3.3 項「Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する方法」を参照してください）。
2. 「通信プロトコル」オプションで「トンネリング」ラジオ・ボタンを選択します。
3. 「OK」をクリックして詳細を保存します。
4. (オプション) ファイアウォールを使用している場合は、必要に応じて、HTTP または HTTPS のトラフィックを受け入れるようにファイアウォールで適切なポートを開きます。
5. Discoverer Plus のユーザーに、Discoverer サブレットの URL を提供します。たとえば、次のような URL です。

`http://<host.domain>:80/discoverer/plus`

Discoverer Plus アプレットは、アプレット自体をダウンロードするために使用された通信プロトコルと同じ通信プロトコル (HTTP または HTTPS) を使用して Discoverer と通信します。ファイアウォールが使用されているかどうかにかかわらず、このオプションは動作します。

### 14.6.3.6 セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法

HTTPS を使用して Discoverer Plus を実行する場合は、「セキュアなトンネリング」オプションを使用します。

セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示して、OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページに移動します（詳細は、第 14.6.3.3 項「Application Server Control で OracleBI Discoverer Plus の「通信プロトコル」ページを表示する方法」を参照してください）。
2. 「通信プロトコル」オプションで「セキュアなトンネリング」ラジオ・ボタンを選択します。
3. 「OK」をクリックして詳細を保存します。
4. (オプション) ファイアウォールを使用している場合は、必要に応じて、HTTP または HTTPS のトラフィックを受け入れるようにファイアウォールで適切なポートを開きます。
5. Discoverer Plus のユーザーに、Discoverer サブレットの URL を提供します。たとえば、次のような URL です。

`https://<host.domain>:4443/discoverer/plus`

Discoverer Plus アプレットは、Discoverer サブレットとの通信に HTTPS プロトコルを使用します。



Discoverer エンド・ユーザーがクライアント・マシン上で初めて Discoverer Plus を起動する際、デフォルトのセキュリティ証明書を受け入れるかどうかの確認がプロンプトされます。Discoverer エンド・ユーザーは、「セキュリティの警告」ダイアログで「はい」を選択する前に、クライアント・マシンに Discoverer Plus セキュリティ証明書をインストールする必要があります（詳細は、[第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」](#)を参照してください）。

## 14.7 Oracle Identity Management Infrastructure との Discoverer の使用

**注意:** この項は、Discoverer のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合にのみ適用されます。詳細は、[第 2.1 項「Oracle Business Intelligence のインストールについて」](#)を参照してください。

Oracle Identity Management Infrastructure は、次のサービスを含め、多数のサービスを提供します。

- OracleAS Single Sign-On
- OracleAS Certificate Authority
- Oracle Internet Directory (OID)
- Oracle Delegated Administration Services
- Oracle Directory Integration and Provisioning
- LDAP Developer Kit

Discoverer で OracleAS Single Sign-On を使用するように指定して、ユーザーが他の Web アプリケーションと同じユーザー名およびパスワードで Discoverer にアクセスできるようにできます。詳細は、次の項目を参照してください。

- [第 14.7.1 項「OracleAS Single Sign-On との Discoverer の使用」](#)
- [第 14.7.2 項「OracleAS Single Sign-On」](#)

Oracle Identity Management Infrastructure の詳細は、『Oracle Identity Management 概要および配置プランニング・ガイド』を参照してください。

### 14.7.1 OracleAS Single Sign-On との Discoverer の使用

この項では、OracleAS Single Sign-On の概要と Discoverer での使用方法を説明します。

### 14.7.2 OracleAS Single Sign-On

OracleAS Single Sign-On は、Oracle Application Server のコンポーネントの 1 つです。これを使用することで、ユーザーは、ユーザー名およびパスワードを一度入力するだけで、複数の Web アプリケーション（OracleBI Discoverer や OracleAS Portal など）にアクセスできるようになります。

**注意:** OracleAS Single Sign-On は、Oracle Single Sign-On Server を使用して実装されます。

#### 14.7.2.1 Single Sign-On と Discoverer

OracleAS をインストールすると、OracleAS Single Sign-On サービスが自動的にインストールされますが、Discoverer に対してはデフォルトで有効になりません。OracleAS Single Sign-On を有効にする方法の詳細は、[第 14.7.2.2 項「Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方法」](#)を参照してください。

Discoverer 接続は、Single Sign-On を使用している環境でも使用していない環境でも動作します。OracleAS Single Sign-On 環境では、Discoverer エンド・ユーザーが OracleAS Single Sign-On による認証を受けていない状態で Discoverer を起動すると、Single Sign-On 用の詳細情報（ユーザー名およびパスワード）を入力するように要求されます。Single Sign-On 用の詳細情報を入力すると、Discoverer 接続ページが表示できるようになり、次回からはユーザー名またはパスワードを入力せずに Discoverer を起動できます。

**注意** : OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On とともに使用した場合の OracleBI Discoverer の動作の詳細は、第 14.7.2.3 項「OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On とともに使用した場合の Discoverer の動作の例」を参照してください。

### 注意

- Oracle Application Server Single Sign-On は、BIS、EDW または DBI の Web ページ内では機能しません。

## 14.7.2.2 Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方法

OracleBI Discoverer インスタンスで Single Sign-On を有効および無効にします。

Single Sign-On を有効および無効にする手順は、次のとおりです。

1. テキスト・エディタで `mod_osso.conf` ファイルを開きます（構成ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください）。
2. Discoverer に対し Single Sign-On を有効にするには、ファイルの最後に次のテキストを追加します。

```
<Location /discoverer/plus>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
<Location /discoverer/viewer>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
<Location /discoverer/app>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
```

3. Discoverer に対し Single Sign-On を無効にするには、ファイルから次のテキストを削除します。

```
<Location /discoverer/plus>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
<Location /discoverer/viewer>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
<Location /discoverer/app>
require valid-user
AuthType Basic
</Location>
```

4. `mod_osso.conf` ファイルを保存します。
5. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
opmnctl stopall
opmnctl startall
```

### 注意

- `/discoverer/portletprovider` の URL に対し SSO を有効にしないでください。Discoverer では、`/discoverer/portletprovider` の URL の保護を OracleAS Portal に依存しています。言い換えると、次のように Location 値を `/discoverer` として指定しないでください。

```
<Location /discoverer/portletprovider>

require valid-user

AuthType Basic

</Location>
```

- mod\_osso.conf ファイルの OsoIPCheck パラメータ値が off に設定されていることを確認します。
- OracleAS Web Cache を使用して Discoverer Viewer のページをキャッシュする場合、Single Sign-On が有効になっているときは Discoverer のキャッシュは動作しないことに注意してください。

### 14.7.2.3 OracleAS Portal および OracleAS Single Sign-On とともに使用した場合の Discoverer の動作の例

OracleAS Portal ページのポートレットに Discoverer のコンテンツを公開する場合、ポータル・ユーザーに Discoverer ワークブックおよびワークシートへのアクセス権を付与します。ただし、Discoverer ワークブックにアクセスするポータル・ユーザーは、データベース・アクセス権を持っているデータしか参照できません。つまり、複数のユーザーが同じワークブックにアクセスする場合でも、付与されているデータベース権限に応じて参照できるデータがそれぞれ異なることがあります。詳細は、第 11 項「OracleAS Portal との OracleBI Discoverer の使用」を参照してください。

OracleAS Portal とともに使用した場合の OracleBI Discoverer の動作を説明するために、次のような例を想定してみます。

2 人の Single Sign-On ユーザーがいるとします。

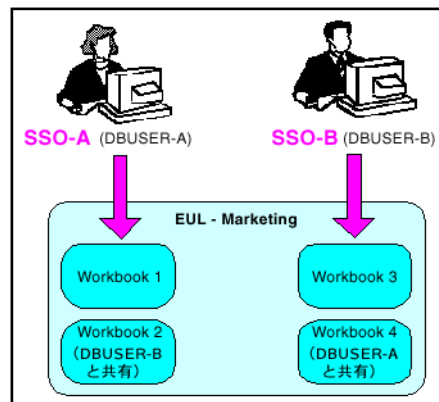
- ユーザー SSO-A は、DBUSER-A@discodb, EUL-Marketing を指しているプライベート接続 Conn-A を持っています。
- ユーザー SSO-B は、DBUSER-B@discodb, EUL-Marketing を指しているプライベート接続 Conn-B を持っています。

ユーザー SSO-A が、接続 Conn-A を使用して、Workbook 1 および Workbook 2 という 2 つのワークブックを Marketing EUL 内に作成します。また、ユーザー SSO-A は、Discoverer Plus を使用して Workbook 2 を DBUSER-B と共有させます。

一方、ユーザー SSO-B は、接続 Conn-B を使用して、Workbook 3 および Workbook 4 という 2 つのワークブックを Marketing EUL 内に作成します。さらに、ユーザー SSO-B は、Discoverer Plus を使用して Workbook 4 を DBUSER-A と共有させます。

次の図は、この状況を示したものです。

図 14-1 2 人の Single Sign-On ユーザーによるワークブックの作成



ここで、ユーザー SSO-A が Conn-A を使用してワークブックのリスト・ポートレットを作成し、Discoverer Portlet Provider の「データベース接続を選択」ページにある **ログイン・ユーザー** ・セクションで「ユーザーのデータベース接続を使用」オプションを選択するとします。

ユーザー SSO-A がワークシートのリスト・ポートレットにアクセスすると、次のワークブック内のワークシートが使用できます。

- Workbook 1

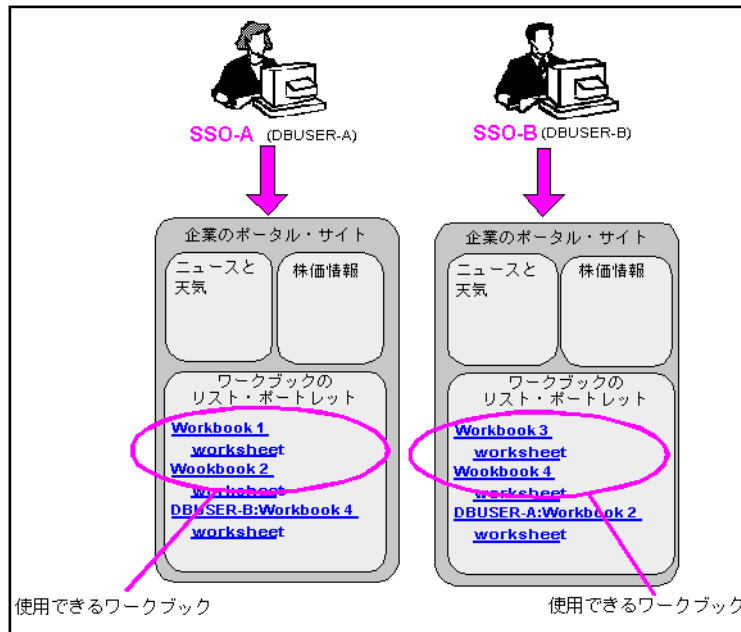
- Workbook 2
- DBUSER-B.Workbook 4

ユーザー SSO-B が同じワークシートのリスト・ポートレットにアクセスすると、次のワークブック内のワークシートが使用できます。

- Workbook 3
- Workbook 4
- DBUSER-A.Workbook 2

次の図は、この状況を示したものです。

図 14-2 2 人の Single Sign-On ユーザーによる Discoverer ポートレットへのアクセス



### 14.7.3 Single Sign-On を使用しない Discoverer の使用

Single Sign-On とともに Discoverer をデプロイしない場合は、エンド・ユーザーはプライベート接続を使用するたびにデータベース・パスワードを入力する必要があります。つまり、Discoverer エンド・ユーザーがブラウザ・セッションで最初にプライベート接続を選択する際に、データベース・パスワードの確認が要求されます。

エンド・ユーザーが Web ブラウザをいったん閉じ、再度 Web ブラウザを起動する場合（つまり、新しいブラウザ・セッションを作成する場合）、データベース・パスワードの確認が要求されます。パブリック接続では、エンド・ユーザーがパスワードを入力する必要はありません（詳細は第 4.2.2 項「パブリック接続」を参照してください）。

#### 注意

- SSO を使用していない環境でプライベート接続を保存するには、Web ブラウザで Cookie を有効にしておく必要があります。
- SSO を使用していない環境では、Discoverer エンド・ユーザーは、現行のマシンおよび現行の Web ブラウザを使用して作成したプライベート接続にしかアクセスできません。エンド・ユーザーが異なるマシンまたは異なる Web ブラウザを使用する場合は、プライベート接続を作成しなおす必要があります。

## 14.8 Discoverer による Single Sign-On 詳細情報のサポート

この項では、Single Sign-On (SSO) の詳細情報を使用して、Discoverer を Virtual Private Database (VPD) とともに使用する方法を説明します。項目は次のとおりです。

- 第 14.8.1 項「Virtual Private Database、Single Sign-On および Discoverer の概要」
- 第 14.8.2 項「SSO ユーザー名による Discoverer データの制限方法を示す例」
- 第 14.8.3 項「SSO ユーザー名による Discoverer データの制限に必要なタスク」
- 第 14.8.4 項「SSO ユーザー名に基づいて異なるデータを表示するように Discoverer ワークシート・ポートレットを設定する方法」
- 第 14.8.5 項「「データベース接続」 ページにある「ログインしているユーザー」リージョンの他のオプションの使用法」
- 第 14.8.6 項「SSO ユーザー名を使用するためにデータベースの LOGON と後続のトリガーを変更する方法」
- 第 14.8.7 項「eul\_trigger\$post\_login トリガーの使用法」

### 注意

- Discoverer は、マルチディメンション・データ・ソースに対して実行している場合 (Discoverer Plus OLAP 内など) には、Single Sign 詳細情報の伝播をサポートしません。データベース ID を使用し、Discoverer Plus OLAP セッションの開始時にデータベース内の有効範囲を管理する D4O\_AUTOGO ファイルを使用する VPD の作成が可能です。詳細は、関連する Oracle データベースのドキュメントを参照してください。

Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」を参照してください。

- Discoverer では、SSO 認証のみを使用して、アクセス可能なデータを決定します。また、データベースのユーザー名とロールを内部的に使用して、ビジネスエリアへのアクセス、ワークブックの共有およびスケジュールを管理します。つまり、SSO ユーザーに対する VPD ポリシーを作成する場合、Discoverer では、SSO 認証に基づいて表示するワークブックのリストを制限しません。Discoverer は、ログインに使用された SSO ユーザー名には関係なく、現在のユーザー名 / データベース接続で使用可能なワークブックをすべて表示します。ただし、SSO ユーザーが表示できるのは、その SSO ユーザーに対して定義された VPD ポリシーに準拠したワークシート・データのみとなります。

### 14.8.1 Virtual Private Database、Single Sign-On および Discoverer の概要

Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以上の Enterprise Edition の強力な Virtual Private Database (VPD) 機能によって、カスタム・セキュリティ・ポリシーを定義および実装できます。特に、VPD 機能を使用すると、ユーザーのセッション情報 (アプリケーション・コンテキストと呼ばれます) の属性に基づくファイングレイン・アクセス制御を確立できます。VPD 機能は、現在ログインしているユーザーの Single Sign-On (SSO) 認証を使用したデータへのアクセスを制御する手段として、一般的に採用されています。VPD の設定の詳細は、『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - 基礎編』を参照してください。

Discoverer が SSO 認証を必要とするように構成されている場合は、Discoverer エンド・ユーザーの SSO ユーザー名を (組込みのアプリケーション・コンテキスト USERENV の CLIENT\_IDENTIFIER 属性として) Discoverer からデータベースに渡すことができます。SSO ユーザー名に基づく VPD ポリシーがデータベースに実装されている場合、Discoverer ワークシートに返されるデータは、SSO ユーザーにアクセス権限が付与されているデータに制限されます。

返されるデータを SSO ユーザー名を使用してさらに制御するために、データベースの LOGON と後続のトリガーおよび Discoverer トリガー (eul\_trigger\$post\_login) の両方にユーザー定義の PL/SQL 文をオプションで追加できます。データベース・トリガーと Discoverer トリガーは、別々に使用することも一緒に使用することもできます。

## 14.8.2 SSO ユーザー名による Discoverer データの制限方法を示す例

Acme 社の Discoverer マネージャは、次のタスクを実行します。

1. Discoverer の URL へのアクセスに SSO 認証が必要となるように、Discoverer 中間層のマシンを構成します。
2. 「売上高」というワークブックにアクセスできる「分析」という Discoverer パブリック接続を作成します。
3. ワークブックの実テーブルに対する VPD ポリシーを作成します。VPD ポリシーは、返されるデータを「CONTEXT1」という変数の値に基づいて決定します。
4. 変数 CONTEXT1 を SSO ユーザー名の値に設定するデータベースの LOGON トリガーを作成します（値は、Discoverer からデータベースに渡されるアプリケーション・コンテキスト情報から抽出されます）。

ACME 社では、Fred Bloggs と Jane Smith の 2 人の Discoverer ユーザーが「売上高」ワークブックを使用します。この 2 人のユーザーの典型的なワークフローは次のとおりです。

1. ユーザー「Fred.Bloggs」は、SSO を介して認証を行い、Discoverer のトップ・レベルの URL にアクセスします。
2. Fred は、パブリック接続「分析」を選択し、ワークブック「売上高」を開きます。
3. Fred は、デフォルトのワークシートにこのデータを表示した後、ログアウトします。
4. ユーザー「Jane.Smith」は、SSO を介して認証を行い、Discoverer のトップ・レベルの URL にアクセスします。
5. Jane は、パブリック接続「分析」を選択し、ワークブック「売上高」を開きます。
6. Jane は、デフォルトのワークシートにこのデータを表示します。

同一のデータベース接続、ワークブック、ワークシートおよびデータベース・クエリーを使用しているにもかかわらず、Jane には Fred とは異なるデータが表示されます。この表示内容の相違は、SSO ユーザー認証に基づく VPD ポリシーによって決定されています。

## 14.8.3 SSO ユーザー名による Discoverer データの制限に必要なタスク

Discoverer ワークシートに表示するデータを SSO ユーザー名を使用して制御する前に、Discoverer マネージャは次のタスクを実行します。

- Discoverer の URL へのアクセスに SSO 認証が必要となるように、Discoverer 中間層のマシンを構成します（詳細は、[第 14.7.2.2 項「Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方法」](#)を参照してください）。
- 1 つ以上のワークブックにアクセスできる Discoverer パブリック接続を作成します（詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)を参照してください）。
- VPD ポリシーが存在しない場合は、ワークブックの実テーブルに対する VPD ポリシーを作成します（VPD ポリシーの作成方法の詳細は、『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - 基礎編』を参照してください）。
- (オプション) SSO ユーザー名を使用する Discoverer ワークシート・ポートレットを構成します（詳細は、[第 14.8.4 項「SSO ユーザー名に基づいて異なるデータを表示するように Discoverer ワークシート・ポートレットを設定する方法」](#)を参照してください）。
- (オプション) SSO ユーザーが使用可能なデータを SSO ユーザー名を使用してさらに制御するために、データベースの LOGON と後続のトリガーを作成または変更します（詳細は、[第 14.8.6 項「SSO ユーザー名を使用するためにデータベースの LOGON と後続のトリガーを変更する方法」](#)を参照してください）。
- (オプション) eul\_trigger\$post\_login トリガーで実行するファンクションを作成し、Discoverer Administrator を使用して登録します（詳細は、[第 14.8.7 項「eul\\_trigger\\$post\\_login トリガーの使用方法」](#)を参照してください）。

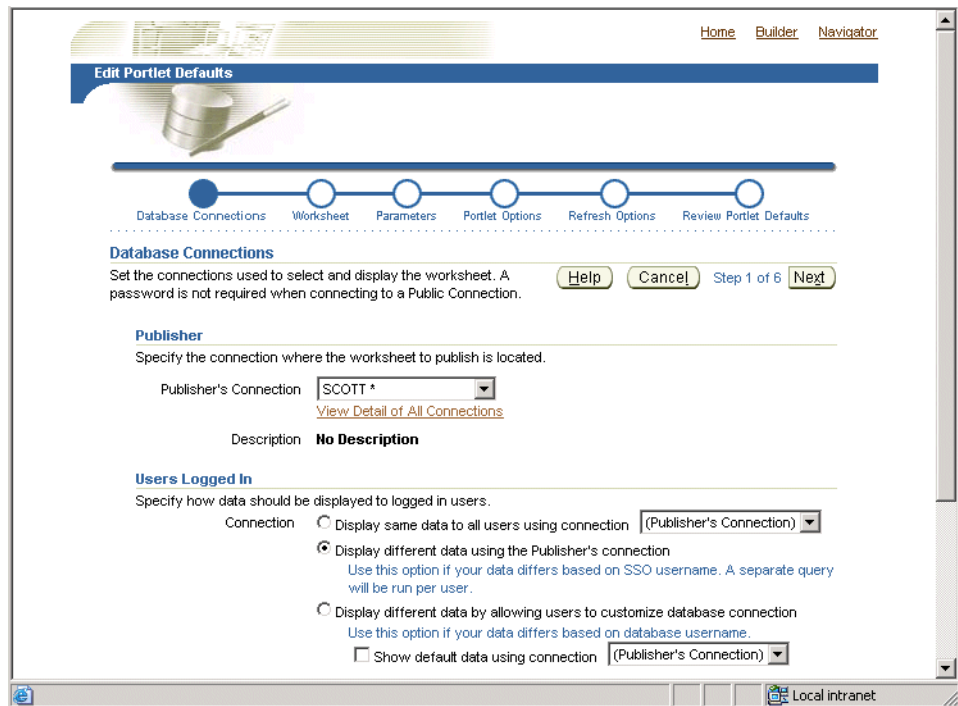


## 14.8.4 SSO ユーザー名に基づいて異なるデータを表示するように Discoverer ワークシート・ポートレットを設定する方法

ユーザーがアクセスできるデータを SSO ユーザー名を使用して決定する VPD ポリシーをデータベースに作成した後は、現在の SSO ユーザー名でアクセスできるデータのみを表示する Discoverer ワークシート・ポートレットを設定できます。

SSO ユーザー名でアクセスできるデータのみが表示されるように指定する手順は、次のとおりです。

1. Discoverer ワークシート・ポートレットの「データベース接続」設定ページの「ログインしているユーザー」リージョンで、次の接続オプションを指定します。
2. 「公開しているユーザーの接続を使用して異なるデータを表示」ラジオ・ボタンを選択します。



このオプションを選択すると、ワークシート・ポートレット・ユーザーの SSO ユーザー名が Discoverer からデータベースに渡されます。VPD ポリシーではこの SSO ユーザー名を使用して、ワークシート・ポートレットに返されるデータを制限します。

## 14.8.5 「データベース接続」ページにある「ログインしているユーザー」リージョンの他のオプションの使用方法

各自のデータベース・ユーザー名または SSO ユーザー名に関係なく、すべてのユーザーにデータベースの同じデータを常に表示する場合は、Discoverer ワークシート・ポートレットの「データベース接続」設定ページで次の操作を実行します。

1. 「接続を使用してすべてのユーザーに同じデータを表示」ラジオ・ボタンを選択します。

各自のデータベースのユーザー名または SSO ユーザー名に関係なく、最初はデータベースの同じデータを表示するが、ユーザーが別のデータベース・ユーザー名を指定できるようにする場合は、次の操作を実行します。

1. 「ユーザーにデータベース接続のカスタマイズを許可し、異なるデータを表示」ラジオ・ボタンを選択します。
2. 「接続を使用してデフォルト・データを表示」チェック・ボックスを選択します。

## 14.8.6 SSO ユーザー名を使用するためにデータベースの LOGON と後続のトリガーを変更する方法

Discoverer から渡される SSO ユーザー名を使用して、SSO ユーザーが使用可能なデータをさらに制御するために、データベースの LOGON と後続のトリガーを変更できます。たとえば、SSO ユーザー名を取得してアプリケーション固有の初期化を実行するカスタム PL/SQL ファンクションをコールできます。

SSO ユーザー名を使用するためにデータベース・トリガーを変更する手順は、次のとおりです。

1. 適切なデータベース・トリガーを作成します。
2. SSO ユーザー名の操作に必要なコードを追加します。

**ヒント:** Discoverer から渡される SSO ユーザー名を返すには、次のファンクション・コールを使用して、USERENV アプリケーション・コンテキストのネームスペースにある CLIENT\_IDENTIFIER 属性に対するクエリーを実行します。

```
SYS_CONTEXT('USERENV', 'CLIENT_IDENTIFIER')
```

### 注意

- Discoverer から渡される SSO ユーザー名は、データベースの LOGON トリガーを実行した時点で使用可能になります。
- Discoverer が SSO を使用するように構成されていない場合、前述の SYS\_CONTEXT ファンクション・コールは NULL を返します。
- SSO ユーザー名は、Oracle9i リリース 1 (9.0.1) 以上のデータベースでのみ使用可能です。

## 14.8.7 eul\_trigger\$post\_login トリガーの使用方法

データベースの LOGON と後続のトリガーのかわりに、または一緒に eul\_trigger\$post\_login トリガーを使用すると、SSO ユーザー名に基づいて Discoverer ワークシートに表示される情報をさらに制御できます。次の場合は、データベース・トリガーのかわりに eul\_trigger\$post\_login トリガーを使用します。

- トリガー・コードを、すべてのデータベース・ユーザーではなく、Discoverer ユーザーのみに反映する場合
- DBA 権限がないためにデータベースの LOGON と後続のトリガー・コードを変更できない場合

eul\_trigger\$post\_login トリガーを使用する手順は、次のとおりです。

1. データベースに次のとおりの PL/SQL ファンクションを定義します。

- 戻り型が integer 型
- 引数を取らない

2. SSO ユーザー名の操作に必要なコードを追加します。

**ヒント:** Discoverer から渡される SSO ユーザー名を返すには、次のファンクション・コールを使用して、USERENV アプリケーション・コンテキストのネームスペースにある CLIENT\_IDENTIFIER 属性に対するクエリーを実行します。

```
SYS_CONTEXT('USERENV', 'CLIENT_IDENTIFIER')
```

3. このファンクションを Discoverer Administrator に登録し、次のプロパティを指定します。

- 名前: eul\_trigger\$post\_login
- 戻り値のデータ型: integer
- 引数: none

PL/SQL ファンクションの登録および Discoverer EUL トリガーの使用の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。



4. pref.txt ファイルに Database/EnableTriggers 作業環境が存在する場合は、値を 0 (ゼロ) 以外に設定します。

#### 注意

- pref.txt ファイルに Database/EnableTriggers 作業環境が存在しない場合は、作業環境を作成しないでください。
- Database/EnableTriggers 作業環境が存在し、その値を 0 (ゼロ) 以外の値に変更する必要がある場合は、後で次の操作を実行する必要があります。
  1. applypreferences スクリプトを実行して、作業環境の変更を適用します。
  2. 更した設定を有効にするために、OracleBI Discoverer サービスを一度停止して再起動します。

## 14.9 セキュリティに関するよくある質問

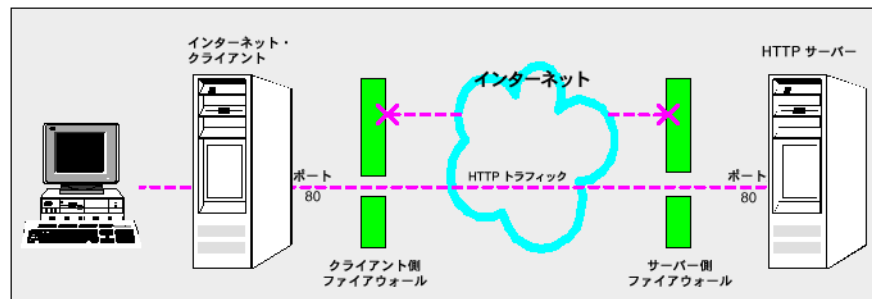
この項では、セキュリティに関する一般的な質問と回答を示します。

### 14.9.1 ファイアウォール

ファイアウォールとは、インターネットと企業ネットワーク間のセキュリティ・ポリシーを確立するためのシステム、または複数のシステムの集まりを指します。

つまり、ファイアウォールはネットワークを囲む電子的な壁であり、許可されていないアクセスからネットワークを保護します。

図 14-3 クライアント側およびサーバー側にファイアウォールがある場合の典型的なインターネット接続

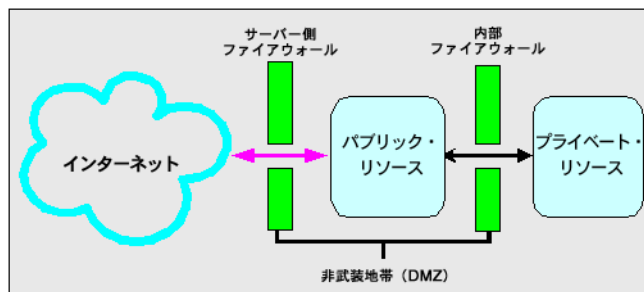


インターネット経由で通信する Web サーバー・マシンの場合、その Oracle HTTP Server とインターネットの間にファイアウォールを設置するのが一般的です。これは、サーバー側のファイアウォールと呼ばれます。この Web サーバー・マシンに接続する他の企業（または遠隔地にある部門）は、クライアント側のファイアウォールと呼ばれる専用のファイアウォールを設置するのが一般的です。企業のファイアウォール・ポリシーに準拠した情報はファイアウォールを通過することが許されるため、サーバー・マシンとクライアント・マシンとは通信できます。

### 14.9.2 非武装地帯 (DMZ)

非武装地帯 (DMZ) とは、もう 1 つのセキュリティ・レベルを提供するファイアウォール構成のことです。この構成では、保護されているネットワークとインターネットとの間にあるエクストラネットが DMZ です。DMZ 内部のリソースは、パブリック・インターネットから参照可能ですが、保護されています。DMZ には、企業のパブリック Web サイト、ファイル転送プロトコル (FTP) サイトおよびシンプル・メール転送プロトコル (SMTP) のホストとなるサーバーが存在するのが一般的です。

図 14-4 非武装地帯 (DMZ)



ファイアウォールのポリシーは企業によって異なります。また、様々なファイアウォール・パッケージが市販されています。

ファイアウォールの構成は、DMZ 内部のリソースが漏れた場合でも、内部ネットワークとそのネットワーク上の機密データの損害を最小限に抑えるように設計するのが理想です。これには、次の 2 つの手順があります。

- 機密上重要なプライベート・リソース（最低でも、データベースとアプリケーション・ロジック）を、DMZ から内部ファイアウォールの背後にある内部ネットワークに移動します。
- 機密上重要なプライベート・リソースへの、DMZ からのアクセスおよび内部ネットワークからのアクセスを制限します。

### 14.9.3 HTTPS の概要と HTTPS を使用する理由

HTTPS プロトコルは、クライアントとサーバー間でセキュリティ保護された接続を確立することを目的とした Secure Sockets Layer (SSL) と呼ばれる業界標準プロトコルです。

このプロトコルには次のようなセキュリティ機能が備わっており、インターネットなどの保護されていないネットワークでも機密データを伝送できます。

- 認証: クライアントがサーバーを識別し、サーバーが偽のサーバーでないことを確認できます（さらに、クライアントがサーバーを識別して認証できます）。
- プライバシー: クライアントおよびサーバー間で伝送されるデータが暗号化されるので、第三者がこのメッセージを傍受しようとしても解読できません。
- 整合性: 暗号化されたデータを受信すると、第三者により破損または変更されたかどうかわかります。

次の場合は、Discoverer で SSL が有効になっています。

- Discoverer Plus を起動するための URL が `https://` で始まり、アプレットのステータス・バーの左側に閉じた鍵のマークが表示されている場合。

**注意:** HTTPS を使用して Discoverer Plus をデプロイするには、Oracle Application Server Control で「セキュアなトンネリング」セキュリティ・プロトコルを選択する必要があります（第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」）。

- Discoverer Viewer を起動するための URL が `https://` で始まり、ブラウザのステータス・バーに閉じた鍵のマークまたはそれに相当する記号（ブラウザによる）が表示されている場合。

## 14.9.4 イン트라ネットでの Discoverer の構成方法

イントラネットでの Discoverer が動作するように構成する手順は、次のとおりです。

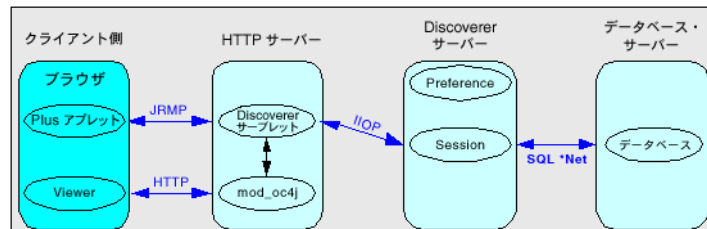
- Discoverer Viewer

イントラネット（ファイアウォールの内側）に Discoverer Viewer をデプロイする場合は、OracleAS のインストール後に特別な構成は必要ありません。Discoverer Viewer では、HTTP 接続が使用されます。

- Discoverer Plus

イントラネット（ファイアウォールの内側）に Discoverer Plus をデプロイする場合は、OracleAS のインストール後に特別な構成は必要ありません。Discoverer Plus では、JRMP による直接接続が使用されます。

図 14-5 イン트라ネット内の Discoverer の典型的なネットワーク構成



## 14.9.5 ファイアウォールを通じた Discoverer の構成方法

ファイアウォールを通して、HTTP または HTTPS で Discoverer が動作するように構成する手順は、次のとおりです。

- Discoverer Viewer

ファイアウォールが HTTP トラフィックを通過させるように設定されていれば、Discoverer Viewer で特別な構成は必要ありません。

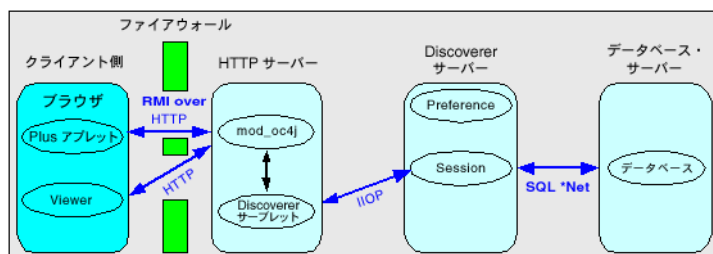
- Discoverer Plus

ファイアウォールが HTTP または HTTPS トラフィックを通過させるように設定されていれば、Discoverer Plus で特別な構成は必要ありません。

初期接続時のパフォーマンスを向上させるには、Discoverer Plus の通信プロトコルを次のいずれかに変更します。

- HTTP の場合は、通信プロトコルを「トンネリング」に設定します。これにより、Discoverer クライアントが、まず JRMP で接続を試行してから HTTP で接続することがなくなります（詳細は、第 14.6.3.5 項「トンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください）。
- HTTPS の場合は、通信プロトコルを「セキュアなトンネリング」に設定します。これにより、Discoverer クライアントが、まず JRMP で接続を試行し次に HTTP を試行して、その後に HTTPS で接続することがなくなります（詳細は、第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください）。

図 14-6 HTTP を使用した Discoverer の典型的なファイアウォール構成



### 14.9.6 複数のファイアウォールを通して動作する Discoverer の構成

HTTP または HTTPS を使用している場合は、Discoverer は複数のファイアウォールを通して動作します（詳細は、第 14.9.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」を参照してください）。

### 14.9.7 イン트라ネット上で暗号化を使用して Discoverer を構成する方法

暗号化を使用するように Discoverer を構成する手順は、次のとおりです。

- Discoverer Viewer
 

HTTPS を使用するように mod\_ossll を構成し（詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください）、HTTPS の URL に Discoverer Viewer をデプロイします。
- Discoverer Plus
 

HTTPS を使用するように mod\_ossll を構成し（詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください）、HTTPS の URL に Discoverer Plus をデプロイします。また、Discoverer Plus 通信プロトコルを「セキュアなトンネリング」に変更する必要があります（詳細は、第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」を参照してください）。

### 14.9.8 ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法

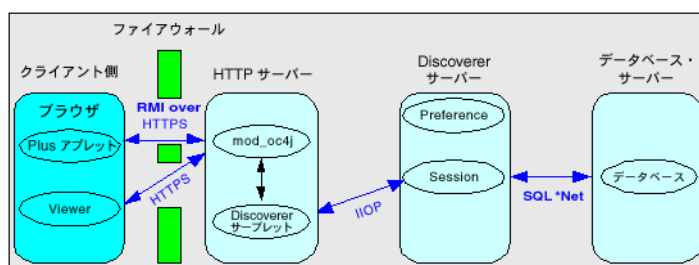
ファイアウォールを通して暗号化を使用するように Discoverer を構成する手順は、次のとおりです。

- Discoverer Viewer
 

ファイアウォールを通して Discoverer Viewer が動作するように構成します（詳細は、第 14.9.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」を参照してください）。その後、HTTPS トラフィックがファイアウォールを通過できることを確認します。
- Discoverer Plus
 

ファイアウォールを通して Discoverer Plus が動作するように構成します（詳細は、第 14.9.5 項「ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法」を参照してください）。その後、HTTPS トラフィックがファイアウォールを通過できることを確認します。

図 14-7 HTTPS を使用した Discoverer の典型的なファイアウォール構成



## 14.9.9 Discoverer による通信の暗号化を確認する方法

Discoverer Viewer では、クライアント・ブラウザ内の Discoverer Viewer ブラウザのステータス・バーに、閉じた鍵のマークまたはそれに相当する記号（ブラウザによる）が表示されていることを確認します。

Discoverer Plus では、クライアントの Discoverer Plus アプレット・ウィンドウの左下隅に、閉じた鍵のマークが表示されていることを確認します。

## 14.9.10 イン트라ネット用およびファイアウォールを通してユーザーが Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法

Discoverer を、イントラネットおよびインターネットの両ユーザー用に構成できます。たとえば、Discoverer Plus でデフォルト通信プロトコルを使用する場合、次のようになります。

- ファイアウォールの内側で機能する直接接続は JRMP だけなので、ファイアウォールの内側からのセッション接続では JRMP 接続が使用されます。
- ファイアウォールの外側からのセッション接続では、HTTP または HTTPS 接続（URL による）が自動的に使用されます。

## 14.9.11 NAT デバイスと Discoverer の使用

標準の Network Address Translation (NAT) デバイスを使用して Discoverer をデプロイできます。



---

---

## OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite

**注意:** この章の内容は、Discoverer Plus Relational および Discoverer Viewer にのみ適用されません。Discoverer Plus OLAP の構成の詳細は、[第 6 章「Discoverer カタログおよび Discoverer Plus OLAP の構成」](#)を参照してください。

この章では、OracleBI Discoverer と Oracle E-Business Suite との統合機能について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- [第 15.1 項「Discoverer 接続と Oracle E-Business Suite」](#)
- [第 15.2 項「Discoverer プライベート接続、OracleAS Single Sign-On および Oracle E-Business Suite のユーザーについて」](#)
- [第 15.3 項「Oracle E-Business Suite 用の Discoverer プリファレンスの設定」](#)

Discoverer および Oracle E-Business Suite の動作要件の詳細は、[第 D.1.2 項「Discoverer および Oracle Applications の動作要件」](#)を参照してください。

**注意:** Oracle Applications および Oracle E-Business Suite という用語は、この章では同じ意味で使用しています。

## 15.1 Discoverer 接続と Oracle E-Business Suite

Discoverer エンド・ユーザーは、Oracle E-Business Suite のユーザー ID および職責を使用して Oracle Applications データベースに接続できます。エンド・ユーザーは、既存の接続（データベース・ログイン詳細の保存セット）を選択でき、また Discoverer に直接接続することもできます。既存の接続を使用した Discoverer への接続の詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Oracle E-Business Suite ユーザーは、「Discoverer に接続」ページの「直接接続」領域にある「接続先」ドロップダウン・リストから「Oracle Applications」を選択することにより、Discoverer に直接接続できます。

**図 15-1 「接続先」ドロップダウン・リストで「Oracle Applications」を選択した状態を示す Discoverer の「直接接続」領域**

### 直接接続

OracleBI Discovererに直接接続するには、次の接続の詳細を入力します。

\* 必須フィールドを示します。

接続先	Oracle Applications
* ユーザー名	<input type="text"/>
* パスワード	<input type="password"/>
* データベース	<input type="text"/>
End User Layer	<input type="text"/>
職責	<input type="text"/>
ロケール	ブラウザから取得したロケール
<input type="button" value="実行(O)"/>	

複数の Oracle Applications 職責を割り当てられたエンド・ユーザーが、Oracle E-Business Suite ユーザーとして接続する（「接続先」ドロップダウン・リストから「Oracle Applications」を選択する）場合、そのエンド・ユーザーは Discoverer によって Applications 職責の指定を要求されます（次の図を参照してください）。

**図 15-2 Discoverer での Oracle E-Business Suite 職責の指定**

### Account Details: Select Responsibility

More than one Responsibility exists for the account you have chosen. Please select the one you wish to use below.

Responsibility	
Select a Responsibility.	
Connection Name	SSO Private Connection
Connection Description	Private connection created by SSO user.
Locale	Locale retrieved from browser
Applications User Name	sysadmin
Database	a1159dis
Connection Type	APPS
Responsibility	System Administrator

### 注意

- Discoverer は、複合アプリケーション環境（Oracle E-Business Suite を使用するユーザーと使用しないユーザーが混在している環境）用に構成されています。つまり、ログイン・ページ（または Discoverer の「接続の作成」ページ）の「接続先」フィールドで、エンド・ユーザーは、OracleBI Discoverer、Oracle Applications または OracleBI Discoverer for OLAP を選択できます。
- Oracle E-Business Suite セキュリティは、「接続先」ドロップダウン・リストから Oracle Applications を選択した場合にのみ適用できます。E-Business Suite セキュリティを使用する OracleBI for OLAP 接続は定義できません。



- Oracle Application Server Control を使用して、パブリックの Oracle E-Business Suite 接続を作成することもできます。詳細は、[第 4.6 項「パブリック接続の作成方法」](#)または Oracle Application Server Control のヘルプを参照してください。
- デフォルトの Oracle E-Business Suite Gateway User ID (GWYUID)、パスワードおよび Foundation Name (FNDNAM) は、pref.txt 構成ファイルで指定されています (プリファレンス設定の詳細は、[第 15.3 項「Oracle E-Business Suite 用の Discoverer プリファレンスの設定」](#)を参照してください)。
- BIS、EDW または DBI のホームページから Discoverer を起動する接続の場合、Discoverer では、opmn.xml に格納された FND\_SECURE および FND\_TOP 変数で指定された位置に格納されている DBC ファイルが使用されます。opmn.xml の場所の詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。  
**注意:** ユーザーが「OracleBI Discoverer に接続」ページから Oracle E-Business Suite 接続を使用する場合には、前述の注意は適用されません。  
データベース接続 (DBC) ファイルの詳細は、『Oracle e-Business Suite System Administrator's Guide』を参照してください。
- SSO を使用してデータベースにすでに接続していれば、SSO ユーザーに関連付けられた Oracle Applications ユーザーを選択する場合は、Discoverer の起動時にパスワードを入力する必要はありません (詳細は、[第 15.2 項「Discoverer プライベート接続、OracleAS Single Sign-On および Oracle E-Business Suite のユーザーについて」](#)を参照してください)。

## 15.2 Discoverer プライベート接続、OracleAS Single Sign-On および Oracle E-Business Suite のユーザーについて

OracleAS Single Sign-On (SSO) ユーザーに関連付けられた Oracle E-Business Suite (Oracle Applications) ユーザーは、パスワードを入力することなく Discoverer プライベート接続を作成および使用できます。

この項のトピックは次のとおりです。

- [第 15.2.1 項「SSO 対応 Oracle Applications データベースの使用時に、Oracle Applications ユーザーが Discoverer でプライベート接続を作成または使用するために必要な条件」](#)
- [第 15.2.2 項「Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする方法」](#)
- [第 15.2.3 項「SSO 対応 Oracle Applications データベースで SSO プライベート接続を使用する場合の Discoverer リリースと OracleAS Infrastructure リリースとの相互運用性」](#)
- [第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」](#)

### 15.2.1 SSO 対応 Oracle Applications データベースの使用時に、Oracle Applications ユーザーが Discoverer でプライベート接続を作成または使用するために必要な条件

次の条件のすべてを満たす場合、Oracle Applications ユーザーは、SSO を使用して Discoverer へのプライベート接続を作成または使用できます。

- Oracle Applications ユーザーが、Discoverer リリース 10.1.2.1 以上を使用すること
- SSO がインストールされ、Discoverer に対して有効化されていること  
詳細は、[第 14.7.1 項「OracleAS Single Sign-On との Discoverer の使用」](#)を参照してください。
- SSO 接続が、Oracle Application Server Control (ASC) で Oracle Applications ユーザーに対して有効化されていること

SSO 接続を有効にするには、Oracle Application Server Control の「Discoverer 構成」ページにある「**認証された OracleAS Single Sign-On (SSO) ユーザーが SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を、パスワードを入力せずに作成および使用できるようにします。**」チェック・ボックスを選択します。

この Discoverer インストールで Oracle Applications ユーザーに対して SSO 対応 Oracle Applications データベースへの接続を有効にする方法の詳細は、[第 15.2.2 項「Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする方法」](#)を参照してください。

- Discoverer が、SSO 対応 Oracle Applications データベースに対して実行中であること
- Oracle Applications ユーザーが SSO ユーザーと関連付けられていること

SSO を使用してプライベート接続を作成または使用する場合、SSO ユーザーに関連付けられた Oracle Applications ユーザーを選択します。そうすれば、パスワード情報を要求されることはありません。

## 15.2.2 Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする方法

通常、Oracle Applications ユーザーは、プライベート接続を作成または使用するときにパスワードを入力します。ただし、SSO ユーザーに関連付けられた Oracle Applications ユーザーは、SSO 対応 Oracle Applications データベースを使用する場合、パスワードを入力することなく Discoverer プライベート接続を作成および使用できます。

Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. 「管理」タブを選択して、「Discoverer 管理」ページを表示します。
3. 「プライベート接続」リンクを選択して、SSO 対応 Oracle Applications データベースに接続領域を表示します。
4. 「**認証された OracleAS Single Sign-On (SSO) ユーザーが SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を、パスワードを入力せずに作成および使用できるようにします。**」チェック・ボックスを使用して、次のように、Discoverer インストールに対して SSO を有効にするかどうかを指定します。
  - Oracle Applications ユーザー（SSO ユーザーに関連付けられた）が、パスワードを入力することなく Discoverer プライベート接続を作成および使用できる（SSO 対応 Oracle Applications データベースを使用する場合）ようにするには、チェック・ボックスを選択します。
  - Oracle Applications ユーザー（SSO ユーザーに関連付けられた）が、パスワードを入力しなければ Discoverer プライベート接続を作成および使用できない（SSO 対応 Oracle Applications データベースを使用する場合）ようにするには、チェック・ボックスを選択解除します。
5. 「OK」をクリックして詳細を保存します。

## 15.2.3 SSO 対応 Oracle Applications データベースで SSO プライベート接続を使用する場合の Discoverer リリースと OracleAS Infrastructure リリースとの相互運用性

使用する Discoverer リリースと OracleAS Infrastructure リリースが異なっても、SSO 対応 Oracle Applications データベースで SSO プライベート接続を使用する場合には、それらのリリースを相互に運用できます。

次の表に、リリース 9.0.4、10.1.2.0.0 および 10.1.2.1 の Oracle Business Intelligence インストールの間で相互運用性を実現するための必要条件を要約し、各 Discoverer リリースを特定の Infrastructure リリースとともに動作させるために必要となる処置を示します。

**表 15-1 Discoverer リリース (Portlet Provider は除く) と OracleAS Infrastructure リリースの相互運用性に対する要件**

使用する Discoverer のリリース	ともに使用する OracleAS Infrastructure のリリース	次の処理を行います。
10.1.2.1 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.1	実行しません。 SSO ユーザーに関連付けられた Oracle Applications ユーザーは、パスワードを入力することなくプライベート接続を作成および使用できます。
10.1.2.1 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.0.0	migratediscoconnection ツールを実行します。 詳細は、第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」を参照してください。
10.1.2.1 (Portlet Provider を除く)	9.0.4	migratediscoconnection ツールを実行します。 詳細は、第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」を参照してください。
10.1.2.0.0 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.1	既存の接続は 10.1.2.0.0 で引き続き動作します。 <b>注意:</b> この組合せで作成された接続は 10.1.2.1 では表示されません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
10.1.2.0.0 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.0.0	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
10.1.2.0.0 (Portlet Provider を除く)	9.0.4	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
9.0.4 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.1	既存の接続はリリース 9.0.4 で引き続き動作します。 <b>注意:</b> この組合せで作成された接続は 10.1.2.1 では表示されません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
9.0.4 (Portlet Provider を除く)	10.1.2.0.0	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
9.0.4 (Portlet Provider を除く)	9.0.4	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。

表 15-2 Discoverer Portlet Provider リリースと OracleAS Infrastructure リリースの相互運用性に対する要件

使用する Discoverer Portlet Provider のリリース	ともに使用する OracleAS Infrastructure のリリース	次の処理を行います。
10.1.2.1	10.1.2.1	実行しません。 SSO ユーザーに関連付けられた Oracle Applications ユーザーは、パスワードを入力することなくプライベート接続を使用できます。
10.1.2.1	10.1.2.0.0	migratediscoconnection ツールを実行します。 詳細は、第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」を参照してください。
10.1.2.1	9.0.4	upgradeMR スクリプトを使用して、Metadata Repository で DISCOVERER5 スキーマをアップグレードし、migratediscoconnection ツールを実行します。 詳細は、第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」および第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」を参照してください。
10.1.2.0.0	10.1.2.1	実行しません。 既存の接続は 10.1.2.0.0 で引き続き動作します。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。 <b>注意:</b> リフレッシュの失敗の可能性を減らすには、Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2.1 を使用します。
10.1.2.0.0	10.1.2.0.0	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
10.1.2.0.0	9.0.4	upgradeMR スクリプトを使用して、Metadata Repository で DISCOVERER5 スキーマをアップグレードします。 詳細は、第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」を参照してください。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。

表 15-2 Discoverer Portlet Provider リリースと OracleAS Infrastructure リリースの相互運用性に対する要件 (続き)

使用する Discoverer Portlet Provider のリリース	ともに使用する OracleAS Infrastructure のリリース	次の処理を行います。
9.0.4	10.1.2.1	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。 <b>注意:</b> リフレッシュの失敗の可能性を減らすには、Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2.1 を使用します。
9.0.4	10.1.2.0.0	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
9.0.4	9.0.4	実行しません。 Oracle Applications ユーザーはパスワードを入力する必要があります。

## 15.2.4 以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法

Oracle Applications プライベート接続 (以前のリリースの Discoverer で作成された) を Discoverer リリース 10.1.2.1 で利用できるようにするには、`migratediscoconnection` ツールを実行して、既存のすべてのプライベート接続を移行する必要があります。

以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する手順は、次のとおりです。

1. 中間層マシン上の `migratediscoconnection` ツールが格納されているディレクトリに移動します (このファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください)。
2. `migratediscoconnection` ツールを実行します。  
たとえば、Windows 上では、Windows のエクスプローラで `migratediscoconnection.bat` ファイルをダブルクリックして、`migratediscoconnection` ツールを実行します。  
`migratediscoconnection` ツールを実行するときには、Discoverer 中間層の管理者のユーザー名とパスワードを入力する必要があります。  
Discoverer 中間層の管理者のユーザー名とパスワードがわからない場合は、Application Server 中間層の管理者に問い合わせてください。
3. Discoverer リリース 10.1.2.1 をインストールします (まだインストールしていない場合)。  
Discoverer リリース 10.1.2.1 のインストールの詳細は、Oracle Business Intelligence のインストール・ガイドを参照してください。

## 15.3 Oracle E-Business Suite 用の Discoverer プリファレンスの設定

Oracle E-Business Suite 環境に Discoverer をデプロイするとき、`pref.txt` ファイル内の次の 2 つの作業環境を変更できます。

- `AppsGWYUID` 作業環境。この作業環境では、Gateway User ID およびパスワード (デフォルト値は 'APPLSYSPUB/PUB') が指定されます。
- `AppsFNDNAM` 作業環境。この作業環境では、Foundation Name (デフォルト値は 'APPS') が指定されます。

`AppsGWYUID` および `AppsFNDNAM` は、`pref.txt` 構成ファイル内で指定されています (詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください)。

**注意:** pref.txt ファイルを編集した後は、作業環境の変更を適用するために applypreferences スクリプトを実行し、その後 OracleBI Discoverer サービスを一度停止して再起動する必要があります (詳細は、[第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」](#)を参照してください)。

---

---

## OracleBI Discoverer の構成ファイル

この付録では、Discoverer の構成ファイルに関する参照情報について説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- 第 A.1 項 「Discoverer ファイルの場所のリスト」
- 第 A.2 項 「configuration.xml 内の構成設定のリスト」
- 第 A.3 項 「opmn.xml 内の構成設定のリスト」

## A.1 Discoverer ファイルの場所のリスト

この項では、OracleBI Discoverer の構成および管理に使用するファイルをリストします。構成ファイル内の設定の多くは、Application Server Control を使用して構成されます。可能な限り、Application Server Control を使用して Discoverer を構成します。手動による構成ファイルの設定の更新は、このマニュアル内の指示に従う場合のみ行うようにしてください。

次のテーブルは、これらのファイルが格納されている場所を UNIX および Windows のプラットフォーム別に示します。

ファイル名	説明および場所
applypreferences.bat/.sh	<p>このファイルは、Discoverer Preferences コンポーネントを更新します (Windows 固有)。</p> <p>UNIX の場合: \$ORACLE_HOME/discoverer/util/applypreferences.sh</p> <p>Windows の場合: %ORACLE_HOME%\discoverer\util\applypreferences.bat</p> <p><b>ヒント:</b> 処理エラーに関する情報は error.txt に格納されます (詳細は、error.txt の File name エントリを参照してください)。</p>
certdb.txt	<p>このファイルには Oracle JInitiator のセキュリティ証明書ストアが含まれており、Discoverer Plus を実行している各クライアント・マシンに格納されます。</p> <p>UNIX の場合: \$JINITIATOR_HOME/lib/security/certdb.txt</p> <p>Windows の場合: %JINITIATOR_HOME%\lib\security\certdb.txt</p> <p>&lt;JINITIATOR_HOME&gt; は JInitiator がインストールされているクライアント・マシンの場所です (例: c:\program files\oracle\JInitiator 1.3.1.9\)</p> <p>JInitiator 証明書ストアへのセキュリティ証明書のインストールの詳細は、<a href="#">第 3.5.1 項「Discoverer Plus クライアント・マシンにセキュリティ証明書をインストールする方法」</a>を参照してください。</p> <p>certdb.txt の詳細は、<a href="#">第 14.6.3.1 項「標準以外の SSL 署名認証を使用するための Discoverer Plus の構成」</a>を参照してください。</p>
checkdiscoverer.bat/.sh	<p>このファイルは、Discoverer 中間層の構成をチェックするユーティリティを起動して、中間層コンポーネントの状態をチェックし、障害または異常をレポートします。</p> <p>UNIX の場合: \$ORACLE_HOME/discoverer/util/checkdiscoverer.sh</p> <p>Windows の場合: %ORACLE_HOME%\discoverer\util\checkdiscoverer.bat</p> <p><b>注意:</b> %util ディレクトリには、checkdiscoverer ユーティリティの使用に関するドキュメントも含まれています。</p>
collectlogs.bat	<p>このスクリプト・ファイルは、すべての Discoverer ログを 1 つのフォルダに収集します。</p> <p>UNIX の場合: \$ORACLE_HOME/discoverer/util/collectlogs.sh</p> <p>Windows の場合: %ORACLE_HOME%\discoverer\util\collectlogs.bat</p> <p><b>注意:</b> collectlogs スクリプトの使用の詳細は、<a href="#">第 D.2.9 項「Discoverer ログ・ファイルのコピー方法」</a>を参照してください。</p>
configuration.xml	<p>このファイルには、Discoverer の構成設定が格納されています。</p> <p><b>注意:</b> このファイルを手動で編集しないでください。このファイル内の設定は、Application Server Control の Discoverer Services 構成ページを使用して構成します (詳細は、<a href="#">第 A.2 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」</a>を参照してください)。</p> <p>UNIX の場合: \$ORACLE_HOME/discoverer/config/configuration.xml</p> <p>Windows の場合: %ORACLE_HOME%\discoverer\config\configuration.xml</p>



ファイル名	説明および場所
convertreg.pl	<p>このスクリプトは、reg_key.dc ファイルを変換して整数値の形式を変更（BigEndian 形式から LittleEndian 形式など）します。このスクリプトは、あるプラットフォームから他のプラットフォーム（Windows から Solaris など）に Discoverer インストールを移行するために使用します。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/perl/bin/convertreg.pl</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\perl\bin\convertreg.pl</p> <p>詳細は、第 10.8 項「Discoverer 作業環境の移行」を参照してください。</p>
defaults.txt	<p>このファイルには、出荷時のデフォルトの Discoverer 作業環境が格納されています。pref.txt が破損した場合、この defaults.txt を使用してデフォルトの作業環境を復元できます。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer/util/defaults.txt</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer\util\defaults.txt</p>
dis51pr.exe/dis51pr	<p>このファイルは、reg_key.dc ファイルに格納されている作業環境を管理するコマンドライン・ユーティリティを実行します。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/bin/dis51pr</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\bin\dis51pr.exe</p>
discwb.sh	<p>このスクリプト・ファイルは、Discoverer EUL Command Line for Java で使用される環境変数を設定します。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer/discwb.sh</p> <p>Windows の場合 : なし</p>
error.txt	<p>このファイルは、applypreferences スクリプトを使用して Discoverer Preferences コンポーネントを更新するときに収集される処理エラーについての情報が含まれています。error.txt が存在しない場合、エラーは記録されていません。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer/util/error.txt</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer\util\error.txt</p>
httpd.conf	<p>このファイルには、Oracle Business Intelligence で使用される Web サーバーに関する構成情報（Web サーバーのタイムアウト設定 Timeout など）が含まれます。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf\httpd.conf</p>
migratediscoconnection.bat/.sh	<p>このスクリプト・ファイルは、以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行するために使用します。</p> <p><b>注意 :</b> 以前の Discoverer リリースからリリース 10.1.2.1 への Discoverer 接続の移行についての情報は、第 15.2.4 項「以前のリリースの Discoverer で作成された Oracle Applications プライベート接続を、リリース 10.1.2.1 で利用できるように移行する方法」を参照してください。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer/util</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer\util</p>
migrateprefs.bat/.sh	<p>このスクリプト・ファイルは、Discoverer 作業環境を Discoverer リリース 9.0.4 から Discoverer リリース 10.1.2 へ移行する際に使用されます。</p> <p><b>注意 :</b> Discoverer 作業環境の Discoverer リリース 9.0.4 から Discoverer リリース 10.1.2 への移行についての情報は、『Oracle Application Server 移行ガイド』の OracleBI Discoverer に関する項を参照してください。</p> <p>UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/discoverer/util/migrateprefs.sh</p> <p>Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\discoverer\util\migrateprefs.bat</p>

ファイル名	説明および場所
mod_osso.conf	<p>このファイルには、OracleAS Single Sign-On の構成設定（OracleAS Single Sign-On を有効および無効に切り替える設定など）が格納されています。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/apache/apache/conf/mod_osso.conf</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\apache\apache\conf\mod_osso.conf</p> <p>Single Sign-On の有効化の詳細は、第 14.7.2.2 項「Discoverer に対し Single Sign-On を有効および無効にする方法」を参照してください。</p>
opmn.xml	<p>このファイルには、Discoverer の OPMN 構成設定が格納されています（サーバーのタイムアウト、Discoverer セッションの最大数など）。</p> <p><b>注意：</b>このファイル内の設定を制御するには Application Server Control を使用してください。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\opmn\conf\opmn.xml</p> <p>詳細は、第 A.3 項「opmn.xml 内の構成設定のリスト」を参照してください。</p>
opmnctl.bat/.sh	<p>このスクリプト・ファイルは、OPMN 処理の管理に使用されます。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl.sh</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl.bat</p> <p><b>ヒント：</b>このスクリプトのオンライン・ヘルプを表示するには、「opmnctl help」と入力します。</p>
pref.txt	<p>このファイルには、Discoverer 中間層のプリファレンスが格納されており、reg_key.dc ファイルを生成するために使用されます。インストール時に、defaults.txt ファイルの設定がこのファイルに移入されます。pref.txt が破損した場合は、defaults.txt を pref.txt へコピーしてデフォルトの作業環境を復元します。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer/util/pref.txt</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\discoverer\util\pref.txt</p> <p><b>注意：</b>pref.txt ファイルを編集した後は、作業環境の変更を適用するために applypreferences スクリプトを実行し、その後 Discoverer サービスを一度停止して再起動する必要があります（詳細は、第 5.3 項「Discoverer サービスの起動および停止」を参照してください）。</p>
reg_key.dc	<p>このファイルには、ユーザーごとの作業環境が、データベースとユーザー ID の一意の組合せとして格納されています。これらの値は、pref.txt で指定されているグローバルなデフォルト値よりも優先されます。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer/.reg_key.dc</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\discoverer\reg_key.dc</p> <p><b>注意：</b>UNIX 実装では、reg_key.dc は隠しファイルです（ファイル名が '.' で始まります）。ファイル管理プログラムまたはコマンド・コンソールで隠しファイルを表示するようにしてください（隠しファイルを表示するためにコンソール・コマンド 'ls -al' を使用するなど）。</p>
tnsnames.ora	<p>このファイルには、OracleBI Discoverer を使用してアクセスできるすべてのデータベースの名前および別名が含まれています。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/network/admin/tnsnames.ora</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\network\admin\tnsnames.ora</p>
upgradeMR.bat/.sh	<p>このファイルは、MR の Discoverer の部分をリリース 10.1.2 に更新します。</p> <p>OracleBI Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 を OracleAS Portal 9.0.4 とともに使用する場合、upgradeMR スクリプトを使用して、9.0.4 の OracleAS Metadata Repository (MR) の OracleBI Discoverer に関する部分のみをアップグレードする必要があります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer Oracle Application Server Portal でのワークブック公開ガイド』を参照してください。</p> <p>UNIX の場合：\$ORACLE_HOME/discoverer/util/upgradeMR.sh</p> <p>Windows の場合：%ORACLE_HOME%\discoverer\util\upgradeMR.bat</p>

ファイル名	説明および場所
web.xml	このファイルには、Discoverer サーブレットのデプロイメント情報が含まれています。 UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_BI_Forms/applications/discoverer/discoverer/WEB-INF/web.xml Windows の場合 : %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_BI_Forms\applications\discoverer\discoverer\WEB-INF\web.xml

## A.2 configuration.xml 内の構成設定のリスト

このファイルには、Discoverer の構成設定が格納されています。次のテーブルは、configuration.xml 内の設定を示しています。

**注意:** このマニュアル内の指示に従っている場合を除き、このファイルを手動で編集しないでください。通常、このファイル内の設定は、Application Server Control の Discoverer Services 構成ページを使用して構成します。

Discoverer Portlet Provider の設定を変更するには、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページを使用します（詳細は、第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法」を参照してください）。

設定	説明
enableAppsSSO	SSO 対応 Oracle Applications データベースを使用する認証済み OracleAS Single Sign-On ユーザーが、パスワードを入力することなく Discoverer プライベート接続を作成および使用できるようにするかどうかを指定します（第 15.2.2 項「Oracle Applications ユーザーが、SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を作成または使用できるようにする方法」を参照してください）。 <b>注意:</b> Oracle Application Server Control の「Discoverer 構成」ページにある「認証された OracleAS Single Sign-On (SSO) ユーザーが SSO 対応 Oracle Applications データベースへのプライベート接続を、パスワードを入力せずに作成および使用できるようにします。」チェック・ボックスを使用して値を設定します。
/disco:configuration/plus/@jvm	Discoverer Plus に使用する Java 仮想マシンを指定します（詳細は、第 5.9.2 項「Discoverer Plus に対する独自の Java 仮想マシンの指定方法」を参照してください）。
/disco:configuration/plus/@laf	Discoverer Plus に使用するルック・アンド・フィールを指定します（詳細は、第 9.1.4 項「Discoverer Plus Relational と Discoverer Plus OLAP に対するカスタム LAF の定義方法」を参照してください）。
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxDataRows	Discoverer Portlet Provider が各 Discoverer ポートレットに対してキャッシュする行数を指定します（デフォルトは 1000）。この値を変更して、Discoverer Portlet Provider で使用するメモリー容量を増減できます。たとえば、この値を増やして、行数の多い Discoverer ポートレットのパフォーマンスを向上させることができます。ただし、Discoverer Portlet Provider が多くのシステム・リソース（メモリー、記憶領域など）を使用する可能性があります。
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxGenericParameters	Discoverer ポートレットに関連付けられたポートレットの汎用パラメータの最大数を指定します。
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxNewSessionPerMinute	作成されるセッションの分単位の最大数を指定します。
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxSessionAgeHour	Discoverer Session がセッション・プール内に存在できる最長時間（時間単位）を指定します。この制限時間を超えると、このセッションは Discoverer によってプールから削除されます。このパラメータのデフォルト値は 1 時間です。このパラメータを小さい値に設定すると、セッションのリサイクルが高速になりますが、セッションの再起動が必要となるため、リフレッシュが低速になる可能性があります。 <b>注意:</b> 値の設定には、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページにある「最大セッション継続時間（時間）」フィールドを使用します。

設定	説明
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxSessionInactivityPeriodMinute	<p>Discoverer Session をセッション・プール内で非アクティブにできる最長時間（分単位）を指定します。この制限時間を超えると、このセッションは Discoverer によってプールから削除されます。</p> <p>たとえば、連続的に使用されるセッションがプール内にあり、maxSessionInactivityPeriodMinute 制限を超えて非アクティブにならない場合、このセッションは、maxSessionAgeHour に達したときのみ Discoverer によってプールから削除されます。ただし、連続的に使用されていないセッションがプール内にある場合、maxSessionInactivityPeriodMinute に達すると、このセッションは Discoverer によってプールから削除されます。</p> <p><b>注意:</b> 値の設定には、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページにある「<b>最大セッション停止時間 (分)</b>」フィールドを使用します。</p>
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxSessions	<p>Discoverer Portlet Provider でポートレットのリフレッシュおよびポートレットの公開に使用するセッション数を指定します。</p> <p><b>注意:</b> 値の設定には、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページにある「<b>最大セッション数</b>」フィールドを使用します（詳細は、<a href="#">第 5.6.1 項「Discoverer クライアント層コンポーネントの構成オプションを個別に変更する方法</a>」を参照してください）。</p> <p><b>注意:</b> この値は、opmn.xml の maxprocs の設定値以下にする必要があります（詳細は、<a href="#">第 A.3 項「opmn.xml 内の構成設定のリスト</a>」を参照してください）。</p>
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@minRequestThreadPoolSize	<p>ユーザー・リクエストの処理に使用するスレッド・プールの最小サイズを指定します。システムにアクセスするユーザーの数が、この設定値だけ増加すると、スレッドを扱うユーザーの数も、それに応じて増加します。</p>
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@peekSleepIntervalSec	<p>リフレッシュするポートレットを取得するスリープ時間隔を指定します。複数の Discoverer Portlet Provider インスタンスがデプロイされている場合、この値を利用すると、Portlet Provider インスタンスのすべてにリフレッシュを割り当てることが可能になります。</p>
/disco:configuration/portlet/sessionPool/@maxWaitNewSessionMinute	<p>セッションの作成を中断するまでに再試行する最大回数を指定します。</p> <p><b>注意:</b> 値の設定には、Oracle Application Server Control の「Discoverer Portlet Provider 構成」ページにある「<b>最大待機時間</b>」フィールドを使用します。</p>
/disco:configuration/viewer/switchWorksheetBehavior	<p>エンド・ユーザーが現在のワークシートの内容を変更した状態で、異なるワークシートを開いた場合の Discoverer Viewer の動作を指定します。有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>always_save</b> ワークブック内でワークシートを切り換えた場合、エンド・ユーザーに確認を要求することなくワークシートの変更内容を保存（ワークブック全体を保存）します。</li> <li>■ <b>never_save</b> ワークブック内でワークシートを切り換えた場合、エンド・ユーザーに確認を要求することなくワークシートの変更内容を破棄します。</li> <li>■ <b>prompt</b> ワークブック内でワークシートを切り換えた場合、ユーザーは、ワークシートの変更内容を保存するか、キャンセルするか、または破棄するかを選択するように要求されます。</li> </ul> <p><b>注意:</b> この設定がファイルで指定されていない場合、Discoverer により 'prompt' がデフォルトで使用されます。</p>

## A.3 opmn.xml 内の構成設定のリスト

このファイルには、Discoverer の OPMN 設定が含まれています。次のテーブルは、デフォルトの Discoverer 構成の変更が必要な場合、変更する可能性のある opmn.xml の設定を示しています。

設定	説明
FND_SECURE	<p>保護モードで Oracle Applications データベースに接続する際に Discoverer で使用される DBC ファイルが格納されたディレクトリを指定します。</p> <p>最初に Discoverer により、ファイル名が &lt;データベース名&gt;.dbc である DBC ファイルが検索されます。見つからない場合、ファイル名が &lt;ホスト名&gt;_&lt;SID&gt;.dbc であるファイルの使用が試みられます。</p> <p>この値が設定されていない場合、Discoverer では FND_TOP で指定された値の使用が試みられます。</p>
FND_TOP	<p>保護モードで Oracle Applications データベースに接続する際に Discoverer で使用される DBC ファイルが格納された、保護ディレクトリのパスを指定します (&lt;\$FND_TOP&gt;/secure)。</p> <p>この変数は下位互換性のために含まれます。最初に Discoverer では、FND_SECURE で指定された値の使用が試みられます。</p>
ORBDebug	Discoverer から ORB に対し、サーバー・コンフィギュレータ・ネットワークからのデバッグ・メッセージを出力するように指示するかどうかを指定します。このオプションには値を設定しませんが、デバッグ・メッセージの有効/無効の切替えに使用します。
ORBDebugLevel=<level>	ORB のデバッグ・レベルを指定します。1 (最小量のデバッグ情報) ~ 10 (最大量のデバッグ情報) の範囲です。
ORBLogFile=<name of log file>	ACE_DEBUG および ACE_ERROR のすべてのメッセージが、指定されたファイルにリダイレクトされるように指定します。パスを指定しない場合、ファイルは、サーバーが実行されているディレクトリ (\$ORACLE_HOME など) に作成されます。
ORBObjRefStyle=[IOE URL]	ユーザーに表示されるオブジェクト参照のスタイルを指定します。IOR スタイル (デフォルト) は従来の CORBA オブジェクト参照ですが、URL スタイルは URL に似ています。
ORBVerboseLogginglevel=[0 1 2]	デバッグ・ログの各行に出力するステータスのデータ量を指定します。大きい値を指定すると生成される出力量が増えます。
process-type id="PreferenceServer"	<p>作業環境を OPMN によって起動するかどうかを指定します。この設定は、1 つの Preference サーバーのみが実行される必要のあるクラスタ環境で便利です。</p> <p>この設定のデフォルト値は次のとおりです。</p> <pre>&lt;process-type id="PreferenceServer" enabled="true"&gt;</pre>
process-type id="SessionServer" module-id="Disco_SessionServer" maxprocs=<value>	<p>同時に実行できる Discoverer セッションの最大数 (デフォルトは 50) を指定します (Discoverer Plus、Discoverer Viewer および Discoverer Portlet Provider が対象)。より多くの Discoverer ユーザーを同時にサポートする必要がある場合は、この値を増やすことができます。</p> <p>この値は正の整数にする必要があります。</p> <p><b>注意:</b> この値は、configuration.xml の /portlet/sessionPool/@maxSessions の設定値以上にする必要があります (詳細は、第 A.2 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」を参照してください)。</p>
process-type id="SessionServer" module-id="Disco_SessionServer" timeout=<value>	サーブレットが Discoverer サーバー・プロセスの応答を待機する時間 (秒単位) を指定します。この値は正の整数にする必要があります。マシンに重い負荷がかかり許可されたデフォルト時間 (30 秒) でサーバーを起動できない場合は、この値を増やす必要があります。
module_data%ssl_enabled	SSL が有効になるように指定します。

設定	説明
variable id="TEMP"	ワークシートのエクスポート時に Discoverer が OracleBI 中間層に格納する dc* という一時ファイルの場所を指定します。デフォルトの場所は、OracleBI のインストール時に指定されます。一時ファイルの場所を変更する場合は、この変数の値を変更します。たとえば、この値を d:\temp から g:\temp に変更します。

**注意:** ORB 要素は、デフォルトでは組み込まれていません。TAO の ORB をカスタマイズする場合は、ORB 要素および前述のテーブルで説明した属性を追加します。詳細は、TAO のドキュメントを参照してください。

---

---

## 以前のリリースの Discoverer からのアップグレード

この項では、Discoverer を以前のリリースからアップグレードする方法を説明します。この項の項目は次のとおりです。

- [第 B.1 項「OracleAS Upgrade Assistant の使用について」](#)
- [第 B.2 項「アップグレード・サマリー」](#)
- [第 B.3 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からのアップグレードについて」](#)
- [第 B.4 項「Discoverer リリース 9.0.4/9.0.2 からのアップグレードについて」](#)
- [第 B.5 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法」](#)
- [第 B.6 項「Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法」](#)
- [第 B.7 項「Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法」](#)

この項は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』の第 24 章とともに読んでください。



## B.1 OracleAS Upgrade Assistant の使用について

OracleAS Upgrade Assistant を使用して、Oracle Business Intelligence の中間層を Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4 から Discoverer リリース 10.1.2.1 (BI and Forms タイプのインストール) にアップグレードします。詳細は、[第 B.4 項「Discoverer リリース 9.0.4/9.0.2 からのアップグレードについて」](#)を参照してください。

OracleAS Upgrade Assistant を使用して、Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 または Oracle9iAS リリース 1.0.2.2 (Discoverer 4i) をアップグレードすることはできません。Discoverer の中間層を手動でアップグレードする必要があります (詳細は、[第 B.5 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法」](#) および [第 B.7 項「Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法」](#)を参照してください)。

## B.2 アップグレード・サマリー

次の表は、Discoverer のバージョンとインストールのタイプごとに必要なアップグレードの手順をまとめたものです。

表 B-1 Discoverer リリース 10.1.2.1 のアップグレード・サマリー

アップグレード前	アップグレード後	手順の要約
Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 スタンドアロン・タイプのインストール	Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 (スタンドアロン・タイプのインストールまたは Oracle AS Business Intelligence and Forms タイプのインストール)	新しいインストールヘブリファレンスを手動でコピーします。 Oracle Application Server Control でカスタマイズを手動でやりなおします。 バックグラウンドの詳細は、 <a href="#">第 B.3 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からのアップグレードについて」</a> を参照してください。 詳細は、 <a href="#">第 B.5 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法」</a> を参照してください。
Discoverer リリース 9.0.4 または 9.0.2 (Business Intelligence and Forms)	Discoverer リリース 10.1.2.1 Business Intelligence and Forms タイプのインストール	OracleAS Upgrade Assistant を使用して、Discoverer の設定をアップグレードします。Discoverer Administrator を使用して、End User Layer をアップグレードします。 バックグラウンドの詳細は、 <a href="#">第 B.4 項「Discoverer リリース 9.0.4/9.0.2 からのアップグレードについて」</a> を参照してください。 アップグレードの詳細の手順は、 <a href="#">第 B.6 項「Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法」</a> を参照してください。
Discoverer リリース 9.0.4 または 9.0.2 (Business Intelligence and Forms)	Discoverer リリース 10.1.2.1 スタンドアロン・タイプのインストール	サポートされていません。
Discoverer リリース 4.1 (Oracle9iAS リリース 1.0.2.2)	Discoverer リリース 10.1.2.1 Business Intelligence and Forms タイプのインストール	Discoverer の設定を手動でアップグレードします。Discoverer Administrator を使用して、End User Layer をアップグレードします。 詳細は、 <a href="#">第 B.7 項「Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法」</a> を参照してください。



表 B-1 Discoverer リリース 10.1.2.1 のアップグレード・サマリー (続き)

アップグレード前	アップグレード後	手順の要約
Discoverer リリース 4.1 (Oracle9iAS リリース 1.0.2.2)	Discoverer リリース 10.1.2.1 スタンドアロン・ タイプのインストール	サポートされていません。

## B.3 Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からのアップグレードについて

Discoverer リリース 10.1.2.0.0 から Discoverer リリース 10.1.2.1 をアップグレードするときは、次のインストール・タイプのいずれかにアップグレードできます。

- スタンドアロンの OracleBI Discoverer 10.1.2.1 インストール  
Discoverer リリース 10.1.2.0.0 スタンドアロン・タイプのインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合、Discoverer リリース 10.1.2.1 スタンドアロン・タイプのインストールを同じ Infrastructure に関連付けることができます。

- Discoverer リリース 10.1.2.1 Business Intelligence and Forms タイプ・インストール

アップグレードの詳細の手順は、[第 B.5 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法」](#)を参照してください。

## B.4 Discoverer リリース 9.0.4/9.0.2 からのアップグレードについて

OracleAS Business Intelligence and Forms 9.0.4/9.0.2 のインストールから、Discoverer の OracleAS Business Intelligence and Forms 10.1.2.1 のインストールにアップデートできます。

アップグレードの詳細の手順は、[第 B.6 項「Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法」](#)を参照してください。

### 注意

OracleAS Portal 9.0.4 で作成した Discoverer ポートレットを引き続き使用する場合は、次のいずれかを実行してください。

- Discoverer ポートレットのみをアップグレードして、OracleAS Portal はアップグレードしない場合、upgradeMR スクリプトを使用してください（詳細は、[第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」](#)を参照してください）。
- Discoverer ポートレットと OracleAS Portal の両方をリリース 10.1.2 にアップグレードする場合は、Metadata Repository Upgrade Assistant を使用してください（詳細は、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください）。

## B.5 Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からアップグレードする方法

Discoverer リリース 10.1.2.0.0 から Discoverer リリース 10.1.2.1 にアップグレードするには、次の操作を行います。

1. Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 を新しい Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。
2. Oracle Application Server Control を使用して、以前のリリースの Discoverer で実行したカスタマイズを再実行します。たとえば、Discoverer Plus Relational のロック・アンド・フィール (LAF) や Discoverer Viewer のロゴを変更している場合があります。Discoverer のカスタマイズの詳細は、[第 9 章「OracleBI Discoverer のカスタマイズ」](#)を参照してください。

**注意** : Discoverer でサポートされているのは、Oracle Application Server Control の Discoverer のカスタマイズ・ページを使用して実行されたカスタマイズのみです。

3. 作業環境をアップグレードします (詳細は、[第 B.5.1 項「Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からリリース 10.1.2.1 へのプリファレンスのアップグレード」](#)を参照してください)。
4. OracleAS Infrastructure に関連付けられたスタンドアロンの OracleBI Discoverer 10.1.2.0.0 のインストールから、スタンドアロンの OracleBI Discoverer 10.1.2.1 にアップグレードする場合、スタンドアロンの OracleBI Discoverer 10.1.2.1 インストールを、同 Infrastructure に手動で関連付ける必要があります。  
  
OracleAS Infrastructure への関連付けの詳細は、[第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」](#)を参照してください。
5. OracleAS Portal 9.0.4 で作成した Discoverer ポートレットを引き続き使用する場合は、次のいずれかを実行してください。
  - Discoverer ポートレットのみをアップグレードして、OracleAS Portal 10.1.2 はアップグレードしない場合、upgradeMR スクリプトを使用してください (詳細は、[第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」](#)を参照してください)。
  - Discoverer ポートレットと OracleAS Portal の両方をアップグレードする場合は、Metadata Repository Upgrade Assistant (MRUA) を使用します。詳細は、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください。

#### 注意

- Discoverer リリース 10.1.2.0.0 から 10.1.2.1 へのアップグレードでは、EUL のアップグレードは必要ありません。
- アップグレード処理を開始する前に、OracleBI のインストールが正常に行われているかどうか確認することをお勧めします (詳細は、[第 1.4 項「OracleBI Discoverer インストールの確認方法」](#)を参照してください)。
- この項の記述は、次の条件を前提としています。
  - Discoverer リリース 10.1.2.0.0 が <ORACLE\_HOME\_1> にインストールされていること。
  - Discoverer リリース 10.1.2.1 が <ORACLE\_HOME\_2> にインストールされていること。

## B.5.1 Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.0.0 からリリース 10.1.2.1 へのプリファレンスのアップグレード

この項では、pref.txt ファイルおよび reg\_key.dc ファイルに格納される、Oracle Business Intelligence のプリファレンスをアップグレードする方法を説明します。

プリファレンスをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. 10.1.2.0.0 と 10.1.2.1 のプリファレンスは互換性があるため、pref.txt および .reg\_key.dc ファイルを 10.1.2.0.0 の Oracle ホームから 10.1.2.1 の Oracle ホームへ、次のようにコピーします。
  - UNIX の場合、<\$ORACLE\_HOME\_1>/discoverer/util/pref.txt を <\$ORACLE\_HOME\_2>/discoverer/util/pref.txt へコピーします。そして <\$ORACLE\_HOME\_1>/discoverer/.reg\_key.dc を <\$ORACLE\_HOME\_2>/discoverer/.reg\_key.dc へコピーします。
  - Windows の場合、<%ORACLE\_HOME\_1%>%discoverer%util%pref.txt を <%ORACLE\_HOME\_2%>%discoverer%util%pref.txt へコピーします。そして、<%ORACLE\_HOME\_1%>%discoverer%.reg\_key.dc を <%ORACLE\_HOME\_2%>%discoverer%.reg\_key.dc へコピーします。

## B.6 Discoverer リリース 9.0.2/9.0.4 からアップグレードする方法

この項では、Discoverer の OracleAS Business Intelligence and Forms 9.0.2 または 9.0.4 のインストールから、OracleAS Business Intelligence and Forms 10.1.2.1 タイプのインストールにアップグレードする方法を説明します。

**注意:** Discoverer リリース 9.0.2 または 9.0.4 から、Discoverer リリース 10.1.2.1 スタンドアロン・タイプのインストールへのアップグレードは、サポートされていません。

Oracle Application Server 10g (9.0.2/9.0.4) から OracleBI リリース 10.1.2.1 にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. OracleBI Discoverer Administrator リリース 10.1.2 を使用して、End User Layer (EUL) をリリース 5.1 にアップグレードします。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

2. Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 を新しい Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

3. OracleAS Upgrade Assistant を使用して、Discoverer の中間層を新しいバージョンにアップグレードします (詳細は、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください)。

OracleAS Upgrade Assistant は、Discoverer のレジストリ設定、構成設定、およびプリファレンスをアップグレードします。

4. OracleAS Portal 9.0.4 で作成した Discoverer ポートレットを引き続き使用する場合は、次のいずれかをアップグレードしてください。

- Discoverer ポートレットのみをアップグレードして、OracleAS Portal はアップグレードしない場合、upgradeMR スクリプトを使用してください (詳細は、[第 2.3 項「Discoverer Portlet Provider リリース 10.1.2 および Oracle Portal 10.1.2 で使用できるように 9.0.4 メタデータ・リポジトリをアップグレードする方法」](#)を参照してください)。
- Discoverer ポートレットと OracleAS Portal をアップグレードする場合は、Metadata Repository Upgrade Assistant (MRUA) を使用してください (詳細は、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください)。

### 注意

- アップグレード処理を開始する前に、OracleBI のインストールが正常に行われているかどうかを確認することをお勧めします (詳細は、[第 1.4 項「OracleBI Discoverer インストールの確認方法」](#)を参照してください)。

## B.7 Discoverer リリース 4.1 からアップグレードする方法

Oracle9iAS リリース 1.0.2.2 から OracleBI リリース 10.1.2.1 にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. OracleBI Discoverer Administrator リリース 10.1.2.1 を使用して、End User Layer (EUL) をリリース 5.1 にアップグレードします。

詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

2. Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 を新しい Oracle ホーム・ディレクトリにインストールします。

3. Oracle Application Server Control を使用して、以前のリリースの Discoverer で実行したカスタマイズを再実行します。たとえば、Discoverer Plus Relational のロック・アンド・フィール (LAF) や Discoverer Viewer のロゴを変更している場合があります。Discoverer のカスタマイズの詳細は、[第 9 項「OracleBI Discoverer のカスタマイズ」](#)を参照してください。

**注意:** Discoverer でサポートされているのは、Oracle Application Server Control の Discoverer のカスタマイズ・ページを使用して実行されたカスタマイズのみです。

4. 作業環境をアップグレードします（詳細は、[第 B.7.1 項「作業環境のアップグレード」](#)を参照してください）。
5. Discoverer の URL を更新します（詳細は、[第 B.7.2 項「URL 作業環境の更新」](#)を参照してください）。

**注意**

- アップグレード処理を開始する前に、OracleBI のインストールが正常に行われているかどうか確認することをお勧めします（詳細は、[第 1.4 項「OracleBI Discoverer インストールの確認方法」](#)を参照してください）。
- この項の記述は、次の条件を前提としています。
  - Oracle9iAS リリース 1.0.2.2 が <ORACLE\_HOME\_1> にインストールされていること。
  - OracleBI リリース 10.1.2.1 が <ORACLE\_HOME\_2> にインストールされていること。

## B.7.1 作業環境のアップグレード

この項では、Discoverer のプリファレンスを Discoverer 4.1 Oracle ホームから、Oracle Business Intelligence Discoverer 10.1.2 Oracle ホームへアップグレードする方法を説明します。

**注意**

- この項の記述は、次の条件を前提としています。
  - Discoverer リリース 10.1.2.0.0 が <ORACLE\_HOME\_1> にインストールされていること。
  - Discoverer リリース 10.1.2.1 が <ORACLE\_HOME\_2> にインストールされていること。

### B.7.1.1 プリファレンスを Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へアップグレードする方法（UNIX の場合）

次の指示に従い、プリファレンスを Discoverer リリース 4.1 Oracle ホームから、Discoverer リリース 10.1.2 Oracle ホームへアップグレードします。

1. 4.1 .reg\_key.dc ファイルと 10.1.2 .reg\_key.dc ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. Discoverer 4.1 の .reg\_key.dc ファイルを、DC\_REG 環境変数で指定されている場所から、10.1.2 Oracle ホームの [第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#) で .reg\_key.dc ファイル用に指定されている場所にコピーします。

4.1 の .reg\_key.dc file ファイルを 10.1.2 のデフォルトの .reg\_key.dc ファイルに上書きコピーします。

**ヒント** : Discoverer リリース 4.1 での .reg\_key.dc ファイルの場所は、ORACLE\_HOME/<installation>/discwb4 にある discwb.sh ファイルで確認します。

3. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> <ORACLE_HOME_2>/discoverer/util/dis51pr -migrate -from 102
```

これで、4.1 から 10.1.2 にプリファレンスが移行されましたが、10.1.2 の pref.txt ファイルは、10.1.2 の .reg\_key.dc ファイルと同期外れになる可能性が高くなります。

applypreferences.sh は、.reg\_key.dc ファイルの pref.txt にあるプリファレンスをすべてデフォルトの値にリセットするので、実行しないでください。プリファレンスの値を変更するには、[第 10.5 項「各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法」](#)で説明されている dis51pr -setpref を使用します。

### B.7.1.2 プリファレンスを Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2 へアップグレードする方法 (Microsoft Windows の場合)

Windows を実行している同一のコンピュータ上で、1 つの Oracle ホームから別の Oracle ホームへアップグレードを行うには、次の指示に従って、ユーザー・レベルのプリファレンスを Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2.1 へアップグレードします。

1. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
> <ORACLE_HOME_2>%discoverer%util%dis51pr.exe -migrate -from 102
```

このコマンドにより、すべてのプリファレンスが Windows レジストリから、10.1.2 Oracle ホームの reg\_key.dc というファイルにコピーされます。

Discoverer のアップグレードを、Windows を実行している 1 つのコンピュータから別のコンピュータへ行うには、次の指示に従って、ユーザー・レベルのプリファレンスを Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 10.1.2.1 へアップグレードします。

1. Discoverer リリース 4.1 がインストールされているマシンで次のように操作します。
  - a. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
  - b. 「ファイル名を指定して実行」ウィンドウに「regedit」と入力し、[Enter] キーを押します。
  - c. 「レジストリ エディタ」で、HKEY\_LOCAL\_MACHINE\Software\Oracle\WebDisco4 レジストリ・キーを開きます。
  - d. 「レジストリ」→「レジストリ ファイルの書き出し」を選択し、レジストリ・キーをファイルにエクスポートします。
  - e. レジストリのエクスポート・ファイルの名前を指定します (disco41prefs.reg など)。
2. レジストリ・エクスポート・ファイルを、Discoverer リリース 4.1 がインストールされているマシンから Discoverer リリース 10.1.2.1 がインストールされているマシンへコピーします。
3. Discoverer リリース 10.1.2.1 がインストールされているマシンで次のように操作します。
  - a. Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択します。
  - b. 「ファイル名を指定して実行」ウィンドウに「regedit」と入力し、[Enter] キーを押します。
  - c. 「レジストリ エディタ」で、「レジストリ」→「レジストリ ファイルの取り込み」を選択します。
  - d. インポートするレジストリ・エクスポート・ファイルの名前を選択します (disco41prefs.reg など)。
4. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力し、作業環境をアップグレードします。

```
> <ORACLE_HOME_2>%discoverer%util%dis51pr.exe -migrate -from 102
```

**注意:** これでは、4.1 から 10.1.2.1 にプリファレンスが移行されましたが、10.1.2 の pref.txt ファイルは 10.1.2.1 の .reg\_key.dc ファイルとおそらく同期外れになります。applypreferences.bat は、.reg\_key.dc ファイルの pref.txt にあるプリファレンスをすべてデフォルトの値にリセットするので、実行しないでください。プリファレンスの値を変更するには、第 10.5 項「各ユーザーのユーザー作業環境を設定する方法」で説明されている dis51pr -setpref を使用します。

## B.7.2 URL 作業環境の更新

Discoverer Viewer と Discoverer Plus の URL 参照は、Discoverer リリース 4.1 と Discoverer リリース 10.1.2.1 では異なります。これらの変更には、Web サイト内のリンクやクライアントのブックマークなどがあります（これに限定されるわけではありません）。次のテーブルを参考にしながら、古い URL をすべて新しい URL に手動で置き換える必要があります。

たとえば、Discoverer のエンド・ユーザーがブラウザの「お気に入り」で、[http://hostname/Discwb4/html/english/ms\\_ie/start\\_ie.htm](http://hostname/Discwb4/html/english/ms_ie/start_ie.htm) へのリンクを設定している場合、「お気に入り」のエントリを <http://hostname/discoverer/plus> に変更する必要があります。

表 B-2 Discoverer の URL 作業環境の更新

リリース 4.1 の URL	リリース 10.1.2.1 の URL
<a href="http://hostname/Discwb4/html/english/ms_ie/start_ie.htm">http://hostname/Discwb4/html/english/ms_ie/start_ie.htm</a> または <a href="http://hostname/Discwb4/html/english/netsc ape/start_nn.htm">http://hostname/Discwb4/html/english/netsc ape/start_nn.htm</a>	<a href="http://hostname/discoverer/plus">http://hostname/discoverer/plus</a>
<a href="http://hostname/Discoverer4i/Viewer">http://hostname/Discoverer4i/Viewer</a>	<a href="http://hostname/discoverer/viewer">http://hostname/discoverer/viewer</a>

---

## OracleBI Discoverer 管理アカウント情報

この付録では、Discoverer の管理アカウント情報のリストを示します。この章の項目は次のとおりです。

- 第 C.1 項「OracleBI Discoverer スクリプトにより PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限」
- 第 C.2 項「OracleBI Discoverer スクリプトにより Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限」

**注意** : Discoverer のアカウントとスキーマの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

## C.1 OracleBI Discoverer スクリプトにより PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限

次のテーブルは、OracleBI Discoverer スクリプトにより PUBLIC ユーザーに付与されるデータベース権限のリストです。

スクリプト名	スクリプトの説明	付与される権限
batchusr.sql	スケジューリング・スキーマの設定 (INVOKER 権限とともに付与)	EUL5_BATCH_REPOSITORY に対する EXECUTE 権限
demoddl.sql	Video Store Tutorial データの設定	VIDEO5 スキーマ内のすべてのテーブルに対する SELECT 権限
eulsuqpp.sql	Secure Views での QPP 統計の実行	v_\$session、v_\$sesstat、v_\$parameter、v_\$sql、v_\$open_cursor に対する SELECT 権限
eulgfn.sql、 lineage.sql、 eul5.sql	PL/SQL パッケージの設定	EUL5_GET_COMPLEX_FOLDER に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_SIMPLE_FOLDER に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_OBJECT に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ITEM に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_HIERORD に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_HIERLVL に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ADATE に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ANALYZED に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_OBJECT_NAME に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ITEM_NAME に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_APPS_USERRESP に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_ISITAPPS_EUL に対する EXECUTE 権限 EUL5_GET_LINURL に対する EXECUTE 権限



## C.2 OracleBI Discoverer スクリプトにより Discoverer マネージャに付与されるデータベース権限

次のテーブルは、OracleBI Discoverer スクリプトにより EUL 所有者に付与されるデータベース権限のリストです。

パッケージ名	パッケージの説明	付与される権限
EUL5_DROP_BATCH_TABLE	Discoverer マネージャに実行権限を付与バッチ・ユーザー管理の一部としてのテーブル削除用バッチ・リポジトリ・パッケージ  (GRANT 権限とともに付与)	GRANT 権限とともに付与



---

---

## Discoverer のトラブルシューティング

この付録では、Discoverer の使用時に発生する可能性がある一般的な問題とその解決方法について説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- [第 D.1 項「問題と解決方法」](#)
- [第 D.2 項「Discoverer の診断およびロギングについて」](#)

**注意** : Discoverer のパフォーマンスとスケーラビリティに関するトラブルシューティングの詳細は、[第 12.3.13 項「Discoverer のパフォーマンスおよびスケーラビリティのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

## D.1 問題と解決方法

この項では、一般的な問題とその解決方法について説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- 第 D.1.1 項「Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 を使用したエクスポート時に Discoverer Viewer によってエラーがレポートされる問題」
- 第 D.1.2 項「Discoverer および Oracle Applications の動作要件」
- 第 D.1.3 項「Discoverer でネットワーク・エラーがレポートされる問題」
- 第 D.1.4 項「Discoverer でエラー ORA-12154 がレポートされる問題」
- 第 D.1.5 項「ポップアップ・ストップの問題」
- 第 D.1.6 項「Netscape Navigator 4.x の問題」
- 第 D.1.7 項「Discoverer Plus で RMI エラーがレポートされる問題」
- 第 D.1.8 項「Discoverer のメモリーの問題」
- 第 D.1.9 項「Discoverer Plus Relational のヘルプの問題」
- 第 D.1.10 項「Discoverer Viewer の SMTP サーバーの構成」
- 第 D.1.11 項「Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データに関する問題」
- 第 D.1.12 項「エラー: Web キャッシュ接続を開始できませんでした。(WWC-40019)」
- 第 D.1.13 項「エクスポートされた Web クエリー・ファイルに非 ASCII の動的パラメータ値が含まれる場合に Microsoft Excel で開けない問題」
- 第 D.1.14 項「Discoverer ポートレットの値リスト (LOV) が長すぎる場合の問題」
- 第 D.1.15 項「Microsoft Excel で索引値を使用してパラメータを指定すると Web クエリー・ファイルが機能しない問題」
- 第 D.1.16 項「Single Sign-on (SSO) と Secure Socket Layer (SSL) のリダイレクト競合」
- 第 D.1.17 項「ワークシートのカスタマイズに関する問題」
- 第 D.1.18 項「OC4J\_BI\_Forms JVM プロセスでのメモリー不足の問題」
- 第 D.1.19 項「Discoverer Viewer にグラフが表示されない問題」
- 第 D.1.20 項「Discoverer Portlet Provider の問題」
- 第 D.1.21 項「Discoverer 接続の可用性」
- 第 D.1.22 項「URL パラメータとして許容されないパスワード」
- 第 D.1.23 項「Discoverer Viewer のカスタマイズ」

### D.1.1 Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 を使用したエクスポート時に Discoverer Viewer によってエラーがレポートされる問題

Discoverer Viewer ユーザーが Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 を使用してデータをエクスポートする際、Microsoft Internet Explorer の不具合によって多数のエラーがレポートされる可能性があります。

**注意:** Discoverer は、Microsoft Excel 97 以上へのデータ・エクスポートをサポートしています。

#### 問題 1

Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 が正しく構成されていないと、次のようなエラー・メッセージが表示されます。

- Internet Explorer was not able to open this Internet Site. The requested site is either unavailable or is not found. Please try again later.

---

エラー・メッセージは、拡張子を開くために構成されたアプリケーションまたは MIME タイプに応じて異なります。

たとえば、SSO に加えて SSL が有効な場合は、次のようなエラーが表示されます。

- Could not open 'https://:/discoverer/viewer/'. For details see c:\%path to temp directory %wecerr.txt

「OK」をクリックすると、Microsoft Excel からエラー「Microsoft Excel cannot access the file 'https://:/discoverer/viewer」が表示されます。これには、次のようないくつかの理由があります。

- ファイル名またはパスが存在しない場合。
- 開こうとしているファイルが他のプログラムで使用中的の場合。他のプログラムの文書を閉じて、再試行してください。
- 保存しようとしているワークブックの名前が、読取り専用の他の文書と同じ場合。別の名前で文書を保存してください。

このカテゴリのエラーは Internet Explorer の不具合によって発生し、OracleAS Web Cache などの ReverseProxy を含む特定の構成でリダイレクト・リクエスト (302) 時に問題が発生します。Internet Explorer のホスト・ヘッダーには、リダイレクト先のホストではなくリダイレクト元のサーバーのホスト・ヘッダーが格納されます。

### 解決方法

この問題を解決する手順は、次のとおりです。

1. 中間層で、mod\_osso.conf ファイルをテキスト・エディタで開きます (mod\_osso.conf ファイルの場所の詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください)。
2. 既存の Discoverer Viewer URL 保護を次のテキストに置き換えます。

```
Header unset Pragma
OssoSendCacheHeaders off
require valid-user
AuthType Basic
```
3. mod\_osso.conf ファイルを保存します。
4. Oracle HTTP Server を再起動します。

### 問題 2

Discoverer で Microsoft Excel フォーマットにエクスポートすると、Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0 でエラー・メッセージが表示されます。

### 解決方法

Microsoft Internet Explorer に、次の手順で Discoverer 中間層を信頼済みサイトとして指定します。

1. Microsoft Internet Explorer メニュー・バーから「ツール」→「インターネット オプション」を選択すると「インターネット オプション」ダイアログが表示されます。
2. 「セキュリティ」タブを表示します。
3. 「信頼済みサイト」アイコンを選択して「サイト」ボタンをクリックすると「信頼済みサイト」ダイアログが表示されます。
4. Discoverer 中間層の URL を次のフォーマットで入力します。

```
http://<host.domain>:<port>
```

説明:

- `<host.domain>` は、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名およびドメインです。
- `<port>` は、Discoverer がインストールされているポート番号（通常は 7777 または 7778）です。

## D.1.2 Discoverer および Oracle Applications の動作要件

この項では、Discoverer でサポートされているパッチのインストール方針、および Oracle Applications の動作要件の方針について説明します。

### 問題

Oracle は、特定のパッチ・セットまたは OracleBI Discoverer のリリース・バージョン（4.1.46 など）を使用して、Oracle E-Business Suite 11i（つまり、Applications 11i）を定期的に動作保証します。この動作要件は、Oracle Applications 製品チームによって Discoverer のバージョンが、Oracle Applications モジュール（Financials Intelligence など）とともに出荷するワークブックと EUL に対してテストされたことを意味します。したがって、Discoverer コンテンツが同梱される Oracle Applications 11i モジュールを使用する顧客は、公開された動作保証済バージョンに自由にアップグレードできます。この動作保証済バージョンは、通常、Oracle Applications 11i 環境の既存のアプリケーション層サーバー・ノードにある ORACLE\_HOME にインストールできます。

Oracle Applications 11i は、Discoverer 4i、Discoverer リリース 9.0.4 および Discoverer リリース 10.1.2.0.0 に対して動作保証されています。このため Discoverer のコンテンツを残りの Oracle Applications スイートとシームレスに統合できます。Oracle Applications は、このリリースに適用可能な Discoverer のパッチ・セットを継続して動作保証していきます。

Oracle Applications の動作保証プロセスとは別に、OracleBI Discoverer では、完全にサポートされたスタンドアロン機能として、Oracle Applications インスタンスに対するカスタムのワークブックと EUL の作成をサポートしています。これは、Discoverer の特定のパッチ・セットまたはリリースが Oracle Applications で動作保証されているかどうかに関係なく、顧客は Oracle Applications インスタンスに対して本番リリースの Discoverer を自由に使用でき、Discoverer をスタンドアロンで使用（つまり、Financials Intelligence など Discoverer を使用する Oracle Applications モジュール以外で Discoverer を使用）して、カスタムのワークブックと EUL を作成できることを意味します。たとえば、企業全体で Business Intelligence ソリューションがサポートされている場合は、このリリースが Oracle Applications で動作保証されていなくても、顧客は Oracle Applications 11i に対する Discoverer 10g (9.0.4) または Discoverer 10.1.2 の使用をサポートされ、独自のカスタムのワークブックと EUL を開発できます。この場合、Discoverer は、Oracle Applications がインストールされている中間層の Oracle ホーム以外にインストールする必要があります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』を参照してください。

動作保証されていないバージョンの Discoverer をリリース 11i で使用できるかどうかを説明します。一般的に、システム管理者は、Oracle Applications 11i の標準的なワークブックと End User Layer コンテンツを使用して、Oracle Applications で動作保証された Discoverer のバージョンとパッチのみを Oracle E-Business Suite リリース 11i 環境にインストールすることを推奨されます（詳細は、Oracle 製品間のすべての動作要件について正式な情報を入手できる Oracle Metalink を参照してください）。

環境によっては、動作保証されていない Discoverer パッチのインストールが必要になる場合があります。特定の環境に基づく指針については、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

Oracle E-Business Suite リリース 11i での Discoverer のバージョンとパッチの動作要件には、Discoverer を使用するすべてのリリース 11i 製品間の調整テストが含まれます。動作保証は、通常、本番リリースの Discoverer に対して実行されます。Oracle では、通常、Oracle E-Business Suite リリース 11i に対する小規模な緊急パッチ（Discoverer 4.1.42.05、4.1.42.08 など）は個別に動作保証しません。Discoverer に対する Oracle のサポート方針は、動作保証済の本番パッチ・リリースおよび緊急パッチの両方に対して報告された不具合に対応することです。

### 解決方法

顧客は、動作保証されていない緊急パッチを使用する際、管理された構成管理方針に従うことをお勧めします。特に、次の事項を遵守してください。

- パッチを適用する前に、必ず既存の作業環境をバックアップしてください。
- 既存の作業環境は、常に動作保証済パッチ・レベルでバックアップしてください。
- パッチを本番環境に適用する前に、必ずパッチを十分にテストしてください。
- 動作保証されていない緊急パッチは、次の本番パッチ・リリースが動作保証されるまで待つことが不可能な場合のみ適用してください。

## D.1.3 Discoverer でネットワーク・エラーがレポートされる問題

OracleBI Discoverer では、ログイン中にネットワーク例外がレポートされます。

### 問題

OracleBI Discoverer が起動できない場合など。

### 解決方法

Preferences コンポーネントが起動していることを確認します。Preferences コンポーネントが起動していることを確認するには、Windows のタスク・マネージャを使用して、Discoverer 作業環境コマンドライン・ユーティリティ `dis51pr` が実行されていることを確認します。

ヒント: `checkdiscoverer` ユーティリティを使用して Discoverer の構成を確認し、障害または異常についてレポートできます (`checkdiscoverer` ユーティリティの詳細は、[第 D.2.2 項「checkdiscoverer ユーティリティ」](#)を参照してください)。

## D.1.4 Discoverer でエラー ORA-12154 がレポートされる問題

OracleBI Discoverer でエラー「ORA-12154: サービス名を解決できませんでした。」がレポートされます。

### 問題

OracleBI Discoverer が、接続の詳細で指定したデータベースの別名に接続できません。

### 解決方法

次のことを確認してください。

- データベースの別名が中間層の `tnsnames.ora` ファイルに存在しているか。
- データベースの別名が、セッションを実行する各マシンの `tnsnames.ora` ファイルに存在しているか。

ヒント: SQL\*Plus または他の Oracle 製品をそのマシンで実行している場合は、それらを使用してデータベースに接続してください。

## D.1.5 ポップアップ・ストoppaの問題

OracleBI Discoverer が起動しません。

### 問題

ポップアップ・ストoppaを有効にしているブラウザで OracleBI Discoverer Plus が起動できません。

### 解決方法

クライアント側のブラウザでポップアップ・ストoppaを無効にします。

## D.1.6 Netscape Navigator 4.x の問題

Netscape Navigator 4.x をクライアント・ブラウザとして使用すると、OracleBI Discoverer が起動しません。

### 問題

Discoverer を Netscape 4.x とともに使用した時に発生する次の問題は、既知の内容です。

- Discoverer Viewer を Netscape 4.x とともに使用すると、非 ASCII 文字を使用してワークブック・リストをフィルタできません。
- Discoverer Viewer を Netscape 4.x とともに使用すると、非 ASCII パラメータを使用できません。
- Discoverer を Netscape 4.x とともに使用すると、非 ASCII 文字を使用してプライベート接続を作成できません。
- Discoverer Plus を Netscape 4.x とともに使用すると、ブラウザ・ウィンドウのサイズ変更が使用不可になります。

### 解決方法

新しいバージョンの Netscape Navigator を使用してください。

## D.1.7 Discoverer Plus で RMI エラーがレポートされる問題

Discoverer Plus エンド・ユーザーが、HTTPS 環境で HTTPS ではなく HTTP を使用して Discoverer Plus を起動しようとした場合に発生します。

### 問題

エンド・ユーザーが HTTP URL を使用して Discoverer Plus を起動しようとする、Discoverer で次のエラー・メッセージが表示されます。

**Oracle Discoverer Application Server に接続できません。 <url> に対して Web サーバーから応答がありません。**

### 解決方法

Discoverer エンド・ユーザーが HTTPS 環境で HTTPS URL を使用していることを確認します。詳細は、[第 14.6.3 項「Discoverer Plus のセキュリティと通信プロトコル」](#)を参照してください。

**注意:** HTTPS 上で Discoverer Plus をデプロイするには、Oracle Application Server Control の「セキュアなトンネリング」セキュリティ・プロトコルを選択する必要があります ([第 14.6.3.6 項「セキュアなトンネリング通信プロトコルを使用するように Discoverer Plus をセットアップする方法」](#))。

## D.1.8 Discoverer のメモリーの問題

グラフを含んだ多数 (たとえば、20 以上) のワークシートを持つワークブックを、通常のように別のブラウザ・ウィンドウで最大化すると、OracleBI Discoverer Plus が不安定になります。

### 問題

クライアント・ブラウザ・マシンで実行中に OracleBI Discoverer Plus でメモリー不足エラーが表示されます。

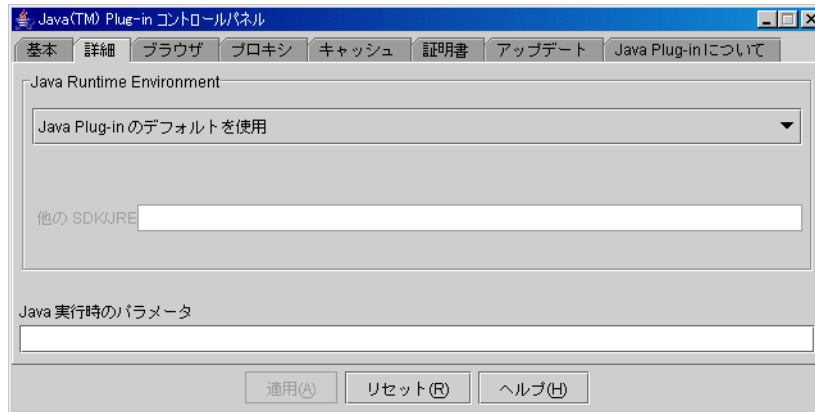
### 解決方法

JVM の最大ヒープ・メモリー・サイズを増やす手順は、次のとおりです。

1. クライアント・ブラウザ・マシンで JVM コントロール・パネルを表示します (たとえば、Windows マシンでは「コントロールパネル」を表示して、「Java Plug-in」アイコンをダブルクリックします)。



2. 「詳細」タブを表示します。



3. 「Java 実行時のパラメータ」フィールドに次のテキストを入力します。  
-Xmx<amount of memory>M  
たとえば、最大メモリー・レベルを 256MB に増やす場合は、-Xmx256M と入力します。
4. 「適用」をクリックします。
5. クライアント・ブラウザ・マシンで Discoverer Plus を再起動します。

## D.1.9 Discoverer Plus Relational のヘルプの問題

OracleBI Discoverer Plus Relational の文脈依存ヘルプは、Sun Java Plug-in のプロキシ設定が正しく設定されていないと、Sun Java Plug-in を使用する Microsoft Internet Explorer および Netscape Navigator で機能しない場合があります。

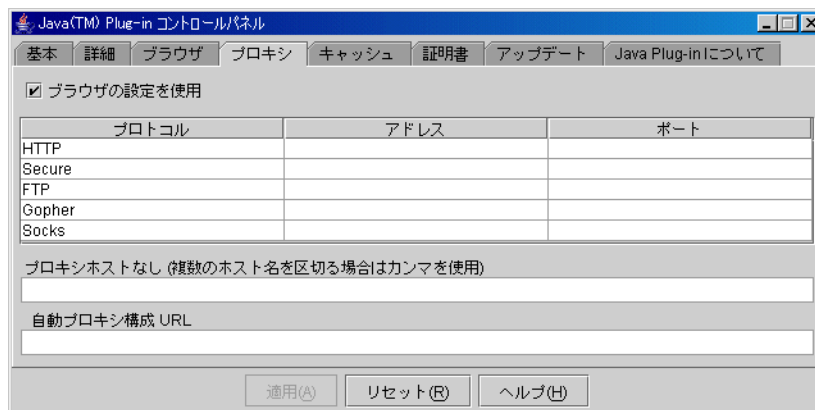
### 問題

OracleBI Discoverer Plus Relational のエンド・ユーザーがダイアログの使用時に「ヘルプ」をクリックすると、Discoverer はそのダイアログに対して適切なヘルプ・ページを表示しません。さらに、ヘルプの目次および索引内のリンクが機能しません。

### 解決方法

Sun Java Plug-in のプロキシ設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. クライアント・ブラウザ・マシンで Sun Java Plug-in のプロパティを表示します（たとえば、Windows マシンでは「コントロールパネル」を表示して、Sun の「Java Plug-in」アイコンをダブルクリックします）。
2. 「プロキシ」タブを表示します。



- 「プロキシホストなし」フィールドでワイルドカードを指定する場合は、アスタリスク (\*) が入力されていることを確認します。  
たとえば、.oracle.com は \*.oracle.com と指定します。
- 「自動プロキシ構成 URL」フィールドの値が .js または .pac で終わっていることを確認します。
- 「適用」をクリックします。
- 新規のクライアント・ブラウザ・セッションを開始して、Discoverer Plus を起動します。

## D.1.10 Discoverer Viewer の SMTP サーバーの構成

Discoverer Viewer では、「操作」リストの「電子メールで送信」リンクを選択して、Discoverer ワークシートを電子メール・メッセージで送信できます（次の図を参照してください）。

図 D-1 Discoverer Viewer の「電子メールで送信」オプション



使用する SMTP サーバーを変更する場合は、別の SMTP サーバーを使用するように Discoverer 中間層を構成する必要があります。

### 問題

Discoverer Viewer が誤った SMTP サーバーを使用するように構成されています。

### 解決方法

Discoverer Viewer の SMTP サーバーを構成する手順は、次のとおりです。

- Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。

- Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
- 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。

**コンポーネント** [最初に戻る](#)

CPUとメモリー使用量の値はDiscovererセッション用のみで、コンポーネントで使用されるサブレットの値は含まれていません。「関連リンク」セクションからOC4Jページにアクセスし、サブレットのCPUとメモリー使用量の値を確認してください。コンポーネントを無効にすると現在作業中のユーザーは作業を続行できますが、新規ユーザーはそのコンポーネントを使用できません。「一般」セクションからDiscovererサービスを停止すると、いずれかのDiscovererコンポーネントから新しいセッションを起動できなくなります。有効なセッションをすべて停止するには、OC4J\_BI\_Forms処理を停止します。

合計セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**  
共有セッション・メモリー使用量(MB) **0.0**

有効  無効

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	セッションのCPU使用率 (%)	セッションのメモリー使用量 (MB)	セッション
<input type="checkbox"/>	Discoverer Plus	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Viewer	有効	0	0	0
<input type="checkbox"/>	Discoverer Portlet Provider	有効	0	0	0

**関連リンク** [最初に戻る](#)

[Oracle HTTP Server](#)  
[OC4J](#)  
[All Metrics](#)

ホーム | パフォーマンス | 管理

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

- 「コンポーネント」領域で、「名前」列から「Discoverer Viewer」リンクを選択すると、「Discoverer Viewer」構成ページが表示されます。
- 「電子メール」リンクを選択すると、「電子メール」領域が表示されます。

**電子メール** [最初に戻る](#)

Viewer電子メール・オプション

\* 必須フィールドを示します

SMTPサーバー

\* 最大添付サイズ(KB)

\* タイムアウト(秒)

**Viewer遅延時間** [最初に戻る](#)

遅延時間を指定します。

\* 必須フィールドを示します

\* クエリーの進行状況ページ(秒)   
最初のクエリー進行状況ページに戻るまでの待機時間。

\* リクエスト(秒)   
リクエストの完了をチェックする頻度。通常、ブラウザのタイムアウトの指定より若干低くします。

**Viewerロギング** [最初に戻る](#)

これらのロギング・オプションはDiscoverer Viewerにのみ適用されます。

ページが表示されました

- 「電子メール」領域のフィールドを使用して、SMTP サーバーの詳細を指定します。
- 「OK」をクリックして詳細を保存します。

これで、Discoverer Viewer で「**電子メールで送信**」オプションを使用してワークシートを送信するとき、Discoverer Viewer は指定された SMTP サーバーを使用します。

## D.1.11 Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データに関する問題

Microsoft Internet Explorer の使用時に、Web サーバーで HTTP 圧縮を使用してデータを送信すると、最初の 2048 バイトが失われる場合があります。この問題の詳細は、次のリンク先を参照してください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q313712>

### 問題

Web サーバーで HTTP 圧縮を使用してデータを送信すると、最初の 2048 バイトが失われます。

### 解決方法

HTTP 圧縮を無効にするためにクライアントで HTTP 1.0 を指定する手順は、次のとおりです。

1. Microsoft Internet Explorer メニュー・バーから「ツール」→「インターネット オプション」を選択すると「インターネット オプション」ダイアログが表示されます。
2. 「詳細設定」タブを表示します。
3. 次の 2 つのチェック・ボックスの選択を解除します（「HTTP 1.1 設定」カテゴリ内）。
  - 「HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス
  - 「プロキシ接続で HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス

## D.1.12 エラー: Web キャッシュ接続を開始できませんでした。(WWC-40019)

OracleBI インストールを既存の OracleAS インストールに関連付けた後に Discoverer ポートレットを公開しようとする、次のエラー・メッセージが表示されます。

Error: Could Not Open Web Cache Connection (WWC-40019)

### 問題

エンド・ユーザーが Discoverer ポートレットを公開しようとする、Discoverer で OracleAS Web Cache 接続を開始できません。

### 解決方法

OracleAS Web Cache を OracleAS Portal コンテンツに対して無効にする手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Portal にポータル管理者（たとえば、ユーザー名 Portal）でログインします。
2. 「管理」タブを表示します。
3. 「ポータル」サブタブを表示します。
4. 「サービス」領域で「グローバル設定」リンクを選択します。
5. 「キャッシュ」タブを表示します。
6. 「Web Cache を Portal コンテンツ・キャッシュ対応にする」チェック・ボックスを選択解除します。
7. 「ホスト名」フィールドが正しく設定されていることを確認します。

**注意:** 複数の Oracle Business Intelligence 中間層がインストールされている場合は、最新の Oracle Business Intelligence インストールのホスト名が更新されます。したがって、以前の Oracle Business Intelligence インストールのホスト名を変更する必要がある場合があります。
8. 「適用」または「OK」をクリックして、変更内容を保存します。

---

### D.1.13 エクスポートされた Web クエリー・ファイルに非 ASCII の動的パラメータ値が含まれる場合に Microsoft Excel で開けない問題

非 ASCII の動的パラメータ値が含まれる Web クエリー (IQY) フォーマットの Discoverer ワークシートを正しくエクスポートするには、Microsoft Excel でエンコーディングを正しく設定する必要があります。

#### 問題

Microsoft Excel ユーザーは、非 ASCII の動的パラメータ値が含まれる、Discoverer Plus Relational で Web クエリー (IQY) フォーマットにエクスポートされた Discoverer ワークシートを正しく開くことができません。

#### 解決方法

Microsoft Excel で Excel のエンコーディングを UTF-8 に設定します。手順は次のとおりです。

1. Microsoft Excel で「ツール」メニューから「オプション」を選択すると、「オプション」ダイアログが表示されます。
2. 「全般」タブを表示します。
3. 「Web オプション」をクリックすると「Web オプション」ダイアログが表示されます。
4. 「エンコード」タブを表示します。
5. 「保存する形式」ドロップダウン・リストから「Unicode (UTF-8)」を選択します。

### D.1.14 Discoverer ポートレットの値リスト (LOV) が長すぎる場合の問題

値リスト (LOV) が URL の制限を超える場合があります。

#### 問題

ワークシート / ポートレット・プロバイダのパラメータ・ページから値リスト (LOV) を起動するときに、テキスト・フィールド内の現行値リストの合計長が URL の長さ制限に近いか、すでに超えている場合は、選択した値が LOV の起動時に正しく機能しない場合があります。

#### 解決方法

「LOV」ウィンドウを閉じ、テキスト・フィールドを空にしてから再起動すると、選択した値のペインが消去されます。

### D.1.15 Microsoft Excel で索引値を使用してパラメータを指定すると Web クエリー・ファイルが機能しない問題

「ユーザーによる値または索引の選択」オプションを使用するパラメータ値を使用してワークシートをエクスポートする場合、Excel エンド・ユーザーは、索引値ではなくパラメータ値を入力する必要があります。

#### 問題

エンド・ユーザーが索引値を使用してパラメータ値を指定すると、Microsoft Web クエリー (IQY) ファイルにデータが戻りません。

#### 解決方法

Microsoft Excel エンド・ユーザーは、索引 (1 など) ではなく実際値 (East など) を使用してパラメータ値を指定する必要があります。

## D.1.16 Single Sign-on (SSO) と Secure Socket Layer (SSL) のリダイレクト競合

Single Sign-on (SSO) と Secure Socket Layer (SSL) の両方がオンの場合は、特に、SSO サーバーに SSL サイトではなく、SSL 以外のサイトが登録されている場合に、リダイレクト競合が発生する場合があります。

### 問題

リダイレクト競合が発生します。

### 解決方法

次の処理を行います。

1. `ossoreg.sh` ツールを使用して、SSL サイトを SSO サーバーに登録します。  
SSL サイトを SSO サーバーに登録する方法については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 4 章の指示に従ってください。仮想ホストを使用した `mod_osso` の構成に関する項を参照してください。
2. 生成された `osso-https.conf` ファイルを指すように構成ファイルを変更します。

## D.1.17 ワークシートのカスタマイズに関する問題

Discoverer ポートレットを使用したり、「分析」ボタンを使用してポートレットから Discoverer Viewer にアクセスすると、Discoverer Viewer で行ったカスタマイズがソース・ワークシートとなんらかの競合がある場合は、エラーが発生する場合があります。

### 問題

Discoverer ポートレットを使用したり、「分析」ボタンを使用してポートレットから Discoverer Viewer にアクセスすると、エラー・メッセージが表示されます（たとえば、「無効な状態が検出されました。OracleBI Discoverer Viewer で、このイベントの結果表示に必要なデータを検出できませんでした。エラーを修正し、再試行してください。」）。

### 解決方法

更新したワークシートに基づいてポートレットを再作成するか、ワークシートを元の状態に戻します。

## D.1.18 OC4J\_BI\_Forms JVM プロセスでのメモリー不足の問題

OC4J\_BI\_Forms JVM プロセスでメモリー不足になると、Discoverer エンド・ユーザーに対してエラーが表示される場合があります。

### 問題

JVM のメモリーに関連する一般的な問題は次のとおりです。

- 大規模なワークシートをリフレッシュすると、エラー・メッセージ「500 内部サーバー・エラー」が表示されます。
- 複数のユーザーが同じ Discoverer Portlet Provider にアクセスすると、エラー:「リスナーが次のメッセージを返しました: 500 内部サーバー・エラー」が表示されます。

### 解決方法

メモリー・エラーの問題を最小限にするために、OracleAS Portal ユーザーは小規模なワークシートを Discoverer ポートレットとして公開することをお勧めします。たとえば、1つのテーブルに含まれる行が 1,000 未満、または 1つのクロス集計に含まれるセルが 1,000 未満のワークシートです。

OC4J\_BI\_Forms JVM プロセスで使用可能なメモリー量を増やす手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Control を起動します（詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法](#)）を参照してください。

2. OC4J\_BI\_Forms インスタンスを停止します。
3. 「サーバー・プロパティ」 ページにドリルします。
4. 「サーバー・プロパティ」 ページの「コマンドライン・オプション」 領域で、「Java オプション」 に -Xmx を設定します。  
たとえば、-Xmx512M を -Xmx1024M に変更します。
5. 「適用」 を押して変更内容を適用します。
6. OC4J\_BI\_Forms インスタンスを起動します。

## D.1.19 Discoverer Viewer にグラフが表示されない問題

OracleAS Web Cache が有効な場合は、OracleAS Web Cache を構成しないかぎり、Discoverer Viewer にグラフが表示されません。

### 問題

Discoverer Viewer にグラフが表示されません。

### 解決方法

/discoverer/GraphBeanServlet/URL に OracleAS Web Cache のキャッシュ・ルールを作成します（詳細は、[第 8.5.1 項「Discoverer キャッシュ・ルールの作成方法」](#)を参照してください）。

## D.1.20 Discoverer Portlet Provider の問題

Discoverer Portlet Provider が OracleAS Portal に正しく登録されていない場合、Discoverer ポートレットの作成または編集時にエラーが発生する可能性があります。

### 問題

「Discoverer Portlet Provider」 ウィザードを使用するとき、次の問題が 1 つ以上発生する可能性があります。

- 「データベース接続」 ページで「次へ」をクリックしても、ウィザードが次のページに進まない。
- ポートレットの隣の「デフォルトの編集」リンクを選択して、「次へ」をクリックすると、OracleAS Portal に次のエラー・メッセージが表示される。  
コントローラでリクエストを処理中に、エラーが発生しました。
- 「デフォルトの編集」ウィザードで「ページ」が 2 回ロードされる。

### 解決方法

OracleAS Portal で、Discoverer Portlet Provider の登録設定を編集して、「Portal と同じ Cookie ドメインの Web プロバイダ」チェック・ボックスを選択解除します。Discoverer Portlet Provider の編集方法は、[第 11.4 項「Discoverer Portlet Provider の編集方法」](#)を参照してください。Discoverer Portlet Provider の登録方法の詳細は、[第 11.3 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」](#)を参照してください。

## D.1.21 Discoverer 接続の可用性

Discoverer の接続は、Oracle Business Intelligence のインストールが OracleAS Infrastructure に関連付けられている場合のみ、使用できます。

### 問題

Discoverer の接続ページに接続が表示されません。また、プライベート接続を作成するためのオプションが提供されません。エンド・ユーザーは「直接接続」フィールドを使用した、直接接続しか使用できません。

### 解決方法

次のいずれかを実行して、Oracle Business Intelligence のインストールが OracleAS Infrastructure と関連付けられていることを確認してください。

- OracleBI スタンドアロン・インストールを OracleAS Infrastructure と関連付けます（詳細は、[第 2.2 項「OracleAS Infrastructure への OracleBI インストールの関連付けの方法」](#)を参照してください）。
- Oracle Business Intelligence を（Oracle Application Server の CD から）Business Intelligence and Forms タイプのインストールとして、インストールします。  
Business Intelligence and Forms タイプのインストールは、インストール中に OracleAS Infrastructure 10.1.2.1 と自動的に関連付けられます。

## D.1.22 URL パラメータとして許容されないパスワード

セキュリティ上の理由から、Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 では URL パラメータを使用するデータベース・パスワードを指定できません。

### 問題

Discoverer では、pw= URL パラメータで URL に指定されたパスワードが無視されます。Discoverer エンド・ユーザーは、データベース・パスワードを入力する必要があります。

### 解決方法

プライベートの Discoverer 接続を使用すると、エンド・ユーザーは常に最低一回以上データベースのパスワードを求められます。また、reuseConnection= URL パラメータを使用して、同じブラウザのセッションにログイン詳細を再利用できます。これにより、エンド・ユーザーは同じプライベートの Discoverer 接続に、データベース・パスワードを繰り返し入力する必要がなくなります。

接続 ID を使用してログイン情報を指定する方法は、[第 13.3.2 項「Discoverer 接続を使用したログイン情報の指定方法」](#)を参照してください。reuseConnection URL パラメータの詳細は、[第 13.7 項「Discoverer Plus と Discoverer Viewer に共通する URL パラメータのリスト」](#)を参照してください。

## D.1.23 Discoverer Viewer のカスタマイズ

Oracle Business Intelligence リリース 10.1.2.1 では、中間層の XSL ファイルを直接編集して、Discoverer Viewer のルック・アンド・フィールをカスタマイズすることはできません。

### 問題

中間層に Discoverer Viewer の XSL ファイルが見つかりません。

### 解決方法

Oracle Application Server Control を使用して、Discoverer Viewer のルック・アンド・フィールをカスタマイズします（詳細は、[第 9.2 項「Discoverer Viewer のカスタマイズ」](#)を参照してください）。

## D.1.24 Discoverer 接続を切断するファイアウォール

エンタープライズ・デプロイメント環境では、ロード・バランサおよびファイアウォールの両方に、アイドル接続のタイムアウトが設定してあります。コンポーネントがファイアウォールを通過する接続プールを維持する場合、接続が切断される可能性があります。

### 問題

Discoverer 接続がエンタープライズ・デプロイメント環境で切断されます。



## 解決方法

OC4J 設定の Oc4JConnTimeout 値が、ファイアウォールのタイムアウト値より小さいことを確認してください。Oc4JConnTimeout 設定の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

## D.2 Discoverer の診断およびロギングについて

この項では、Discoverer で使用可能なサーバーの診断機能およびロギング機能について説明します。説明する項目は次のとおりです。

- 第 D.2.1 項「使用可能な Discoverer の診断機能とロギング機能」
- 第 D.2.2 項「checkdiscoverer ユーティリティ」
- 第 D.2.3 項「OracleAS のログの表示機能の使用について」
- 第 D.2.4 項「OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法」
- 第 D.2.5 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする方法」
- 第 D.2.6 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする方法」
- 第 D.2.7 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルの表示方法」
- 第 D.2.8 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法」
- 第 D.2.9 項「Discoverer ログ・ファイルのコピー方法」

### D.2.1 使用可能な Discoverer の診断機能とロギング機能

Discoverer の診断機能を使用して、Discoverer の問題をトレースおよび診断できます。たとえば、Discoverer のパフォーマンスが低下した場合、Discoverer の中間層コンポーネントが正しく構成されているか確認する必要があります。

使用可能な Discoverer 診断機能は、次のとおりです。

- ログ・ファイル：
  - Discoverer サービス・ログ・ファイル（詳細は、第 D.2.7 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルの表示方法」を参照してください）。
  - Discoverer Plus ログ・ファイル（詳細は、第 D.2.8 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法」を参照してください）。
  - Discoverer Viewer ログ・ファイル（詳細は、第 D.2.8 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法」を参照してください）。
  - Discoverer Portlet Provider ログ・ファイル（詳細は、第 D.2.8 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法」を参照してください）。
- CollectLogs スクリプト - collectlogs ユーティリティを使用して、すべての Discoverer ログを 1 箇所に収集できます（collectlogs スクリプトの使用の詳細は、第 D.2.9 項「Discoverer ログ・ファイルのコピー方法」を参照してください）。
- CheckDiscoverer ユーティリティ - checkdiscoverer ユーティリティを使用して、Discoverer の構成を確認し、障害または異常についてレポートできます（ユーティリティの詳細は、第 D.2.2 項「checkdiscoverer ユーティリティ」を参照してください）。
- Discoverer Plus OLAP には、独自の診断ユーティリティがあります（checkdiscoverer ユーティリティの詳細は、第 6.6 項「Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ」を参照してください）。
- ログ・ファイル - ログ・ファイルを検索して表示するには「Application Server Control」ページの「ログ」リンクを選択し、「ログ・ファイル」タブを表示します（詳細は、第 D.2.4 項「OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法」を参照してください）。また、「ログ・リポジトリの検索」タブを表示して、ログ・リポジトリを検索することもできます。

## 注意

- Discoverer セッション情報を診断する際、監視する Discoverer Plus セッションのセッション ID が必要になる場合があります。セッション ID は、エンド・ユーザーの Discoverer へのログイン時に開始し、Discoverer からのログアウト時に終了するセッションを一意に識別します。このセッション ID を使用して、対応するサーバー・ログを検索できます。

Single Sign-On をデプロイしている場合には、Single Sign-On ユーザー名を使用して Discoverer セッションを監視できます。

Discoverer Plus ユーザーのセッションのセッション ID は、Discoverer Plus ユーザーの JInitiator コンソールにアクセスし、「セッション ID: <番号>」値で確認できます。

## D.2.2 checkdiscoverer ユーティリティ

checkdiscoverer ユーティリティは、Discoverer 中間層および中間層コンポーネントの構成を確認し、障害または異常をレポートするためのスクリプトです。

checkdiscoverer ユーティリティの詳細は、第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」を参照してください。

**注意:** Discoverer Plus OLAP には独自の診断ユーティリティがあります（診断ユーティリティの詳細は、第 6.6 項「Discoverer Plus OLAP の構成診断ユーティリティ」を参照してください）。

## D.2.3 OracleAS のログの表示機能の使用について

OracleAS のログの表示機能では、OracleAS アプリケーションのログ・ファイルにクエリーを行い、表示できます。たとえば、特定の Discoverer 中間層のマシン上で実行中のすべての Discoverer セッションのリストを作成できます。

**注意:** OracleAS のログの表示機能の動作は、Application Server Control Discoverer ホームページにある「ログ」リンク、または各 Discoverer サブレットの「パフォーマンス」ページにある「ログの表示」リンクを使用した場合と同等です。

## D.2.4 OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法

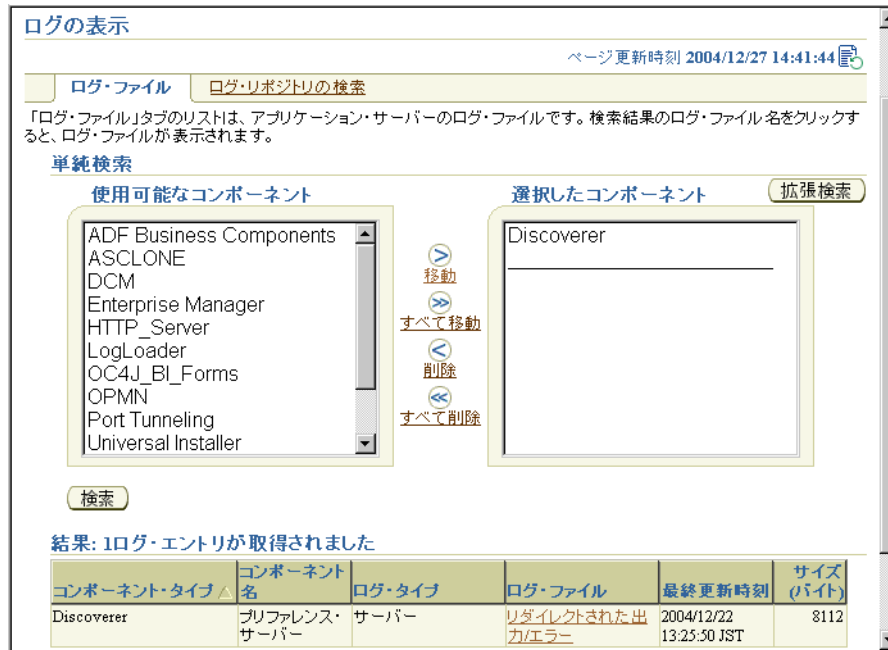
特定の Discoverer ログを検索する場合に、OracleAS のログの表示機能を使用します。たとえば、特定の Discoverer のセッション・ログ・ファイルを参照する場合などです。

OracleAS の「ログの表示」を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する手順は、次のとおりです。

- Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
- 「名前」列で、OracleBI Discoverer がインストールされている Oracle Business Intelligence インストールを含む OracleAS インスタンスを選択します。
- プロンプトが表示されたら、Application Server Control のユーザー名とパスワードを入力します。

Application Server Control に、Oracle Business Intelligence スタンドアロン CD インストールで使用可能な OracleAS システム・コンポーネント（Discoverer、HTTP Server など）のリストが表示されます。

- Application Server Control ヘッダーの「ログ」リンクを選択し、「ログの表示」ページを表示します。
- 「選択したコンポーネント」リストに Discoverer を追加します。
- 「検索」をクリックして、マシン上のすべての Discoverer サービス・ログ・ファイルを表示します。



- 「ログ・ファイル」列のリンクを選択して、ログの詳細を表示します。

**ヒント:** さらに特定のロギング情報を検索するには、「拡張検索」をクリックしてログ・ファイルの属性で検索するか、または「ログ・リポジトリの検索」タブを表示してすべてのログを検索します。

## D.2.5 Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする方法

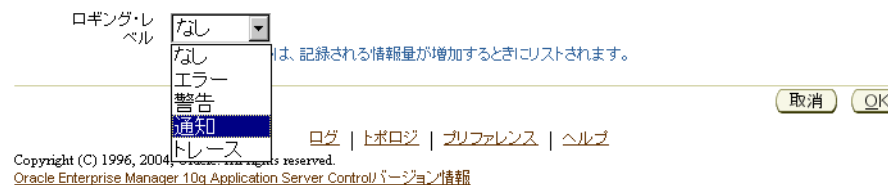
Discoverer セッションのプロセスを監視する場合は、Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にします。

Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする手順は、次のとおりです。

- Application Server Control を表示します（詳細は、第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」を参照してください）。
- Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」を参照してください）。
- 「管理」タブを表示します。
- 「サービス・ロギング」リンクを選択し、「Discoverer サービス・ロギング」領域を表示します。

### Discoverer サービス・ロギング

これらのロギング・オプションは、Discoverer サービス層の Discoverer セッション・プロセスのみに適用されます。Discoverer Plus、Discoverer Viewer または Discoverer Portlet Provider のアクティビティをより詳細に表示するには、Discoverer の各コンポーネントでもロギングを有効にする必要があります。それぞれのオプションは各コンポーネントのホーム・ページからアクセスできます。



- Discoverer サービス・ログ・ファイルを次のように有効にします。

6. 「ロギング・レベル」ドロップダウン・リストから、ロギング・レベルを選択します。  
これで、Discoverer サービス・ログ・ファイルを監視できます（詳細は、[第 D.2.7 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルの表示方法」](#)を参照してください）。
7. 「OK」をクリックします。

## D.2.6 Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする方法

Discoverer サブレットのアクティビティを監視する場合は、Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にします。

Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法」](#)を参照してください）。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法」](#)を参照してください）。
3. 「コンポーネント」リンクを選択して、「コンポーネント」領域を表示します。
4. ログ・ファイルを有効にする Discoverer サブレットのホームページを表示し、「名前」列で次のリンクのうち 1 つを選択します。
  - Discoverer Plus サブレット・ログ・ファイルの場合は、「**Discoverer Plus**」リンクを選択します。
  - Discoverer Viewer サブレット・ログ・ファイルの場合は、「**Discoverer Viewer**」リンクを選択します。
  - Discoverer Portlet Provider サブレット・ログ・ファイルの場合は、「**Discoverer Portlet Provider**」リンクを選択します。
5. 「ロギング」リンクを選択して、「ロギング」領域を表示します。
6. 「ロギング・レベル」ドロップダウン・リストから、ロギング・レベルを選択します。  
たとえば次の図では、Discoverer Plus のロギング・レベルが選択されています。

### Plusロギング

[最初に戻る](#)

これらのロギング・オプションはDiscoverer Plusのみに適用されます。Discoverer Plus OLAPIには適用されません。

ロギング・レベル

ロギング・レベルは、記録される情報量が増加するときリストされます。

[ログ](#) | [トポロジ](#) | [プリファレンス](#) | [ヘルプ](#)

7. 「OK」をクリックします。  
これで、有効にした Discoverer サブレット・ログ・ファイルを監視できます（詳細は、[第 D.2.8 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法」](#)を参照してください）。

## D.2.7 Discoverer サービス・ログ・ファイルの表示方法

Discoverer を監視する場合、Discoverer サービス・ログ・ファイルを表示します。

**注意:** まず、Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする必要があります（詳細は、[第 D.2.5 項「Discoverer サービス・ログ・ファイルを有効にする方法」](#)を参照してください）。

**ヒント:** OracleAS のログの表示機能を使用して、Discoverer のログ・ファイルを検索および表示することもできます（詳細は、[第 D.2.4 項「OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法」](#)を参照してください）。

Discoverer サービス・ログ・ファイルを表示する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法](#)」を参照してください）。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法](#)」を参照してください）。
3. 「パフォーマンス」タブを表示します。

#### Discoverer

ホーム	パフォーマンス	管理
-----	---------	----

ページ更新時刻 2004/12/28 13:55:59 

#### Discovererセッション

セッション情報はDiscoverer Plus、Discoverer ViewerおよびDiscoverer Portlet Provider用です。Discoverer Plus OLAPIはJDBCを使用して直接データベースに接続し、中間層ではセッションを作成しません。

セッション 39

表示  最上位  CPU使用率

セッションID	OSプロセスID	コンポーネント	合計CPU使用率(%)	合計メモリー使用量(MB)	データベース・ユーザー@DB - EUL	SSOユーザー	ログの表示
200412281349262236_4629		Viewer	0.35	5.72	admin@dsspm - EUL51	tshah	
200412281348591968_1968		Plus	0.49	19.97	admin@dssdev - EUL51	chbarron	
200412271158462478_7416		Viewer	1.35	19.18	chbarron@dsspm - EUL51	cdariach	
200412280957256348_1462		Plus	8.45	45.24	video@orcl - EUL51	cleung	
200412270238469857_7958		Portlet Provider	0.88	14.27	smead@dsspm - EUL51	smead	
200412280756381968_6498		Viewer	6.31	11.97	admin@dss -	dsmath	
200412272235492358_4628		Plus	8.14	24.07	admin@video - EUL51	jashley	

4. 「パフォーマンス」ページの「ログの表示」列にあるファイル・アイコンをクリックして、「ログの表示」ページを表示します。

## D.2.8 Discoverer サブレット・ログ・ファイルの表示方法

Discoverer サブレットを監視する場合、Discoverer サブレット・ログ・ファイルを表示します。

**注意:** まず、Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする必要があります（詳細は、[第 D.2.6 項「Discoverer サブレット・ログ・ファイルを有効にする方法](#)」を参照してください）。

**ヒント:** OracleAS のログの表示機能を使用して、Discoverer のログ・ファイルを検索および表示することもできます（詳細は、[第 D.2.4 項「OracleAS のログの表示を使用して Discoverer ログ・ファイルを表示する方法](#)」を参照してください）。

Discoverer サブレット・ログ・ファイルを表示する手順は、次のとおりです。

1. Application Server Control を表示します（詳細は、[第 5.1.2 項「Application Server Control の起動方法および「システム・コンポーネント」ページの表示方法](#)」を参照してください）。
2. Application Server Control Discoverer ホームページを表示します（詳細は、[第 5.1.3 項「Application Server Control Discoverer ホームページの表示方法](#)」を参照してください）。
3. 監視する Discoverer サブレットの「パフォーマンス」タブを次のように表示します。
  - Discoverer Plus を監視する場合 - 「Discoverer Plus」リンクを選択して「パフォーマンス」タブを表示し、監視するセッションの「ログの表示」アイコンをクリックします。
  - Discoverer Viewer を監視する場合 - 「Discoverer Viewer」リンクを選択して「パフォーマンス」タブを表示し、監視するセッションの「ログの表示」アイコンをクリックします。

- Discoverer Portlet Provider を監視する場合 - 「**Discoverer Portlet Provider**」リンクを選択して「パフォーマンス」タブを表示し、監視するセッションの「ログの表示」アイコンをクリックします。

## D.2.9 Discoverer ログ・ファイルのコピー方法

すべての Discoverer ログを 1 つの場所にコピーする必要がある場合があります。たとえば、Discoverer 中間層マシンのスナップショットが必要な場合や、Discoverer ログ・ファイルをアーカイブする場合などです。

Discoverer のログを 1 つの場所にコピーするには、collectlogs ユーティリティを使用します。

collectlogs ユーティリティの詳細は、[第 A.1 項「Discoverer ファイルの場所のリスト」](#)を参照してください。

Discoverer ログ・ファイルを 1 つの場所にコピーする手順は、次のとおりです。

1. Discoverer の中間層のマシンのコマンド・プロンプトで次のいずれかのコマンドを入力します。

```
collectlogs <logs target location>
```

<logs target location> は、TAR ファイル名 (UNIX) またはフォルダ名 (Windows) です。

これで、Discoverer ログ・ファイルは指定した場所にコピーされます。

### 注意

- collectlogs スクリプトは、次の情報を収集します。
  - 中間層の Discoverer ログ
  - application.log ファイル
  - .reg\_key.dc ファイル
  - env 情報
  - Discoverer サーバー・ファイル (<ORACLE\_HOME>/discoverer/bin および <ORACLE\_HOME>/discoverer/lib 内のすべてのファイル)
  - UNIX 固有のシステム・パラメータ (/etc.hosts、ifconfig output、showrev -p output、uname -a output、ulimit -a output など)

## 数字

500 内部サーバー・エラー - トラブルシューティング  
 , D-12

## A

Apache

タイムアウト, A-3

Apple Mac

Discoverer Plus の実行, 3-12

前提条件, 3-12

正しいJVM の選択, 5-24

必要なJVM, 5-24

Application Server Control, 5-2

Discoverer コンポーネント管理のための使用, 5-4

Discoverer ホームページの表示方法, 5-4

Discoverer を使用する理由, 5-2

概要, 5-2

起動方法, 5-4

applypreferences.bat, A-2

ASO 暗号化認証, 14-3

## B

BI Beans カタログ, 6-3

管理, 5-2

## C

CellPadding 作業環境, 10-7

certdb.txt, A-2

checkconfiguration ユーティリティ, 6-11

checkdiscoverer ユーティリティ, A-2, D-15, D-16

collectlogs.bat, A-2, D-15, D-20

collectlogs.sh, D-15, D-20

configuration.xml

サマリー, A-2

設定, A-5

convertreg.pl スクリプト, 10-22

CORBA コンポーネント

Preferences, 1-13

Session, 1-13

## D

D4OSYS ユーザー

権限, 6-8

データベース権限, 6-4

DBC ファイル, 15-3

dc\* ファイル, A-8

defaults.txt, A-3

dis51pr, A-3

Discoverer, 10-22

CORBA コンポーネント, 1-13

Discoverer Plus の URL 引数, 13-15

Discoverer Viewer の URL パラメータ, 13-19

J2EE コンポーネント, 1-12

Oracle Application Server, 2-2

Oracle Applications, 15-1

OracleAS Portal, 11-2

Plus サブレット, 1-13

Portlet Provider サブレット, 1-13

SSL/HTTPS 経由, 3-4, 14-6

Viewer, 1-2

アーキテクチャ, 1-10

概要, 1-2

サブレット, 1-13

セキュリティ, 3-3, 4-11

プロセス, 1-15

ポート番号, 5-22

Discoverer Java アプレット, 1-11

Discoverer Plus, 3-11

Apple Mac での実行, 3-12, 5-24

HTTPS を使用した実行, 14-9

Internet Explorer での実行, 3-11, 3-14

Netscape Navigator での実行, 3-11, 3-17

UI ペインの表示 / 非表示, 9-2

URL 引数, 13-15

アプレットのアップグレード, 1-11

アプレットの削除, 3-1

オペレーティング・システム権限, 3-4

概要, 1-2

クライアント・マシンの必要条件, 1-11

構成, 5-2

実行, 3-11

セキュリティの設定, 3-11

セッションのタイムアウト, 3-13

ダイヤルアップを介したアクセス, 3-13

プロセス, 1-15, 1-16

ロック・アンド・フィール, 9-2

Discoverer Plus OLAP

URL パラメータ, 6-13

URL パラメータでの起動, 13-11

アクセス権の確認, 6-8

エンド・ユーザーへの情報, 6-10

- カスタマイズ, 6-10
- 概要, 1-2
- 構成診断ユーティリティの概要, 6-11
- Discoverer Plus でのセッション・タイムアウト, 10-22
- Discoverer Plus のカスタマイズ
  - 概要, 9-2
- Discoverer Plus のセキュリティ設定, 3-11
- Discoverer Portlet Provider, 12-8, A-5
  - HTTPS, 11-6
  - 使用, 11-4
  - セキュリティの例, 14-15
  - テスト, 11-4
  - テスト URL, 11-4
  - 登録方法, 11-4
  - トラブルシューティング, D-12
  - 編集, 11-8
- Discoverer Preferences コンポーネント
  - 実行するマシンの指定, 7-14
- Discoverer Viewer
  - JavaScript, 1-11
  - OLAP ワークシートの URL パラメータ, 6-16
  - OracleAS Portal 内部の HTTPS 経由, 11-6
  - URL パラメータ, 13-19
  - カスタマイズ, 5-2
  - カスタマイズのトラブルシューティング, D-14
  - 概要, 1-2
  - クライアント・マシンの必要条件, 1-11
  - グラフ表示の問題, D-13
  - 実行, 3-23
  - セキュリティ, 14-7
  - 電子メール・オプション, D-8
  - トラブルシューティング, D-2
  - プロセス, 1-16
  - ルック・アンド・フィール, 9-6
  - ワークシートの保存動作, A-6
- Discoverer Viewer でのセッション・タイムアウト, 10-22
- Discoverer Viewer の SMTP サーバー, D-8
- Discoverer Viewer のカスタマイズ
  - 概要, 9-6
  - トラブルシューティング, D-14
  - ルック・アンド・フィール, 9-6
  - レイアウト, 9-8
- Discoverer Viewer の実行, 3-23
- Discoverer Viewer の電子メール・オプション, D-8
- Discoverer Viewer ページのキャッシュ
  - 有効化, 8-8
- Discoverer カタログ, 6-2
  - D4OSYS ユーザー, 6-4
  - アーキテクチャ, 6-3
  - アクセス権の取消, 6-9
  - アクセスの承認, 6-8
  - アンインストール, 6-5
  - インストール, 6-4
  - インポート, 6-6
  - エクスポート, 6-5
  - オブジェクトおよびフォルダに対する権限, 6-7
  - オブジェクト・プロパティ, 6-2
  - 管理, 6-2
  - 概要, 6-2
  - 権限, 6-7
  - 承認ユーザーとロール, 6-6
  - 定義, 6-2
  - フォルダ構造, 6-6
  - ブロック・サイズ, 6-4
  - ユーザーとロールの管理, 6-6
- Discoverer カタログのインポート, 6-6
- Discoverer カタログのエクスポート, 6-5
- Discoverer カタログのフォルダ構造, 6-6
- Discoverer サービス構成ページ
  - OEM の起動, 14-10
- Discoverer サービス・コンポーネント
  - Discoverer Session コンポーネント, 1-14
  - Preferences コンポーネント, 1-14
  - Session コンポーネント, 1-14
  - 概要, 1-12
- Discoverer サービスの Preferences コンポーネント, 1-14
- Discoverer サービスの Session コンポーネント, 1-14
- Discoverer 作業環境
  - 移行, 10-23
  - 概要, 10-2
- Discoverer 接続
  - Oracle Applications, 15-2
  - Oracle E-Business Suite, 14-5, 15-2
  - 移行, 4-4
  - 概要, 4-2
- Discoverer 接続の移行, 4-4
- Discoverer の階層構造
  - Discoverer サービス層 (Plus および Viewer), 1-12
  - クライアント層 (Plus および Viewer), 1-11
  - データベース層 (Plus および Viewer), 1-14
- Discoverer のスケーラブルなアーキテクチャ
  - 活用する方法
    - OC4J 処理の数の指定, 12-9
    - OC4J のメモリー使用量パラメータの指定, 12-9
    - OracleAS のスケーラビリティ機能の使用, 12-9
- Discoverer のセキュリティ
  - Discoverer サービス構成ページ, 14-10
  - HTTPS での構成, 14-12
  - JRMP、HTTP、HTTPS, 14-6
  - OracleAS Portal, 14-15
  - Single Sign-On, 14-13
  - Single Sign-On を使用しない環境, 14-16
  - セキュア・トンネリング, 14-9
  - 接続, 14-6
  - 通信プロトコル, 14-9
  - データベース, 14-3
  - デフォルト, 14-9
  - トンネリング, 14-9
- Discoverer のポート番号, 5-22
- Discoverer のメモリーとパフォーマンス, 12-9
- Discoverer のメモリー要件, 3-4
- Discoverer へのログイン
  - Oracle Application Server Control を使用した管理, 4-4
- discwb.sh, A-3
- DMZ, 14-21

## E

- E-Business Suite ログイン, 14-5, 15-2
- Enterprise Manager
  - クエリー進行状況の遅延, 5-2
- EuroCountries 作業環境, 10-10



## F

FND\_SECURE, A-7  
FND\_TOP, A-7

## H

HTTP, 14-6  
概要, 14-8, 14-9  
HTTPS, 14-6  
Discoverer Plus の実行, 14-9  
Discoverer Portlet Provider の実行, 11-6  
Discoverer の実行, 3-4  
概要, 14-9, 14-22  
トラブルシューティング, D-6  
有効化, 3-4, 14-6

## I

IE での Discoverer Plus の実行, 3-14  
Internet Explorer  
Discoverer の実行, 3-14  
IQY フォーマット, 5-27

## J

J2EE コンポーネント  
概要, 1-12  
Java Plug-in  
ポップアップ, 3-2  
Java Runtime Environment, 3-2  
Oracle JInitiator, 3-2  
Sun Java Plug-in, 3-2  
Javascript  
Discoverer Viewer での必要条件, 1-11  
Java 仮想マシン, 5-24  
オーバーライド, 5-24  
JInitiator  
バージョン 1.3, 5-24  
JRMP, 14-6  
概要, 14-8, 14-9

## L

LAF  
Oracle, 9-2  
システム, 9-3  
ブラウザ, 9-2  
プラスチック, 9-3

## M

maxDataRows  
Discoverer Portlet Provider によるキャッシュ, A-5  
maxprocs  
portlet/Sessionpool/maxSessions, A-7  
maxSessions  
設定, A-6, A-7  
Metadata Repository  
Discoverer 部分のアップグレード, 2-8, A-4  
Microsoft Excel  
Web クエリ・フォーマットがサポートされる最低限  
のバージョン, 5-27

エクスポートでサポートされる最小バージョン  
, D-2  
migratediscoconnection.bat, A-3  
migrateprefs.bat, A-3  
migrateprefs.sh, A-3  
minRequestThreadPoolSize  
設定, A-6  
mod\_osso.conf, 11-3, 14-13, A-4  
OssolPCheck, 11-3

## N

NAT (Network Address Translation)、標準の NAT を  
使用する Discoverer のデプロイ, 14-25  
Netscape Navigator, 3-11  
Discoverer の実行, 3-17  
Netscape での Discoverer Plus の実行, 3-17  
Netscape バージョン 4.x  
トラブルシューティング, D-6

## O

OLAP  
Discoverer Plus OLAP の起動, 13-11  
OLAP カタログ, 6-2  
概要, 6-2  
OPMN  
opmnctl script, A-4  
opmn.xml 内の構成設定のリスト, A-7  
ORBDebug, A-7  
ORBDebugLevel, A-7  
ORBLogFile, A-7  
設定, A-7  
opmn.xml, A-4, A-7  
ORA-12154 エラー・メッセージ, D-5  
Oracle Application Server  
OracleBI Discoverer, 2-2  
Oracle Application Server Control  
クエリー進行状況の遅延, 5-2  
スタイルシートのプーリング, 5-2  
データベース・パスワードの変更, 5-2  
パブリック接続の作成, 5-2  
Oracle Applications, 15-2  
AppsFNDNAM, 15-7  
AppsGWYUID, 15-7  
DBC ファイル, 15-3  
Discoverer とともに使用, 15-2  
FND\_SECURE, A-7  
FND\_TOP, A-7  
OracleBI Discoverer, 15-1  
構成設定, 15-7  
動作要件, D-4  
Oracle E-Business Suite ログイン, 14-5, 15-2  
Oracle Enterprise Manager  
プライベート接続の有効化, 4-10  
Oracle Jar Cache, 3-4  
OracleAS, 14-15  
OracleAS Framework Security  
Discoverer, 14-6  
OracleAS Portal  
Discoverer Portlet Provider のテスト URL, 11-4  
Discoverer との統合, 11-4  
HTTPS 経由での Viewer の実行, 11-6

- 概要, 11-2
- セキュリティの例, 14-15
- OracleAS Web Cache
  - Viewer とともに使用, 8-4, 8-5
  - 概要, 8-2
  - キャッシュ・ルールの作成, 8-5
  - セッション・バインディング, 7-12
  - 動作, 8-3
  - 有効化, 8-8
  - 利点, 8-3
- OracleBI Discoverer
  - Discoverer Plus の概要, 1-2
  - Discoverer Viewer の概要, 1-2
  - Portlet Provider の概要, 11-2
- OracleBI スタンドアロン CD, 2-2
- OssolPCheck, 11-3

## P

---

- peekSleepIntervalSec
  - 設定, A-6
- Preference サーバー
  - 構成, A-7
- pref.txt, A-4
- PrintHeadersOnce 作業環境, 10-14

## R

---

- reg\_key.dc, A-4
- RMI エラー
  - トラブルシューティング, D-6

## S

---

- Safari ブラウザ, 3-12
  - Discoverer Plus の実行, 3-12
  - 必要な JVM, 5-24
- Secure Sockets Layer (SSL), 3-4
- session-timeout 値, 10-22
- Session コンポーネント, 1-14
- Single Sign-On
  - OracleAS Portal の例, 14-15
  - 概要, 14-13
- Single Sign-On (SSO)
  - Discoverer, 14-13
  - mod\_osso.conf, 14-13
  - Oracle Applications ユーザーに対する有効化, 15-3
  - 概要, 14-13
  - 詳細情報の伝播, 14-17
  - トラブルシューティング, D-12
  - 有効および無効にする方法, 14-13
  - 有効化または無効化する理由, 8-5
- SSL
  - opmn.xml の ssl\_enabled 設定, A-7
  - トラブルシューティング, D-12
  - 有効化, 3-4, 14-6
- Sun Java Plug-in のアップグレード, 3-2
- Sun Java Plug-in のアラート, 3-2
- switchWorksheetBehavior フラグ, A-6

## T

---

- TAO の ORB

- 設定, A-7
- デフォルト, A-8
- Timeout
  - Discoverer Plus, 10-22
  - Discoverer Viewer, 10-22
  - Discoverer Viewer での設定, 10-22
  - 作業環境, 10-22
  - セッションのタイムアウト, 3-13, 10-20
  - タイムアウト値の設定, 10-22
- tnsnames.ora, A-4
  - 概要, 7-17
  - 編集, 7-17, A-4

## U

---

- upgradeMR スクリプト, A-4
  - 使用, 2-8
  - 場所, A-4
- URL パラメータ
  - Discoverer Plus OLAP, 6-13
  - Discoverer Viewer で OLAP ワークシートを開く, 6-16
  - Plus OLAP の起動例, 13-11
  - Plus と Viewer に共通する URL パラメータ, 13-13
  - URL パラメータを使用する理由, 13-2
  - 構文, 13-2
  - パスワードの要求, 13-11
  - 文字制限, 13-3
  - ワークブックとワークシートの指定, 13-5
- URL パラメータでの Discoverer の起動, 13-2

## V

---

- Virtual Private Database (VPD), 14-17
- VPD, 14-17
  - マルチディメンション・データ・ソース, 14-17
  - リレーショナル・データ・ソース, 14-17

## W

---

- Web Cache
  - 「OracleAS Web Cache」を参照
- web.xml, 10-22, A-5
- Web クエリー
  - Discoverer の構成, 5-27
  - Excel の必要最小バージョン, 5-27
  - エクスポートの有効化, 10-11
  - 概要, 5-27
  - ファイルの関連付け, 5-27
  - フォーマットの制限, 5-27
  - レスポンス・メッセージ, 10-20
- Web サーバー
  - タイムアウト, A-3

## あ

---

- アーキテクチャ
  - Discoverer, 1-10
  - Discoverer カタログ, 6-3
- アップグレード
  - Discoverer 作業環境, 10-23
- 暗号化
  - Discoverer による通信の暗号化を確認する方法

, 14-25  
イントラネットでは暗号化を使用して Discoverer を構成する方法, 14-24  
ファイアウォールを通して暗号化を使用する Discoverer の構成方法, 14-24  
一時ファイル  
エクスポート, A-8  
印刷  
レポート・サイズの縮小, 10-7,10-14  
イントラネット  
イントラネットでの Discoverer の構成方法, 14-23  
イントラネット・ユーザーおよびファイアウォールを通して Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法, 14-25  
エクスポート  
一時ファイル, A-8  
エクスポートするデータ内の NULL 値, 10-11  
エクスポートのエラー  
トラブルシューティング, D-2  
エラー診断, D-2  
エラーメッセージ ORA-12154, D-5  
エラー・メッセージ-サービス名を解決できませんでした。 , D-5

## か

カスタマイズ  
「選択可能アイテム・ウィンドウ」の表示 / 非表示, 9-2  
カタログ  
Discoverer, 6-2  
OLAP, 6-2  
キャッシュ  
Discoverer Portlet Provider, A-5  
Discoverer 用のルールの作成, 8-5  
クエリー予測とパフォーマンス, 12-8  
グラフの作成  
トラブルシューティング, D-13  
権限  
Discoverer で必要, 3-4  
Discoverer マネージャに付与, C-3  
PUBLIC への付与, C-2  
構成診断ユーティリティ  
Discoverer Plus OLAP, 6-11  
構成ファイル  
applypreferences.bat, A-2  
certdb.txt, A-2  
checkdiscoverer.bat, A-2  
collectlogs.bat, A-2  
configuration.xml, A-2, A-5  
convertreg.pl, A-3  
defaults.txt, A-3  
dis51pr, A-3  
discwb.sh, A-3  
error.txt, A-3  
migratediscoconnection.bat, A-3  
migrateprefs.bat, A-3  
migrateprefs.sh, A-3  
mod\_osso.conf, A-4  
opmnctl, A-4  
opmn.xml, A-4, A-7  
pref.txt, A-4  
reg\_key.dc, A-4

tnsnames.ora, A-4  
upgradeMR スクリプト, A-4  
web.xml, A-5

## く

最小のセキュリティ設定, 3-11  
作業環境  
convertreg.pl スクリプト, 10-22  
Discoverer 作業環境の概要, 10-2  
Discoverer システム作業環境, 10-2  
Discoverer のアップグレード, 10-23  
Discoverer ユーザー作業環境, 10-3  
Discoverer ユーザー作業環境のリスト, 10-6  
EnableWebQueryRun, 10-10  
ExportToWebQuery, 10-11  
migrateprefs スクリプト, B-4  
WebQueryBaseURL, 10-20  
移行, 10-23, B-4  
エンディアン形式, 10-22  
各ユーザー用に設定する方法, 10-5  
すべてのユーザーに対するユーザー作業環境を設定する方法, 10-4  
ファイル形式の変更, 10-22  
作業環境ファイルのエンディアン形式, 10-22  
索引値  
トラブルシューティング, D-11  
サマリーとパフォーマンス, 12-8  
署名認証, 14-9  
スケーラビリティ  
トラブルシューティング, 12-8  
スワップ領域およびパフォーマンス, 12-9  
セキュリティ  
Discoverer Plus, 14-8  
Discoverer Plus の無効化, 3-3, 4-11  
Discoverer Viewer, 14-7  
Discoverer の実行, 3-3, 4-11  
FND\_SECURE, A-7  
FND\_TOP, A-7  
暗号化, 14-24  
概要, 14-1  
許可されないプライベート接続, 13-4, 13-13  
証明書のインストール, 3-4  
データベース・レベル, 14-3  
ネットワーク・レベル, 14-6  
標準以外の署名認証, 14-9  
プライベート接続の無効化, 3-3, 4-11  
プロトコル, 14-8, 14-9  
セッション ID  
ログ内, D-16  
セッションのタイムアウト, A-7  
セッションのプーリング, 5-2  
セッション・バインディング  
OracleAS Web Cache, 7-12  
接続, 3-14, 3-24  
OLAP データに対するプライベート, 6-9  
Oracle Application Server Control を使用した管理, 4-4  
移行, 4-4  
概要, 4-2, 4-4  
接続 ID の確認方法, 13-7  
接続ページ, 4-4  
タイプ, 4-3

- トラブルシューティング, D-13
- パブリック, 5-3
- パブリック接続, 4-3
- パブリック接続の作成, 4-6, 4-9
- プライベート, 3-14, 3-24
- プライベート接続, 4-3
- プライベートの有効化, 4-10

#### 接続 ID

- 確認方法, 13-7
- 選択可能アイテム・ウィンドウ表示 / 非表示, 9-2

## た

---

#### タイトル

- 長いワークシート・タイトルの印刷, 10-14

#### タイプのエクスポート

- Web クエリー, 10-11

#### タイムアウト

- Apache, A-3

- Web サーバー, A-3

- ダッシュボード・アプリケーション, 11-3

#### 通貨

- ユーロ諸国, 10-10

#### 通信プロトコル, 5-2

- HTTP, 14-8, 14-9

- HTTPS, 14-9, 14-22

- JRMP, 14-8, 14-9

#### テスト

- Discoverer Portlet Provider, 11-4

#### データのエクスポート

- Excel の必要最小バージョン, D-2

- NULL 値, 10-11

- 繰返し値の表示, 10-11

#### データベース権限

- D4OSYS, 6-4

#### データベース接続ファイル, 15-3

#### データベースのセキュリティ

- ASO 暗号化認証, 14-3

- 概要, 14-3

- データベース・ユーザーおよびパフォーマンス, 12-9

#### トラブルシューティング, D-2

- Discoverer Plus Relational のヘルプ, D-7

- Discoverer Viewer でのグラフ表示, D-13

- Discoverer Viewer のカスタマイズ, D-14

- Discoverer Viewer の「電子メールで送信」オプション, D-8

- Discoverer のメモリー, 12-9

- HTTPS, D-6

- Microsoft Internet Explorer バージョン 6.0, D-2

- Netscape バージョン 4.x, D-6

- OC4J\_BI\_forms JVM, D-12

- ORA-12154 エラー, D-5

- Oracle Applications の動作要件, D-4

- RMI エラー, D-6

- XSL ファイル, D-14

- クエリー予測, 12-8

- サマリー, 12-8

- 使用不可能な接続, D-13

- スワップ領域, 12-9

- データベース・ユーザー, 12-9

- ネットワーク・エラー, D-5

- パフォーマンスおよびスケーラビリティ, 12-8

- パラメータ値, D-11

- パラメータの索引値, D-11

- プラスチック・ルック・アンド・フィール, 9-3

- ポップアップ・ストップ, D-5

- メモリー不足エラー, D-6

- リダイレクト競合, D-12

- ロギング, 12-9

- ワークブック, 12-9

#### 動作要件

- Oracle Applications, D-4

## な

---

- 長いワークシート・タイトルの印刷, 10-14

#### ネットワーク例外

- トラブルシューティング, D-5

## は

---

#### パスワード

- URL パラメータでの要求, 13-11

#### パフォーマンス, 12-8

- Discoverer Portlet Provider, 12-8

- Discoverer のパフォーマンス, 12-2

- Discoverer のパフォーマンスを向上させる方法, 12-2

- Discoverer Administrator ヒントの使用, 12-5

- OracleAS Web Cache の使用, 12-8

- キャッシュ設定の変更, 12-7

- サマリー・フォルダの使用, 12-4

- 重複しない値を含むテーブルに基づく値リスト, 12-6

- データベースからのフェッチ行で使用する配列サイズの拡大, 12-6

- ビジネスエリアおよびフォルダの表示時間の短縮, 12-4

- 「保存形式」アイテム・プロパティの適切な設定, 12-5

- ワークシートを夜間に実行するようにスケジュール, 12-8

- Web Cache の有効化, 8-8

- スワップ領域, 12-9

- トラブルシューティング, 12-8

- レポート・サイズの縮小, 10-7, 10-14

#### パブリック接続

- URL パラメータ, 13-4, 13-13

- 概要, 4-3

- 許可されない, 13-4, 13-13

#### パラメータ値

- トラブルシューティング, D-11

#### 非武装地帯 (DMZ)

- 概要, 14-21

#### ファイアウォール

- イントラネット用およびファイアウォールを通してユーザーが Discoverer にアクセスするように Discoverer を構成する方法, 14-25

- 概要, 14-21

- ファイアウォールを通した Discoverer の構成方法, 14-23, 14-24

- ファイアウォールを通して暗号化を使用する

- Discoverer の構成方法, 14-24

- ポリシー, 14-22

- 複数のマシンへのインストール

- Discoverer の構成, 7-5
- ブラウザ
  - Discoverer でサポート, 3-3
  - 要件, 3-3
- ブロック・サイズ
  - Discoverer カタログ, 6-4
- プライベート接続
  - OLAP データ, 6-9
  - URL パラメータ, 13-4, 13-13
  - 概要, 4-3
  - 許可されない, 13-4, 13-13
- プラスチック・ルック・アンド・フィール, 9-3
- プリファレンスの移行, B-4
- ポータル, 11-2
- ポート, 5-22
- ポップアップ・ストッパ
  - トラブルシューティング, D-5

## ま

---

- メモリー不足の問題
  - トラブルシューティング, D-6
- 文字制限
  - ブラウザ制限, 13-3
- 問題の診断, D-16
  - checkdiscoverer ユーティリティ, D-16

## や

---

- ユーザー個人プロファイル領域, 3-4
- ユーロ通貨, 10-10
- よくある質問
  - セキュリティについて, 14-21

## ら

---

- リダイレクト競合, D-12
- ルック・アンド・フィール, 9-4, 9-5
  - カスタマイズ, 9-2, 9-6
  - カスタム LAF の作成, 9-5
  - タイプ, 9-2
  - 変更, 9-4
- レイアウト
  - カスタマイズ, 9-8
- レポート
  - レポート・サイズの縮小, 10-7, 10-14
- レポートの列幅, 10-7
- ロード・バランシング
  - セッション・バインディング, 7-12
- ロギングおよびパフォーマンス, 12-9
- ログ・ファイル, D-15, D-20
  - Discoverer サービス・ログの表示, D-18
  - Discoverer サービス・ログの有効化, D-17
  - Discoverer サブレット・ログの表示, D-19
  - Discoverer サブレット・ログの有効化, D-18
  - OPMN, A-7
  - OracleAS のログの表示の使用, D-16
  - ORB デバッグ・ファイル, A-7
  - 収集, D-15, D-20
  - 使用可能なサーバー診断, D-15

## わ

---

- ワークシート
  - OLAP ワークシートの URL パラメータ, 6-16
- ワークシート ID
  - 確認方法, 13-6
- ワークシート・レイアウト
  - 長いタイトルの印刷, 10-14
  - パディング・セル, 10-7
- ワークブック ID
  - 確認方法, 13-6
- ワークブックおよびパフォーマンス, 12-9

